

國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報

Annual Report of the Institute for Japanese Culture and Classics
Kokugakuin University

第9号

特集：日本文化研究所設立60周年



平成28年(2016)9月発行

もっと日本を。もっと世界へ。

國學院大學研究開発推進機構
日本文化研究所年報

第9号

目次

【プロジェクト活動紹介】

- 「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」 井上 順孝…… 1
「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開
—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」 遠藤 潤…… 5

【2015年度のトピック】

- 日本文化研究所設立 60 周年記念事業 …… 8
2015 年度の CERC の活動について ……11
國學院大學博物館 国際シンポジウム・ワークショップ 2015
「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」 ……13
国学研究会・社家文書研究会 ……16
出張報告「XXI. World Congress of the International Association
for the History of Religions (国際宗教学宗教史学会第 21 回世界大会)」 ……18
出張報告「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」イギリス調査 ……20
出張報告「一宮調査」 ……23
出張報告「研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開」
による史料調査」 ……26

【特集 日本文化研究所設立 60 周年】

- 特集によせて ……31
旧研究所スタッフ随想
国際発信という役割 井上 順孝……32
研究所の思い出 梶山 林繼……36
「常磐松二号館時代」の思い出 齋藤ミチ子……38
日本文化研究所時代を振り返る 茂木 栄……41
日本文化研究所のインターネット情報発信をめぐる回想 黒崎 浩行……44
日本文化研究所設立 60 年におもうこと 松本 久史……47
日本文化研究所から研究開発推進機構への再編を振り返って 齊藤 智朗……49
日本文化研究所との関わりを振り返って 平藤喜久子……52

日本文化研究所 50 年～ 60 年の活動記録

プロジェクト	……56
国際研究フォーラム	……60
刊行物	……65
年報目次	……71
年表	……76

【研究論文】

ポスト・サリン事件の学生の宗教意識とオウム真理教観 —20 年間に生じた宗教意識の変化を中心に—	井上 順孝……79
上代における「事」という漢字と「コト」という倭語との間の 意味的な隔たりをめぐって	イグナシオ・キロス……103
近世前中期における『神皇正統記』の受容史 —羅山・素行・白石の事例を中心に—	齋藤 公太……119
資料紹介 ポーランドのボードゲームに描かれるカトリック修道会の世界	加藤 久子……135

【スタッフ紹介】	……144
----------	-------

【出版物紹介】	……153
---------	-------

【テレビ放映・番組紹介】	……157
--------------	-------

カバー写真：戸隠神社（長野市）の鏡池。

撮影：ノルマン・ヘイヴンズ

「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」

プロジェクト責任者 井上順孝

1. プロジェクトの概要

日本文化研究所のプロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」は、「デジタル・ミュージアムの構築と展開」(2007～2009年度)、「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」(2010～2012年度)の両プロジェクトを継承し、2013～2015年度の3年計画で実施されたものである。以下では、本プロジェクトの最終年度となった2015年度の成果を紹介した後、2016年度から3年間の新規プロジェクトである「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」の計画について概要を示す。

本プロジェクトの事業内容には、主に二つの柱があった。一つは、2009年から本格的な運用が開始された「國學院大學デジタル・ミュージアム」(<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>)について、研究開発推進機構内の諸機関や図書館、関連部署等と連携して円滑な運営を行い、内容の改善を進めることであった。もう一つは、本プロジェクト独自の調査研究を展開し、それに基づいたデジタル・コンテンツを拡充することであった。

また、本プロジェクトでは、教育活動への活用・還元という点を特に重視し、これを前述の二つの柱の双方に適用しながら、事業を展開してきた。とりわけ、後者の独自のコンテンツ作成の面では、宗教文化に関する教育のための教材作成に力を入れてきた。この点については、「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」

(CERC、サーク、本研究所内に設置)との緊密な連携を取りながら進められた。

2015年度の本プロジェクトメンバーは、以下の通りであった。

責任者 井上順孝

分担者

専任教員：平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高、鈴木聡子

兼任教員：ノルマン・ヘイヴンズ、黒崎浩行、斉藤こずゑ

客員研究員：李和珍、市川収、カール・フレレ

PD研究員：加藤久子

研究補助員：村上晶

客員教授：ケイト・ナカイ、土屋博、星野英紀、山中弘

共同研究員：イヴ・カドー、ヤニス・ガイタニディス、キロス・イグナシオ、ジャン＝ミシェル・ビュテル、市田雅崇、今井信治、小堀馨子、野口生也、藤井麻央、牧野元紀、山梨有希子

2. 2015年度の成果

(1) 「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

各種のデータベース・事典等(現在26種)をウェブ上で総合的に検索・閲覧・利用できる「國學院大學デジタル・ミュージアム」(DM)は、基本的な部分についてはすでに確立されているため、さらなる利用しやすさの改善とコンテンツの充実に力を注いだ。

機構内の他機関の担当者、システム担当者、図書館・機構事務課・広報課等とともに、「デジタル・ミュージアム・ワーキンググループ」会議を年度内に7回開き、課題の共有と改善案の検討を行った。

2015年度は、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に、國學院大學博物館が中心となった「東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業」が採択された。よって、博物館のサイト構築や、そこにおけるDMとの連携についても集中的に検討を進めた。

DMに関しては、データベース数が増加したことを受けて、各データベースの簡単な説明をまとめたページの構築が検討され、その文面と形式が確定された。また、機構内各機関のサイト内容も同様に点検され、特に多言語化（英訳）について、機構スタッフの英語表記の取りまとめを中心に、検討と情報集約が進められた。

(2) プロジェクト独自の調査・研究等

◇国際研究フォーラム「『日本文化』研究の展望」の開催

2015年10月25日（日）には、國學院大學学術メディアセンター1階常磐松ホールにおいて、本研究所の主催により、国際研究フォーラム「『日本文化』研究の展望」が開催された。これは、前日24日（土）の公開学術講演会（研究開発推進機構主催）とともに、日本文化研究所の設立60周年記念事業の一環として行われたものである（本号「2015年度のトピック1」を参照）。

同フォーラムでは、4名の発題とコメント、討議が行われた。発題者とタイトル、コメントーターは以下の通りである。

- ・篠田謙一（国立科学博物館人類研究部長）
「DNAで読む日本人の形成史」
- ・ウィリアム・ケリー William W. Kelly

（イェール大学教授）

「Is Japan a Lost Cause or a Sustainable Model? An Anthropological Perspective on the Contemporary Society」

・スチュワート・ガスリー Stewart E. Guthrie（フォードム大学名誉教授）

「Religion as Anthropomorphism: A Cognitive Theory」

・河野哲也（立教大学教授）

「アフォーダンスと生態学的倫理学の構築」

・コメンテーター

井上順孝（國學院大學教授）

・司会

松村一男（和光大学教授）

日本文化と宗教文化が交わるテーマについて、複数の学問領域からの先端的な知見を踏まえた活発な議論が交わされ、本研究所の名となっている「日本文化」について深く再考が迫られる機会となった。

なお、同フォーラムでの議論を下敷きとして、國學院大學日本文化研究所編・井上順孝責任編集『〈日本文化〉はどこにあるか』（春秋社、2016年8月）が刊行された。

◇EOSの点検

2015年度には、英文のオンライン神道事典 Encyclopedia of Shinto (EOS) の充実・改善作業が継続して進められた。アップロード済みの本文内容をチェックし、統一性・整合性を確保する作業を行った。

また、韓国語版においても公開内容ならびに添付メディアファイルの点検が進められた。

なお、EOSですでに公開済であった「年表」に修正を加えた上で、『*Encyclopedia of Shinto: Chronological Supplement*』として刊行した（本号「出版物紹介」を参照）。

◇双方向論文翻訳

本プロジェクトではこれまで、神道・日本文化に関する研究を国際的に発信するため、また海外の研究を日本に紹介するために、日本語から外国語、外国語から日本語への翻訳を行って、ウェブで公開する事業を継続してきた。

2015年度には、次の2論文を選定して翻訳を行った。日本語から英語へのものが1点、英語から日本語へのものが1点である。

- ・日本語から英語へ翻訳された論文類
石井研士「神社神道と限界集落化」(英訳 Community Marginalization and *Jinja Shintō* 翻訳者: CASTIGLIONI, Andrea)
- ・英語から日本語へ翻訳された論文
ROTS, Aike P. "Sacred Forests, Sacred Nation: The Shinto Environmentalist Paradigm and the Rediscovery of *Chinju no Mori*" (邦訳: 聖なる森、聖なる国—神道環境主義のパラダイムと鎮守の森の再発見—) 翻訳者: 齋藤公太)

◇教派神道・神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化と公開

本研究所ではこれまで、神理教や神道修成派を中心とする教派神道や神道系新宗教に関する文書資料が集められ、その整理とデジタル化が進められてきた。DMのなかにはすでに、「教派神道関連資料データベース」が構築されており、公開体制が整備されてきている。2015年度は、神道系新宗教関係の資料を中心に、公開準備作業が進められた。

◇現代宗教に関する資料・データの収集とデータベース構築ならびに公開

宗教文化教育推進センター事業、ならびに2015年度國學院大學特別推進研究「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」(研究代表者: 井上順孝)と連携しながら、宗教文化の教育と学習に役立てられる現代宗

教に関する資料・データの収集とデータベースや教材の作成が進められた。

すでに公開済の「博物館と宗教文化」「宗教文化を学ぶための基本書案内」「世界遺産と宗教文化」データベースの点検作業が行われた(本号「2015年度のトピック2」、ならびに宗教文化教育推進センターのサイト <http://www.cerc.jp/> を参照)。

3. 新規プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」の2016年度の研究計画

◇「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

デジタル・ミュージアムの運営については、従来通り、ワーキンググループ会議を定期的に行き、課題共有と意見交換を行う。

2016年度は、デジタル・ミュージアム上の画像を第三者が利用する際のルール作りや、スマートフォン対応、動画、音声使用の利便性の向上などを中心的課題として取り組んでいく。

また、地図アプリ「ロケスマ」(株式会社デジタルアドバンテージ)を活用したデータベースの構築と公開については、そのコンテンツの充実も図っていききたい。

なお、2016年度は前々年度・前年度の同種事業に続き、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に、國學院大學博物館の「東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業」が採択された。同事業には、本プロジェクトの事業内容とその目的が重なり合う部分もあり、これまでのプロジェクトで培われてきたコンテンツとノウハウの活用が引き続き求められる。よって、同事業とも連携を取って各種の事業を進めていく。

◇神道に関する日本語、英語のポータルサイトの構築

すでに DM において構築・公開されている「EOS」「双方向論文翻訳」「Basic Terms of Shinto」「Images of Shinto」の各データベースの内容を点検しつつ、利用者とりわけ外国人ユーザーの利便性の改善を行う。

国内外の学生が神道を学ぶ際に活用でき、神道に関する情報への入口となるようなポータルサイトの構築を進める。今年度はそのレイアウトの検討を行う。

◇神道古典の英語訳

本プロジェクトでは、新たに神道古典の英語訳に取り組む。研究開発推進センターの「『古事記学』の構築」研究事業等と連携しながら、古事記の英語訳を進める。訳文や訳語を検討・決定し、注釈も含めた翻訳を進め、公開にあたっては専門家による精査を経ることで、国際的に信頼され長く使用される翻訳の提供を目指す。

◇収集している教派神道・神道系新宗教の資料の整理とデジタル化

DM 内の「教派神道関連資料データベース」で公開が開始されている教派神道の神理教の資料を始め、教派神道・神道系新宗教に関する文書資料の整理と公開を進める。同データベースのコンテンツの充実をはかることで、教派神道・神道系新宗教の研究の進展に資することを旨とする。

◇宗教文化教育の教材研究の国際的展開

宗教文化教育推進センターと連携を継続し

ながら、教材作成を進める。

これまで公開されてきた宗教文化の学習に活用できる映画・世界遺産・博物館・参考文献等に関するデータベースの拡充と点検を行う。

動画教材を配信するためのシステム構築を目指し、これまで蓄積されてきた動画の整理とデータベース化、公開形式についての検討を行う。

また、2016年11月20日に第11回が実施予定の宗教文化士認定試験（第10回は6月26日に実施済み）事業等にも協力していく。

あわせて、「宗教と社会」学会の「宗教文化の授業研究」プロジェクトとも連携し、授業研究会を継続して行う。

◇「学生宗教意識調査」のまとめ

「宗教と社会」学会の「宗教意識調査」プロジェクトと共同で1995年から2015年まで全12回にわたり行ってきた「学生宗教意識調査」のまとめを行う。データの整理と、さらなる分析を加え、報告書としての刊行を目指す。

◇国際研究フォーラムの開催

2016年度は、10月15日（土）のSISR（国際宗教社会学会）東アジア国際ワークショップと連携し、「東アジアのグローバル化と宗教文化」というテーマで、10月16日（日）に国際研究フォーラムを開催することとなった。東アジアの宗教文化や宗教意識についての現況を共有することで、国際的な研究ネットワークの構築が一層進展することが期待される。

『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開 —明治期の国学・神道関係人物を中心に—』

プロジェクト責任者 遠藤 潤

研究開発推進機構日本文化研究所の神道・国学研究部門では、2011年度に、神道・国学の研究を遂行する拠点としての「國學院大學 国学研究プラットフォーム」（以下「国学研究プラットフォーム」と略する）を設定した。これは恒常的な組織を意味するものではなく、国学に関わる学内外のさまざまな研究活動の連絡ハブとなるとともに、研究の基礎的情報を蓄積していく拠点を指向している。具体的には、『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築』（2011～2013年度）と『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究』（2014年度）という、2期4年間にわたる研究事業および今回の研究事業の一年目において、「国学研究プラットフォーム」の運営が行われてきた。これらを継承・発展させるために計画されたのが、研究事業『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—』であり、2015年度から3か年の予定で開始された。

この研究事業の目標は「国学研究プラットフォーム」を拠点として、「国学研究の基礎的データ構築」および「国学に関する研究連携のための組織づくり」を継続・発展させることにある。今回の研究事業での具体的なデータ構築としては、明治期の神道・国学・宗教関係人物の基礎的情報の収集・整理を実施し、また組織づくりについては、これまで定期的に開催している国学研究会を運営するとともに、人物関係の収集情報や研究会などで得られた研究情報の公開を行う。

このような一連の研究活動を展開するのは、これまで國學院大學、なかでも日本文化研究所、研究開発推進センター、研究開発推進機構などが蓄積してきた研究成果を、人物をインデックスとして再整理し、基礎的な情報を、特定の視点から集約・再検討するとともに、現在までの研究成果をあらためて取り込むかたちでの人物情報の収集を行うことを企図してのことである。

2015年度研究事業の成果

I 国学に関する基礎的研究

最初に、教導職のリストを作成した上で、先行の諸業績に基づき、明治期の国学・神道・宗教関係人物の情報を再確認した。その作業の結果、1,096名の国学・神道関係人物、337名の教派神道関係人物、141名の仏教者をリストアップすることができた。また、2015年9月8～10日、12月26～27日には京都市立総合資料館や京都市歴史資料館などで、明治期京都の宗教行政や主要寺社の動向、および神官・僧侶の人物情報に関する資料について、2016年2月19日には国立歴史民俗博物館にて明治期平田国学関係の資料について調査を行った（調査については「出張報告「研究事業『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開』による史料調査」」を参照）。

II 神道・国学に関する基礎的データの整理・公開

調査項目やデータ入力の形式について協議

した上で、上記の「Ⅰ 国学に関する基礎的研究」で作成したリストから、明治宗教行政に深く関与した重要な人物をピックアップし、人物情報の収集・整理を進めた。具体的には、①高位の教導職（権少教正以上）に補任された人物、②近代神道史・仏教史・宗教史研究で著名な人物（今泉定助、大内青巒など）、③先行研究の多い人物、を優先的に取り上げることとし、優先度別に分類した。下半期からは、このうち主に優先度 A に属する人物（井上頼圀、鴻雪爪、赤松連城や畔上棟仙など）の項目作成を進めていった。

Ⅲ 国学に関する研究連携のための組織づくり

国学研究会を継続的に実施し、神道・国学・宗教を専門とする学内外の若手研究者による発表が行われた。一方、社家文書研究会も継続的に実施し、学内外の参加者を交えて井上頼圀宛の平田鏡胤書簡の読解と書簡の翻刻を進めた（詳細については、「2015年度の特ピック「国学研究会・社家文書研究会」」を参照）。

以上、2015年度研究事業として予定していた計画はほぼ実行できたと判断している。

2016年度の実施計画

Ⅰ 国学に関する基礎的研究「近代の神道・国学関係資料の調査ならびに重要な人物を焦点とした先行研究の調査・検討」

- (1) 研究事業2年目として、先行の目録類などでの明治期に活動の見られる人物の確認を前提として、当該期の国学者、神道関係人物、教派神道関係人物などに関する著書・論文についての網羅的なリストの作成などを継続する。

さらに2016年度は、これまでリストにあがった人物のうち、先行研究が充実しているかどうかなどを勘案して重要な人物を選定し、より重点的な調査・研究を行う。

具体的には、2015年度までの調査により、幕末から維新时期にかけての国家的教化活動、神社行政の分野で活動し、今日に資料を残した人物である西川吉輔は、仏教など諸宗教との関係においても興味深い活動を行った可能性があることが判明した。2016年度は、滋賀大学経済学部附属史料館所蔵の西川吉輔文書など、西川の関連の史料をわれわれの視点で見直し、当該時期の神道、国学、宗教に関する研究を深めるため、出張調査を行う。

- (2) 上記(1)とあわせて、近代における国学から関連領域（信仰、学問、その他）への展開の調査・研究、すなわち人物研究を切り口として、江戸後期から明治期にかけて国学を学んだとされる人々が、近代に入ってから教派神道や仏教その他の信仰へと活動を広げた様子、あるいは、明治期に新たな国学研究（明治国学、近代国学）をはじめ文献学や近代の人文諸学などに学問を展開させた様子などを、一次文献や先行研究の調査を踏まえて研究し、重要な史料については必要があればマイクロフィルムからの複写も行う。

Ⅱ 神道・国学に関する基礎的データの整理・公開「明治期神道・国学関係人物の基礎的データをもとにした項目執筆と定期的な検討」

- (1) 明治期の国学者および神社・教派神道関係人物に関する先行の目録、「国学関係人物データベース」の記載事項の確認ならびに関係分野の先行研究の確認と内容の検討、ならびに調査項目やデータ設計などの具体的検討とともに基礎的データに基づいて項目を執筆する。
- (2) 明治期の国学者および神社・教派神道関係人物に関する基礎的データの収集・整理を行う。
- (3) 「国学研究プラットフォーム」によるこ

れまでの研究成果の整理と発信、旧日本文化研究所収集資料の現存状況の確認も継続して行う。

Ⅲ 国学に関する研究連携のための組織づくり 江戸時代後期から明治期までを主たる範囲

とした報告を順次行う国学研究会を月1～2回程度開催する。また、主として神道・国学関係一次文献の読解・学習や史料に関する研究情報の交換などを目的とした、社家文書研究会を運営する。

日本文化研究所設立 60 周年記念事業

國學院大學日本文化研究所は、1955（昭和30）年に設立され、2015年に設立60周年を迎えた。よって、2015年度には、それを記念した諸行事・事業が複数行われたので、以下ではその概要を報告する。

(1) 第41回 日本文化を知る講座「『日本文化』研究のこれまでとこれから」

日本文化研究所では、1990年の秋より春・秋各4回の「日本文化を知る講座」を実施してきた。渋谷区教育委員会の協力も得ながら、大学の研究情報・成果を公開し、社会へと還元すべく行われてきたものである。2007年の研究開発推進機構の開設以降は機構主催の行事として、毎年6月ごろに全4回で開催されている。

第41回「日本文化を知る講座」は、「日本文化研究所 設立60周年 記念講座」として、2015年6月6日・13日・20日・27日（いずれも土曜日）の4回にわたり、本学常磐松ホールにて開催された。

今回の講座は、共通テーマを「『日本文化』研究のこれまでとこれから」と設定した。日本文化研究所で行われてきた多様な研究テーマの中からいくつかの柱を取り上げ、これまでどのようなことが明らかにされてきたかを振り返るとともに、今日のグローバル化時代においてこれからどのようなことが課題となるかを明らかにすることを目指した。具体的には、神道・国学研究、民俗学、日本文化研究の海外発信、日本文化と宗教文化の教育、の4テーマを取り上げ、各講師に講演いただいた。

各回の講師と演題は、以下の通りである。



第1回 6月6日

江上敏哲氏（国際日本文化研究センター情報管理施設資料課 資料利用係長）「日本文化研究と海外発信」

第2回 6月13日

新谷尚紀氏（國學院大學文学部教授）「民俗学の新たな展開と展望」

第3回 6月20日

岩井洋氏（帝塚山大学学長）「グローバル化のなかの日本文化と宗教文化教育」

第4回 6月27日

伊藤聡氏（茨城大学文学部教授）「中世神道研究の回顧と展望」

なお、各回の講演内容の概要は、『國學院大學研究開発推進機構 機構ニュース』18号（2016年2月）に掲載されているので参照さ

りたい。いずれの回も、百数十名ほどの参加者があった。

(2) 公開学術講演会「『日本文化』研究の展望」

公開学術講演会は、日本文化研究所が一貫して実施してきた事業の一つで、1956年4月に岩橋小彌太・柳田國男の講演が行われて以来、春季と秋季にそれぞれ1、2名が講演するスタイルで続けられてきた。2007年の研究開発推進機構の開設以降は、機構主催の行事として毎年秋に行われている。

2015年度の公開学術講演会は10月24日(土)、研究所設立60周年記念事業の一環として、翌25日の国際研究フォーラム(後述)とともに「『日本文化』研究の展望」を共通テーマとして企画された。井上順孝・研究開発推進機構長・日本文化研究所長を講師として、「現代宗教は古代宗教と何が違うか?—宗教進化論再考—」の演題で、本学常磐松ホールにて開催された。学内外から約130名の参加があった。



井上氏は講演の趣旨を、「宗教は歴史的に多様な展開をし、今日の状況に至っているが、日本の宗教文化という観点からすると、現代宗教の多様性とそこに至るダイナミズムはどう捉えられるか。ダーウィンの進化論の意味、特に淘汰という概念を再考し、近年の脳科学や認知科学系の研究を参照して、新しい研究視点を提示することを試みる」ことだと述べた。日本の宗教状況や世界の宗教史を概観するなかで、脳科学や進化生物学、進化心理学

などの先進的な研究成果を摂取・応用しながら考察する手法を広く提示した。

講演の最後に井上氏は、存続している宗教現象は進化の過程にあると言え、対象を前にしてより基本的と思われる事柄への具体的な疑問を見つけること、宗教を研究する上で欠かせないものを見つけ、それらと取り組むことの重要性を強調した。

なお、講演内容の詳細については、『國學院大學 研究開発推進機構 紀要』第8号(2016年3月)に収録されている。



(3) 国際研究フォーラム「『日本文化』研究の展望」

10月25日(日)に、国際研究フォーラム「『日本文化』研究の展望」が、本学常磐松ホールにて行われた。国際研究フォーラムは、日本文化研究所が研究開発推進機構の一機関に改組されて以来、毎年秋に国内外から研究者を招いて行っている。2015年度は、前日の公開学術講演会とテーマを合わせて、研究所設立60周年の記念行事とした。

本フォーラムは、「日本文化」研究の新たな展望について検討することを目指し、さまざまな切り口から先端的な研究を行っている研究者4名に発題を依頼した。

パネリストと題目は以下の通りである。

発題 1 :

篠田謙一氏(国立科学博物館人類研究部長)
「DNA で読む日本人の形成史」

発題 2 :

スチュワート・ガスリー Stewart E.
Guthrie 氏 (フォーダム大学名誉教授) "
Religion as Anthropomorphism: A
Cognitive Theory"

発題 3 :

ウィリアム・ケリー William W. Kelly 氏
(イェール大学教授) " Is Japan a Lost
Cause or a Sustainable Model? An
Anthropological Perspective on the
Contemporary Society"

発題 4 :

河野哲也氏 (立教大学教授) 「アフォーダ
ンスと生態学的倫理学の構築」

その後、井上順孝・日本文化研究所長によるコメントを受けて、活発な総合討議が行われた。なお、司会は松村一男氏 (和光大学教授) をお願いした。

本フォーラムにおける発題・議論に基づき、國學院大學日本文化研究所編・井上順孝責任編集『〈日本文化〉はどこにあるか』(春秋社、

2016年8月)が刊行された。

(4) 特別展示「写真で見る日本文化研究所の60年」 記念懇親会

公開学術講演会と国際研究フォーラムに前後する10月23日(金)～25日(日)の期間、特別展示「写真で見る日本文化研究所の60年」が、常磐松ホール前の多目的ホールにて実施された。日本文化研究所の草創期の人物・建物、これまでの講演会やシンポジウムの様子など、研究所の歩みを60枚余の写真パネルで振り返る展示を構成した。両行事の来場者の多くも足を止め、懐かしくかつ貴重な写真の展示に見入っていた。

また、同写真パネルは、12月12日(土)～13日(日)に行われた國學院大學博物館国際シンポジウム・ワークショップ2015「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」の期間にも、博物館エントランスにて展示された。

10月24日の公開学術講演会後には、日本文化研究所60周年を記念した懇親会が、本学の有栖川宮記念ホールにて、研究開発推進機構の主催により開かれた。研究所の代々のスタッフら数十名の出席があり、旧交が温められた。また、過去の行事などの写真・映像も上映され、これまでの歩みが振り返られた。

(塚田穂高)



2015年度のCERCの活動について

2011年1月に発足した宗教文化教育推進センター（通称CERC）は、宗教文化士の認定に関わる業務と、宗教文化教育の充実に関わる業務を行っている。後述するように2015年度には6月28日に第8回、11月15日に第9回目の宗教文化士認定試験が行われ、第1回試験からこれまでに216名の宗教文化士が誕生した。また、宗教文化士試験の過去問題を活用した問題集も作成されるなど、センターの活動はさらに充実したものとなっている。なお、2014年度までの活動については、『日本文化研究所年報』第8号を参照されたい。

2015年度のCERCの活動は國學院大學特別推進研究助成金「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」（代表：井上順孝）との連携によって進められた。以下、(1)宗教文化士認定試験の実施について、(2)宗教文化士へのサポートについて、(3)宗教文化教育推進のための教材作成について、(4)宗教文化士資格の更新について報告し、今後の展望を提示する。

(1) 宗教文化士認定試験の実施報告

第8回認定試験は、2015年6月28日（日）に行われた。東北大学・國學院大學・皇學館大学・関西学院大学・天理大学の5ヶ所を会場として、受験者は26名、合格者は17名であった。

続く第9回認定試験は、同年11月15日（日）に國學院大學と関西学院大学の2ヶ所で行われた。受験者は20名、合格者は13名であった。これまでの試験問題と解答、および結果

はCERCのWebページ上で公開されている。

本年度からは受験資格が拡大され、これまでの大学生、大学院生、教員に加えて報道関係者にも受験資格が認められるようになった。現職の報道関係者（新聞社、テレビ・ラジオ局）で、3年以上の記者経験を持つ人を対象とする。受験申請の際に、宗教に関係があると思われるこれまでの取材経験を報告し、センターに認められた場合受験が可能となる。さらに、来年度（2016年度）からは九州大学が受験会場に加わることも決まり、今後の受験者の広がりが期待される。

試験合格者については、2013年度までの28大学に加え、本年度新たに九州大学、国際基督教大学、ルーテル学院大学の3大学から宗教文化士が誕生した。これまでに資格取得者が出た大学は以下のとおりである。

愛知学院大学、大谷大学、オーストリア国立ウィーン大学、関西大学、関西学院大学、九州大学、皇學館大学、國學院大學、国際基督教大学、駒澤大学、首都大学東京、上智大学、清泉女子大学、相愛大学、大正大学、東京外国語大学、東京大学、東北学院大学、東北大学、東洋大学、同志社大学、中央大学、筑波大学、天理大学、北海道大学、八洲学園大学、立教大学、立正大学、龍谷大学、ルーテル学院大学、早稲田大学

2016年度からは参加大学も3大学ほど増える予定になっている。参加大学になっている大学では、認定試験に必要な科目が学生に公開されている。

(2) 宗教文化士へのサポートについて

CERC では、宗教文化士の資格取得後も宗教文化に関する情報を得るためのサポートの一環として、『CERC メルマガ』を年に4回発行している。メルマガでは、宗教文化に関わる最新のニュースを解説とともに紹介。また、講演会やシンポジウムの情報も掲載されている。2015年度末時点で、15号まで発行された。このメルマガは、宗教文化士資格の更新の際にもレポートのテーマとして活用されるため、今後さらに重要度が増していくものと思われる。

また、CERCのWebページには「宗教文化士専用掲示板」が用意されており、受動的にニュースを受け取るだけではなく、能動的に疑問点などを質問することができるようになってきている。パスワードで保護された宗教文化士専用ページでは、こうした掲示板の他、メルマガのバックナンバーも自由にダウンロードできるようになっており、宗教文化についての近年の動向を知ることができる。

(3) 宗教文化教育推進のための教材作成について

CERCのHPでは、宗教文化を学ぶためのオンライン教材として以下のものを提供している。

- ① 「宗教文化を学ぶための基本書案内」
- ② 「世界遺産と宗教文化」
- ③ 「映画と宗教文化」
- ④ 「博物館と宗教文化」
- ⑤ 「宗教文化に係る基本用語クイズ」

本年度も、これらの教材の内容の拡充を行った。

また、認定試験時に行うアンケートでは、書籍の形で参照することのできる教材を希望する声が毎回多く挙がる。宗教文化士認定試験に関連の深いテキストとしては、これまでに、井上順孝編『要点解説90分でわかる！

ビジネスマンのための「世界の宗教」超入門』（東洋経済新報社、2013年）と櫻井義秀・平藤喜久子編『よくわかる宗教学』（ミネルヴァ書房、2015年）が刊行されている。特に後者の巻末には「宗教文化士試験問題例と解説」が付されており、各試験から抜粋された問題によって、認定試験に触れることが可能になっている。2015年度は、これらに加え、過去に宗教文化士認定試験で出題された問題200問に解説を付した冊子『日本と世界の宗教文化一問題を解きながら学ぶ』（井上順孝編集責任、國學院大學）が刊行された。各分野の専門家たちによって記された解説文はコンパクトで読みやすく、受験者や宗教文化に興味をもつ人々にとって格好の教材となる。また、同書を英訳した *Workbook for Learning Religious Culture in Japan and the World* も同時に刊行された。日本の宗教文化教育の試みを海外に発信する際などに極めて有用なものである。

(4) 宗教文化士資格の更新について

宗教文化士資格は取得から5年間の有効期限が設けられており、2016年度より順次更新が始まる。更新のためには、(a) e-learningによる学習、(b) CERC指定の講演会などの聴講とレポート提出、(c) メルマガの記事をもとにしたレポートの提出、(d) 体験に基づくレポートの提出、の4種から1つまたは複数を選び、計3ポイントが認められることが必要となる。更新が認められると、終身資格の「上級宗教文化士」（仮称）が与えられる予定となっている。これらのうち、(d)の体験に基づくレポートは、当センターにとって、宗教文化士資格が実際に社会の中でどのように活用されているかを知るよい機会となるだろう。更新期間や更新方法の周知については2016年度前半になされる予定となっている。

(村上晶)

國學院大學博物館 国際シンポジウム・ワークショップ 2015 「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」

2015年12月12日（土）、13日（日）の2日間にわたり、國學院大學博物館主催で「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」と題する国際シンポジウム・ワークショップが開催され、日本文化研究所スタッフも運営に関わった。

この企画の趣旨は次のとおりである。

海外の博物館における日本の資史料、美術の展示は、その国の日本文化研究、教育のまさに最前線であるといえる。2009年に大英博物館で開催された『The Power of DOGU』展は、連日多くの来場者で賑わい、これまで日本の縄文土偶になじみのなかった人々にも、広くその文化的価値を伝えることになったことは記憶に新しい。

そうして日本文化への興味を抱いた人々が、さらに資料の理解を深め、日本文化の理解へと歩みをすすめていくためには、展示で完結するのではなく、もう一歩踏み込んだ工夫を提供することが必要だろう。

その有効な仕掛けの一つに、日本の専門的な博物館とのオンライン上での提携が挙げられる。

今回のシンポジウムでは、海外で日本関連の資料を展示、研究している博物館から担当の学芸員を招き、それぞれの博物館の現状を報告し、日本の博物館にどのような情報発信を求めるかを発題していただく。その上で、日本側のパネリストたちと討議を行い、情報化時代といわれる現代の状況にもとめられる博物館の国際的ネットワークのあり方を展望する。

この趣旨に賛同し、国内外から多くのパネ

リストが参加し、討議を盛り上げて下さった。シンポジウムに先立ち、12月11日にはフィールドトリップとして、春画展でにぎわう永青文庫、國學院大學博物館、そして本博物館と連携している山種美術館、東洋文庫を訪問した。これらの美術館、博物館をともに参観す



永青文庫



國學院大學博物館



東洋文庫

ることで、互いの問題意識を事前に共有することができたように思う。

12日のパネリスト、コメンテーター、司会は次のとおりである。

12月12日 国際シンポジウム

【パネリスト】

マティ・フォラー Matthias Forrer (ライデン国立民族学博物館、オランダ)

サイモン・ケイナー Simon Kaner (セインズベリー日本芸術研究所、イギリス)

ミシェル・モクエール Michel Maucuer (ギメ美術館、フランス)

アン・ニシムラ・モース Anne Nishimura Morse (ボストン美術館、アメリカ)

アレクサンダー・シニーツィン Alexander Sinitsyn (ピョートル大帝記念 人類学・民族学博物館 [クンストカメラ]、ロシア)

【コメンテーター】

井上洋一 (東京国立博物館)

【司会】

中牧弘允 (吹田市立博物館、国立民族学博物館)

12日のシンポジウムでは、海外の比較的

大きな博物館・美術館を中心とした日本文化の展示について発表が行われた。こうしたテーマは必然的にその国の日本学の歴史とも深く関わることになる。とくにオランダは日本と長い外交関係を築いてきた。シーボルトコレクションはその代表であろう。このように各国のコレクションの形成過程が、その国と日本との関係のあり方を反映していることをあらためて感じた。

12月13日のワークショップの登壇者は次のとおりである。比較的小規模な博物館、美術館の情報化、国際化への取り組みに関する報告や研究者の立場から博物館、美術館の収集資料をどう活用してきたか、あるいは今後はどのような展望があるか、などの点が議論された。

【パネリスト】

イローナ・バウシュ Ilona Bausch (東京大学)

クリストフ・マルケ Christophe Marquet (国立東洋言語文化大学、日仏会館、フランス)

ヨハネス・ヴィーニンガー Johannes Wieninger (オーストリア応用美術博物館、オーストリア)



オランダ、マティ・フォラー氏と司会の中牧弘允氏



左から：三宅秀和氏、内川隆志氏、宮崎克則氏、イローナ・パウシュ氏

内川隆志（國學院大學）
岡崎礼奈（東洋文庫）
三宅秀和（永青文庫）
宮崎克則（西南学院大学）
山崎妙子（山種美術館）

【司会】

笹生衛（國學院大學）

比較的小規模な博物館の場合、とくに多言語への対応については人材の点から難しいという現状などが報告された。にもかかわらず、展示内容によっては多くの外国人が訪れることもあるため、わかりやすい表現を工夫する試みなどが紹介された。

今回のシンポジウム、ワークショップについては、すでに報告書が刊行されており、下記サイトから閲覧が可能である。

<http://museum.kokugakuin.ac.jp/files/user/symposium2015report.pdf>

日本に関する展示を行っている著名な海外の博物館、美術館の担当者が、これだけ一堂に会する企画を國學院大學博物館主催で行うことができたということは、奇跡的な出来事と言ってよいだろう。その背景には、これま

で本学の考古学の研究者や日本文化研究所が築いてきた国際的な研究者ネットワークがあったからこそと考える。とくに日仏会館・フランス国立研究センターのクリストフ・マルケ所長（当時）が、いち早く企画に賛同し、後援を引き受け、すぐにフランスのギメ美術館の館長に直接連絡を取って協力を得て下さったことは、その後のほかの方々との交渉を順調に進める大きな推進力となった。

国際的なネットワークは、一朝一夕に築けるものではない。しかし、今回の企画をきっかけにこれまでの絆がさらに強まり、また新たな関係を築くきっかけになったことは確かだと思う。

ほかの参加者にとっても、今回の企画がそのように実りあるものになったであろうと願っている。

最後に、フィールドトリップにはじまる2日間のシンポジウム、ワークショップの実施に当たっては、國學院大學博物館の職員をはじめ研究開発推進機構の教員、事務課職員総出でご協力いただいた。ここに篤く御礼申し上げます。

（平藤喜久子）

国学研究会・社家文書研究会

研究プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」の一環として、本年度も国学研究会と社家文書研究会を開催した。

国学研究会

国学研究会では、国学研究会参加メンバーが、普段進めている国学・神道に関する研究の成果や、本研究プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」に関連する研究内容を発表した。2015年度は、主にAMC5階プロジェクトルーム2を会場にして、全7回開催されている。それぞれの開催日時と発表者、発表題目は下記の通りである。

- ① 2015年5月7日(木)18:30～20:00
齋藤公太「井上頼国の子孫と業績」
- ② 2015年7月27日(月)18:30～20:00
松永優子「近世における人神祭祀思想の展開」
- ③ 2015年9月25日(金)18:30～20:00
芹口真結子「明治初期における東本願寺の教化活動—明治5年大谷勝尊一行の九州巡回説教を事例に—」
- ④ 2015年12月17日(木)18:30～20:00
武田幸也「今泉定助の思想と皇道発揚運動」
- ⑤ 2016年1月21日(木)18:30～20:00
安藝竜彦「疾病観の宗教史学的研究—近世日本の呪術書を手がかりに—」

⑥ 2016年2月25日(木)18:30～20:00
蔣建偉「会沢正志斎の国学観」

⑦ 2016年3月15日(火)18:30～20:00
齋藤公太「村岡典嗣の神道史研究とキリスト教」

以上のように、近世から近代にかけての時期を対象とした発表がなされ、それぞれの回で参加者による活発な議論が交わされた。①齋藤公太「井上頼国の子孫と業績」は、次に述べる社家文書研究会で着手する井上家宛気吹舎書簡の翻刻に向けて発表されたもので、その成果は書簡の翻刻作業を進めるための前提となった。

また、③芹口真結子「明治初期における東本願寺の教化活動—明治5年大谷勝尊一行の九州巡回説教を事例に—」は、本研究事業の成果の一部を発表したものである。この報告をもとにした論文「明治五年東本願寺の九州巡回説教—教導職制度揺籃期の教化活動—」は、『國學院大學研究開発推進機構紀要』8号(2016年3月刊行)に掲載されている。

このほか、武田幸也「今泉定助の思想と皇道発揚運動」(國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『昭和前期の神道と社会』弘文堂、2016年所収)などのように、各報告は、論文掲載や学会報告などのかたちで公表が進められている。今後も、神道・宗教を歴史的な視点を踏まえて研究しようという姿勢を持つ、学内外の研究者に広く参加を呼びかけて、若手研究者の研究の推進をはかっていく。

社家文書研究会

2015年度の社家文書研究会では、井上家宛気吹舎書簡の翻刻を行った。まず、2015年4月29日(水)16:10～17:40に、井上家宛気吹舎書簡の概要を確認し、今後の翻刻作業の進め方について協議した。井上家宛気吹舎書簡は、皇典講究所教授や國學院講師等を歴任した、井上頼因に宛てられた平田鏡胤からの書簡で主に構成されている。この書簡は2007年に井上頼輝氏が國學院大學図書館に寄贈し、校史・学術資産研究センターが調査や整理を行った「井上氏旧蔵資料」に含まれていたものである(武田幸也「資料紹介 井上氏旧蔵資料『古史成文』」(『國學院大學研究開発推進機構 機構ニュース』13号、2013年6月)を参照)。翻刻に際しては、以前撮影されたデータを用いた。撮影データには、史料毎に1つずつ番号が振られており、この番号に基づくかたちで作業を進めた。

具体的な進め方は、書簡毎に担当を決めて個別に翻刻を進め、その内容を研究会で発表し、誤字などのチェックを参加者全員で行った(なお、鏡胤以外の書簡などは省いている)。研究会の各回の終了後に、翻刻担当者がデータを修正し、その内容を研究会のメーリングリストへアップロードして成果を共有した。書簡の翻刻発表の会は全8回開催された。それぞれの日時と担当者は以下の通りである。

- ① 2015年5月14日(木)18:30～20:00
井上家宛気吹舎書簡1(担当:芹口真結子)
- ② 2015年6月2日(火)18:30～20:00
井上家宛気吹舎書簡2(担当:齋藤公太)

- ③ 2015年6月26日(金)18:30～20:00
井上家宛気吹舎書簡3(担当:小田真裕)
- ④ 2015年7月9日(木)18:30～20:00
井上家宛気吹舎書簡5(担当:安藝竜彦)
- ⑤ 2015年10月6日(火)18:30～20:00
井上家宛気吹舎書簡6(担当:並木英子)
- ⑥ 2015年11月5日(木)18:30～20:00
井上家宛気吹舎書簡7(担当:小林威朗)
- ⑦ 2015年11月24日(火)18:30～20:00
井上家宛気吹舎書簡8(担当:松永優子)
- ⑧ 2016年2月9日(火)18:30～20:00
井上家宛気吹舎書簡9(担当:齋藤公太)

書簡の内容は、金銭借用に関するもの(書簡2)や、平田神社関係(略縁起の執筆に関する内容(書簡3)、運営に関する内容(書簡7)など)、『古史成文』(書簡5)・『古史伝』(書簡7)の出版に関するもの、平田家再興に関する内容(書簡7)など、多岐にわたる。年代を特定できるものから推定するに、書簡からは、概ね明治期(明治5年～明治20年代)における平田家の動向を追うことが可能である。このように、本書簡は、本研究事業を遂行する上でも有益な史料群として位置づけることができる。

今後も、引き続き書簡の翻刻を進めることで、参加者の古文書読解能力の向上を図るとともに、当該期における平田家や、平田派の動向について分析を深めていく予定である。
(芹口真結子・齋藤公太)

出張報告

XXI. World Congress of the International Association for the History of Religions (国際宗教学宗教史学会第21回世界大会)

2015年8月23日から29日にかけて、ドイツのエアフルト Erfurt において XXI. World Congress of the International Association for the History of Religions (国際宗教学宗教史学会第21回世界大会) が行われた。研究所より井上順孝所長、平藤喜久子、星野靖二、また客員教授である林淳が参加した。以下、星野が概要を報告する。

国際宗教学宗教史学会 (IAHR: International Association for the History of Religions) は、宗教研究の国際的な展開を促進することを目的とする学会である。個人単位ではなく様々な国や地域における宗教研究の学会が、学会単位で参加する形で構成されており、現在48の国と地域における宗教研究の学会・協会が加わっている。日本からは日本宗教学会が同学会に加盟している。近年は基本的に5年に一度世界大会を開催しており、2005年に東京で第19回大会、2010年にはトロントで第20回大会が開催された。なお、日本では1958年に第9回世界大会が開かれている。

今回大会の開催地であるエアフルトは、ドイツ中央部に位置するテューリンゲン州の首都で、フランクフルト空港から特急電車で2時間半ほどのところにある。かつては東ドイツ領であったが、現在では中世ドイツの趣をよく残している街として知られているという。エアフルト大聖堂は観光地にもなっており、日曜礼拝に参加する機会を得たが、多くの出席者の中には、おそらくは旅行者であろうと思われるような人々も見られた。

大会の主要会場となったエアフルト大学には宗教学部に加えて、マックス・ウェーバー



エアフルト大学正門

高等文化社会研究センターがあり、ドイツにおける宗教研究の一つの有力な拠点となっている。なおマックス・ウェーバーは同地の生まれである。

大会の共通主題として「宗教のダイナミクス：過去と現在 Dynamics of Religion: Past and Present」が置かれ、その下に「社会の中の宗教コミュニティ：適応と変容 Religious Communities in Society: Adaptation and Transformation」、「実践と言説：革新と伝統 Practices and Discourses: Innovation and Tradition」、「個人：宗教性・スピリチュアリティ・個人化 The Individual: Religiosity, Spiritualities and Individualization」、「方法論：表象と解釈 Methodology: Representation and Interpretations」という4つの分野が設定された。大会全体を通して、多岐にわたる内容の370を超すパネルが開催され、様々な国から来た研究者たちと交流を深める良い機会となった。

以下に、研究所スタッフが報告したパネルの概要を記す。

8月24日(月)午前中に平藤喜久子を代表とする Religion and Education in the Age of Globalization: The Attempt of Education in Religious Culture in Japan (「グローバル時代における宗教と教育：日本における宗教文化教育の試み」)というパネルが行われ、井上順孝と平藤喜久子が報告した。このパネルは現在日本で行われている「宗教文化教育」について、グローバル化に伴う社会変化などに対応するための新たな試みであることを紹介し、更にその社会的な位置と意義について国際比較を試みるものである。報告者と題目は以下の通りである。



「日本における「世俗化」再訪」パネル終了後の様子

- (1) Kikuko Hirafuji 平藤喜久子 “Myth education from a global perspective” 「グローバルな展望における神話教育」
- (2) Yoshihide Sakurai 櫻井義秀 “Religious Diversity and University Education to Prevent Cult Problems” 「カルト問題対策のための宗教的多様性と大学教育」
- (3) Nobutaka Inoue 井上順孝 “Religious Culture Education Seen From Global Perspectives” 「グローバルな視点から見た宗教文化教育」
- (4) Birgit Staemmler: “Comparing Religious Education in Globalizing Germany and Japan” 「グローバル化するドイツと日本における宗教教育の比較」

また、8月27日(木)午後Orion Klautauを代表とする Revisiting ‘Secularization’ in Japan: A Historical Perspective (1850s-1890s) (「日本における「世俗化」再訪：歴史的視座において(1850年代から90年代にかけて)」)というパネルが行われ、林淳と星野靖二が報告し

た。このパネルは「世俗化」を言説論的に問う視座を前提とし、近年の「宗教」概念論を踏まえた上で、「世俗化」がどのように用いられてきたのかをあらためて歴史的に問い直そうとするものである。報告者と題目は以下の通りである。

- (1) Kiri Paramore “Secularism not Secularization: The Interactivity of Modern Ideologies of Religion between China and Japan” 「世俗化ではなく世俗主義：中国と日本における近代の宗教イデオロギーの相関」
※ Paramore氏は体調不良のため参加することができず、チェアマンのOrion氏がペーパーを代読した。
- (2) Makoto Hayashi 林淳 “Asylum Practices and the Dissolution of Priestly Status in Modern Japan” 「近代日本におけるアジールと僧侶身分の解体」
- (3) Seiji Hoshino 星野靖二 “Considering the ‘Religious’ and the ‘Secular’ in Meiji Japan” 「明治日本における「宗教的なもの」と「世俗的なもの」の検討」

Respondent: Trent E. Maxey

(星野靖二)

出張報告 「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」イギリス調査

「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」では、これまでの宗教文化教育に関する調査研究、作成してきた教材を踏まえ、さらにグローバル化のなかで国際的視点から取り組むべき課題について検討してきた。そのもっとも重要な点である国際的視点からの研究という部分について、より実質化していくために、多文化宗教教育に関して蓄積のあるイギリスにおいて、先行的な取り組みを行っている機関を訪問し、宗教文化教育に関わる教員と議論を深めることとした。調査の概要を以下に記す。

○2月23日（火）

宗教文化教育の教材調査のため、カンタベリー大聖堂を訪問。カンタベリー大聖堂は、イギリス国教会の総本山である。カンタベリーのアウグスティヌスによって602年に建設された。現在の姿は、ゴシック様式の美しい建築で知られる。この聖堂では、1170年イングランド王ヘンリー2世と対立していたトマス・ベケット大法官が暗殺されている。ベケットはその後、殉教者として列聖され、遺体の眠るこの聖堂には多くの巡礼者が訪れるようになった。かの『カンタベリー物語』はその巡礼者たちを描く作品である。

本研究では、「世界遺産と宗教文化」についてのデータベースを作成し、公開している。カンタベリーについては、記事はあるものの、写真等の教材が未だなかったため、HPで公開するための教材写真の撮影を行った（現在は写真も公開している）。また現在の国教会をめぐる世俗化の問題等を考察した。



カンタベリー大聖堂

○2月24日（水）

ノリッジへ移動し、セインズベリー日本芸術研究所を訪問し、イースト・アングリア大学のサイモン・ケイナー Simon Kaner 教授と今回の調査の趣旨についてディスカッションを行った。その後ノリッジ大聖堂について、教会のボランティアの方に案内をお願いし、教会の歴史や教会建築の特徴等について詳しくお話を伺った。

イースト・アングリア大学では、multi faith centre を訪問し、チャプレンの Darren 氏と



セインズベリー日本芸術研究所でサイモン・ケイナー先生と

面会。イースト・アングリア大学における多宗教の共生の状況や現在抱えている問題、センターの活動内容などをインタビューした。Interdisciplinary Institute for the Humanitiesの責任者である John Charmley 教授とも面会し、宗教文化教育の必要性について、日本の文脈について説明し、イギリスの状況についてもお聞きした。



Multifaith CentreでDarren氏と

Sainsbury centre for visual arts をガイドの方の案内で調査した。大学美術館・博物館の有する作品の教材としての活用について考察を行った。

夕方には、日本学の情報交換会に出席し、井上教授が参加教員、学生の前で調査の趣旨と宗教文化教育の取り組みについて紹介した。



イースト・アングリア大学日本学情報交換会で井上順孝教授が趣旨説明

○2月25日(木)

イースト・アングリア大学のサイモン・ケイナー教授の紹介で、ケンブリッジ大学名誉教授で日本学が専門の Richard Bowring 先生に面会し、宗教文化教育について意見交換を行う機会を持った。

Bowring 先生に今回の「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」の趣旨や國學院大學も積極的に活動に関わっている宗教文化教育推進センターの宗教文化士制度などについて詳しく紹介をした。

その上で宗教文化士の試験問題のうち 200 問を英訳した *Workbook for Learning Religious Culture in Japan and the World* の見本をお渡しし、国際的視点からの教材としての可能性について意見を伺った。

Bowring 先生は、われわれの取り組みに対し高い関心を示し、その場で熱心に同 *Workbook* を読み、いくつか重要な意見を述べられた。なかでもケンブリッジ大学の授業においては、知識を得る学習というスタイルではなく、ディスカッションが重んじられることから、正答を選ぶという形式の問よりも、なぜこのような問が成立するのかという方向へ関心が向くだろうという指摘は大変興味深かった。国、あるいは大学の文化によって授業運営には大きな違いがあり、学生の関心や習熟レベルもさまざま異なっている。そのなかで今回の *Workbook* がどのような使われ方をするのか、ただ、回答と解説に留まらない多様な使用法の可能性があることが示されたと考える。

Bowring 先生は、われわれの研究の参考に、ということでケンブリッジ大学図書館に案内して下さった。図書館では日本部の主任である Kristin Williams 氏の説明を受けながら、日本関連の書籍コーナー、書庫を見せていただいた。

ケンブリッジ大学には、大学の幅広い研究活動と長い伝統を示すように、いくつもの博



ケンブリッジ大学図書館

物館がある。そのなかで宗教文化教育の教材研究という立場から、考古学人類学博物館を訪問調査した。その後ケンブリッジ大学のキングスカレッジチャペル、ラウンドチャーチなどの宗教施設にて宗教文化教育の教材作成のための写真撮影や情報収集を行った。

○2月26日（金）

午前中は、ウェストminster寺院、ならびにウェストminster大聖堂(カトリック)の調査を行った。ウェストminster寺院は、世界遺産に登録されているが、現在本研究で作成しているデータベースでは、まだ記事を作成していない。その作成のための写真撮影や取材を行った。イギリス国教会の施設との比較のために、カトリックのウェストminster大聖堂も訪問し、ミサの様子などを観察した。

午後には SOAS の宗教学・哲学部で日本宗教の授業を担当している Tatsuma Padoan

講師に面会し、授業の内容や使用しているテキスト、ビデオなどについて話を伺い、日本側で取り組んでいる宗教文化教育については、教材としてどのようなものを求めるかなどの意見を聴取した。

夕方には、SOAS の日本学の Alan Cummings 氏と面会し、Cummings 氏の行っている日本宗教の授業の内容、学生の関心や、授業の構成上の課題などを話し合った。

○2月27日（土）

午前中に大英博物館の所蔵する資料から、宗教文化教育の教材として活用できそうなものを検討するため、調査を行った。とくに日本関係の資料、仏教、キリスト教、古代宗教についての教材を重点的に調査した。

今回の調査では、イースト・アングリア大学、ケンブリッジ大学、ロンドン大学 SOAS と設立の時期や特色の全く異なる3つの大学を訪問し、それぞれのところで研究者と面談をし、宗教文化教育について議論を深めることができた。日本側の取り組みについても十分に理解をしていただき、今後の研究について協力関係を築くことができた。宗教施設の訪問についても、英国国教会の施設だけではなく、カトリックも比較的調査することができ、イギリスのキリスト教について多面的な見方が必要であることがわかった。全体としてきわめて大きな実りのある調査ができたと考える。

(平藤喜久子)

出張報告

「一宮調査」

2015年度は、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に、國學院大學博物館が中心となった「東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業」が採択された。

前年の2014年度には、文化庁「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」に採択された「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」の一環として、「資料アーカイブによる教育・映像コンテンツ作成」に関わる画像・コンテンツ収集調査を、「二十二社」を対象として行った。

よって、その目的意識を継承し、事業の柱の一つである「博物館における多言語サービスの充実（多言語充実事業）」に関わる画像・映像収集のために、2015年度は全国の「一宮」を中心的な対象として選定し、研究所スタッフが中心となって出張・調査を実施した。

以下では、その出張・調査の目的と方法、調査地ごとの概要と成果について報告する。

(1) 目的と方法

本出張・調査の目的は、國學院大學博物館展示資料に関連する神社の有形文化財や祭礼等の無形文化財についてオリジナルの画像・映像コンテンツ素材を収集・整理してウェブ上での公開による内容の充実をはかるとともに、有名神社の多言語化や情報発信の状況について把握することにある。

今年度はその主たる対象を、全国に数多くの神社が鎮座するなかより、中世から近世にいたるまで地域の総鎮守として機能した「一宮」とすることにした。2015年6月に石川県、

12月に長崎県壱岐市、2016年3月に三重県・和歌山県にてそれぞれ出張調査を実施した。

調査方法は、調査員が現地を実際に訪れ、デジタルカメラ・ビデオを用いてオリジナルの画像・映像コンテンツの収集に努めた。

(2) 調査地と成果

◆気多大社 白山比咩神社

実施日：2015年6月21～22日

調査員：井上順孝、塚田穂高、今井信治、藤井麻央（敬称略）

6月21日は、気多大社（石川県羽咋市）にて調査を行った。同社は、能登国一宮である。主祭神は大己貴命である。

同社境内では、鳥居・石柱・由緒・社号額・天皇陛下行幸記念碑・参道・古札所・神棚・社務所・養老大天國像奉安殿・折口父子歌碑・お守り類・撰社菅原神社・合格橋・絵馬・提灯・撰社楊田神社・撰社太玉神社・燈籠・狛犬・おみくじ類・手水舎・撰社奥津島神社・神門（重要文化財）・茅の輪・拝殿（重要文化財）・本殿・撰社白山神社本殿（重要文化財）・撰社若宮神社本殿（重要文化財）・昭和天皇御製碑・守札所・看板類などの撮影を実施した。

社務所では、由緒やパンフレット類が、日本語・中国語・タイ語・フランス語・ドイツ語・韓国語・台湾語・英語に翻訳されているのを確認し、一部を入手した。

6月22日は、白山比咩神社（石川県白山市）にて調査を行った。同社は加賀国一宮であり、全国三千余社とされる白山神社の本宮・白山信仰の中心である。祭神は、白山比咩大神（菊理媛尊）・伊弉諾尊・伊弉冉尊である。



気多大社 由緒・パンフレット多言語化の状況



天手長男神社 鳥居



白山比咩神社 参道

同社境内では、鳥居・社号票・参道・石燈籠・由緒板・石橋・御神木・手水舎・狛犬・撰社荒御前神社・神門・絵馬・神馬舎・外拝殿・古神札納所・授与所・社務所・奉納額・盤持石・白山奥宮遥拜所・参集殿・遊神殿・禊場・末社住吉社・注連縄・芭蕉句碑・車祓所・宝物館・霊水・参拝客駐車場・觸穢の所・河濯尊大権現・旧加賀一宮駅・石碑・宣伝掲示・看板類などの撮影を実施した。

書籍類・パンフレット類の入手とともに、宝物館にて所蔵資料の展示状況を把握した。

◆天手長男神社

実施日：2015年12月19～21日

調査員：井上順孝、今井信治、吉田尚文（敬称略）

12月19～21日、長崎県壱岐市にて調査を行った。壱岐国一宮は、天手長男神社とされることが多い。ただし、同市内の興神社あるいは住吉神社ではないかとの説もある。

よって、本出張では天手長男神社のほか、市内の複数の有力神社を調査することとした。同時に、壱岐市立一支国博物館にて展示内容の翻訳状況や冊子刊行物などを調査した。

12月20日には、天手長男神社にて調査と撮影を実施した。神職不在、社務所はなく、パンフレットなども置かれていない。境内には壱岐市内の観光名所に置かれる音声案内板が設置されていた。由緒などの紹介は参道入り口に置かれ、日本語のみであった。

その他、調査日程内において、19日は壱岐市立一支国博物館にて展示内容の翻訳状況や冊子刊行物などを調査した。

20日には、前述の天手長男神社の他に、興神社・月讀神社・國片主神社・住吉神社・賽神社にて、21日には、聖母宮・新城神社・中津神社・箱崎八幡神社・壱岐神社・高御祖神社・安国寺・白沙八幡神社にて、調査と撮影を実施した。

◆椿大神社 日前神宮・國懸神宮 伊太祁曾神社

実施日：2016年3月4～5日

調査員：井上順孝、斎藤公太、吉田尚文（敬称略）

3月4日は、椿大神社（三重県鈴鹿市）の調査を行った。伊勢国一宮をめぐる議論が続いており、都波岐奈加等神社や多度大社を一宮とする説もあるが、今回は長年一宮として有力視されてきた椿大神社を調査した。



樫大神社 鳥居・参道

同社は式内社であり、主祭神は猿田彦大神。相殿に瓊々杵尊と栲幡千千姫命を祀る。入口付近にある由緒書や境内各所の案内板は日本語のみであった。他方、レストランや土産物店の入った「樫会館」を併設し、樫岸神社では「縁結び」や「芸能上達」の御利益を打ち出すなど情報発信に工夫が見られた。

3月5日は、和歌山市で伊太祁曾神社と日前神宮・國懸神宮の調査を行った。

伊太祁曾神社の主祭神は五十猛命とその妹神である大屋津姫命、都麻津姫命である。紀

伊国一宮の論社の一つであり、社伝によれば後述の日前神宮・國懸神宮に鎮座地を譲って現在の場所に遷座したという。境内の由緒書や案内板は日本語のみであった。ただし、境内には外国人観光客や外国語の絵馬も見られた。

日前神宮と國懸神宮は一つの境内に鎮座し、二社一組で紀伊国一宮とされる。前述の通り紀伊国一宮については諸説あるが、日前・國懸神宮を一宮とするのが一般的である。日前神宮の主祭神は日前大神であり、國懸神宮の主祭神は國懸大神である。境内の由緒書や案内板は日本語のみであった。

以上の調査により、多くの画像・映像データが収集された。こうしたオリジナルデータは、現在の全国の一宮の様子を知るうえで貴重な資料と言えるだろう。収集データは現在、博物館において、館内展示やデジタル・ミュージアム上でのデータの活用・公開を目指した写真の選定・再整理作業が進められている。

(塚田穂高)

出張報告

研究事業「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開」 による史料調査

2015年度に「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」では3回にわたって出張による史料調査を行った。以下にその概要を報告したい。

1. 京都調査 (第1回)

- ・出張者：遠藤潤・齋藤公太・芹口真結子
- ・用務：明治期国学・神道関係人物に関する史料の調査
- ・用務先：京都府立総合資料館、京都市歴史資料館、大谷大学図書館、龍谷大学大宮図書館（京都府京都市）
- ・出張日程：2015年9月8日～9月10日（2泊3日）
- ・出張の概要

初日の9月8日には、京都府立総合資料館において史料調査を行った。館内でのみ閲覧可能な簿冊目録で史料の概要を把握したあと、齋藤は京都府庁文書所収の「旧神官由緒書」（明治5年）を閲覧し、近世から維新时期に至る神官の経歴を記載した同史料が、本事業にとって有用であることを確認した。

続いて齋藤は、同じく京都府庁文書所収の「神官進退録」（明治20年、30年）、「神官進退綴」（明治28年）、「官国幣社神職進退」（明治31年）を閲覧し、撮影した。これらの史料は明治期の京都府における神官の任用・昇進を記録したものであり、確かな出典に基づく神道関係人物の情報を収集するという本事業の目的を遂行する上で、直接的に役立つ史料であるといえる。さらに齋藤は「神仏各教ニ関スル一件」（明治33年）の撮影も行った。

これは様々な宗教団体から京都府へ提出された行政関係の書類を一冊にまとめた大部の史料である。この史料には天理教や金光教の教会に関する書類が多数含まれており、明治期の教派神道の展開と宗教行政との関係を明らかにする上で有益なものとなるだろう。

一方、芹口は京都府庁史料や京都府庁文書のうち、寺院に関する史料を閲覧し、史料内容の概要についてメモをとった。具体的には、(1)「寺院本末一覧6」（明治3年閏10月改）、(2)「仁和寺歴代先蹤」（明治9年8月）、(3)「二十三院由緒書」（明治13年2月）、(4)「本県支庁諸布達留」（明治7年）、(5)「東本願寺三代以上家士明細書」（明治5年4月改）である。(1)は真宗の京都所在寺院の本末関係を一覧化したもの、(2)(3)は各寺院の歴代住職の来歴や得度年、寺院の由緒を記載、(5)は東本願寺の家臣の系図をまとめたものである。(4)は京都府と福知山県との往復書類を収載しているが、神社取締や寺院取締の任命書や、由利滴水等教導職による説教の実施を周知する布達も含まれており、社寺行政や教導職の諸活動を窺い知ることが可能である。

9月9日は台風の接近による調査の中止が危ぶまれていたが、十分に安全を確認した上で予定通り調査を遂行した。まず齋藤は、午前から京都市歴史資料館で史料の調査を行った。最初に「先斗町丸寿組所蔵文書」（明治25年）を調査した。この史料は神宮教所属の神風講社の契約連名書であり、当該期における神宮教の民間レベルにおける動向について窺い知ることができた。続いて、下鴨神社の社家の史料である「鴨脚正彦家文書」につ

いて調査を行った。資料館の目録によれば、この文書には明治6年に至る鴨脚家の歴代日記が所蔵されているということであったが、調査の結果、現時点では鴨脚秀静の嘉永6年の日記までしか見つからないことが明らかになった。ただし、鴨脚正彦家文書には鴨脚秀文の教導職への就任や神祇省への出仕を申しつけた任状（明治5年）など、明治期の史料も断片的に残っており、同史料の筆写を行った。

上賀茂神社関連の社家文書である梅辻清子家文書についても調査を行ったところ、梅辻太久の日記や「太久參朝記」（明治2年）に、神祇官との関係など幕末維新期における神官の動向が記されていることが明らかになり、当該部分のノートをとった。また同じく上賀茂関連の北大路（季）家文書も調査し、「備忘録」（明治2年）や「賀茂上下行幸記録」（慶應4年）など維新期の史料の概要を確認した。藤木俊顕家文書についても調査したところ、「賀茂氏名門録草考」（明治39年）という史料に、教導職への就任など明治期の賀茂氏の人物情報が記載されていることがわかり、筆写を行った。最後に霊明神社文書を閲覧したところ、神葬祭の記録に神道関係人物の没年月日などの人物情報が、また社務の記録に教導職関連の情報が記載されていることを発見した。これらは大部の史料であるため筆写は見送ったが、今後の調査のための概要把握は行うことができた。

遠藤は京都市歴史資料館での調査において、館内でのみ閲覧可能な簿冊目録で史料の概要を把握したあと、鴨脚家文書所収の社家日記（文化年間以降）について、文化年間以降の社家の特徴的な動向を中心に調査を行い、必要箇所についての筆写を実施した。疱瘡神に関する祈禱や宮中に代わっての荒神代参など、興味深い事例が見られた。

同日、芹口は大谷大学図書館にて史料の閲覧ならびに適宜史料の一部分の筆写を行っ

た。閲覧した史料は小栗栖香頂の自筆日記である(1)「八州日曆」（明治4～5年分4冊）、(2)「東京一覽」（3冊）、(3)「久留米説教日記」、(4)「小栗栖香頂蔵書目録」である。(1)には教部省設立時の出来事や真宗公称に関すること、三条教則の解釈、大谷勝尊の九州巡回説教に関する内容などが記載されている。大洲鉄然等とのやりとりや、香頂を含む教導職任免に関する内容も確認できた。(2)にはキリスト教対策に関する内容が主であった。(3)は久留米滞在中の説教活動に関する内容が記載されている。

10日に遠藤と齋藤は再び京都府立総合資料館で史料調査を行った。遠藤は維新期の関係資料のリストアップを行った後、「旧神官由緒書 明五」第一冊の調査を行い、松尾社の各神職家の明治5年までの履歴について確認し、特に明治初年の神社をめぐる激動の中でどのような身分の変更が生じたのかを中心に記録した。齋藤は「神仏各教二関スル一件」の撮り残していた部分を撮影したあと、「神職進退」第1冊（明治32年）、「神官進退録」（2冊、明治31年、32年）を全て撮影し、「神職進退」第2冊（明治32年）、「神職進退二関スル件」（明治33年）も部分的に撮影した。これらは9日に撮影した史料と同様、明治期京都における神官の人物情報と行政との関わりを知る上で有益な史料である。また、「神仏各教二関スル一件」と同様、宗教団体の書類をまとめた史料である「宗教」（明治39年）も閲覧し、史料の性質と概要を把握した。

同日、芹口は龍谷大学大宮図書館で史料を閲覧し、記述内容についてメモをとった。具体的には、(1)「博多万行寺旧蔵資料」、(2)「明治護法史料」、(3)「西本願寺を主とする明治仏教関係資料集」を確認した。(1)は七里恒順関係史料、(2)は常見寺旧蔵史料である。(1)には福岡県における寺院取締や、大教院・中教院規則、教部省からの布達書、寺院僧侶の本籍記載に関する件、真宗の大教院分離運動

関連史料の他、幕末に作成された護法書の写本（『仏法勤王弁』）が確認出来た。護法書については月性の『仏法護国論』（『護法意見封事』を改編し刊行）が著名だが、本書は「日本古典籍総合目録DB」に記載されていない。内容は排耶論を中心としたもので、キリスト教に対する仏教教団の態度の思想的淵源を探る上で重要な史料であると思われる。(2)には山城国宇治郡に所在する蓮如墳墓の管理についてや、広島県における大麻授与に関するもの、大谷光沢（広如）の事績が記載されている。(3)は万行寺旧蔵史料等が含まれており、内容は多岐にわたるが、島地黙雷の大教院批判書や、真宗の大教院分離運動に関するもの、興正寺別派独立関係史料、教導職巡回章程等が存する。

同日の調査終了後、遠藤、芹口、齋藤の三者で各自の調査成果を報告・共有し、今後の研究事業の進め方について協議した。

以上が今回の京都での史料調査の概要である。

2. 京都調査（第2回）

- ・出張者：松本久史・齋藤公太・芹口真結子
- ・用務：明治期国学・神道関係人物に関する史料の調査
- ・用務先：京都市歴史資料館、京都府立総合資料館
- ・出張日程：2015年12月26日～12月27日（1泊2日）
- ・出張の概要

初日の12月26日には、上記3名で京都市歴史資料館において史料調査を行った。松本は、旧府社の城南宮に蔵される文書（城南宮文書）の写真帳を閲覧し、以下を複写した。「京都府江願伺届之扣」（明治元年9月～明治4年）、「京都府江願伺届之控」（明治4年9月～6年9月）、「京都府江願伺届書記」（明治6年9月～9年2月）、「京都府願伺届書雜記」（明治9年2月～10年4月）、「京都府願伺届

控」（明治10年5月～14年6月）、「諸願伺届控」（明治14年6月～16年2月）。

上記の史料から、当該時期の社司の鳥羽重義が教導職として、権少講義に任じられ、官幣大社稲荷神社宮司、安江静の著した「新撰葬祭考」の出版人となっていることがわかった。同書は神葬祭の手引書であるが、鳥羽重義の需に応じて安江が著したという経緯がわかる。そもそも城南宮は、城南宮文書所収の「山州紀伊郡鳥羽庄 城南宮神社記」、「属伝」によれば、享和年間には白川伯家と関係があり、また、同文書には「唯一神道人別帳」（文化年間～万延元年）があり、社家である鳥羽家は「唯一神道」として、人別が記載されている。このような近世期の城南宮と社家鳥羽家の記録からは、近世後期において神仏分離および、神葬祭に強い関心があったことがうかがわれる。そのような背景が、鳥羽重義が「新撰葬祭考」の出版人となる要因の一つであったことが考えられる。

齋藤は二十二社関連の史料、特に大原野神社文書と平野神社文書を閲覧した。大原野神社文書には、京都府や内務省への明治15年の進達願等をまとめた史料が含まれ、明治期の大原野神社の動向やその人事を知ることができるため、複写した。平野神社文書に関しても同様に調査を行い、「平野社頭日誌」（明治3年）における人物情報にまつわる部分についてノートをとった。

芹口は黒谷文書や佐々木一子家文書を調査した。黒谷文書には金戒光明寺の僧侶が作成した、幕末から明治期にかけての日鑑があり、このうち明治2年（一部）・同5年・同8年・同9年（一部）を複写した。これらの日鑑には、京都諸宗同徳会盟に関する記録のほか、大教院が置かれた増上寺、教部省・末派僧侶などとのやりとりや通達類などが記され、当該期における浄土宗僧侶の人事や諸宗派の動向を把握する上で有益な史料である。また、佐々木一子文書には、東本願寺出入の大工職

であった射水家の史料が伝来しており、このうち「報恩実歴」(射水伊三郎著)を複写した。

12月27日は同じ3名で京都府立総合資料館にて史料調査を行った。松本はまず「神社協会一件」について調査を行った。これは明治37～41年の主に『神社協会雑誌』会費未納者会員に対する督促の状況について、東京の神社協会本部とその京都支部とのやり取りの書類を綴ったものである。続いて、「明治三十七、三十八年戦役神職功績調」(明治39年)を調査した。実物ではなく、写真版紙焼きのファイルを閲覧した。これは京都府内の神職の功績を、各神職の上申書に基づいて上申したものである。今後、すでに調査で収集した明治20～30年代の京都府内の神職履歴と合わせて考察することができれば、明治期の神職の社会活動をより深く理解することが可能になることが期待される。

齋藤は前回からの継続で、「神職進退」第2冊(明治32年)と「神職進退に関する件」(明治33年)の撮影、及び「旧神官由緒書」(明治5年)の調査を行った。芹口は「寺院住職進退」(明治12年)を閲覧の上、撮影を行った。本史料には、京都府内に所在した寺院の人事異動に関する京都府知事等への届出がまとめられている。その届出に添えられた履歴書には、僧侶の戸籍・生国・得年度・修学歴・住職歴・教導職階級などが記載されていた。

以上が第2回の京都での史料調査の概要である。

3. 国立歴史民俗博物館調査

- ・出張者：遠藤潤・齋藤公太・芹口真結子
- ・用務：明治期国学・神道関係人物に関する史料の調査
- ・用務先：国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）
- ・出張日程：2016年2月29日
- ・出張の概要

齋藤はまず「平田篤胤関係資料」のうち、

戸沢盛定の『文稿』を閲覧した。盛定は後に平田盛胤として平田家を継承する人物であるが、この史料ではまだ盛定名を名乗っており、東京大学古典講習科在学中、もしくはそれ以前に書かれたものと推測される。本史料は盛定の草稿類をまとめたもので、「神皇正統記を讀みて思ふ事」といった文章からは、今泉定助とも共通する平田家継承以前の盛定の学問の特徴を窺うことができた。

続いて齋藤は、安政3年に国学者の久保季茲が編纂した『古道集語 一・二』を閲覧した。本書は季茲が自らの塾でテキストとするため、「国体神道」にまつわる漢文を集めたもの。垂加神道や水戸学からの引用が多く見られる。後に季茲は栗田寛や内藤耻叟ら水戸学系統の人々とともに皇典講究所で教鞭をとることになるが、その際の背景にある国学と儒家神道との関係を知る上で有益な史料といえる。なお、引用されている書名と引用箇所についてノートをとった。

さらに齋藤は、「平田篤胤関係資料」所収の「(井上頼国書翰)」や「(頼国カ書翰 平田鏡胤宛)」といった井上頼国関連の書簡を複写した。本研究事業では頼国宛での平田鏡胤の書簡の翻刻を進めており、これらの書簡はその参考になると予想される。また同資料所収の「(西川吉輔書翰)」や、「水木家資料」所収の「[書簡] (靈魂行方・祭奠の件につき御示教御願)」も複写した。これらは明治期の国学・神道関係人物の情報を得る上で参考資料となると考えられる。

芹口は、「平田篤胤関係史料」のうち、まず「排仏論」を閲覧した。本史料の成立年代は不詳だが、史料中に天保14年(1843)に出された幕令に関する記述などを確認できることから、篤胤没後に成立したものであると推察される。内容は仏教批判であるが、とりわけ浄土真宗が主な批判対象となっている。また、火葬に対する批判も確認することができる。かかる批判部分などについては、適宜

ノートにメモをとった。

芹口は続いて、同史料群のうち、「第一年預建白」という写本を閲覧した。これは、西本願寺学僧の南溪が、門主に宛てて提出した上書である。その内容は、平田国学の排仏論が世間に流布していることに危機感を抱き、対策を取るべきであると主張するものである。執筆の動機は、恐らく平田派が松浦彦礼なる人物へ贈った『古学諄辞集』（篤胤著）の「古学者内伝」の部分で、南溪が「有人」から密かに見せて貰ったところ、そこには篤胤が「数年畜懐セシ大志」が書かれており、その内容に危機感を抱いたためであるという。平田派の仏教批判が真宗教団に与えた影響や、門主への上書が平田家に伝来していることなどがわかり、国学者と仏教教団の緊張を孕んだ関係性を窺い知ることができる興味深い史料である。こうした上書の執筆動機に関する部分については、ノートをとった。

このほか、平田延胤の書簡も閲覧した。これは明治3年6月28日付に鋳胤宛に出され

た書簡で、東本願寺門主の秋田通行に関する出来事の報告のほか、黄泉国論争の動向も記載されており、明治初期における平田派国学者の動向や、宣教使の活動などを考える上で有益な史料である。

遠藤は、平田国学者と神社界や教派神道の関係を具体的に考察するという目的のもとで、明治10年代の平田神社創建や本教教会の創設の関係資料（電子）の閲覧・筆写を行った。平田家の邸内社を発展させる形で平田神社を創建する際の関係資料である、「平田神社共有祭祀願」、「平田神社地所絵図面書」、「平田神社永続方法書」（いずれも明治11年4月）などや、「平田神社明細書」（明治11年5月）や平田神社を拠点に本教教会を創設する際の「平田神社本教々会願」（明治11年8月）などの基本資料を対象とした。

以上が国立歴史民俗博物館での史料調査の概要である。

（遠藤潤・齋藤公太）

特集によせて

國學院大學日本文化研究所は、1955（昭和 30）年に設立され、2007（平成 19）年の研究開発推進機構の一機関への改組を経て、2015（平成 27）年で 60 周年を迎えた。

日本文化研究所の 50 年の歩みについては、すでに『國學院大學日本文化研究所 50 年誌』（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編・刊、2008 年 3 月）に包括的にかつ詳しく収められているので、参照されたい。

本特集ではまず、旧・研究所時代からさまざまな研究プロジェクトに携わってこられ、また研究開発推進機構へと移行した後も継続して関わってこられた 8 名の方々に、研究所の変化を見ながら思うことについての随想を寄せてもらった。

続いて、本特集では、『50 年誌』収録内容の後のおよそ 10 年間分（2015 年度まで）をアップデートすることを目指し、研究所の活動記録を作成して収録した。項目は、『50 年誌』の構成を踏まえ、「プロジェクト」「国際研究フォーラム」「刊行物」「年報目次」「年表」の 5 つとした。

「プロジェクト」では、2007～2015 年度に実施された研究所プロジェクトの名称、担当教員、分担者の一覧を示している。「担当教員」には専任教員と兼任教員の名を、「分担者」には客員研究員・PD 研究員・研究補助員・客員教授・共同研究員の名を載せている。（責）とあるのは、プロジェクトの責任者である。

「国際研究フォーラム」では、2008～2015 年度に毎年 1 回（2013 年度はミニ・フォーラムを含め 2 回）秋に開催されてきた国際研究フォーラムの、テーマ、年月日、登壇者、発表題目等を収録した。

「刊行物」では、2007～2015 年度に研究所とその事業が主体となって刊行された書籍・報告書類の、書名、編著者／出版社、刊行年月、体裁、概要がまとめられている（なお、2015 年度の 60 周年記念行事での議論がまとめられた『〈日本文化〉はどこにあるか』（國學院大學日本文化研究所編・井上順孝責任編集／春秋社、2016 年 8 月）の情報も収録している）。

「年報目次」では、2008 年 9 月に創刊された『國學院大學 研究開発推進機構 日本文化研究所 年報』の創刊号から 8 号（2015 年 9 月）までの全目次が収録されている。

「年表」では、2007～2015 年度の日本文化研究所関係・國學院大學関係等の出来事が収録されている。

各活動記録の作成にあたっては、『50 年誌』の増補となることを意識し、同様の基準で各項目を選定した。また、各データは、『國學院大學 研究開発推進機構 日本文化研究所 年報』創刊号～第 8 号、『國學院大學 研究開発推進機構 機構ニュース』1～19 号（2007 年 6 月創刊、年 2 回刊行）、ならびに日本文化研究所ウェブサイト（<http://www.kokugakuin.ac.jp/oard/index2>）などの記載内容に依拠した。

研究所の 10 年の歩みを振り返るとともに、将来、いずれかの機会に研究所の歩みをあらためてまとめる際に、本活動記録が何らかのかたちで役立てばと思う。

国際発信という役割

井上 順孝

1. 国際会議との因縁

私は 1982 年 4 月に日本文化研究所に講師として着任した。この年は國學院大學創立百周年に当たり、その記念行事の一環として日本文化研究所主催の国際シンポジウムが開催されることが決まっていた。シンポジウムは「アジアの近代化と民族文化」というテーマで 1983 年 1 月に開催された。ロバート・ベラー氏とピーター・バーガー氏がメインゲストで、その他韓国から柳東植氏、インドからトリロキ・マダン氏、インドネシアからアリフィン・ベイ氏、フィリピンからルネ・メンドーザ氏、シンガポールからエディ・クオ氏の各氏を招いた豪華なものであった。当時主事であった藺田稔氏が師と仰いでいた柳川啓一氏の人脈によるところが大きかったと考える。

それから 13 年後の 1996 年 1 月にふたたび大掛かりな国際シンポジウムを開催することになった。「グローバル化と民族文化」がテーマであった。このときは私自身が日本文化研究所の主事であったので組織委員長となったが、所長であった阿部美哉氏と相談しながら、ローランド・ロバートソン氏、リリアン・ボアイエ氏という著名な宗教社会学者を招聘した。当時磯村尚徳氏が日本文化研究所の教授であったので、ジャンヌ・パイフェール氏を紹介いただいた。

この 2 つの国際会議の結果はいずれも日本文化研究所編の単行本として刊行された。それぞれ『アジア文化の再発見—比較国学をめざして—』（弘文堂、1984 年）、『グローバル化と民族文化』（新書館、1997 年）である。

20 世紀においては、國學院大學でこうした国際会議が開かれることはそう頻繁ではなかった。現在と比べていろいろな面でかなりハードルが高かったようだ。それが 21 世紀になり、日本文化研究所から研究開発推進機構への移行前後あたりから、国際会議はむしろ日常的な企画へと転じた。そのきっかけは 2002 年度から 2006 年度まで 21 世紀 COE プログラムに採択された「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」による事業推進である。日本文化研究所はこのプログラムの重要な一翼を担った。日本文化研究所がなければこのプログラムへの応募さえ覚束なかったとさえ言えるだろう。それまでの国際会議の経験とそれによって得られていた国外の研究者たちとの人脈は非常に強力な基盤として機能したのである。

2002 年 4 月から私は新設された神道文化学部へ移籍し、日本文化研究所は兼任教授ということになった。プロジェクトの責任者は継続したが、学部や大学院の学生指導も行うことになったので、なかなか大変であった。けれども、そもそも日本文化研究所着任のときに与えられた役割からしても、國學院大學を中心とする神道や日本文化研究の成果の国際発信や研究交流の推進は自分にとっての責務になってしまったのだと感じていた。

2. COE プログラムでの鍛錬

COE プログラムが採択される上では、とりわけ阪本是丸氏の非常な尽力があったのだが、5年間の事業推進によって國學院大學の国際交流には全体として底力がついたと感じている。このプログラムは3つのグループに分かれて研究を実施したが、日本文化研究所は主に第3グループ(「神道・日本文化の情報発信と現状の研究」)の事業推進に関わった。そして『神道事典』(弘文堂、1999年)の本文を英訳したオンライン事典 EOS (Encyclopedia of Shinto) の作成とともに、神道・日本文化研究をテーマとした国際会議の開催をミニシンポジウムを含めて合計6回行った。

第1回は2003年3月に「各国における神道研究の現状と課題」をテーマに開かれた。招聘したのは、米国のヘレン・ハーデカ氏、フランスのフランソワ・マセ氏、オーストリアのベルンハルト・シャイド氏、オランダのヤン・ファン・ブレーメン氏、韓国の李元範氏。第1回の会議なので、それぞれの国で神道や日本宗教について一線で研究している人たちに依頼した。

第2回は2003年9月に、「〈神道〉はどう翻訳されているか」をテーマに、アン・ウェイマイヤー氏(米)、マーク・マクナリー氏(米)、ジョン・ベンテリー氏(米)、マセ氏、魯成煥氏(韓)を招いた。各国の神道古典についての研究のレベルが予想以上に進んでいることを感じさせられた会議であった。外から神道はどう見えているかを知る上でも、大変興味深いものとなった。この年の12月にはさらにミニ・国際シンポジウム「〈神道〉はどう翻訳されているか(2) 近現代の神道を中心に」を開催し、ジャン・ピエール・ベルトン氏(仏)とインケン・プロール氏(独)を招聘した。年度は違うものの、2003年にはなんと3回も国際会議を開催したことになる。

第3回は、2004年9月に開催され、テーマは「神道の連続と非連続」であった。神道概念の再考を内包するものであった。リュドミーラ・エルマコーワ氏(露)、アルノー・プロトン氏(仏)、ファビオ・ランベッリ氏(伊)、ゲイリー・エバーソール氏(米)、クラウス・アントーニ氏(奥)を招聘した。このときは日本文化研究所の若手研究者に、それぞれ招聘した発表者へのコメント役をしてもらおうという構成にした。こうした機会に直接国外の研究者と意見を交わす体験を増やして欲しいと考えたからである。

第4回は2005年9月に「オンライン時代の神道研究と教育」をテーマに開催された。情報化の進行を意識して、新しい研究方法に着手している研究者を招聘した。色音氏(中)、ステーブン・コベル氏(米)、ペトラ・キーンレ氏(独)、ジャン・ミシェル・ビュテル氏(仏)、ベンテリー氏である。この会議でも若手研究者にそれぞれの発題にコメントしてもらう形式とした。國學院大學関係者だけでなく、学外の若手研究者にもコメント役を依頼した。研究のネットワークは国内外に広がってこそ、いっそう力を発揮するからである。

最後の第5回の会議は2006年9月に、「神道研究の国際的ネットワーク形成」というまさに一連のシンポジウムが目指すそのもののテーマで開催された。招聘したのは、魯成煥氏、色音氏、マーク・テーウェン氏(諾)、ジョン・ブリーン氏(英)、ベンテリー氏である。招聘が複数回になる人が多かったが、これはネットワーク形成の促進を考えてのことである。

3. 研究開発推進機構時代へ

COE プログラムが終了した直後に日本文化研究所を発展させた研究開発推進機構という新しい組織ができる。このことはCOE プログラムが採択された段階で目指されたことであり、降ってわいた話ではない。2007年に研究開発推進機構がスタートすると、日本文化研

究所は同機構の一機関という位置づけになった。日本文化研究所の研究活動を拡大発展させる形で研究開発推進機構になったが、日本文化研究所のそれまでのプロジェクトの一部は日本文化研究所で継続的に実施するという、少しややこしい話ではある。そして国際交流・国際発信に関わる事業は、引き続き日本文化研究所が担当することになった。日本文化研究所には2つのプロジェクトが設けられたが、そのうち「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトが国際交流・国際発信を担うことになった。

機構ができたのはたんに組織改革だけの問題ではなかった。学術メディアセンターという新しい研究棟が建設された。2006年に日本文化研究所のあった常磐松2号館は解体された。同時に常磐松1号館、3号館も解体され、その場所に学術メディアセンターが設置された。この「学術メディアセンター（略称 AMC）」という名称は私が考案したものである。「外国語名はどうも・・・」というような思いがけない異論が、当時の安蘇谷正彦学長から出されたものの、大方の了解が得られて決定した。1階には国際会議場を設置するというになっていたが、是非同時通訳用のブースを設け、聴衆席は傾斜をつける形式にして欲しいと希望を出した。他の部分はともかく、国際会議場だけは使いやすいものにしたいと強く願っていたので、要望通りになったのは、大変うれしかった。これが常磐松ホールである。

2008年10月に学術メディアセンターの開所式が行われた。そして常磐松ホールで行われた初めての国際会議が、同年10月26日の国際研究フォーラム「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」であった。それまで重ねてきた神道・日本文化に関する国際会議を基盤に、当時から本格化した宗教文化教育の拠点作りの一環ともなるものであった。このときはアラン・カミングス氏(英)、ミカエル・ヴァチュツカ氏(独)、ビュテル氏を招聘した。

以後、日本文化研究所では毎年国際フォーラムを開催するようになった。2009年には「映画の中の宗教文化」をテーマにビュテル氏、ジョリオン・トーマス氏(米)、グレゴリー・ワトキンス氏(米)を招聘した。宗教文化教育の教材の一つとして映画を位置づけたときに、どのような可能性、利用の方法があるかを議論した。宗教文化教育の教材として映画・DVDを積極的に利用するという方針を固めた。個人的には2007年に平凡社から毎年刊行されていた『宗教と現代がわかる本』で、毎回宗教文化に関わりが深い最新の映画を紹介していたので、非常に得られるところが多かった。

2010年10月には「イスラームと向かい合う日本社会」をテーマにし、イサム・ハムザ氏(埃)、サリー・ユセル氏(豪)、グリット・クインカマー氏(独)を招聘した。日本各地にモスクが建設されるようになり、イスラーム問題は日本でもしだいに大きな問題となってきたことを意識しての企画であった。

2011年10月には「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」をテーマにし、エリカ・バッフェリ氏(伊)、カミング氏を招聘した。それまでは国際フォーラムに当たってずっと司会を務めてきたが、この年は黒崎浩行氏とノルマン・ヘイヴンズ氏に司会役をお願いした。

2012年9月には「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」をテーマにロベルタ・ストリッポリ氏(米)、マーク・マックウィリアム氏(米)を招聘した。宗教文化教育の教材としての文学、絵画、漫画・アニメといったものに焦点を当てた。

2013年には通常の国際フォーラムを開催しなかったが、これには事情がある。この年は

日本宗教学会の第72回学術大会が國學院大學を会場に開催された。当時私は同学会の会長であったが、学術大会の実行委員長でもあった。そこで開催校企画として日本文化研究所国際フォーラムと日本宗教学会の公開学術講演会との共催という形で、9月に講演会を実施したのである。「ネットワークする宗教研究」というテーマのもとに、国際比較神話学会会長でハーバード大学教授のマイケル・ヴィツェル氏に講演者の一人になってもらった。なおこの講演会をもとにしたものが、井上順孝編『21世紀の宗教研究—脳科学・進化生物学と宗教学の接点—』（平凡社、2014年）である。ただし、この年度は2014年2月に「日常生活と宗教文化—戒律をめぐる問題を中心に—」をテーマとした比較的小規模な国際会議を開き、英国のジュリア・イブグレイブ氏に、英国の宗教教育についての基調講演をしてもらった。

2014年9月には再び例年の形式の国際フォーラムを開催した。「ミュージアムで学ぶ宗教文化—デジタル時代のチャレンジ—」というテーマで、カミングス氏、サミュエル・C・モース氏（米）を招聘した。カミングス氏はロンドン大学が大英博物館の近くにあるので、博物館を授業にどう取り入れるかを説明した。モース氏はボストン美術館の例をひきながら、宗教的芸術を博物館で扱うことの意味について掘り下げた議論を提示した。この年から國學院大學博物館を充実させていくことに機構全体で取り組むことになったので、それも意識した企画であった。

そして昨2015年10月に日本文化研究所設立60周年を記念する「[日本文化]研究の展望」が開催され、米国からウィリアム・ケリー氏とスチュワート・ガスリー氏が招聘された。日本文化研究所における研究の回顧ではなく、これからの展望に焦点を当てることにしての企画である。この会議と前日の公開講演会をもとに刊行されたのが、國學院大學日本文化研究所編『〈日本文化〉はどこにあるか』（春秋社、2016年）である。

むすび

神道や日本文化の研究を日本人だけが行っては、どうしても見方が偏ってしまう。そこに含まれているものの大半を、つい当然のこととして考えがちであるからである。当たり前のことの中にこそ多くの不思議が潜んでいる。日常世界のあり方が異なる人の眼から見た方が、その不思議さを発見しやすいと言える。お互いの文化について意見交換する醍醐味の一つはここにある。21世紀にはいり、日本文化研究所が研究開発推進機構の一機関としての機能を充実させていく上で、こうして継続されている国際的交流の場は、10年20年たつてから、その本当の意義が明らかになるのではないかと考えている。

それにしても、常磐松ホールという非常に優れた設備を持つ会場で、こうした意義深い国際会議を行えるということは、恵まれていると感じる。せっかくの施設をさらに有効に使って欲しいと願う。

最後に付け加えておきたいのは、ここで紹介した多くの国際フォーラムが、実は衛星放送としてテレビ放映されているということである。それらはDVDとして残されているので、いずれ、非常に貴重なアーカイブとなると考えている。これもまた10年後、20年後にその価値が見いだされるのであろうと思っている。

これらの国際会議を撮影し、スカイパーフェクTV！で放映することにご尽力いただいているのが、元・精神文化映像社社長の並川汎氏である。数時間の会議を一時間にまとめるとするのは部外者では難しいので、そのタイムシートは私が作成しているのだが、撮影から放映に至るまでの並川氏の厚い支援というのは、本当にありがたく感じている。

研究所の思い出

梶山 林繼

研究所の昔については、平成 27 年度神道宗教学会の学術大会における学術シンポジウム「戦後神道研究の課題と展望—終戦 70 年を節目として—」の際に語り、皇學館大学の神道研究所と比較しながら話し合いしたのちに、『神道宗教』誌上（第 244 号、平成 28 年 10 月刊行予定）に「基調講演 研究所の思い出」として採録されるので、これが詳しい。ここでは残る思い出を。

研究所が現在の研究開発推進機構の一部となる前は、國學院大學の一部として教授・助教授制をとって来た。これ以前は、学校法人國學院大學の傘下であり、大学とは独立していた。私は設立の時は知らないが、昭和 33（1958）年に大学に入学してまもなく、研究所を知り、昭和 37（1962）年大学院在学中にはアルバイトをするようになった。以後、研究所と関係することになり、研究所に育てられたと言っても過言ではない。法人傘下の研究所は、大学の給料より一まわり安く、経済的には豊かではなかった。しかし、気分的には、和気藹々としていた。毎年親睦旅行があり、楽しい思い出であった。旅行費用も上の人が多く出し、我々はほんの少しで行くことが出来た。当時大学のバスがあり、これを使った。宿泊も折口信夫先生の叢蔭寮とか、二木謙一所員の豊島岡学園の佐久（蓼科）の寮であったり、日光、伊豆、会津、時には森磐根所員の世話で長良川の鵜飼にも行った。内野吾郎、安津素彦、藤井貞文、平山輝男などの教授方も同行であった。酔っ払って暴れ、叢蔭寮の管理人にもう来るなど怒られたこともあった。

バスの後方から大声をあげて駆けてくる男がいる。誰かを見れば、我がメンバーであったり、数々の思い出がある。



坪井洋文先生(左)と筆者 神道要語集編集のための成田山の図書館調査時 1962年8月

一方、研究所は地道な研究活動を続けていった。中村啓信さんの日本書紀校訂とか神道要語集の編纂とか神社史料のフィルムによる蒐集などなど、大学の研究部門の中心とならなければならない。

シンクタンク的存在を各々が意識して活動していたと言えるだろう。

大学が教育と研究を両輪として動いていかねばならないことは、いつの時代でも同じであり、過去を追うのではなく、これからも各々自覚の上、前進して行ってほしいと思っている。



上田賢治先生（左）と筆者 秋田国学者調査時に菅江真澄の墓前にて 1984年8月

旧研究所スタッフ随想 3

「常磐松二号館時代」の思い出

齋藤 ミチ子

はじめに

退職してほぼ 10 年を経た今日、在職中の 40 年余に及ぶ思い出のくさぐさは、一朝一夕には整理がつかねる。そのため、記述内容にバランスを欠くむきもあるが、脳裏に浮かぶ事柄を順次書き連ねてみることにした。乱雑無章のほどをご容赦願いたい。

私が研究所に入った頃は、まだ李王邸に研究室が設置され、一部は図書館棟の中に分室が設けられていた。李王邸の庭先には、見事な八重桜があって、二階の窓から掌に受けた花房の感触をいまだに思い出す。

日本文化研究所発足以来、その後、研究所は紆余曲折、機構内容の整備、発展に応じて、施設および建造物も幾たびか変わったが、私の場合は、図書館の間借り時代を経たのち、後に李王邸の跡地に建て替えられた「常磐松 2 号館」に落ち着き、研究所生活のほとんどをそこで過ごした。

「梧鼠之技」のしごと種々相

梧鼠之技とは、何でも屋、器用貧乏で周囲の人様にとって重宝の意であるが、私は入所して久しい間、自虐的にこの言葉が脳裏に浮かんでならなかった。後で考えてみると、所の機構上の不備がもたらす矛盾、加えて業務を差配する御仁の個性などがあいまって動く斯界の中で、文字通り孤軍奮闘していたということであろう。

入った当初は、刷り物の塊や不揃いの書物などの整理にもっぱら明け暮れていたもので、研究業務に従事とのお声掛かりで、こちらに呼ばれた筈と、いぶかる私に、研究活動の前提として、環境を整えるための前作業であるとの説明であった。

時を前後して、河野省三博士の蔵書受け入れの準備の一作業として、博士宅へ参上し、そちらの蔵書の整理も託された。一人、お屋敷に泊めて頂きながらの、埃と鼠の糞との格闘は、今でも苦い思い出であるが、唯一、省三博士ご令室のお心入れの朝餉が懐かしく思い出される。いずれにせよ、その後も続いた各様の梧鼠之技の経験は、心身ともにかなりの忍耐力を養うこととなった。

次いで『分類食物習俗語彙』編集作業が始まった。編集の前作業として柳田国男の手書きのカードを拝借して、柳田特有の筆癖や引用文献の略記述の解説を行いながら、筆写による新カードの作成。データー処理機能が今日のように進歩していたら、どのような展開を見せたか、複雑な感慨を覚える。柳田カードに欠落していた山菜類の、データー補填にそなえて出かけた、資料収集旅行で覚えた開放感を、鮮明に思い出す。結果的に、この企画によって、食文化の基層についての関心が触発され、その後の食を巡る諸々の研究活動へと紐帯することになったといえようかと思う。

この頃、故・馬淵東一氏のご指導によって長年続けてきた沖縄の女性祭祀研究は、個人宅

で行ってきたのを、当時の所長の許可を得て、研究所に場を借りて研究会を継続させることができ、個人的な動向については、本来の業務に支障がない限り、自由であったので、イザイホーの調査をはじめ、沖縄の調査は数年の間継続した。

この時期、沖縄地域のフィールド調査を重ねる機会をもてたことは、その後のこの地域社会の急速な変貌、伝統文化の衰退現象を鑑みると、幸いであったと思う。

大学の委託業務を巡って

大学付置になった後、本校からの委託業務に携わることも少なくなかった。私に関わった主だった事業を記せば、まず『芳賀矢一選集』の編集業務が上げられる。芳賀矢一は明治、大正期の国文学者として、研究領域は広く、加えて、その頃の学識者が概ねそうであったように、関心事も多岐に亘っていた。そのため、扱う資料も膨大で、整理、編集、加えて解説の代筆などと、かなりの時間を要した。しかし、はからずも、民俗学の萌芽期といえる大正期の柳田と芳賀との密かな確執を認める資料を見出すなど、思いがけぬ収穫もあった。

また、大学は、百周年記念行事の一端として、国外から前途ある研究者を招聘、援助する企画をたてた。研究生生活を1人につき2年間保証するという条件で、まずモンゴル民族（中国・内モンゴル自治区）から、若手研究者3名を各2年ずつ招いた。その際の研究室の提供、おのずから伴う面倒見を研究所側が担うことになった。6年間に亘ったこの件を、研究所の50年の歴史の一駒として特筆しておこう。

1985年4月から1987年4月まで布仁巴図（プリンバトウ、文学部）、1987年4月から1989年3月まで芒来夫（マンライフ、法学部）、1990年5月から1992年3月まで武勝利（イラータ、経済学部）といった新進気鋭の3氏が選ばれて来日した。その受け入れ先は、研究フォローは各部門の教員各位、その他研究生生活に関するすべてを研究所が担った。そして彼等の机は我が研究室に置かれた。6年に及ぶ彼等の動向は、研究室内に止まらず、多様な場面で多くのエピソードを残していった。同じ研究室で過ごした私としては、時には煩累を逃れたい衝動にかられる時もあったものの、今にして思えば、意義のある日々であったといえるかも知れない。彼等は現在、2人はそれぞれ文学部、法学部の教授、1人は大学教員から日中合弁企業に移り、現在、管理職などなど、各分野でそれぞれ活躍している。彼等は今もって、往事の研究所で過ごした日々を、折に触れ懐かしむ。そのよりどころは、研究所のスタッフ各人が、常時何くれとなく、暖かい対応を惜しまなかった点にあるようだ。

私どもは折角の絆を大切にまで今日に至っている。当方でもかの地へ赴き、彼らの協力を得て、内モンゴル、わけても牧民の食文化や信仰の様相を中心とした調査などを行うことができ、草稿作成もすることが出来た。今や、彼の地もご多分に漏れず、近代化が急速に進み、社会変化が著しい。時宜を得た採訪であったと痛感している。

そもそも、研究所を特徴づける点のひとつに、スタッフの顔ぶれが比較的多様であることがあげられよう。その上、外来の方々の出入りに寛容であり、理解がある。交流も比較的盛んであった。こうした特徴を基盤として、大学側からの委託により、しばしば外来の短期研究者に研究の場や機会を提供した。一時期、学内の中国をはじめアジア圏の招聘研究者もよく顔を見せた。2、30年前のかの国々の方々は、海外留学はまだ珍しいことで、エリートとはいえ、留学先の会話能力をつける機会を得ぬまま来日するようであった。思い出すたび、顔が緩んでしまう閑話の一つ。来日したばかりの女性の研究者が、学内で先生方と行き交う

ごとに声をかけてくれるので当惑する、どうしたものかとの相談に、以下のごとき私の苦肉の策の提案。「お陰様で……」と首を傾げて微笑む。次いで先方が何か言ったら、「いずれ又……」と喋って会釈して失礼する。実際、この手で暫く凌いだらしい。この種の思い出草は枚挙にいとまがない。

風吹き雲を吹き払う

既述したような状況での歳月、研究所に離れがたい愛着を持続できたのは、所内のスタッフ、わけても重鎮世代ではなく、若年世代の方々からの援護、加勢に恵まれたが故であったと思う。その一つ一つの具体的な場面を追想すると、今でも胸が熱くなる。

爾来、私は遅まきながら己の意図する研究活動、あるいは充足感を覚えることが出来る仕事に専念できるようになった。

退職の数年前には、「食と心—食文化にともなう精神性を探る—」をテーマとした講演会・シンポジウム・出版といったシリーズ行事の遂行を担ったが、企画から関係スタッフの選定、ポスター、本の装丁に至るまで、己の思うまま自由にさせて頂いた。この頃は、夜半タクシーで帰宅という日々も珍しくなかったが、いっこうに苦にならず、充足した明け暮れであった。遅まきながら、こうした経験をもてたことは有り難かった。

その後も新風は吹き抜けて、今や、研究所の機構も著しい変貌をみせ、その推進を往時の若手の研究者が担っていることも納得がゆく。徐々に女性の登用も拡大し、また女性も呼応して、大いに活躍されている様子を目の当たりにするのも嬉しい限りである。

末筆になってしまったが、かつて私が研究を進めるにあたり、古社大社のご協力は不可欠であったが、この点で、私は諸社から多大な恩恵をこうむった。往訪する時期が、常に行事や祭儀が行われるご繁多の時に、いつも恐縮であった。にもかかわらず、常にお厭いもなく、対応して下さり、ご協力くださった。貴重な映像資料を残すことができたのも、そのお陰であると、心から感謝している。

旧研究所スタッフ随想 4

日本文化研究所時代を振り返る

茂木 栄

1. 日本文化研究所の嘱託研究員の頃

國學院大學日本文化研究所が創設 60 周年を迎えるにあたって、一文を寄せるように要請された。

私は昭和 59 (1984) 年度より嘱託研究員として日本文化研究所に週 2 日勤めることとなった。当時助教授であった藺田稔先生が呼んで下さったのである。参加プロジェクト名は「祭礼調査とその資料化に関する研究」。同じ嘱託研究員であった宇野正人氏の下に配置され、藺田稔先生の薫陶を受け、宇野正人氏の調査手法を学んだ。『國學院大學日本文化研究所五十年誌』(平成 20 (2008) 年 3 月刊)を見ると、このプロジェクトにはもう一人坪井洋文氏が担当教員として加わっている。

当時坪井洋文氏は、千葉県佐倉市に建設された「国立歴史民俗博物館」の民俗研究部部长として民俗展示の構想を練り上げていた。私は昭和 56 (1981) 年 4 月から坪井洋文氏の下で展示プロジェクト委員及び嘱託研究員として民俗展示構想の検討と構想に従って、全国から何をどのように集めるか、また現地に赴き収集や、民俗仮面の模造面の製作の段取りをつけるなど岩井宏實先生・山折哲雄先生のお手伝いをさせていただいていた。

昭和 59 (1984) 年から、週の前半は佐倉の国立歴史民俗博物館に、後半は渋谷の日本文化研究所に通うことになった。研究所では、個別具体的な祭礼調査と資料収集、分析が行われた。飛騨古川の古川祭の調査研究、奄美大島全村落の民俗風土と神社調査、大和の水分・山口・御県に坐す神々の社を中心とした祭り調査と風土構造の研究、国府祭礼の総合的研究などのプロジェクトで大伝統としての国府総社の祭の分析と在地の小伝統としての一宮の祭との比較分析などを行った。そして、昭和 62 (1987) 年に専任にさせていただき、平成 14 (2002) 年 4 月の神道文化学部開設に伴って学部に移籍するまでの 16 年間 (嘱託時代を除く) の長きにわたり、研究所でお世話になったことになる。

2. 最も印象に残っている映像制作の仕事

研究所時代の活動で、最も印象に残った仕事を記しておきたい。

調査研究と並行して祭礼・芸能の「分析的記録映像」制作運動と称して、映画・ビデオ制作を行ってきた。最初に手掛けたのは、昭和 50 年代の後半から調査に入った静岡県磐田市見付の裸祭であった。調査の成果は磐田市史のシリーズに収められたが、昭和 59 (1984) 年に 16 ミリ映画『見付天神はだか祭り—海と山との交歓 (遠州総社の祭)—』(55 分) を完成させた。研究所と神社本庁内の民俗文化財研究協議会との共同企画制作の形をとったが、費用は民俗文化財研究協議会に負担していただいた。これは「日本の祭礼行事」シリーズとして後にビデオ化した。刊本としては、平成 3 (1991) 年に『見付天神はだか祭り 海と山との交歓—矢奈比売神社、遠江総社淡海国玉神社祭礼の観察—』(302 頁) を研究所から刊

行していただいた。続いて平成元（1989）年に昭和 50（1975）年から調査に入っていた長野県下伊那郡天龍村の三ヶ村の夏の仏行事（念仏踊り）と冬の神楽（坂部の冬祭り、向方のお潔め祭り、大河内の御神楽）を対比的に描いた映画作品を制作した。『山の祭り 第一部 天龍村の夏』（25 分）、『山の祭り 第二部 天龍村の冬』（55 分）である。重要無形民俗文化財の記録作成事業として研究所の本プロジェクトが映像記録にあたった。この映画は、英語版も制作した。また、EC ヨーロッパの EU への移行と市場統合を控えた昭和 63（1988）年頃、ベルギーの首都ブリュッセルで統合を予祝したユーロパリアジャパンが半年間開かれた。そこに *Japan, Land of Festivals*（『日本は祭の国』英語版、30 分）を制作し出品した。これは評判が良く後に日本語版を制作することとなった。「祭礼調査とその資料化に関する研究」プロジェクトは様々な媒体の資料を収集しながら、資料の一元化を模索していたのであるが、祭祀という調査研究対象の特殊性により、文字による記述分析論文ばかりでなく、必然的に映像を用いた祭祀資料の記録、さらに映像表現による祭祀の分析を進めることとなった。この間に高価な映画制作から比較的安価な業務用ビデオ制作に切替え、研究所には金銭的負担を極力かけないように、民俗文化財研究協議会、諸財団、国、自治体などに負担をしていた。映像の質は高く、映像資料を蓄積していた時期は、私がもっぱら撮影をしていたが、その後プロカメラマンの松永国彦氏の力を借りて、多数の映像作品を生み出すことができた。思いつくままに記してみよう。

岩手県黒森：「黒森神楽・舞立ち編」（60 分）、「黒森神楽・巡業神楽宿編」（40 分）

島根県隠岐島：「隠岐島前の神楽」（25 分）、「由良比売神社の海上祭」（30 分）、「隠岐の伝承 芸能」（50 分）、「美田八幡宮の田楽祭」（30 分）

福岡県豊前市：「山人走り」（32 分）、「嘯吹八幡神社の湯立三十三番神楽」（40 分）

海村：「初島の鹿島踊り」（30 分）、「北勢の鯨船神事」（20 分）、「鹿島町江垂日吉神社のお浜下り」（35 分）

一宮：「一宮の祭祀—気多神社平国祭—」（30 分）、「一宮の祭祀—出雲の神在祭—」（27 分）

勅祭：「勅祭の伝統—賀茂祭・葵祭—」（27 分）、「勅祭の伝統—石清水祭—」（27 分）

「日本は森の国」シリーズ（愛・地球博出展ハイヴィジョン作品）：「籠もりくの大和」（17 分）、「神の木 神の森」（17 分）、「森と現代文明」（14 分）、「森のまつり」（30 分）、「森をつくる話」（17 分）

外国語版

英語版：Aoi-matsuri「賀茂祭・葵祭」（7 分）、Iwashimizu-sai「石清水祭」（7 分）、Japan, Land of Festivals「日本は祭の国」（30 分）、Kamiari-sai in izumo「出雲の神在祭」（7 分）、Kunimuke-matsuri「気多神社平国祭」（7 分）、Kunimuke-matsuri「気多神社平国祭」（7 分）、Iwashimizu-sai「石清水祭」（7 分）、Kamiari-sai in izumo「出雲の神在祭」（7 分）

そして、「気多神社平国祭」「石清水祭」「出雲の神在祭」「賀茂祭・葵祭」の 4 作品については中国語版、フランス語版、ロシア語版、スペイン語版をそれぞれ制作した。

3. 伝統文化リサーチセンター四季の祭りコーナー

なお、これらの映像作品は、再編集し、平成 20（2008）年に開設された伝統文化リサーチセンター資料館の神道展示の一角に、映像で見る四季の祭りコーナーが作られ、春夏秋冬のそれぞれのモニターで最低でも日英語、最多で 5ヶ国語に対応するように作ることができた。これまでコツコツと作り出してきた映像作品が活用され、非常に安価に充実した映像コーナーを提供することができたのが、誇りである。また、このように自由に調査研究映像制作を続けさせてくださった日本文化研究所には大変感謝している。映像制作は公の仕事として現在も続けている。

旧研究所スタッフ随想 5

日本文化研究所のインターネット情報発信をめぐる回想

黒崎 浩行

1. インターネットの普及に対応した学術情報発信

筆者が日本文化研究所に専任講師として着任したのは平成 9(1997) 年だった。その 2 年前の平成 7(1995) 年には、阪神・淡路大震災とオウム真理教地下鉄サリン事件という日本社会を大きく揺るがす出来事があった。また Windows95 が発売され、インターネットが日本社会にも広く普及しはじめた時期でもあった。

日本文化研究所では、創立 40 周年記念事業として、阿部美哉所長（当時）、井上順孝教授のもとで平成 8(1996) 年 1 月に国際シンポジウム「グローバル化と民族文化」を開催している。そして、次なる展開として、グローバル化の時代に対応した日本文化の学術情報発信を目指すこととなった。

そこで筆者に課されたのは、日本文化研究所が蓄積してきた成果をインターネットを通じて発信することであった。

その前は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で COE 研究員として客員研究員のコンピュータ・ネット環境整備の支援、メーリングリストの構築などサーバー用フリーソフトウェアの導入・メンテナンス、外国語学習テキストの電子組版支援などにあたっていた。

その当時の國學院大學は、情報センターという組織が新たに立ち上がったばかりであった。コンピュータ教室の管理、教職員へのメールアドレス発行、アナログ電話回線での大学サーバーへの接続などが行われていた。筆者も専任講師となる前年に兼任講師として大学ホームページの作成をお手伝いした。

専任講師となってまず行ったことは、日本文化研究所ホームページを立ち上げることであった。研究所の沿革、事業概要、刊行物紹介、スタッフ紹介などを、日本語・英語双方で同一のボリュームで公開した。それとともに、*Basic Terms of Shinto*、*Contemporary Papers on Japanese Religions* シリーズ、国際シンポジウム報告書などの英文刊行物のオンライン化を進めていった。また、*Religion in Modern Asia Newsletter* という国内外のアジア宗教研究者を結ぶニューズレターのオンライン公開も行った。日本における人文系の学術情報発信としては、けっして最先端ではないものの、どうにか足並みを揃え、また日本文化研究所がこれまで蓄積してきたコンテンツを広く発信、共有できていたのではないかと思う。

また、当時日本文化研究所は常磐松 2 号館 6 階にあったが、筆者とノルマン・ハイヴンズ氏（現・神道文化学部教授）は、同じプロジェクト担当の兼任講師たちとともに、国際交流センター 2 階の研究室で仕事をしていた。国際交流センター自体も新しく立ち上がったばかりで、招聘研究者のパソコンやネット接続の相談に乗ることもしばしばあった。

2. 学術フロンティア事業とその後継事業

その後、平成 11(1999) 年になると、杉山林継所長（当時）のもとで文部科学省学術フロ

ンティア事業として「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」が始まった。この事業の立ち上げ実務を支えていたのは、当時共同研究員で、現在は九州保健福祉大学准教授として、地域再生と博物館・文化財アーカイブ活用をテーマに活躍している山内利秋氏であった。加藤里美氏や中村耕作氏（現・國學院大學栃木短期大学専任講師）という稀有な若手の考古学研究者などを中心に、祭祀考古学者・大場磐雄博士の撮影したガラス乾板写真などの劣化画像の再生とデジタル化、およびそのデータベース公開を進めていった。

筆者もこの事業のメンバーではあったが、扱われる資料が考古学・民俗学関係であったこともあり、インターネット公開のためのサーバー管理についての技術的なサポートを行うにとどまった。その後、小川直之兼担教授のもとで研究開発推進機構の後継事業へと続いていき、今日に至っている。

3. 21世紀COEプログラム

平成14(2002)年、文部科学省21世紀COEプログラムとして「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」が採択された。複数の学問分野にわたる大規模なプロジェクトであり、その成果が後の研究開発推進機構への足がかりともなった。その情報発信のためのサーバー構築には筆者も関わったが、同年に開設された神道文化学部に移籍することが決まっていたこともあり、より若い世代のCOE研究員が情報発信の実務を担うようになっていった。

4. 研究開発推進機構

(1) デジタルミュージアム

平成19(2007)年、日本文化研究所が拡大改組され研究開発推進機構が発足した。それまで学術フロンティア事業や21世紀COEプログラムとして進めてきた学術情報発信は、「デジタルミュージアム」として再構築されることになった。

ここでの大きな変化は、画像資料などのデジタルデータを公開するサーバーの構築管理を、専門の業者に一括して委託することになった点である。独自に構築・メンテナンスしてきたサーバーは順次、デジタルミュージアムに移行していった。また新たなコンテンツもデジタルミュージアムに収録していくこととなった。

(2) 国際研究フォーラム

日本文化研究所がインターネットによる情報発信に乗り出していったそもそもの契機は、グローバル化時代に対応した日本文化研究の国際的な学術交流を進めることにあった。それはCOE事業での国際研究フォーラムの開催と『神道事典』の英訳・インターネット公開へと展開していったのであるが、国際研究フォーラムの開催は今日でも日本文化研究所の重要な事業の一つとして位置づけられている。フォーラムにおいてインターネットやデジタル資料の活用がとりあげられることも多い。平成20(2008)年度には「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」と題するフォーラムが開催された。これは科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者:星野英紀大正大学教授(当時))との共催で、米国、フランス、英国、ドイツ、日本の宗教研究者が自らの研究・教育におけるインターネット活用事例と課題について知見を共有しあう貴重な機会となった。

むすび

以上を振り返ってみると、インターネットの普及当初の時期にあつて、フリーソフトウェア、オープンソース文化やDIY (Do It Yourself) 的な要素が色濃かったコンピュータ、インターネット技術が、社会の確固たるインフラになっていくにしたがつて、日本文化研究所もその流れに乗りながらインターネット利用の形を変えていったようにまとめられるかもしれない。

情報システムの安定的な運用管理にともなうコストが適切に見積もられ、若手スタッフが技術的な事柄に拘泥することなく人文学的な研究活用に集中できるようになったことは喜ばしいことと言えよう。

そうした流れに旧世代としては一抹の淋しさを覚えることも事実だが、他方で、デジタル化された学術資産の研究活用や教育、社会貢献への展開という面で、さらに取り組みを進めていかなければならないとも感じている。今後の研究所のとりわけ若手メンバーに期待するとともに、筆者も引き続き微力ながら貢献していきたい。

旧研究所スタッフ随想 6

日本文化研究所設立 60 年におもふこと

松本 久史

私は、日本文化研究所にかかわることになって、20 年ほどであり、全体を総括する立場にはないが、自分の知る限りにおいての感想じみたことを述べてみたい。

大学院の前期課程に入学した平成 8 年に、神道学専攻の先輩方から、「近世社家文書研究会」なるものに参加しないか、という誘いを受け出席したことが、研究所との最初の接点である。毎週 1 回夕刻に旧常磐松校舎の研究所セミナー室で研究会は開かれており、杉山林継教授（現：名誉教授）の指導の下、松本丘氏（現：皇學館大学）や中山郁氏（現：教育開発推進機構）が運営の中心となっていた。入った当初は滋賀県の日吉大社の祭礼関係文書の読解であったが、それも一段落し、杉山教授から、「平田国学関係の文書がある。少し難しいけれどもやってみるか」、という提案があり、既に図書館が購入していた福島県相馬の篤胤門人の社家、高玉安兄宛平田鋳胤書簡の解説を始めた。ほとんどのメンバーが近世の書簡については未熟練であり、最初は一行読むにも大いに苦勞した。何とか読めるようになってくると内容に興味が湧き、従来の篤胤全集ではうかがい知ることのできない気吹舎の活動を知ることにより、自己の研究の新たな指針を得たのであった。研究所のメンバーではない一介の院生も受け入れてくれる寛容な雰囲気、当時の研究所にはあった。博士課程後期になると、杉山教授のプロジェクトのアルバイトで、美保神社目録作成のための史料整理を行い、現地での文書調査にも同行した。近世の神社文書の取扱いの「イロハ」を研究所で習ったといっても過言ではない。私にとっての研究所は「もう一つの大学院」でもあった。

平成 14 年は國學院大學の創立 120 周年に当たり、神道文化学部が発足して、日本文化研究所も大きな節目を迎えた年であった。神道文化学部へ研究所から多くの専任教員が移籍し、大学附置後の教授・助教授制以降では初めて任期制の専任教員を採用することとなり、私と浅山雅司氏（現：神社本庁）が最初のケースとして、10 月に研究所の助手に採用されたのである。最初の主任務は同年に採択された文部科学省 21 世紀 COE プログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」を運営する COE 事務局の立ち上げであり、研究所プロジェクトに関与する時間はあまりなかった。國學院大學にとって、これほどの大規模な外部研究資金の受け入れは経験がなく、書類の様式一つを決めることから、教員・職員を含めた皆が試行錯誤しつつ運営をしていったのである。

平成 18 年 4 月からは、研究所の専任講師を拝命し、旧規程の日本文化研究所としては最後の定年制専任教員として任命されたが、同時に「副主事」として、研究所全体の実務に携わることとなった。研究所事務課内にあった主事の机に座って仕事をするのであるが、当初は、なりたての専任講師には任が重すぎるとも思い、まさに「ケツの座り」の悪さを感じたものである。ただし、そんな悠長なことを言っている暇はなく、渋谷キャンパス再開発に伴う、研究所の引越しの現場責任者を任せられた。当時は「引越し隊長」などと言っていたが、仮引越し先である本館 3・4 階の部屋割り、書架・什器等の配置や手配、日程調整など、事

務局と業者との打ち合わせに忙殺された。しかし同時に、研究所の荷物の整理作業は、研究所の過去を顧みる良い機会ともなった。創設以来の会議資料や写真などは散逸しないよう一まとめに保存した。これらの写真は、60周年記念のパネル展示や、祝賀会会場における投影などにも用いられ、往時を偲ぶことができた。なお、常磐松校舎の老朽化が激しかったことを示すエピソードとして、図書室の本を全て移して建物への荷重が減り、長年の重量バランスを崩したためか、傾きと雨漏りが生じてしまったことがある。結果論ではあるが、もし渋谷再開発がなければ、我々は東日本大震災をどのように迎えたのであろうか。

また、研究所50周年記念行事の準備も大きな役割であった。招待者のリスト作成の作業の中で、研究所の輩出した人的蓄積の厚さについても思いを致したものである。有栖川宮記念ホールで開催された祝賀会には、平井直房先生や伊藤幹治先生など、研究所草創期を支え、所長や主事を歴任した先生も出席された。しかし、上田賢治先生、さらに、変革期の國學院をリードした阿部美哉先生もすでに逝去され、お招きすることがかなわなかった。その平井、伊藤両先生も近年他界され、私自身も平成22年度から神道文化学部に移籍し、研究所には兼任教員という形での関わりになっており、60年という月日の重みを感じるのである。

平成14年のCOEプログラムの採択は、公的資金を含めた外部資金によって研究が推進されていくという大きな流れを決定付けた出来事であった。研究開発推進機構発足以降、「オープン・リサーチ・センター」事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」、大学院GP「高度博物館学教育プログラム」、さらに近年は文化庁支援事業「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」で採択された「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」に至るまで、継続して大型の外部資金の導入に成功している。また、機構本体の研究事業も、共同で行う研究プロジェクト形態に完全に移行しているため、研究所時代の個人プロジェクトは、科研等の外部資金に応募するという形に変化している。

日本の人文科学研究は、現在、大きな曲がり角にあり、国内外の経済的な競争激化の影響による逆風を直接受けている。日本文化研究所及び研究開発推進機構が大型の研究資金を外部から導入する窓口となり続けていることの重要性、および私立大学の人文科学系附置研究所としての研究開発推進機構の存在意義を再確認する時が来ている。

第一に強調したい点は、研究所時代以降、一貫して若手研究者を養成し、学界に送りだしていることである。大型の研究プロジェクトにかかわった若手研究者たちは、現在、学内では研究開発推進機構のみならず、学部や教育開発推進機構において、さらに学外の大学や諸機関において、中堅研究者として活躍している。冒頭の研究所が「もう一つの大学院」であったという私の述懐は、決して過去へのノスタルジーではないし、また、そうあってはならないものである。

第二には、現在の研究開発推進機構全体が旧日本文化研究所の設立の精神を継承しているのだ、という認識である。つまりは、「日本文化に関する精深な研究を行い、これを広く世界文化と比較しつつ、民族的伝統の本質と諸相を把握する」、という設立の趣旨は今後とも不変である。将来的に、人文科学研究を進展させる（ネガティブに言うならば「生き残る」）ためには、学内外の連携のみならず、専門分野を超えた学際的な共同研究の推進が不可欠であろう。今こそ、機構内の各機関の連携をより一層密にし、専門分野を超えた共同研究に取り組みつづけていくことが、求められているのではないだろうか。

旧研究所スタッフ随想 7

日本文化研究所から研究開発推進機構への再編を振り返って

齊藤 智朗

國學院大學日本文化研究所が創立 60 周年を迎えたのを期に、「日本文化研究所から研究開発推進機構への変化を見ながら思うこと」をテーマとする特集原稿の執筆依頼を受けた。私は現在、神道文化学部の所属だが、平成 13 年度に調査員として旧日本文化研究所（以下、旧研究所）に入所して以来、平成 19 年度における研究開発推進機構の発足をはさんで、2 年前の平成 26 年度まで同機構に所属していたため、文字どおり「日本文化研究所から研究開発推進機構への変化」の只中にいたことになる。ここでは、旧研究所から研究開発推進機構への再編の過程とあわせて、私自身が経験した旧研究所の、主に研究員・助手時代を振り返りつつ、「日本文化研究所から研究開発推進機構への変化」について感じたことなどを述べていきたい。

平成 12 年、國學院大學大学院生であった私は、明治日本の法制官僚である井上毅の神道・宗教観を研究テーマにしていたこともあり、旧研究所において同年度より開始された、國學院大學図書館が所蔵する井上毅の遺文書群である「梧陰文庫」史料の目録作成を行う総合プロジェクト『『梧陰文庫総合目録』の編纂・刊行』にアルバイトとして参加し、同年度末には大学院を単位取得退学して翌 13 年度に旧研究所の調査員に着任した。旧研究所は、「國學院中興の祖」である石川岩吉を中心に、終戦まで國學院大學の母体であった皇典講究所の学統を継承して設立された神道・日本文化研究の最高峰に位置する研究機関であり、國學院大學大学院の、とくに研究者を目指す神道学・宗教学専攻の院生にとって憧れの場所であった。そのため旧研究所の研究員になったことは心から嬉しく、大変光栄にも感じた。当時は教授・助教授・専任講師の教員のほか、非常勤の研究員である兼任講師・調査員・共同研究員がおり、このうち兼任講師と調査員は、週 1 日ないし 2 日の勤務形態であった。それゆえ他のプロジェクトに参加する、勤務曜日が同じ研究員とは所内で毎週顔を合わせるため、何となしに自然と知り合いになった。旧研究所の日常を思い返してみると、このことがとても大切で、他の大学の出身・所属で、異なる学問分野の研究者たちとざくばらんに研究内容についての意見交換ができたことは、自らの研究知見をひろげることにつながったように思う。一方で平成 17 年度からは「神道と国学の歴史に関する資料的研究」プロジェクトにも参加して、近代神道史や明治国学に関することなど、学問分野が近い研究員からは自らの研究内容を深めることができる専門的な知識を数多く得た。このように多種多様な学問分野と自分の専門と近接した分野の、両方の教員・研究員に囲まれて研究できる環境こそが、旧研究所から続く研究開発推進機構の最大の良さの一つであろう。

また、『『梧陰文庫総合目録』の編纂・刊行』プロジェクトでの目録作成作業では、「梧陰文庫」中の未公開分を含む全史料を調査し、そこから得た新たな知見を発表するなど、学位論文作成の上で大きな助けにもなった。学内の史資料の調査・研究は、平成 17 年度より携わった「『梧陰文庫』を中心とする学術財産の構築と運用」プロジェクトにおける國學院大學図

書館所蔵「佐佐木家図書」の目録である『佐佐木高行家旧蔵書目録』編纂作業でも引き続き行った。このような旧研究所のプロジェクトを通じて学内の学術資産を調査し、その成果を研究に活用することは、後の研究開発推進機構校史・学術資産研究センターにおける研究事業や、平成19年度～平成23年度文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（オープン・リサーチ・センター整備事業）に選定された「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」研究事業（以下、ORC整備事業）中の皇典講究所・國學院の学術資産に関する調査・研究を行う「國學院の学術資産に見るモノと心」研究プロジェクトに従事する上での素地となった。また、旧研究所以来の様々なプロジェクトや研究事業においては、日本文化研究所事務課から研究開発推進機構事務課、図書館事務課をはじめ、ひろく大学事務局職員との協働が不可欠であり、こうした教職員協働に基づく学内の人的交流は、日常的な組織運営の上ではもちろん、殊に研究開発推進機構になって本格化した学内における多機関・部署にわたる、今日までの数々の研究事業を遂行していく上での基礎になっている。

國學院大學創立120周年を迎えた平成14年、「國學院大學21世紀研究教育計画」が策定され、その重点施策である建学の精神に基づく研究教育の具体的事業として、「日本文化の総合的研究と発信のための世界的研究教育センター」の形成を目的とする「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」が文部科学省21世紀COEプログラムに採択された（以下、COEプログラム）。旧研究所はCOEプログラムの主体の一つであり、数多くのCOE連携プロジェクトが開始された。教員・研究員の数も大幅に増え、こうした旧研究所における学際的環境の拡充が、研究開発推進機構の基盤の一つとなった。また、同年には神道文化学部が設置されて、旧研究所の専任教員の半数以上が同学部へ異動することとなった。これにともない、若手研究者育成の目的から、新たな任期制専任教員の制度として専任講師・助手が採用され、プロジェクトの推進をはじめ、旧研究所全体の組織業務に当たった。人材養成もまた旧研究所が従来担ってきた重要な役割の一つであり、こうした若手研究者の育成もCOEプログラムやORC整備事業を含めて、研究開発推進機構へと受け継がれていった。

学位を取得した翌年度の平成17年度に助手となり、プロジェクト業務とともに、旧研究所の組織的な実務に従事することになった。例えば、旧研究所の機関紙であった『日本文化研究所報』の編集や、公開学術講演会・「日本文化を知る講座」の運営事務、所員が他の所員の前で自らの研究に関する発表を行う所内研究会の企画運営などである。殊に所内研究会は、発表者となった場合は、様々な学問分野の研究者から自らの研究内容に関する新しい知見を幅広く得ることができ、発表者でない場合も、異なる研究分野の動向を理解することができる極めて貴重な機会であった。旧研究所での事業や業務は、研究開発推進機構に移行した後もその多くが発展的に継承されたが、所内研究会のような研究開発推進機構全体の研究会は、組織の大規模化とそれにとまなう研究事業・業務の増加や人員の増員などにより、定期的に、かつ多数の構成員が参加しての開催が困難になってしまった。その後、機構長や機関長からも所内研究会に代わる全体の研究会を定期的に行っていくべきとの提案がなされたが、私の努力の足りなさもあって、所属している間に実現できなかったことは大いに反省している。しかし、教員・研究員（殊に若手の研究員）個々の研究の進展とともに、研究開発推進機構内における機関間の研究面での有機的連携を一層推進していく上でも、組織全体の研究会の開催が重要であることは言うまでもなく、現状も定期的な実施はなかなか難しいかとは思いますが、私も再開のための支援・尽力をしていきたいと考えている。

平成 19 年度に旧研究所を中心に学内の研究機関・研究施設を統合した研究開発推進機構が発足し、私はその中で新たに設置された校史・学術資産研究センターが主たる配属先となった。同センターは、國學院大學の歴史及び所蔵する学術資産の研究を行い、その成果を広く公開・発信して社会に還元することを目的とする機関で、その研究事業の一環として、導入教育用の自校史に関するテキストを作成した。こうした研究成果の教育への活用は、研究開発推進機構に改組してから特に進展してきており、今後も一層充実していっくだろう。また、研究開発推進センターの研究事業と同年度から開始した ORC 整備事業を推進する伝統文化リサーチセンターの研究プロジェクトや事務にも同時に関わるなど、研究開発推進機構が発足した直後の数年間は多忙を極めたが、機関・研究事業の運営や実務などは、旧研究所時代に培った知識や技能をもとに、なんとか遂行することができたように思う。

このように旧研究所からの組織の変遷と、その間に私が関わったプロジェクトや組織における研究業務のことなどを思い返しなが、 「日本文化研究所から研究開発推進機構への変化」を考えると、旧研究所という基盤があったからこそ研究開発推進機構が発足したことと同様、実際に旧研究所において自らが従事した組織業務や研究実務が研究開発推進機構に変わった後の基礎となっており、この意味で組織的なだけでなく、個人的な経験の上でも旧研究所と研究開発推進機構の連続性・連結性を感じている。今後、研究開発推進機構の中心を担っていく専任教員・研究員には、國學院大學内はもちろん、国内外でも神道・日本文化研究の中心拠点として高い評価を受け続けてきている、先人たちが築いてきた創立以来の実績をさらに積み上げていくとともに、60 年間培ってきた学際的な気風と、それに基づく多分野にわたる研究者間の交流を通じた人材育成の伝統も継承し発展させていってほしいと願うものである。

旧研究所スタッフ随想 8

日本文化研究所との関わりを振り返って

平藤 喜久子

はじめに

はじめて日本文化研究所を訪れたとき、たくさんのパソコンや何に使うのかも想像できないような機器の数々に驚いた。その驚きは、研究所のあった常磐松 2 号館のアンティークなたたずまいの印象とかけ離れたイメージだったこともあるかもしれない。

学生の頃、パソコンとは、文章を作成し、ネットで調べ物をするためのものであると思っていた。「データベース」という発想を知ったのも、その常磐松 2 号館でのことである。

研究とは、資史料と向き合い、自分一人で行うものだった。広い年代の研究者が、得意分野を持ち寄って、次の世代に使ってもらえるものを作る意義と楽しさもここで学んだ。

今では当たり前となっている光景も、仕事の進め方も、発想法も、長い間積み上げられてきた先輩たちの工夫の上にあると感じる。母校がまさに自分を生み出してくれた場所であるなら、研究者として育ててくれたのは研究所だと感じている。

研究開発推進機構に改組される以前の日本文化研究所のことを知るもの一人として、ここ 10 年余りを振り返ってみたい。

1. 21 世紀 COE プログラムを通して

わたしが日本文化研究所と正式に関わりを持つのは 2002 年 10 月からである。この年、國學院大學は文部科学省の「世界的研究教育拠点の形成のための重点的支援——21 世紀 COE プログラム (Center of Excellence)」に「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」という研究課題で申請して採択された。

この研究プログラムの採択により、いくつもの試みがスタートしたが、そのなかに井上順孝先生が中心となる『神道事典』の英訳 Encyclopedia of Shinto の作成と国際シンポジウムの実施が含まれていた。博士論文を提出したばかりであったところに、この補助作業の声がかかったのだった。

日本文化研究所の共同研究員にいただき、いわゆるアルバイトとしてお手伝いをはじめた。遠藤潤先生とともに、翻訳者たちからの翻訳に関する問い合わせに返答するなどの、翻訳サポートという内容が中心だった。

2003 年の第 1 回国際シンポジウムは、「各国における神道研究の現状と課題」と題して行われた。2004 年度から COE 研究員として関わることとなるが、その年に行われた第 2 回のテーマは「〈神道〉はどう翻訳されているか」である。

今思うと Encyclopedia of Shinto の作成と国際シンポジウムという 2 つの仕事は、自分の研究にとっても大きな意味を持つこととなったと感じる。その一つは古事記など日本神話の翻訳の歴史と課題についての研究である。この研究は、現在國學院大學 21 世紀研究教育計画委員会研究事業「古事記学」の構築」と日本文化研究所の「デジタル・ミュージアムの



運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」における古事記の新たな英訳へとつながっている。

また各国における日本神話の研究史について関心を抱くようになった。国際シンポジウムを通して知り合うことのできた先生方とは今でも研究交流が続いており、大きな財産を得たと感じている。

2. 日本文化研究所の専任教員として

2005年には専任講師として採用していただくことになった。齊藤智朗先生、加藤里美先生と3人の着任だった。日本文化研究所が50周年を迎えた年である。そして常磐松2号館の解体も近づき、研究所も新たな体制になるらしいという時期でもあった。

今回、振り返るにあたり、その頃自分が作成したファイルを見てみたところ「研究所将来構想について」などと題する文書があった。今後のプロジェクトのあり方と、若手研究員の育成について書いたものだったが、書いた記憶もなければ、どの会議体に出したものかも憶えていない。

学術メディアセンターがどのような建物になるのかという設備面と研究所がどうなるのかという組織面と、大きな変化が来そうだという雰囲気の中かで若手としていろいろ考えるところがあったのだろう。

この頃の印象的な出来事は日本文化研究所の50周年事業と引越しである。過去のアルバムをひっくり返し、いろんな意味で貴重な諸先輩方の写真をデジタル化する作業を行った。研究所の歴史や偉大な研究者のオフの顔を知ることができ、大変良い勉強になった。

50周年記念事業としては公開講演会を2007年の1月に行った。国立民族学博物館の吉田憲司先生が「情報装置としてのミュージアム」と題する講演を、東京大学大学院の坂村健生が「文化を支えるコンピュータ」と題する講演を行った。この講演を受けて、「ひらかれる学術資産—学術メディアセンターの展望—」をテーマとする国際シンポジウムも実施した。

新たにできる学術メディアセンターのなかに博物館が設けられるということのほか、こ

れまでの学術資産や 21 世紀 COE プログラムで形成された神道研究の拠点を「デジタル・ミュージアム」という姿にしてオンラインで発信していこうという構想があったためである。日本文化研究所が研究開発推進機構に改組されていく転換点を象徴するような講演会、シンポジウムであったと思う。

常磐松 2 号館から仮住まいの本館への引越しは松本久史先生の強力なリーダーシップのもとで行われた。わたしの研究室は幸い国際交流センターにあったため、自分の荷物については引っ越す必要はなかったが、研究所全体では大変な分量であった。「新しいぶどう酒は新しい皮袋に」のように、新しい建物は新品のもので満たされるようなイメージを持っていたが、「歴史ある」道具類の多くは常磐松 2 号館から本館へ、そして学術メディアセンターへと引越しを繰り返すことになった。

さて、かつての日本文化研究所は、プロジェクト制を取っていた。学内外の研究者が集い、共同研究を行う「総合プロジェクト」と専任教員が中心となる比較的小規模の「専任プロジェクト」、学部の教員による「兼担プロジェクト」があった。着任したばかりの若手でも、予算を得て専任プロジェクトの担当者となることができるという、とてもありがたい制度だった。自分で研究計画を立案し、予算を組み立てることができる専任プロジェクトは、科研応募へのステップにもなっていた。

21 世紀 COE プログラムも継続しており、その研究事業の推進、総合プロジェクトの推進、加えて専任プロジェクトがあったことになる。慣れないうちは、なにから手をつけてよいのやら、という感じであったが、次第に多様な仕事に関わることが自分の研究の推進力になるという感覚も出てくるようになった。

所内研究会もあり、他のプロジェクトの専任の先生、若手の兼任講師の研究発表を聞くこともできた。自分も発表し、普段あまり話をする機会のなかった先生に意見をいただくことができたのも貴重な体験であった。

現在の研究開発推進機構よりも規模は小さかったが、多様な研究、研究者との接点は今以上に多かったように感じることもある。

ちなみに日本文研究所内の役割分担のなかには「行事委員」というのがあり、納涼会と忘年会、送別会を業務として企画していた。このとき渋谷の店を探した経験は、今も活かされる機会が多い。この委員は研究開発推進機構でも設けたらいいのではないかと感じる。

3. 研究開発推進機構になってから

2007 年 4 月に研究開発推進機構が発足し、日本文化研究所はその一機関に位置づけられた。

1 神道・国学研究部門

2 国際交流・学術情報発信部門

上記の 2 つの研究部門が設けられ、わたしは国際交流・学術情報発信部門の一員としてデジタル・ミュージアムの構築、国際研究フォーラムの実施に関わっていくことになった。

デジタル・ミュージアムは、2009 年度に正式に稼働をはじめ、現在では 30 近いデータベースを閲覧することができる。ミュージアムらしさやデータベース間の相互参照、Encyclopedia of Shinto の使い勝手など、まだまだ良くしたいと思うところはあるが、毎年着々と改良を重ねている。

2014 年にはスマートフォンアプリ「ロケスマ」との連携もはじまり、地図をベースにし

たデジタル・ミュージアムのあり方というものも展開している。今後も地図だけでなく、年表やカレンダーなどのツールもミュージアムの発信媒体として検討してみたい。

国際研究フォーラムは2008年から行われている。21世紀COEプログラムで行っていた国際シンポジウムの後継と位置づけ、毎年さまざまな研究者を招聘している。2003年から振り返れば、相当な数の研究者が國學院大學を訪れたことになる。最初に招聘した先生の弟子がパネリストとして招聘されるようになるなど、企画者側とともに招聘される研究者も世代交代が進んでいる。こうして築かれた交流の拠点となる海外の研究機関との関係は今後も大切にしていきたい。

国際シンポジウム、国際研究フォーラムは、海外の一線で活躍する研究者と直接知り合いになることのできるきわめて貴重な機会である。日本文化研究所の若手研究者はいうまでもなく、広く大学内外の研究者が、この機会を活かして視野を広げ、交流の手がかりをつかみ、研究の展開につなげて欲しいと心から思っている。

これまではそうした機会を享受する側という意識があったが、今後は機会を提供する側として、尽力していきたい。

おわりに

とりとめもなく十年余りを振り返り、今後の抱負などを記してみた。毎年たくさんのイベントもあり、一つ一つを振り返れば時間も紙もいくらあっても足りない。そのわりに十年ほど前のことだと忘れていることも多く、われながらぞっとした。

幸いなことに研究開発推進機構になってからはこの『日本文化研究所年報』が毎年刊行されており、年ごとに大きなイベントや出張などがまとめられている。これはとても便利だ。

忘れてはいけないこと、伝えておいたほうが良いことをどのように記憶しておくか。個人としても組織としても工夫が必要なのだろう。



2008年国際研究フォーラム

日本文化研究所 50 年～ 60 年の活動記録 1

プロジェクト

年度	プロジェクト名	担当教員	分担者
2007 (平成 19) 年度	デジタル・ミュージアムの構築と展開	井上順孝 (責) 遠藤潤 平藤喜久子 星野靖二 石井研士 小川直之 千々和到 黒崎浩行 ノルマン・ヘイヴンズ	市川収 市田雅崇 大澤広嗣 堀越祐一 ジョリオン・トーマス ジョシュア・イリザリ エリック・シッケタンツ 江島尚俊 住家正芳 武井順介 山内利秋 山田美紀子 ジェームズ・メーガ ライアン・ワルド
	近世国学者の靈魂観をめぐる思想と行動の研究	松本久史 (責) 遠藤潤	
	日本神話の神話学的研究 (専任プロジェクト)	平藤喜久子 (責)	ジャン＝ミシェル・ビュテル アルノー・プロトンス
	万葉集における神事語彙の基礎的研究 (兼任プロジェクト)	辰巳正明 (責)	
	現代日本の情報環境における健康とメディア文化 (兼任プロジェクト)	野村一夫 (責)	
	「詩人大使」ポール・クローデルの総合的研究—「国際文化交流」と日仏関係史 (兼任プロジェクト)	濱口學 (責)	
2008 (平成 20) 年度	デジタル・ミュージアムの構築と展開	井上順孝 (責) 平藤喜久子 星野靖二 石井研士 黒崎浩行 ノルマン・ヘイヴンズ	市川収 市田雅崇 大澤広嗣 ジェシー・ラフィーバ ラウラ・ココラ 李和珍 ケイト・ナカイ 関守ゲイノー アンネマリー・アイフラ 江島尚俊 エリック・シッケタンツ 高橋典史 武井順介 ドロシア・フィルス 松本喜以子 山田美紀子
	近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—霊祭・霊社・神葬祭—	松本久史 (責) 遠藤潤 中野裕三	星野光樹 小林威朗 三ツ松誠 林淳

2009（平成 21）年度	デジタル・ミュージアムの構築と展開	井上順孝（責） 平藤喜久子 星野靖二 石井研士 黒崎浩行 ノルマン・ヘイヴンズ	市川収 カール・フレレー 市田雅崇 大澤広嗣 李和珍 モリー・ヴァラー ケイト・ナカイ 関守ゲイノー アンネマリー・アイフラ 江島尚俊 エリック・シッケタンツ ヤニス・ガイタニディス キロス・イグナシオ 小堀馨子 ジャン＝ミシェル・ビュテル 高橋典史 武井順介 ドロシア・フィルス 松本喜以子 ミカ・ベルスハイム 山田美紀子 ロハニ・ビナヤク
	近世国学の靈魂観をめぐ るテキストと実践の研究 —霊祭・霊社・神葬祭—	松本久史（責） 遠藤潤 中野裕三	小林威朗 三ツ松誠 林淳
2010（平成 22）年度	デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開	井上順孝（責） 平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高 黒崎浩行 ノルマン・ヘイヴンズ 斉藤こずゑ	市川収 カール・フレレー 市田雅崇 李和珍 今井信治 マシュー・チョジック ケイト・ナカイ 江島尚俊 エリック・シッケタンツ 高橋典史 武井順介 松本喜以子 小堀馨子 ジャン＝ミシェル・ビュテル ヤニス・ガイタニディス ロハニ・ビナヤク キロス・イグナシオ シュテファン・メーダー
	近世国学の靈魂観をめぐ るテキストと実践の研究 —霊祭・霊社・神葬祭—	松本久史（責） 遠藤潤	小田真裕 小林威朗 林淳 三ツ松誠 鈴木齋彦
2011（平成 23）年度	デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開	井上順孝（責） 平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高 黒崎浩行 ノルマン・ヘイヴンズ 斉藤こずゑ	市川収 カール・フレレー 市田雅崇 李和珍 ヤニス・ガイタニディス 今井信治 ケイト・ナカイ 土屋博 星野英紀 山中弘 マシュー・チョジック キロス・イグナシオ 小堀馨子 エリック・シッケタンツ 高橋典史 ジャン＝ミシェル・ビュテル

			山梨有希子
	「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築	遠藤潤（責） 松本久史	小林威朗 小田真裕 林淳 一戸渉 三ツ松誠
2012（平成24）年度	デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開	井上順孝（責） 平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高 黒崎浩行 ノルマン・ヘイヴンズ 斉藤こずゑ	市川収 カール・フレレ 市田雅崇 李和珍 加藤久子 ヤニス・ガイタニディス 今井信治 ケイト・ナカイ 土屋博 星野英紀 山中弘 天田顕徳 マシュー・チョジック キロス・イグナシオ 小堀馨子 齋藤知明 エリック・シッケタンツ 高橋典史 ジャン＝ミシェル・ビュテル 村上晶 山梨有希子
	「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築	遠藤潤（責） 松本久史	小林威朗 小田真裕 武田幸也 林淳 一戸渉 三ツ松誠
2013（平成25）年度	デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開	井上順孝（責） 平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高 鈴木聡子 黒崎浩行 ノルマン・ヘイヴンズ 斉藤こずゑ	市川収 カール・フレレ 李和珍 加藤久子 天田顕徳 ケイト・ナカイ 土屋博 星野英紀 山中弘 ヤニス・ガイタニディス キロス・イグナシオ 市田雅崇 今井信治 小堀馨子 野口生也 村上晶 山梨有希子
	「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築	遠藤潤（責） 松本久史	小林威朗 三ツ松誠 武田幸也 林淳 一戸渉 小田真裕
2014（平成26）年度	デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開	井上順孝（責） 平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高 鈴木聡子 黒崎浩行	李和珍 市川収 カール・フレレ 加藤久子 天田顕徳 ケイト・ナカイ

		ノルマン・ヘイヴンズ 斉藤こずゑ	土屋博 星野英紀 山中弘 イヴ・カドー ヤニス・ガイタニデイス キロス・イグナシオ 市田雅崇 今井信治 小堀馨子 野口生也 藤井麻央 村上晶 山梨有希子
	「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究	遠藤潤（責） 松本久史 塚田穂高	早乙女牧人 武田幸也 齋藤公太 林淳 一戸渉 小田真裕
2015（平成27）年度	デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開	井上順孝（責） 平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高 鈴木聡子 黒崎浩行 ノルマン・ヘイヴンズ 斉藤こずゑ	李和珍 市川収 カール・フレレ 加藤久子 村上晶 ケイト・ナカイ 土屋博 星野英紀 山中弘 イヴ・カドー ヤニス・ガイタニデイス キロス・イグナシオ ジャン＝ミシェル・ビュテル 市田雅崇 今井信治 小堀馨子 野口生也 藤井麻央 牧野元紀 山梨有希子
	「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—	遠藤潤（責） 松本久史 塚田穂高	齋藤公太 芹口真結子 林淳 一戸渉 小田真裕

Stewart Guthrie (Fordham University, USA) " Religion as Anthropomorphism: A Cognitive Theory"

William Kelly (Yale University, USA) " Is Japan a Lost Cause or a Sustainable Model? An Anthropological Perspective on the Contemporary Society"

河野哲也 (立教大学) 「アフォーダンスと生態学的倫理学の構築」

コメンテータ :

井上順孝 (國學院大學)

司会 :

松村一男 (和光大学)

刊行物

書名： 『第 4 回日韓学生宗教意識調査報告』
編著者／出版社： 井上順孝編集責任／國學院大學日本文化研究所
刊行年月： 平成 20（2008）年 2 月
体裁： B5 判 55 頁
概要：

本研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」のメンバー、ならびに「宗教と社会」学会の「宗教意識調査プロジェクト」メンバーが中心となって実施された質問紙調査の報告書。1995 年以來 9 回目となる日本の学生意識調査（2007 年 4 月～6 月実施・全国 35 大学の学生 4,306 人の有効回答）、ならびに 1999 年以來 4 回目となる韓国の学生意識調査（2007 年 9 月～11 月、12 大学の学生 1,385 人の有効回答）の結果をまとめたものである。編集と刊行には、科学研究費補助金基盤研究（C）「宗教教育における情報リテラシーの日韓比較」が、本研究所プロジェクトとともに関わっている。

.....

書名： 『近世の好古家たち—光圀・君平・貞幹・種信—』
編著者／出版社： 國學院大學日本文化研究所編／雄山閣
刊行年月： 平成 20（2008）年 2 月
体裁： A5 判 246 頁
概要：

本書は、「近世学問を検証する—近代ヨーロッパ Archaeology 日本上陸以前の考古学的学問・国学者に光をあてる—」を統一テーマとして、日本文化研究所が 2004 年度より 2 年間にわたって実施した公開学術講演会と公開シンポジウム、および座談会「斎藤忠先生を囲んで 近世の好古家たち—日本考古学の基礎をきづいた人々—」をもとにして再構成したものである。近代欧米の文化の日本上陸以前に、日本独自の学問として古典研究や有職故実研究などによる自国文化の追及が着実に進行していた。ここでは、そうした活動を行っていた人物の中で特に、徳川光圀、蒲生君平、藤原貞幹、青柳種信の 4 人の好古家に焦点を当て、それぞれの研究内容や交流のあり方などについて検証がなされている。

.....

書名： 『写真資料デジタル化の手引き—保存と研究活用のために—』
編著者／出版社： 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編／刊
刊行年月： 平成 20（2008）年 3 月
体裁： A5 判 82 頁
概要：

國學院大學日本文化研究所が文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（学術フロンティア推進事業）の選定を受けて実施したプロジェクト「劣化画像の再生活用と資料化に関

する基礎的研究」を通じて8年間にわたり培ってきた、写真資料の整理・アーカイビング、デジタル化、データベース化における方針策定と作業実務のノウハウを一冊にまとめたもの。

目次構成は、「第1章 人文科学と写真資料の活用」「第2章 写真資料整理・デジタル化の基本方針」「第3章 整理・デジタル化と保存措置の手順」「第4章 公開と管理」「第5章 作業スキルの構築と伝承」となっている。

書名： 『國學院大學日本文化研究所紀要 総目次・本文』(DVD)

編著者／出版社： 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編／刊

刊行年月： 平成20(2008)年3月

体裁： DVD1枚

概要：

2005年に日本文化研究所が設立50周年を迎えた記念事業の一環として作成されたDVDで、『國學院大學日本文化研究所紀要』第1輯(1957)～第100輯(2008)の総目次と全本文が、PDFとして電子化され、一枚に収められている。収録にあたっては、誤字脱字等の訂正を行い、またPDFファイルは、すべて透明テキスト化し、検索可能なものとした。

書名： 『國學院大學日本文化研究所50年誌』

編著者／出版社： 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編／刊

刊行年月： 平成20(2008)年3月

体裁： A5判 347頁

概要：

日本文化研究所は、1955年に設立され、2005年に50周年を迎えた。本書はその設立50周年記念事業の一環として、設立から2006年度までの研究所の活動について包括的に記録した書物である。「第1章 沿革」「第2章 事業・プロジェクト」「第3章 講演会・講座」「第4章 刊行物一覧」「第5章 紀要・所報目次」「第6章 略年表」という構成である。いずれも設立当初からの情報を可能なかぎり集め、最近の成果はもとより、過去の研究所の活動についても具体的に知りうる基本資料となっている。

書名： 『國學院大學図書館所蔵 佐佐木高行家旧蔵書目録』

編著者／出版社： 國學院大學編／汲古書院

刊行年月： 平成20(2008)年3月

体裁： B5判 303頁

概要：

國學院大學図書館が所蔵する「佐佐木高行家旧蔵書」の目録。この編纂刊行については、日本文化研究所の総合プロジェクト「『梧陰文庫』を中心とする学術資産の構築と運用」の事業として、2005年度に同図書館との全面的提携のもと開始された。2007年度からは、研究開発推進機構 校史・学術資産研究センターにおいて事業が継続された。

書名： 『井上毅傳 史料篇 補遺 第二』

編著者／出版社： 國學院大學日本文化研究所編／東京大学出版会

刊行年月： 平成 20 (2008) 年 3 月
体裁： A5 判 372 頁
概要：

さきに完結した『井上毅伝史料篇』全 6 巻の補遺をなすもの。本書には、井上毅の意見書 24 点と、著作 25 点、校閲書 2 点が収められている。本書の編集は、2005 年度に日本文化研究所の総合プロジェクトとして発足した「『梧陰文庫』を中心とする学術資産の構築と運用」プロジェクト (2007 年度は研究開発推進機構 校史・学術資産研究センターにおいて続行) が担当した。

書名： 『万葉集 神事語辞典』

編著者／出版社： 辰巳正明・城崎陽子監修、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編／國學院大學

刊行年月 平成 20 (2008) 年 6 月

体裁： B5 判 273 頁

概要：

2005 年度から 3 年計画で行われた日本文化研究所兼担プロジェクト「万葉集における神事語彙の基礎的研究」(代表・辰巳正明) の成果として編まれた辞典。『万葉集』を中心とした古代文献にみえる神事に関わる語彙に、最新の知見を加えて解説を施したものである。80 人近くが各項目を分担執筆している。

書名： 『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」2009 年度研究報告書』

編著者／出版社： 井上順孝編集責任／國學院大學日本文化研究所刊

刊行年月： 平成 22 (2010) 年 1 月

体裁： B5 判 78 頁

概要：

本研究所のプロジェクト「デジタル・ミュージアムの構築と展開」によって、2007・2008 年度に行われた研究成果の一部。宗教情報リサーチセンターとの共催で、2008 年 11 月 2 日に本学で行われた研究フォーラム「〈宗教情報〉とメディアリテラシー」、ならびに 2009 年 2 月 7 日に本学で行われた東アジア新宗教国際研究会議「東アジア新宗教研究と情報リテラシー」の報告が、収められている。また、4,306 の有効回答を分析した、井上順孝「学生の宗教意識の変化—2007 年度のアンケート調査を基本とした比較—」も収録されている。

書名： 『国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」報告書』

編著者／出版社： 井上順孝編集責任／科学研究費補助金基盤研究 (A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」第 2 グループ

刊行年月： 平成 22 (2010) 年 2 月

体裁： B5 判 98 頁

概要：

日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究 (A)「大学における宗教文化教育の実質化

を図るシステム構築」の主催によって、2009年9月20日に本学で開催された国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」の報告が収められている。趣旨説明から第1～5セッション、そして総合討議まで当日の生の議論をなるべく再現することを念頭に置いて編集し、また巻末に議論の中で言及された映画の一覧を付した。

書名： 『第10回学生宗教意識調査報告』

編著者／出版社： 井上順孝編集責任／國學院大學日本文化研究所

刊行年月： 平成23（2011）年2月

体裁： B5判 29頁

概要：

本研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」のメンバー、ならびに「宗教と社会」学会の「宗教意識調査プロジェクト」メンバーが中心となって実施された質問紙調査の報告書。1995年以来10回目となる本調査は、2010年4月～6月に行われ、全国37大学の学生4,311人の有効回答を得た。「パワースポットの存在を信じるか」「散骨や自然葬を希望するか」「大学において「カルト対策」の教育が必要か」といった新たな設問も設けられている。編集と刊行には、科学研究費基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」も本研究所プロジェクトとともに関わっている。

書名： 『第11回学生宗教意識調査報告』

編著者／出版社： 井上順孝編集責任／國學院大學日本文化研究所

刊行年月： 平成25（2013）年1月

体裁： B5判 30頁

概要：

本研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」のメンバー、ならびに「宗教と社会」学会の「宗教意識調査プロジェクト」メンバーが中心となって実施された質問紙調査の報告書。1995年以来11回目となる本調査は、2012年4月～6月に行われ、全国30大学の学生4,094人の有効回答を得た。2011年3月の東日本大震災を受け、災害時の宗教・宗教家の役割や、震災による意識の変化などの問いが新設された。イスラームへの関心や関わりなどを問う設問は、2005年度の第8回調査以来、2回目となっている。編集と刊行には、科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」も本研究所プロジェクトとともに関わっている。

書名： 『21世紀の宗教研究—脳科学・進化生物学と宗教学の接点—』

編著者／出版社： 井上順孝編／平凡社

刊行年月： 平成26（2014）年8月

体裁： B6判 215頁

概要：

2013年9月6日に國學院大學常磐松ホールで開催された公開学術講演会をもとに編集されたもの。講演会は日本宗教学会と國學院大學日本文化研究所の共催で行われたもので、テーマは「ネットワークする宗教研究」であった。講師は、ハーバード大学教授で比較神話学者

のマイケル・ヴィツェル氏、総合研究大学院大学教授で生物学者の長谷川真理子氏、京都大学教授でキリスト教神学の研究者である芦名定道氏の3人である。それぞれの講演をもとにした論文に、講演会を企画し司会を務めた井上順孝が書き下ろしを加え、以下のような構成となった。「宗教研究の新しいフォーメーション」(井上順孝)、「神話の「出アフリカ」—比較神話学が探る神話のはじまり—」(マイケル・ヴィツェル)、「進化生物学からみた宗教的概念の心的基盤」(長谷川真理子)、「脳神経科学と宗教研究ネットワークの行方」(芦名定道)。

書名： 韓国語版『神道事典（縮刷版）』

編著者／出版社： 井上順孝編・李和珍訳／國學院大學日本文化研究所

刊行年月： 平成 27 (2015) 年 2 月

体裁： B5判 282 頁

概要：

國學院大學日本文化研究所編『神道事典（縮刷版）』（弘文堂、1999年）の第4章「神社」と第8章「流派・教団と人物」の韓国語訳である。研究員の李和珍が翻訳し、ソウルにある成均館大学の研究員である林泰弘氏に校閲してもらったもの。韓国語に音訳しただけでは分かりづらい用語については日本語を付した。なお、本書と同じ内容は國學院大學デジタル・ミュージアムのなかにも収蔵されており、オンラインでも利用できる。

書名： 『国際研究フォーラム報告書 2008～2013年度』

編著者／出版社： 井上順孝発行・平藤喜久子編集担当／國學院大學日本文化研究所

刊行年月： 平成 27 (2015) 年 2 月

体裁： B5判 80 頁

概要：

日本文化研究所が毎年開催している国際研究フォーラムのうち、以下の回の内容・議論を記録した報告書。2008年度「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」、2010年度「イスラームと向かい合う日本社会」、2011年度「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」、2012年度「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」、2013年度「日常生活と宗教文化—戒律をめぐる問題を中心に—」。発題者や内容は多岐にわたるが、宗教文化教育の推進・デジタル情報技術の活用・さまざまな専門家との開かれたネットワーク構築といった問題意識については一貫している。

署名： 『第12回学生宗教意識調査報告』

編著者／出版社： 井上順孝編集責任／國學院大學日本文化研究所

刊行年月： 平成 27 (2015) 年 12 月

体裁： B5判 31 頁

概要：

2015年4月から6月にかけて全国36の大学で実施された第12回の学生宗教意識調査の結果をまとめた報告書である。國學院大學日本文化研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」と「宗教と社会」学会の「宗教意識調査プロジェクト」

のメンバーが中心になって行われた。同調査は1995年に第1回が実施され、今回で最後となる。有効回答数は5,773であった。第1回より継続的になされている学生およびその両親の信仰の有無、宗教への関心度合いといった基本的調査項目の他、オウム真理教に対する関心やイスラム教の認知度など現時点で重要と思われる調査項目が合計20ある。

書名： *Encyclopedia of Shinto Chronological Supplement*
編著者／出版社： チャールズ・フレール訳／國學院大學日本文化研究所
刊行年月： 平成28(2016)年1月
体裁： A5判 314頁
概要：

日本文化研究所ではかねてより『神道事典(縮刷版)』(國學院大學日本文化研究所編、1999年、弘文堂)の英語版である*Encyclopedia of Shinto*をウェブ上で公開しているが、同事典の付録として作成された「年表」(764-830頁、作成：井上順孝・並木和子)についても英訳を実施した。2014年9月に先行して國學院大學デジタル・ミュージアム内のEOSサイトにて電子ファイルを公開していたが、利用者の便を考慮し、修正を加えた上で紙媒体として刊行した。なお、紙媒体のもととなった改訂版の電子ファイルも同様にウェブ上で公開されている。

書名： 『〈日本文化〉はどこにあるか』
編著者／出版社： 國學院大學日本文化研究所編・井上順孝責任編集／春秋社
刊行年月： 平成28(2016)年8月
体裁： B6判 232頁
概要：

2015年10月24日・25日に、日本文化研究所の設立60周年を記念して國學院大學常磐松ホールにて行われた公開学術講演会・国際研究フォーラムでの議論を下敷きとした論集。目次は、「はじめに 複雑な渦の中にある〈日本文化〉」(井上順孝)、「DNAで読む日本人の形成史」(篠田謙一)、「神仏はなぜ人のかたちをしているのか—擬人観の認知科学—」(スチュアート・E・ガスリー(藤井修平訳))、「アフォーダンスと生態学的倫理の構築」(河野哲也)、「ローカルな生活世界から見える現代日本—人類学者の視点から—」(ウィリアム・W・ケリー(加藤久子訳))、「現代日本宗教のリバースエンジニアリング—今を観察することから始める—」(井上順孝)からなる。

年報目次

第 1 号 (創刊号) 2008 年 (平成 20) 年 9 月

創刊の辞 井上順孝

【プロジェクト活動紹介】

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」 井上順孝・加藤里美

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト内、ワーキンググループ活動報告
星野靖二

「近世国学者の靈魂観をめぐる思想と行動の研究」 松本久史

「日本神話の神話学的研究」 平藤喜久子

【昨年度の活動報告】

オーストリア科学アカデミーアジア文化・思想史研究所主催国際シンポジウム Shinto
Studies and Nationalism に参加して 遠藤潤

フォーラム「画像資料の公開と知的財産権」 黒崎浩行

【研究論文】

霊能番組への関心と宗教情報リテラシー—第 9 回学生宗教意識調査の結果を中心に—
井上順孝

【スタッフ紹介】

【出版物紹介】

【研究所からのお知らせ】

第 2 号 2009 (平成 21) 年 9 月

【プロジェクト活動紹介】

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」 井上順孝

「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—霊祭・霊社・神葬祭—」 松本久史

『万葉集神事語辞典』 辰巳正明・城崎陽子

【研究論文】

学生における宗教文化教育への関心について—2008 年度アンケート調査の分析から—
井上順孝

日本における宗教間対話と宗教間協力 ドロシア・フィルス

韓国新宗教研究の最近の動向—機関誌『新宗教研究』の内容から— 李和珍

【第 3 回国際比較神話学会議講演】

日本神話にみる基層心意—“出雲”の姿相・位相を踏まえて— 千家和比古
中央アジア神話と日本神話 マイケル・ヴィツェル

【スタッフ紹介】

第3号 2010（平成22）年9月

【プロジェクト活動紹介】

「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」 井上順孝

「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—靈祭・靈社・神葬祭—」 松本久史

【2009年度のトピック】

国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」

ミニ・シンポジウム「死と靈魂をめぐる国学者のいとなみ—現実のなかの死生観—」

宗教文化の授業を考える研究会

第3回国際比較神話学会議

【展望】

「宗教文化士」制度の発足へ向けて 井上順孝

【研究論文】

グローバル時代と企業にとっての宗教文化 井上順孝

圓佛教教徒の意識調査—アンケート調査の分析を中心に— 李和珍

【スタッフ紹介】

【出版物紹介】

第4号 2011（平成23）年9月

【プロジェクト活動紹介】

「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」 井上順孝

「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—靈祭・靈社・神葬祭—」 松本久史

【2010年度のトピック】

宗教文化の授業研究会

第20回国際宗教学宗教史会議（IAHR・トロント）に参加して

日本宗教学会パネル「〈靈魂の学知〉と政治活動—19世紀の鈴屋と気吹舎を焦点に—」

国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」

公開講演会「観光と宗教」

「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究」プロジェクト

相馬地方調査報告

【特集：宗教文化士制度発足】

宗教文化士資格認定制度の意義と展望 土屋博

宗教文化士制度発足への歩み 井上順孝

心理学領域の資格をめぐる問題 斉藤こずゑ

「宗教文化の授業研究会」の試み 平藤喜久子

教材開発の現状報告 今井信治

【研究論文】

圓仏教の現況と研究の動向—宗教社会学的視点から— 李和珍

【スタッフ紹介】

【出版物紹介】

【テレビ放映・番組紹介】

第5号 2012 (平成24) 年9月

【プロジェクト活動紹介】

「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」 井上順孝

「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」 遠藤潤

【2011年度のトピック】

宗教文化の授業研究会

国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」

日本文化研究所購読・収蔵英文雑誌とその活用

日本文化研究所ウェブサイトのリニューアル

第2回国学研究会

【研究論文】

新宗教研究にとっての認知科学・ニューロサイエンス 井上順孝

圓佛教の海外布教現況—日本教区を中心に— 李和珍

【スタッフ紹介】

【出版物紹介】

【テレビ放映・番組紹介】

第6号 2013 (平成25) 年9月

【プロジェクト活動紹介】

「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」 井上順孝

「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築」 遠藤潤

【2012年度のトピック】

国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」

2012年度のCERCの活動について

宗教文化の授業研究会

共催事業報告「教派神道六派特立—三〇周年」記念公開シンポジウム

「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の現状と今後

第3回国学研究会 吉田麻子著『知の共鳴：平田篤胤をめぐる書物の社会史』書評会

ハーバード大学への派遣について 星野靖二

南フランス出張報告 平藤喜久子

南カリフォルニア大学における国際会議 井上順孝

北京での日中3か国フォーラム報告 井上順孝

ベトナム調査報告 井上順孝

日本文化研究所・研究開発推進機構と私 遠藤潤

【研究論文】

宗教の境界線—学生に対する意識調査から— 井上順孝

宗教文化教育の到達目標に関する一考察—第1～4回宗教文化士試験問題の分析から—
塚田穂高

神社年中行事の成立過程について—二十二社・一宮の農耕行事に焦点をあてて—
鈴木聡子

【スタッフ紹介】

【出版物紹介】

【テレビ放映・番組紹介】

第7号 2014 (平成26) 年9月

【プロジェクト活動紹介】

「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」 井上順孝

「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」
遠藤潤

【2013年度のトピック】

公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」

国際研究フォーラム「日常生活と宗教文化：戒律をめぐる問題を中心に」

2013年度のCERCの活動について

公開学術研究集会「國學院大學の国学研究の現在」

出張報告 研究事業「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開による鹿児島調査
(2013年3月) 遠藤潤・武田幸也

出張報告「ハーバード大学ライシャワー日本研究所設立40周年記念会議」 井上順孝

日仏会館討論会「宗教・ライシテ・道徳」 井上順孝

出張報告「国際比較神話学会」 平藤喜久子

出張報告「ボーダリング・ザ・ボーダレス：東アジアにおける近代仏教の諸相」 星野靖二

出張報告「世紀転換期の米国における日本宗教の提示についての研究」 鹿児島・京都調査
星野靖二

【研究論文】

宗教文化教育の教材としての映画 井上順孝

資料紹介 河合博之駐ポーランド特命全権公使の改宗と客死(1933年)—『無原罪の聖母
の騎士』誌より— 加藤久子

講演録 イギリスにおける多民族・多宗教の問題とその解決をめぐる—教育の現場を事例
に— ジュリア・イブグレイヴ(翻訳：間永次郎)

【スタッフ紹介】

【出版物紹介】

【テレビ放映・番組紹介】

【プロジェクト活動紹介】

「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」 井上順孝

「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」 遠藤潤

【2014年度のトピック】

国際研究フォーラム「ミュージアムで学ぶ宗教文化—デジタル時代のチャレンジ—」

2014年度のCERCの活動について

宗教文化の授業研究会

東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業「ミュージアム展示とデジタル技術」研究会

出張報告「香港亞洲研究學會」 平藤喜久子

出張報告 Asian Buddhism : Plural Colonialisms and Plural Modernities - workshop #3 - Kyoto 星野靖二

出張報告 Santander International Summer Schools for Doctoral Students "What is Caesar's, what is God's?: A transcultural perspective on the legitimation of the political and religious spheres" 星野靖二

出張報告「二十二社調査」 天田顕徳

出張報告「中国の宗教文化関連の施設の調査」 井上順孝

出張報告「ワルシャワ調査出張」 加藤久子

【研究論文】

国際的視点からみた宗教文化教育 井上順孝

研究ノート 妙智會教団とグローバル化—「ありがとうインターナショナル」への改称を中心に— 李和珍

【スタッフ紹介】

【出版物紹介】

【テレビ放映・番組紹介】

日本文化研究所 50 年～ 60 年の活動記録 5

年表

和暦	西暦	日本文化研究所関係	國學院大學関係等
平成 19 年	2007	4. 日本文化研究所、研究開発推進機構内の一機関に改組される。所長は井上順孝教授が継続	4. 研究開発推進機構、発足。阪本是丸教授が初代機構長、井上順孝教授が副機構長となる
		4. 総合プロジェクトとして、「近世国学者の靈魂観をめぐる思想と行動の研究」、「デジタル・ミュージアムの構築と展開」（～ 21 年度）が開始。デジタル・ミュージアム企画委員会が発足	
		4-6. 第 9 回学生宗教意識調査を実施	
		12. デジタル・ミュージアム・ワーキンググループ会議が発足	
平成 20 年	2008	3. 『國學院大學日本文化研究所紀要 総目次・本文』（DVD）を作成・刊行	
		3. 『國學院大學日本文化研究所 50 年誌』を刊行	
			4. 國學院大學学術メディアセンター（AMC）の本格的な運用が開始される
		4. 「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—靈祭・靈社・神葬祭—」プロジェクトが開始（～ 22 年度）	
		6. 『万葉集 神事語辞典』を刊行	
		9. 『國學院大學 研究開発推進機構 日本文化研究所 年報』が創刊される	
			10. 伝統文化リサーチセンター資料館、全面開館
			10.12 國學院大學学術メディアセンター（AMC）開設記念講演会が開催される
		10.26 国際研究フォーラム「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」が開催される	
平成 21 年	2009	2.7 東アジア新宗教国際研究会議「東アジア新宗教研究と情報リテラシー」が開催される（宗教情報リサーチセンターとの共催）	
		5. デジタル・ミュージアムの公開が開始される	

		5.23-24 第3回国際比較神話学会議が、日本文化研究所の共催で開催される	
		9.20 国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」が開催される	
		12.26 「宗教文化の授業研究会」の第1回が開催される	
平成22年	2010	1.21 ミニ・シンポジウム「死と靈魂をめぐる国学者のいとなみ—現実のなかの死生観—」が開催される	
		1.24 シンポジウム「宗教文化教育に求められるもの—「宗教文化士」のスタートに向けて—」が、日本文化研究所の共催で開催される	
		4. 「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」プロジェクトが開始（～24年度）	
		4-6. 第10回学生宗教意識調査を実施	
		10.3 国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」が開催される	
		12.11 公開講演会「観光と宗教」が開催される	
平成23年	2011	1. 宗教文化教育推進センター（CERC）が発足。研究所内に設置される	
			3. 東日本大震災発生
		4. 『『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築』プロジェクトが開始（～25年度）	
			4. 科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者：井上順孝、23～26年度）が採択される
			6. 「日本文化を知る講座」20周年記念講座が開催される
		10.16 国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育—開かれたネットワークによる取り組み—」が開催される	
			11. 第1回宗教文化士認定試験が開催される
平成24年	2012	4-6. 第11回学生宗教意識調査を実施	
		9.29 国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐって—」が開催される	
			11.4 國學院大學創立130周年記念式典
平成25年	2013	3. 元所長、平井直房名誉教授逝去	
			4. 研究開発推進機構の第二代機構長に井上順孝教授が就く

			4. 國學院大學博物館が発足
		4. 「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」プロジェクトが開始（～27年度）	
		9.6 日本宗教学会第72回学術大会 公開学術講演会との共催で国際研究フォーラム「ネットワークする宗教研究」が開催される	9.6-8 國學院大學にて日本宗教学会第72回学術大会が開催される
平成26年	2014	2.8 公開学術研究集会「國學院大學の国学研究の現在」が開催される	
		2.13 ミニ国際研究フォーラム「日常生活と宗教文化—戒律をめぐる問題を中心に—」が開催される	
			4. 國學院大學博物館が「平成26年度文化庁 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」に採択される
		4. 「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』を拠点とする国学の『古事記』解釈の研究」プロジェクトが開始	
			6. 「日本文化を知る講座」が第40回を迎える
		9.27 国際研究フォーラム「ミュージアムで学ぶ宗教文化—デジタル時代のチャレンジ—」が開催される	
平成27年	2015		4. 國學院大學博物館が「平成27年度文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業「東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業」に採択される
		4. 「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」プロジェクトが開始（～29年度）	
		4-6. 第12回学生宗教意識調査を実施	
		6. 日本文化研究所設立60周年記念の「日本文化を知る講座」が開催される	
		10.24-25 公開学術講演会・国際研究フォーラム「『日本文化』研究の展望」が、研究所設立60周年記念事業の一環として開催される	
			12.12-13 國學院大學博物館 国際シンポジウム・ワークショップ2015「博物館の国際的ネットワーク形成と日本文化研究」が開催される
平成28年	2016	3. 元主事、伊藤幹治国立民族学博物館名誉教授逝去	

ポスト・サリン事件の学生の宗教意識とオウム真理教観 —20年間に生じた宗教意識の変化を中心に—

井上順孝

はじめに

國學院大學日本文化研究所のプロジェクトと「宗教と社会」学会の宗教意識調査プロジェクトは、1995年から2015年まで、12回にわたり合同で学生の宗教意識を知るためのアンケート調査を実施してきた。毎回数千人を対象としているが、1995年の第1回の調査は、同年3月20日のオウム真理教による地下鉄サリン事件直後に実施された。そして最後の第12回の調査はサリン事件から20年後に実施された¹。この調査は1992年に日本文化研究所の宗教教育プロジェクトによって行われた、大規模な学生意識調査を一つの足場とし²、1993年6月に「宗教と社会」学会が設立されたことを受けて、継続的な合同調査が立案されたものである³。したがって当初はオウム真理教についての調査項目を含む予定はなかった。ところが、図らずも第1回の調査直前に地下鉄サリン事件が起こったことにより、必然的にオウム真理教に関する調査項目が毎回のように入れられることとなった。

20年間にわたる調査結果の全体的なまとめと、主なテーマについての分析は、別途日本文化研究所から報告書を作成する予定であるので、本稿では次の3点に絞って論じたい。第1はオウム真理教事件が学生たちの世代の宗教意識にどのような影響をもたらしたか。第2は事件後のオウム真理教に対する関心や知識は、時間の経過とともにどのように変わったか。そして第3はオウム真理教問題といわゆるカルト問題や宗教関連の事件に対する意識との関係である。

1. 地下鉄サリン事件は宗教意識にどう影響を与えたか

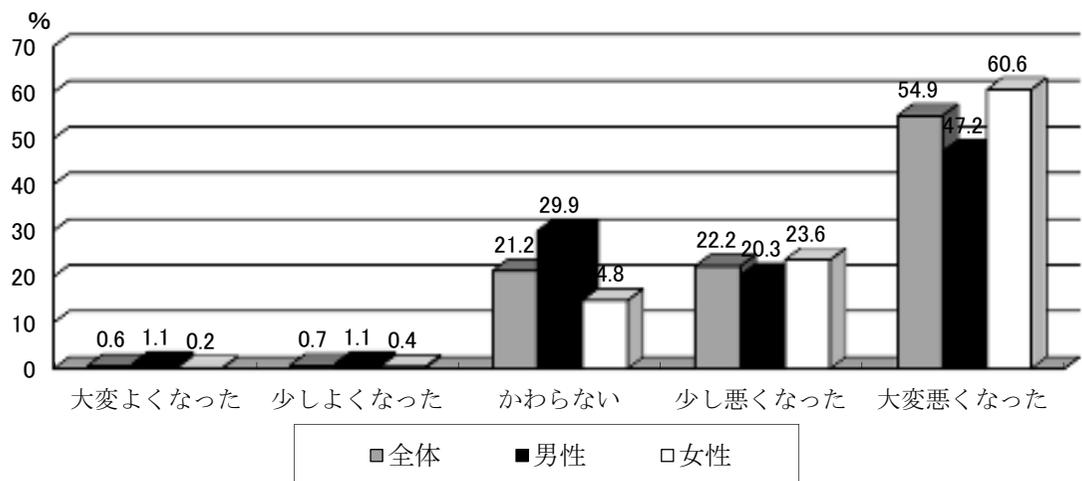
一連の調査結果を分析している中で、学生たちの宗教についてのイメージは、実際に自分が体験したことよりも、マスメディア等の報道によって大きく左右されることが比較的初期の段階で分かった。それを端的に示すのは、「あなたは宗教にどの程度関心がありますか」という質問のサブクエスチョンに対する回答内容である。この宗教への関心の程度に関する質問に「信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない」または「信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない」と回答した人たちに、さらにその理由を尋ねるサブクエスチョンを設けた。回答の選択肢は「宗教に関する嫌な体験があるから」、「なんとなく嫌いだから」、「関心がないから」、「宗教の必要性を感じていないから」である。

このサブクエスチョンに対する回答を見ると、「宗教に関する嫌な体験があるから」を選んだのは3～4%に過ぎなかった。複数を選択できるようになっていたから、実際に嫌な体験をした人はこの選択肢を選んだはずである。実際に宗教に関する嫌な体験をした人はわずかであるのに、宗教がアブナイなどの否定的な意見を回答する学生の数はいわゆる半数近くにのぼった。このことから宗教についてのイメージは、実際の体験よりも報道などによって得られた情報に基づいていると考えられる。

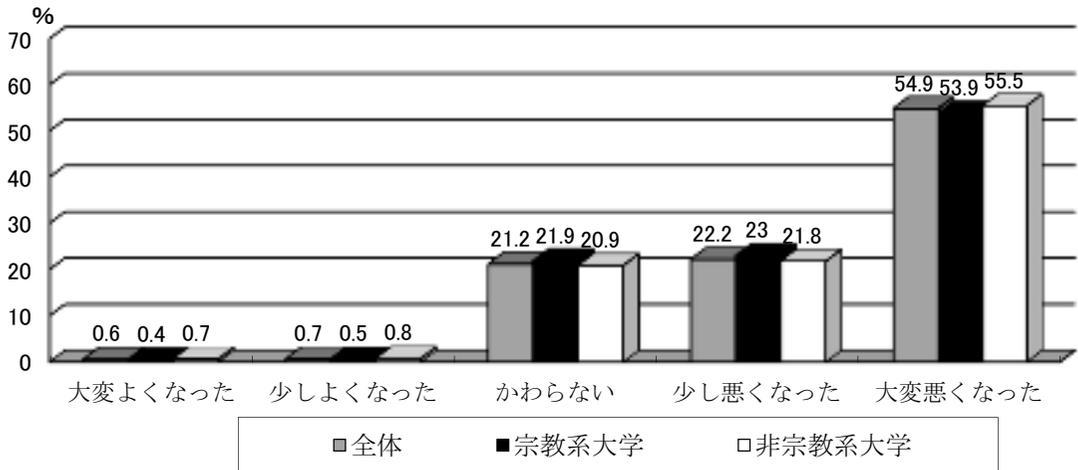
20歳前後で日本にあるさまざまな宗教に直接的に接する機会は、一般的にそれほど多くないと考えられるから、宗教についてのイメージ、関心などがマスメディアの発する情報内容に大きく影響を受けるのは当然のことと推測される。オウム真理教については地下鉄サリン事件以後少なくとも半年以上、連日のようにテレビでも報道がなされた。日本において未曾有とも言える宗教テロであったから、その報道は、とりわけ若い世代には大きな影響を与えたと考えられる。宗教に対する意識にどの程度影響を与えたのであろうか。

事件の衝撃で宗教に対するイメージがどう変わったか、時間の経過とともにその影響の度合いはどうかを見てみる。単刀直入に「あなたの宗教に対するイメージは、オウム真理教事件のおこったことでどうなりましたか」という質問をしたのは、事件後4年経った1999年の調査においてであった。回答の選択肢は「大変よくなった」、「少しよくなった」、「かわらない」、「少し悪くなった」、「大変悪くなった」の5つである。「よくなった」という回答はほとんどないと予測されたが、回答の選択肢のバランスをとるため設けた。実際に注目したのは、かわらないという回答と悪くなったという回答とがどんな比率になっているかである。

結果はグラフ1に示したが、「少し悪くなった」または「大変悪くなった」と回答した人の数を「かわらない」と回答した人の数で割ると3.6であった。つまり多少なりとも宗教のイメージが「悪くなった」人が「かわらない」人の3.6倍ということである。この質問では男女差がかなり大きかったという点が特徴的である。「かわらない」に対する「悪くなった」の比率が男性では2.3なのに、女性では5.7と大きな差が生じた。女性の方が事件によって宗教のイメージが悪くなったと回答した人がずっと多く、男性の2倍以上になったのである。この男女間の違いは宗教系大学と非宗教系大学との違いよりはるかに大きい(グラフ2参照)。非宗教系の大学とは国公立の大学及び宗教系でない私立大学のことである。同様の比を求めてみると、宗教系大学は3.5であり、非宗教系大学は3.7である。非宗教系大学の方が、イメージが悪くなった割合が若干高いものの、男女差に比べるとその違いはずっと小さい。このオウム真理教に関しての男女の意識の違いは、後述するように一連の調査の随所にあらわれているので注目したい。



グラフ1 オウム事件後の宗教のイメージ

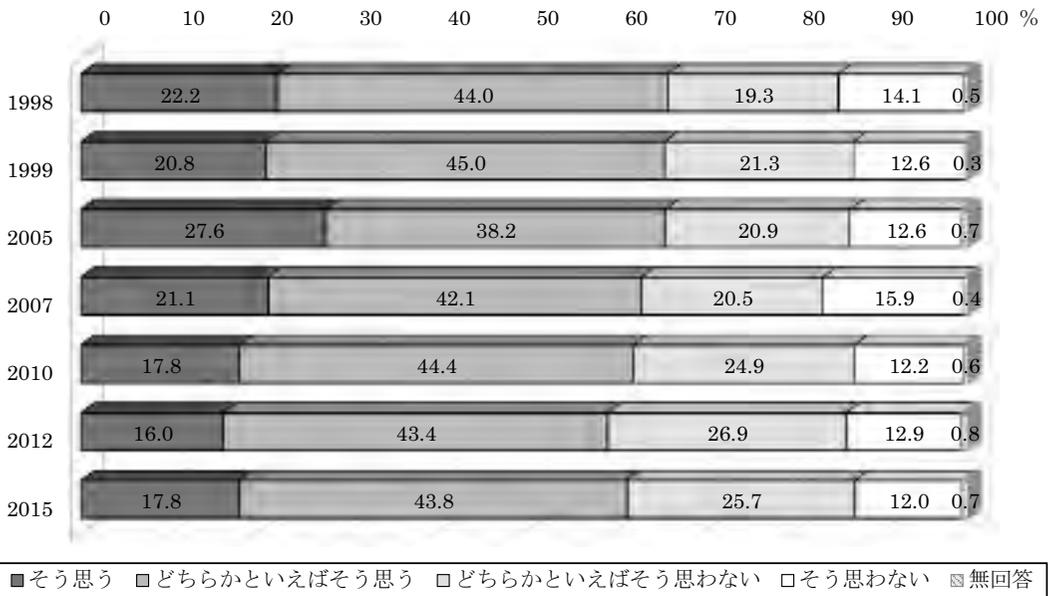


グラフ2 オウム事件後の宗教のイメージ

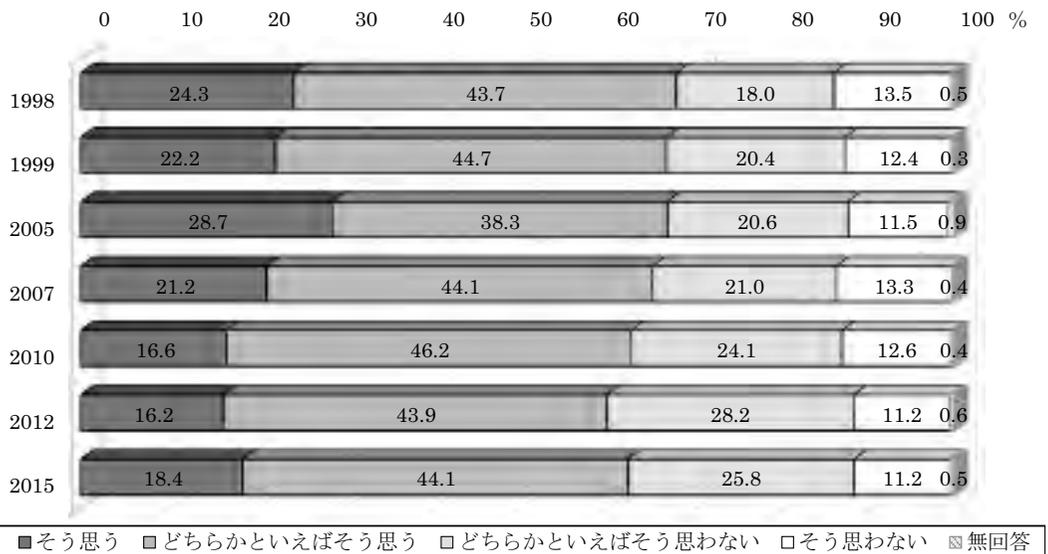
オウム真理教は地下鉄サリン事件だけでなく、前年に松本サリン事件、1989年には坂本堤弁護士一家殺害事件、信者のリンチ殺害事件など、多くの犯罪に関わった。地下鉄サリン事件以後、それまで関与が疑われていた事柄が、すべて事実であったことが次々に報じられ、オウム真理教またその教祖麻原彰晃（本名松本智津夫）は、宗教の負の面を広く社会に印象づけることになった。このような報道を価値観の形成途上にある若い世代が一定期間インプットされ続けた場合、宗教について警戒心を強めるようになったとしても不思議ではない。オウム真理教は新興の宗教の一つであり、宗教教団の一つでもあるということから、新興の教団全般、さらには宗教全般に対して警戒心を抱く傾向が生じたのは確かである。事件当時小学校高学年であれば、事件のことはしっかり心に刻まれた可能性が高い。とすれば事件後10年くらいまでに行なったこの意識調査の回答者の場合、その大半は事件の報道から少なからぬ影響を受けた世代と想定していいだろう。

とはいえ、時間の経過とともに、事件の記憶は薄れる。事件後潮が引くようになってきた。霊能者番組も数年後には少しずつみられるようになってきた。霊能者番組を自粛したのは、麻原彰晃が説く空中浮揚などを信じる若者がいたのは、霊能の存在を無責任に放映したテレビにも責任があるなどという議論が一部にあったからである。しかし、反省のフリも、もうそろそろいいだろうといった様子見も、すべて右へならえの姿勢が目立ったテレビ界であった。

こうしたメディアのオウム報道、あるいは宗教を扱う態度の変容は、若い世代の宗教に対する意識に少なからぬ影響を与えたと思うが、ここで「宗教はアブナイと思うか」という質問に対する回答が、事件後の時間の経過とともに、どのように変化したかをみている（グラフ3参照）。この質問項目は1998年に初めて設け、以後2015年まで7回設けた。グラフからは1990年代末と2010年代を比べると、わずかだがアブナイと思う割合が減少傾向にあるようにも読みとれる。「そう思う」または「どちらかというと思う」と答えた者（「アブナイ派」としておく）の合計を、「どちらかというと思わない」または「そう思わない」と答えた者（「非アブナイ派」としておく）の合計で割ってみる。1998年、1999年は1.9～2.0であるが、2010年以後は1.5～1.7である。誤差の範囲かもしれないが、「アブナイ派」の比率が、わずかながら減少傾向を示している。



グラフ3 「宗教はアブナイ」と思うか



グラフ4 「宗教はアブナイ」と思うか（非宗教系大学）

宗教に対する態度は、宗教系大学と非宗教系大学では非宗教系大学の学生の方が全体の傾向に近いと考えられるので、同じ質問に対する非宗教系大学の回答者の結果をグラフ4に示した。先と同様の計算をすると、1998年、1999年は2.0～2.2であり2010年以降は1.5～1.7である。より明確に「アブナイ派」が減少傾向である。2010年になると事件後15年であり、事件の記憶がない回答者も多くなる。2015年であると20年経っているので、回答者の中にはサリン事件のときにはまだ生まれていなかったという人もいる。2015年の回答者5,773人のうち1994年以前の出生者、つまり明らかにサリン事件当時は生まれていなかった回答者は1,683人で全体の約3割になる。オウム真理教事件の記憶がはっきりあるかそうでないか

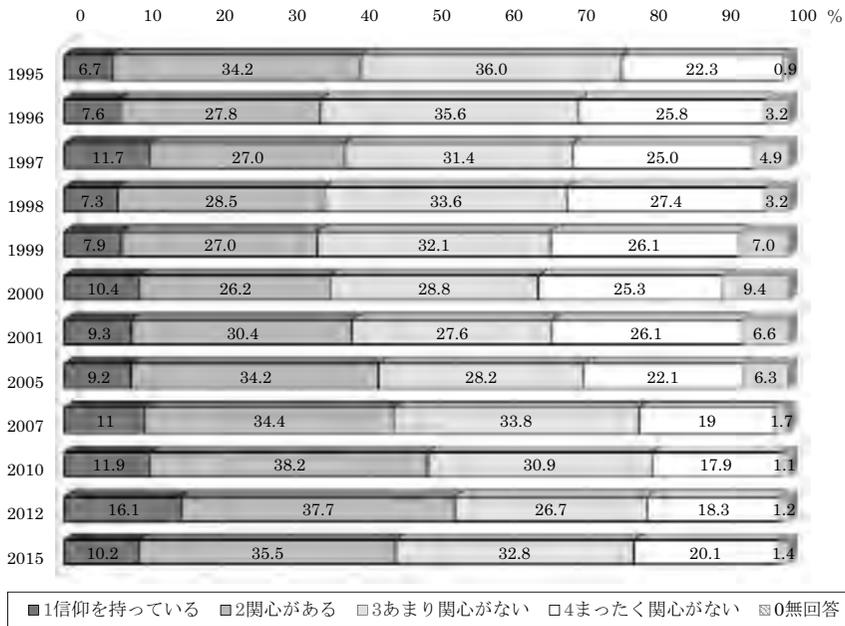
が「宗教はアブナイ」と答える割合にどれほど影響するかを、これだけで判断することはできない。ただ事件の記憶が薄れる時期に「アブナイ派」は減少傾向にあるのは見てとれる。

グラフを見るとよく分かるが、「アブナイ派」は減少傾向にあるものの、2005年の回答結果では、全体でもまた非宗教系の大学だけを見ても、「アブナイと思う」と明確にアブナサを認めた学生が数%増え、やや突出する形になっている。何が影響したのであろうか。この年の調査に先立って起こった宗教関連の事件等を確認してみる。それほど宗教に関心のない学生でも知りえたかもしれないオウム真理教関連の出来事としては、2004年2月に東京地裁が麻原彰晃に死刑判決を下したことがあげられる。調査を実施する直前の2005年4月7日には、坂本堤弁護士一家殺害事件の実行犯である岡崎一明の裁判で、最高裁で死刑が確定した。

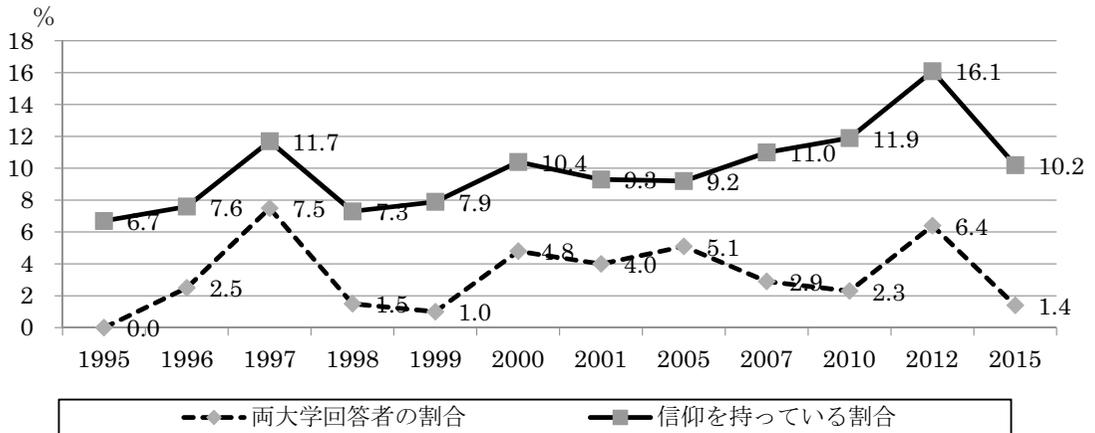
オウム真理教以外の出来事であると、2000年代にはライフスペース問題や加江田塾問題がテレビや新聞でかなり頻繁に報じられた。ライフスペース問題とは同団体の代表者高橋弘二がミイラ化した信者の遺体を生きていると主張して保護責任遺棄致死容疑で逮捕された事件である。高橋代表は自説をまったく翻さなかった。加江田塾事件もやや似ており、代表の東純一郎が預かっていた男児二人が死亡しミイラ化していたのに、復活させるためにお清めを続けていた」と主張した事件である⁴。これらはいわゆるカルト問題として報じられるようになっていた。これらの事件についての報道がどう影響を与えたかは調査からは知りえないのだが、テレビその他の報道でこれらの事件を知った学生もいるはずであるから、一つの要素として想定しておく。

宗教に警戒心を抱く割合は減少傾向にあったが、信仰を持っている割合や関心を抱く割合が20年間でどう推移したかをみておく。これに関しては、初回の調査から最終の調査まで12回とも同じ形式で質問してきたので、20年間の変化を見ることができる。信仰を持つといっても熱心さは異なるし、宗教に関心を持つといってもその内容はさまざまである。また質問の形式や調査全体のフレーム、あるいはワーディングによっても回答結果は少なからず変わってくる⁵。それゆえ同じ調査方法、同じ形式、そして同じワーディングの質問に対する回答結果を比較することは、変化を見る上では非常に参考になる。

グラフ5に示したとおり、全体でみるなら、信仰を持つ人は年ごとにかなりの変動がある。最大の数値になったのが2012年の16.1%であり、最少が1995年の6.7%である。倍以上の開きがある。この調査では信仰を持つ割合の変動に、創価大学や天理大学の回答者の数が大きく影響している。多くの宗教系の大学の場合、その大学の学生であるからといって、非宗教系の大学と比べて信仰を持つ人の割合がとくに多いわけではない。親もしくは自分がキリスト教徒であるからキリスト教系の大学を選ぶとか、同様に仏教系の大学を選ぶという例は非常に少ない。神職や僧侶を養成するために設けられたような学部の場合はその影響が出るが、それ以外は宗教系の大学であるからといって信仰を持つ学生の割合は非宗教系の大学の場合と大差ない。しかしながら創価大学や天理大学の場合、学部に関わらず、学生がそれぞれ創価学会、天理教の信者である割合は非常に高い。信仰を持つ人の割合は回答者全体として少ないので、両大学の回答者の多寡は信仰を持つ人の割合にかなり影響する。つまり信仰を持つ人の割合が高い年は創価大学と天理大学からの回答者の数が比較的多かった年である。全体の回答者の中で創価大学と天理大学の回答者の占める割合と、信仰を持っていると答えた人の割合との関係を示したのがグラフ6である。両大学の回答者の割合が多い年と信仰を持っていると答えた人が多い年とは明らかに相関関係が見てとれる。



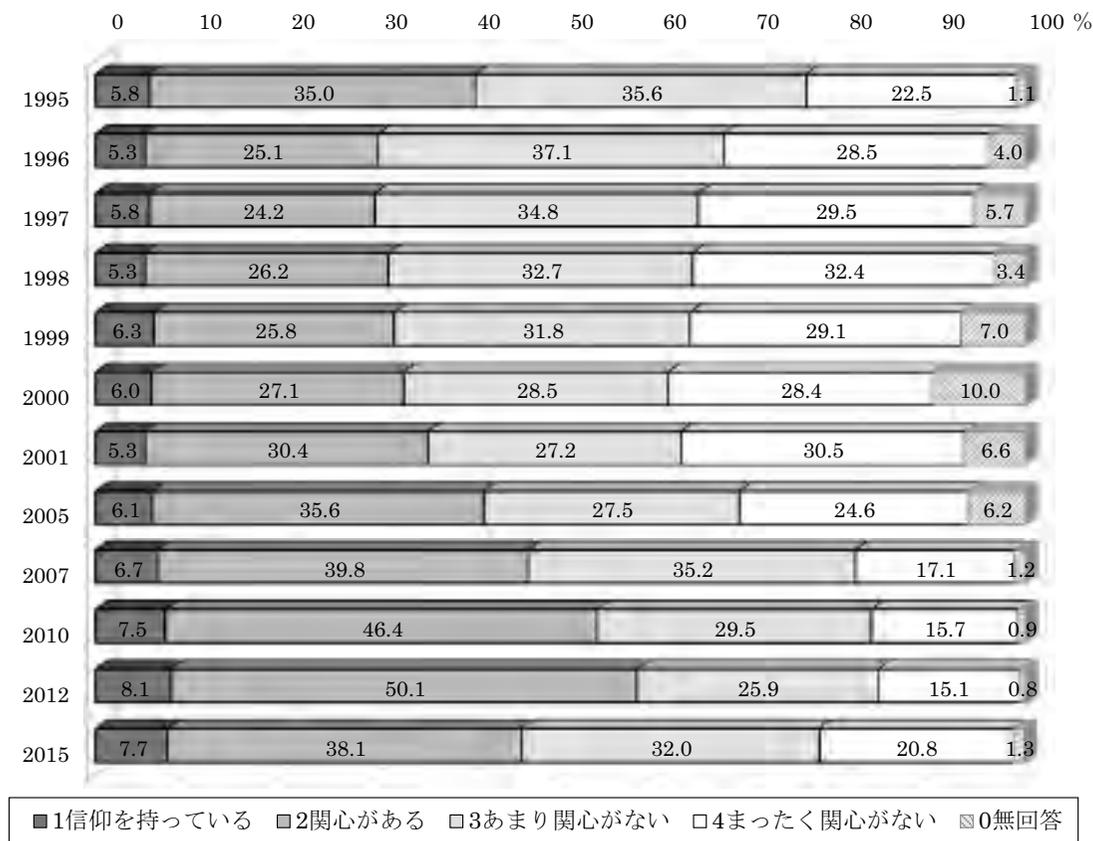
グラフ5 宗教への関心（全体）



グラフ6 創価大学・天理大学の回答者の割合と信仰を持っている割合

それゆえに学生の信仰を持つ割合がどう推移してきたのかをみるには、非宗教系の大学の回答者のみの数値を比べた方が、同世代の傾向をより正確に反映すると考えられる。それを示したのがグラフ7である。そうすると信仰を持つ割合は、1995年から2005年までの10年間はほぼ5～6%程度で安定していることが分かる。その後の10年はやや数値が高めで2012年には8.1%と初めて8%台に達した。宗教に関心があるという人も21世紀には増加傾向なのであるが、2015年には少し減少している。

他方、宗教にまったく関心がないと回答した人は1995年から2005年までは20～30%台であり、1998年には32.4%とほぼ3人の1人の割合である。2007～2012年は10数%と少なくなっているが、2015年にふたたび20%強になっている。1990年代後半に比べれば、21世紀には信仰を持つ人や宗教に関心を抱く人が増えたとは言えるが、今後はどう変わるかわからない。少なくともこの結果からする限り、オウム真理教事件以後若者の宗教離れが進ん



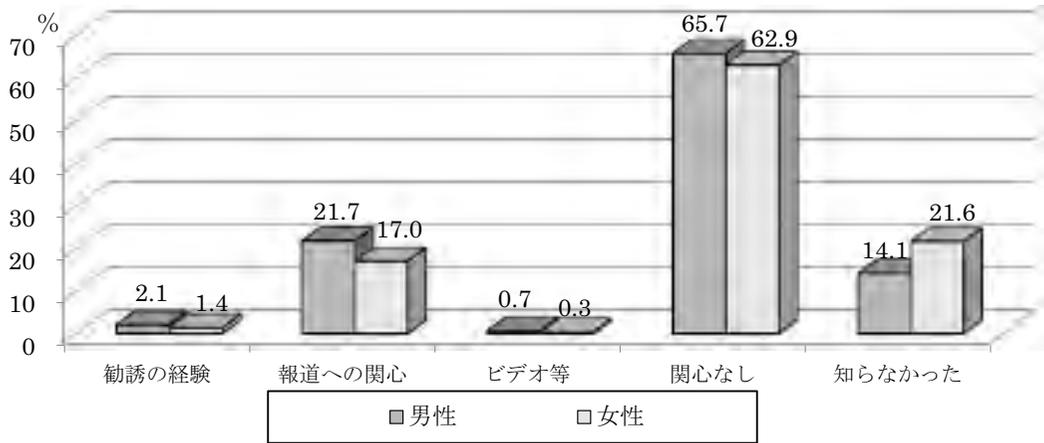
グラフ7 宗教への関心（非宗教系）

だというような見方は成り立たないことになる。

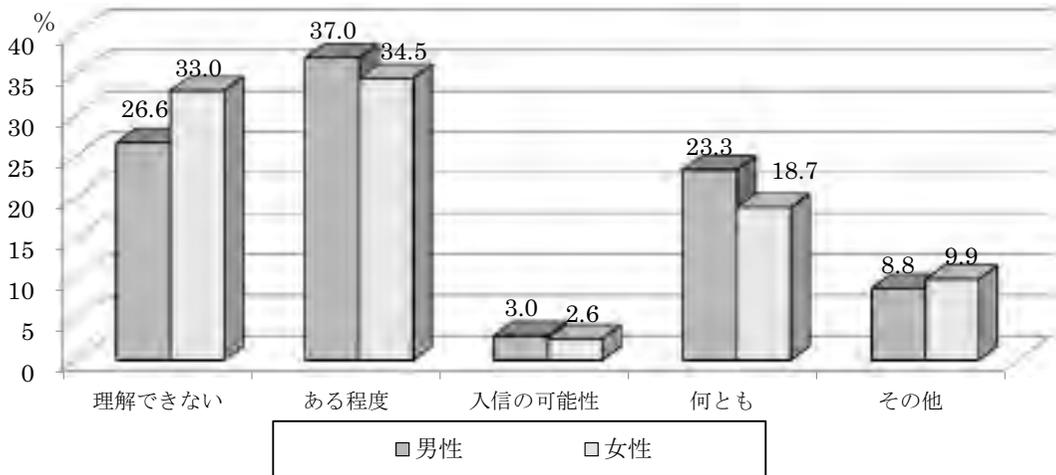
若者が宗教離れているという説を、しかるべき資料やデータに基づくことなく、たんに印象のみで語っている類の議論はともかくとして、教団関係者から若い世代の信仰者が減ったという話を聞くことが少なくない。なぜそうした言説が広まるかを考える場合には、割合と絶対数との違いを考慮する必要が出てくる。教団関係者の述べることは、実感に基づいていると考えられるからである。

総務省統計局のデータによれば、第1回の調査をした年である1995年の新成人人口は201万人である。これに対し最後の調査をした2015年は126万人である。1995年を100とすれば2015年は62.7である。信仰をもつ若者の割合が仮に2～3%増えても絶対数は減る。この調査での数字をそのまま使うと、1995年の201万人の5.8%（非宗教系）は11万人6千人ほどである。これに対し信仰を持つ割合がもっとも高かった2012年で考えても、122万人の8.1%（非宗教系）であるから、9万9千人ほどになる。2015年だと126万人の7.7%（非宗教系）であるから、9万7千人ほどである。割合としては増えていても、絶対数は減っているのである。この調査におけるある程度の誤差を考慮しても、個々の宗教教団にとって、若者の信者が減っていると感じるのは絶対数の減少に基づくと考えれば辻褃があう。

信仰を持つ割合ではなく、宗教に関心がある割合はどう推移したであろうか。1990年代後半と21世紀に入ってからの比べると、21世紀に入ってからの方が関心が高い傾向にある。



グラフ8 オウム真理教への関心 (1996年)

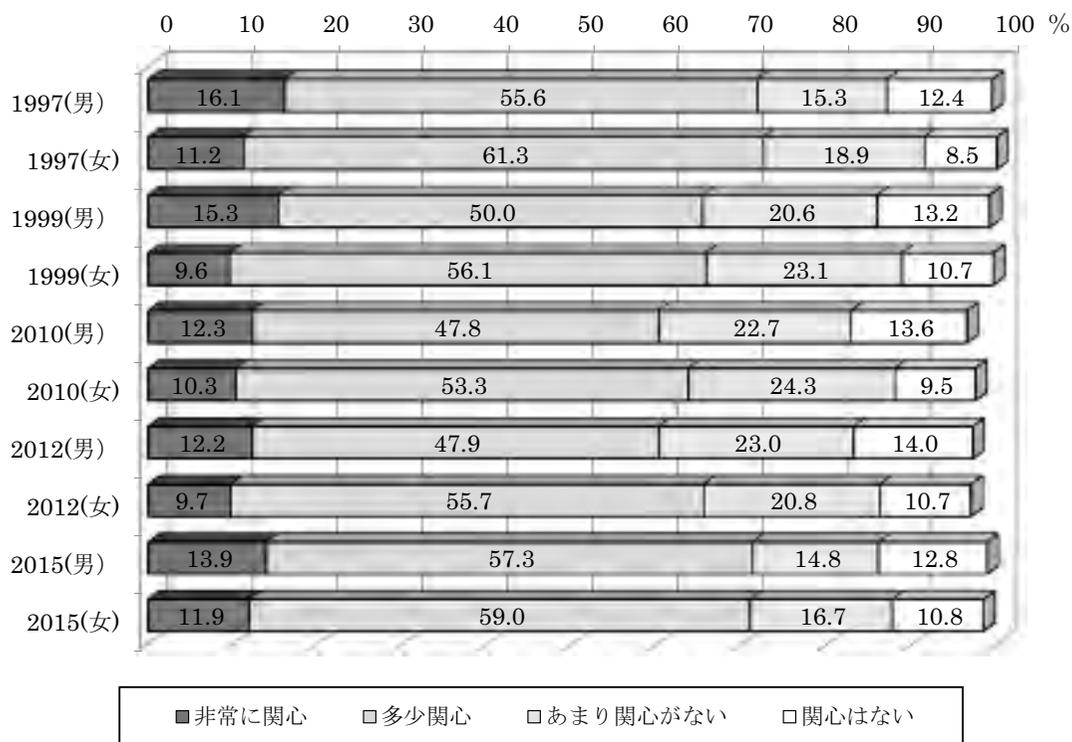


グラフ9 信者をどう思うか (1996年)

オウム真理教にどれほど関心を持っているかについては、1997年、1999年、2010年、2012年、2015年の5回にわたって質問している。1997年には山梨県、静岡県にまたがって建てられていたサティアンのほとんどが取り壊された。オウム真理教を象徴するような建物が視覚的に確認できなくなった。このことはオウム真理教の活動をリアルに想起する一つの物理的対象がなくなったことを意味する⁶。

質問は「現在あなたは、オウム真理教についての報道に対して、どれくらい関心がありますか」というもので、「非常に関心をもっている」、「多少関心をもっている」、「あまり関心をもっていない」、「関心はない」という選択肢から選ぶ形式である。

グラフ10を見て分かるように、1997年から2015年に至る回答結果を比較しても、オウム真理教報道についての関心は減ってはいないことが分かる。「関心がある」、「多少関心がある」を合わせると1997年は7割程度で、次第に減少して2010年前後には6割程度になったが、2015年にはふたたび7割程度になっている。これは地下鉄サリン事件20周年という



グラフ10 オウム真理教報道への関心

ことで、その年のはじめから報道も多少あったこと、また指名手配されていた平田信、菊地直子、高橋克也の3人が2012年に相次いで逮捕され、2014年から2015年にかけて東京地裁が3人に判決を言い渡し、その報道があったことも多少関係していると考えられる。

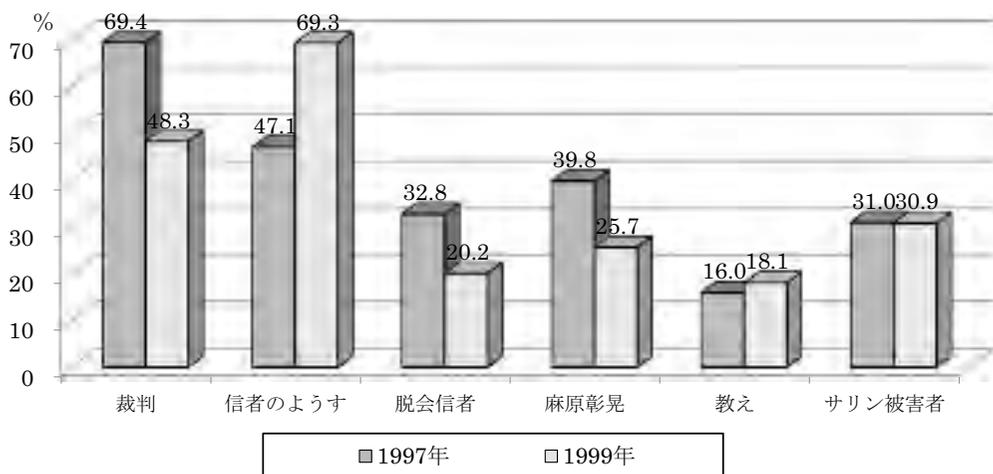
しかしそれだけでは説明がつかない。非常に関心があるという回答もずっと1割以上であり、また強い関心を持つ割合は、年により多少の違いがあるが一貫して男性の方が高い。やはりオウム真理教に対する一定の関心が若い世代には保たれていると考えた方がよさそうである。

1997年と1999年の調査においては、オウム真理教に対する関心の内容についても、選択肢を提示して複数回答可で答えてもらった。また2010年の調査では、すでに事件後15年が経過していることを考慮して、オウム真理教について何を知っているかを質問することにした。2012年と2015年の調査においてもこれに準じた。

1997年と1999年の調査で設けた質問と回答の選択肢は次のとおりである。

「(多少なりともオウム真理教の報道について関心があると答えた人に対し) その関心の内容について次から選んで下さい」

1. 裁判のなりゆき
2. 今でも信者である人たちのようす
3. 脱会した信者の社会復帰
4. 麻原彰晃(松本智津夫)の言動
5. オウム真理教の教え
6. サリン事件の被害者に関すること



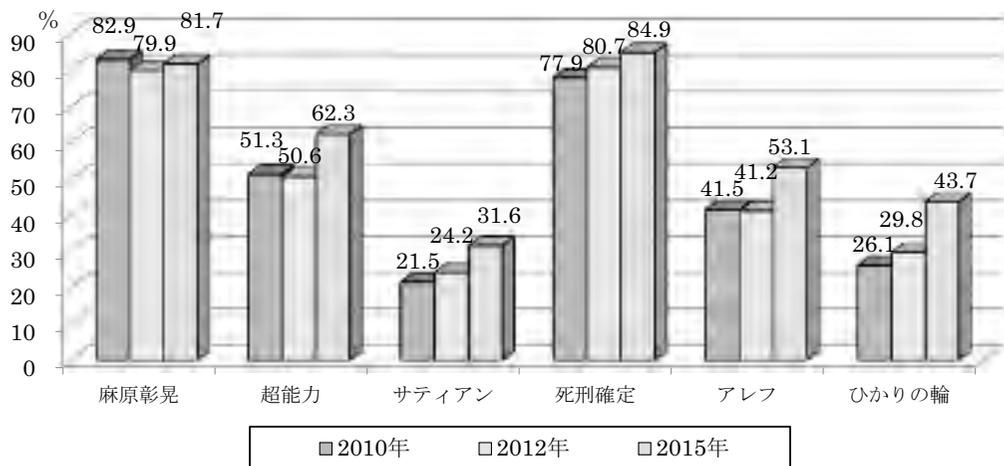
グラフ11 オウム真理教への関心内容

事件後数年以内ということを考えてオウム真理教の教祖が麻原彰晃であり、1995年に地下鉄サリン事件を起こしたくらいは認識しているであろうという前提のもとに、6つの回答の選択肢を設けたのであるが、1997年と99年の2年間でかなり数値が変わった項目がある。裁判の様子についての関心は20%以上減少しているが、今でも信者である人たちへの関心は逆に20%増えている。また脱会信者や麻原彰晃への関心は減っているのにオウム真理教の教えへの関心は少しだけが増えている。

男女差が大きい項目がある。麻原彰晃の言動に関する関心は両年とも男性の方が5%程度高い数値である。男女別では1997年は42.1%対37.9%、99年は28.5%対23.7%である。逆にサリン事件の被害者に対する関心は女性の方が7～8%程度高い。1997年は男女別では26.6%対34.6%、99年は26.8%対34.0%である。

2010年には事件後15年経過して、基本的知識が乏しくなっている学生もいることを想定し、オウム真理教についてどのようなことを知っているのかを問う形に変えた。次の8つの事項について質問し、2012年も同じに内容にした。2015年は事件後20年になったわけだが、やはり知識を問う形にして、4と5をそれぞれ(4)と(5)のように変え、残りは同じ回答の選択肢とした。

1. 教祖は麻原彰晃（本名松本智津夫）である。
2. 教祖は修行によって空中浮揚など超能力が得られると主張した。
3. 信者たちが修行していた建物は、サティアンと呼ばれていた。
4. (1995年3月に) 東京で地下鉄サリン事件を起こした。
 - (4) 真理党を結成し(1990年の)衆議院選挙に教祖と幹部信者たちが立候補した。
5. 地下鉄サリン事件では10名以上の死者を含む数千人の被害者が出た。
 - (5) 1995年に東京で地下鉄サリン事件を起こし、10名以上の死者を含む数千人の被害者が出た。
6. サリン事件にかかわった教祖と幹部の何人かは死刑が確定した。
7. オウム真理教の元信者の一部は、現在アレフという団体に所属している。
8. 麻原彰晃の弟子であった上祐史浩は「ひかりの輪」という団体を作った。



グラフ12 オウム真理教についての知識

8つの選択肢のうち6つは2010年、2012年、2015年に共通するので、その結果を比較してみる（グラフ12参照）。

麻原彰晃が教祖であることは20年経っても8割強が認識していることが分かる。また報道が関係しているであろうが、教祖や幹部の死刑判決についても8割以上が知っている。注目されるのは2015年の回答結果である。超能力についても、サティアンについても、またAleph（アレフ）やひかりの輪についても、2010年・2012年に比べて明らかに高い数値になっている。そしていずれも男性の方が顕著に割合が高い。2015年で見ると、男女別では超能力が70.8%と55.9%、サティアンが37.9%と26.8%、アレフが50.4%と38.6%、ひかりの輪が50.4%と38.6%である。いずれも10%以上の開きがあり、男性の方が関心が高いことは明らかである。グラフには示していないが、宗教か非宗教系かで比べてみると、非宗教系の方がすべての事柄に対し少しだけ知識の度合いが高い。通っている大学が宗教系か非宗教系かの違いよりも、男女差の方がずっと顕著なのである。

超能力に関しての男女差が15%ほどあり、明らかに男性の方が関心を持っている度合いが高いことに関しては、一連の調査における別の質問項目の結果で参考にするべきことがある。それはインターネットの利用状況を調べると同時に、どのようなサイトに関心を持っているかを調べた質問項目の結果である。1995年にWINDOWS95が発売されたことで、パソコンを通してのインターネット利用は一挙に広がった。1990年代末から2000年代初めにかけては学生の世代においては数年の間にインターネットを通しての情報収集は一般的なこととなり、さらにその後SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の利用も一般化していく。

総務省の通信利用動向調査の結果を見ると、1997年にインターネットの人口普及率は9.2%であったが、2000年には37.1%となり、2002年には57.8%となって半数を超えている。2005年には70.8%となり、10人に7人はインターネットを利用するようになって⁷。20世紀から21世紀への世紀の変わり目頃に非常なスピードで日本にインターネットが普及したことが確認できる。若い世代に限れば、2004年末の時点で13～19歳で90.7%、20歳代で92.3%が利用している。50歳代が65.8%、60～64歳が49.0%、65～69歳が27.3%と比

較すると、若い世代がすぐさまこの新しいメディアに馴染んだことが分かる。

この意識調査はちょうどインターネットの影響が若い世代を中心に、日本社会に広く及び始めた時期に、ぶつかったことになる。そこでインターネットの利用度と、関心を持っているホームページについての質問を2001年から開始し、以後2005年、2007年、2010年までの計4回行った。2000年代はブログ、ミクシィ、ツイッターと新しいSNSが次々と登場したので、インターネット利用形態に関する質問は毎回少しずつ変わっている。ただ「自分のホームページをもっている」と「インターネットを利用していない」という回答の選択肢は4回とも設けているので比較ができる。

自分のホームページをもっている		
年	男性 (%)	女性 (%)
2001	6.2	3.9
2005	7.1	8.5
2007	6.4	12.2
2010	7.2	16.3

インターネットは利用しない		
年	男性 (%)	女性 (%)
2001	18.2	16.5
2005	3.5	2.8
2007	5.1	2.6
2010	9.8	8.3

この結果は少し興味深い。というのはホームページを持っている割合が2001年は男性の方が高いが、2005年以降は女性の方がどんどん高くなり、2010年では男性の倍以上になっている。インターネットを利用しないというのも女性の方が少ない。インターネットの商用化は1990年であり、それ以前に行われていたパソコン通信においては男性の利用が多かったが、インターネットの一般利用が広まると、少なくとも学生の世代では、女性の方がより多く利用しているということが分かる。

2001年の総務省の統計でもインターネットの利用率は全体では男性53.0%、女性40.6%と男性の方が高いけれども、若い世代では女性の方がわずかながら高い。6～12歳で男性48.1%、女性50.3%、13～19歳で男性72.4%、女性73.3%、20～29歳で男性68.1%、女性68.9%である。男性の方が高くなるのは30歳代以上である。これは仕事で利用する割合が高いからと考えられる。この意識調査における結果は総務省の調査とも合致する結果であることが確認できる。

なお、インターネットを利用しないという回答の割合が2001年から2005年にかけては減少しているが、その後は逆に増えている。2010年は利用しない人が9%ほどになっている。総務省の統計でも2010年前後は6～12歳でのインターネットの利用率が減少している。考えられる理由の一つはスマートフォンの普及と関係である。スマートフォンでも実際はインターネット接続しているのだが、インターネットはパソコンを利用してアクセスするものと考えた学生がいたからと考えられる。

注目したいのは、インターネットによってどのようなサイトにアクセスしているかである。これについては次の5つのカテゴリーを示して関心を持っているかどうかを複数回答で質問した。

1. 宗教団体のホームページ
2. オカルト・超常現象に関するホームページ

3. 癒しに関するホームページ
4. UFOに関するホームページ
5. 占いに関するホームページ

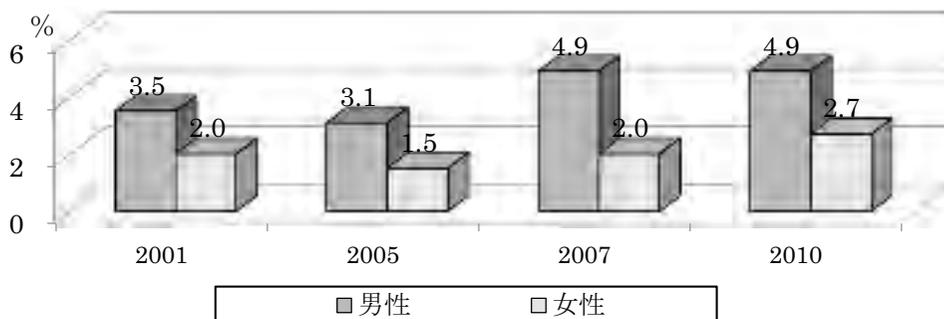
これらの回答には非常にはっきりとした性別による差があらわれている（グラフ13～17参照）。男性の関心が高いのは宗教団体、オカルト・超常現象、UFOに関するホームページである。また女性の関心が高いのは、癒し、占いに関するホームページである。この男女差は一貫している。宗教団体のホームページに対する関心は、2001年から2010年まで、男性は女性のそれぞれ1.8倍、2.1倍、2.5倍、1.8倍と一貫して高い。同様にオカルト・超常現象に関するホームページであると、男性が女性のそれぞれ3.0倍、1.8倍、2.3倍、1.7倍である。UFOに関するホームページは、それぞれ3.3倍、2.8倍、2.9倍、1.8倍で、もっとも男女差が大きい。

これに対し、癒しに関するホームページと占いに関するホームページでは、逆に女性の方が一貫して高い。癒しに関するホームページでは、女性が男性のそれぞれ1.2倍、2.5倍、2.0倍、2.1倍である。占いに関するホームページでは、それぞれ2.7倍、3.7倍、1.9倍、3.1倍である。2005年には3.7倍もの開きになっている。

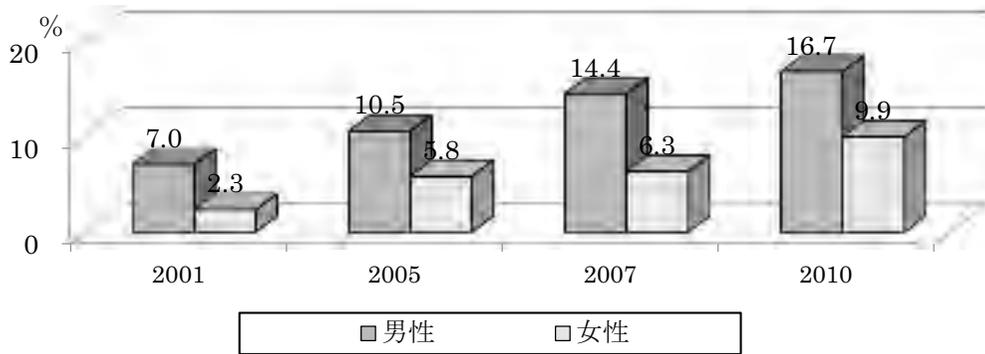
ちなみに2005年と2007年には、ほぼ同じ内容で韓国の学生に対する意識調査も同時期に行ったが、日本同様の傾向がみられた⁸。

なお、性別による差は同じでも数値が男女ともに明らかに増加傾向にあるのがオカルト・超常現象に関するホームページと、UFOに関するホームページである。21世紀になってからの調査であるので、これまで述べてきたこととの関連でいえば、テレビなどが霊能番組の類の自粛をやめた時期である。これはオウム真理教事件以前の状態に復したとも言える。メディアの発する情報内容が若い世代のサブカルチャー的な事柄への関心に影響を与えている可能性を読みとれる。

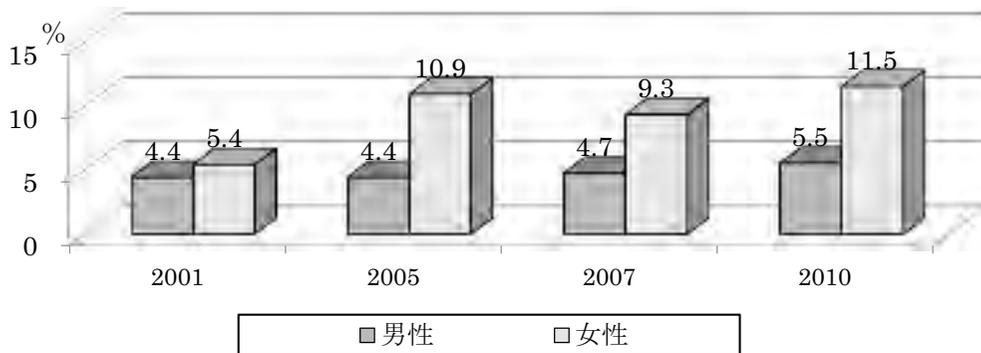
そして男性の方がもともとオカルト・超常現象などに対する関心が高いとすれば、超能力を得られるなどと誇示していた麻原彰晃の教えが、男性により強い関心を抱かせた可能性も考えられる。



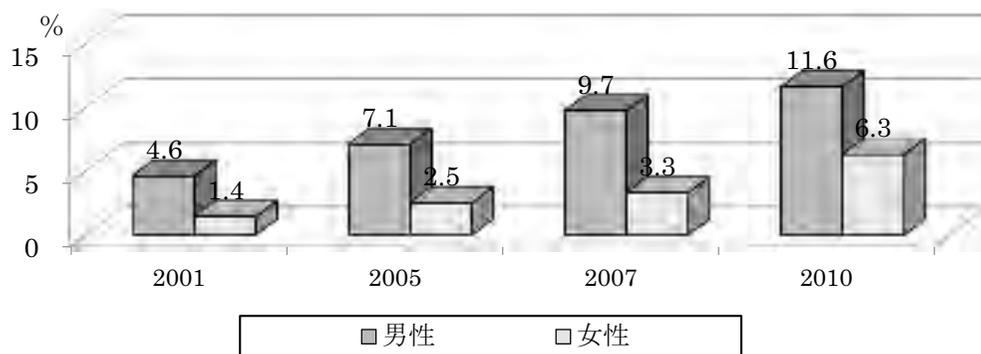
グラフ13 関心のあるホームページ① 宗教団体



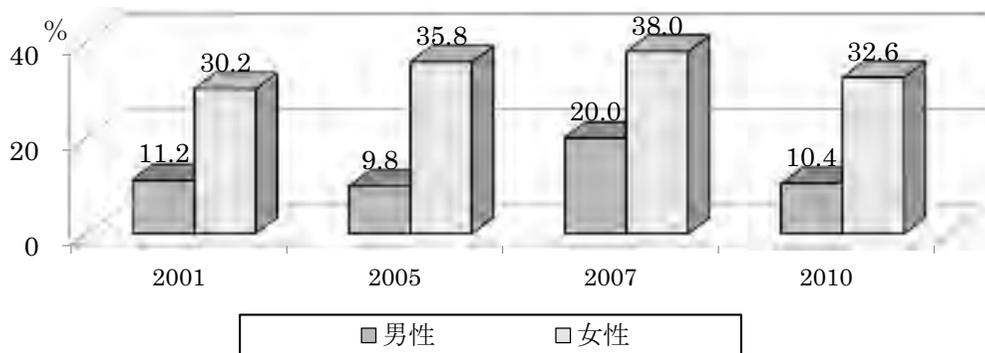
グラフ14 関心のあるホームページ② オカルト・超常現象



グラフ15 関心のあるホームページ③ 癒し



グラフ16 関心のあるホームページ④ UFO



グラフ17 関心のあるホームページ⑤ 占い

3. オウム真理教とカルト問題

オウム真理教事件は日本においてもカルト問題（またはカルト・セクト問題）についての議論を盛んにした。大学においても新入生に対するカルト問題への啓蒙を行うところもでてきた。しかし事件から時間が経過するとともに、オウム真理教、そして後継の団体であるアレフ、ひかりの輪に対する警戒も弱まる傾向にある⁹。

では学生たちはカルト問題をどのように認識し、またその必要性を感じているのであろうか。2010年と2012年には、「大学が主催して、新入生などを対象に「カルト対策」の教育をすることについてどう思いますか」という質問をし、次の5つの選択肢を設けた。

1. ぜひやるべきである
2. やったほうがいい
3. あまりやらなくてもいい
4. やるべきではない
5. 「カルト対策」というのが何のことかわからない

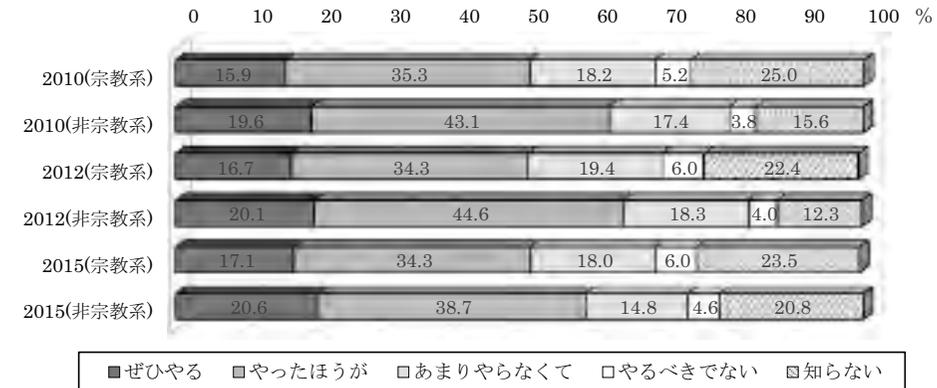
これについては宗教系か非宗教系かで異なる可能性が高いのでこれを比較してみる。グラフ18で分かるように、2010年、2012年そして2015年とも、明らかに非宗教系大学の学生の方がカルト対策について肯定的である。またカルト対策というのが何のことかわからないという回答の場合、2010年と2012年は宗教系の方が非宗教系よりも10%ほど高い。宗教系の大学の方がカルト対策には消極的という解釈もありうるが、むろんこれだけでは即断できない。

宗教系の大学であるからといってとくに宗教について詳しく教育するとは限らないので、宗教系の高校を卒業したかそうでないかで見してみる。宗教系の高校を卒業した回答者（以下「宗教系高校」）であると、通常週に一回程度は宗教もしくはそれに類する授業を設けている¹⁰。したがってカルト対策的な意識は一般的に大学よりも高い可能性がある。グラフ19に結果を示したが、2010年、2012年そして2015年も、宗教系の高校を卒業した回答者の方が、そうでない回答者（以下「非宗教系高校」）よりもカルト対策には肯定的であることが分かる。つまり大学が宗教系かどうかと卒業した高校が宗教系かどうかの二つの区分法で比較してみると、逆の結果になっている。大学では宗教系の方がカルト対策の必要性を感じる割合が低い、卒業した高校で見ると、宗教系の方がカルト対策の必要性を感じる割合が高いということである。

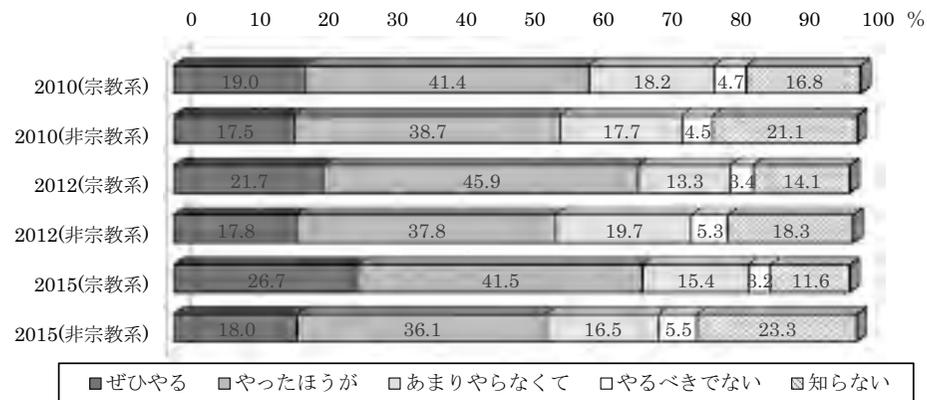
またカルト対策の意味が分からない回答者も2010年と2012年では4%少々少ない。2015年には倍ほどの開きがある。つまり知識もあるということである。3回にわたる調査において同じような傾向になっている。しかも、カルト対策の意味が分からないと言う人の割合は、宗教系高校では知らない割合が2010年から2015年にかけてしだいに減っているのに対し、非宗教系高校の場合は2015年にむしろ増えている。またカルト対策を「ぜひやるべきである」と回答する割合が、宗教系高校ではしだいに増えているのに、非宗教系高校では5年間でほとんど変化がない。これらのことから、カルト問題に関しては宗教系の高校での授業の影響が及んでいる可能性があると考えられる。

では男女別で比較してみるとどうであろうか。グラフ20で分かるように、男性の方がカルト対策にはやや肯定的である。5～6割が「ぜひやるべき」または「やったほうがいい」と肯定的である。ただし、2010年でも2割ほどは「カルト対策」というのが何のことかわからな

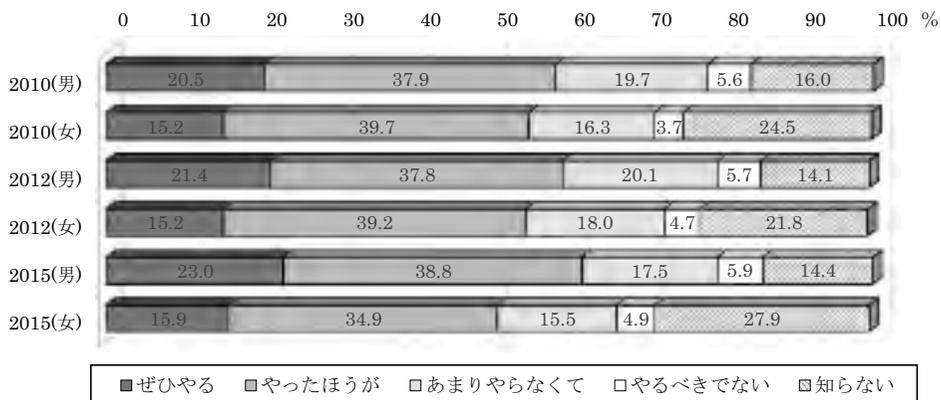
いと答えているので、それを除外してみると、意味が分かっている人だけで計算すると、肯定的な割合は71%程度になる。同様に2012年では69%程度である。つまり7割ほどは大学での新入生に対するカルト対策に肯定的であると解釈できる。カルト対策ということの意味が分からないということは、カルトという言葉を知らないというふうに理解できる。女性の方がカルトという言葉についての知識が乏しい理由はこの調査では知りえないが、宗教系の高校を卒業した回答者でみても、やはり女性の方がカルト対策の意味が分からない割合が高い。



グラフ18 カルト対策の必要性（宗教系と非宗教系）

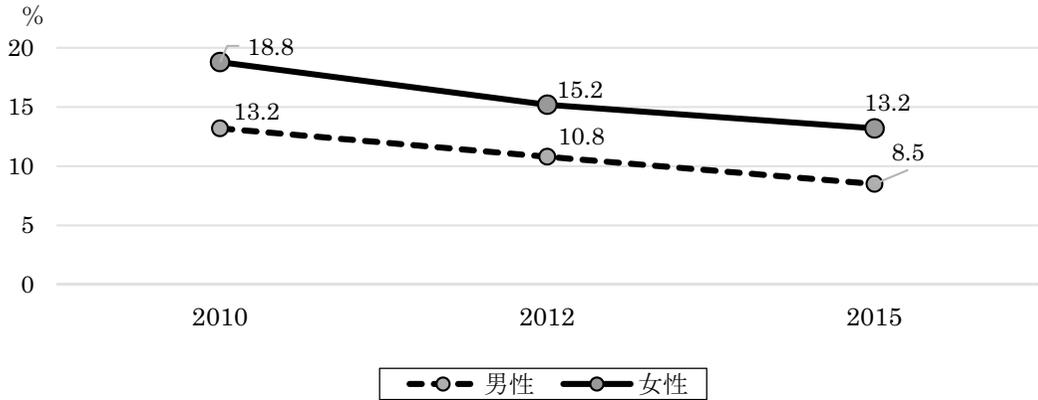


グラフ19 カルト対策の必要性（宗教系高校と非宗教系高校）

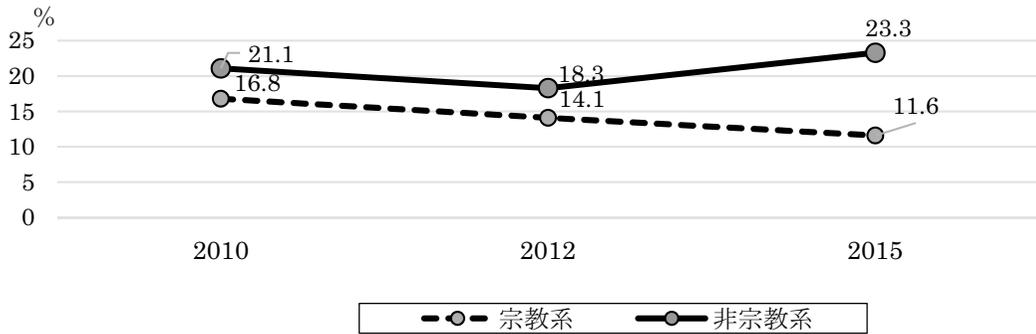


グラフ20 カルト対策の必要性（男女別）

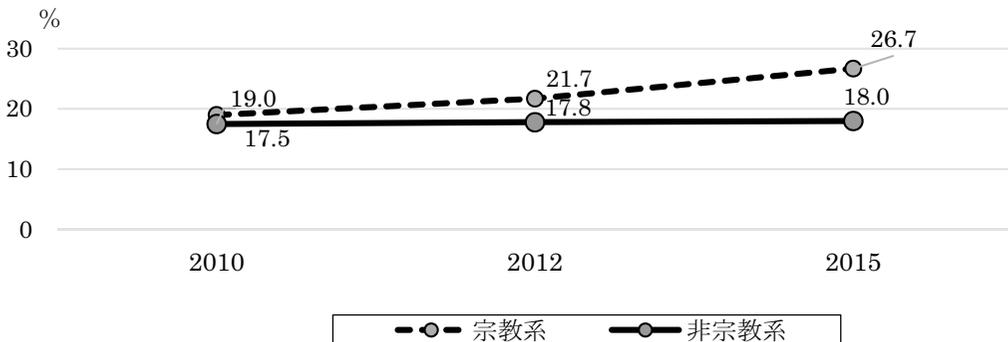
宗教系の高校を卒業した回答者の傾向で興味深いのは、意味が分からない人の割合の性別による違いと、変化である（グラフ 21～23 参照）。2010 年、2012 年、2015 年の 3 回の調査ともカルトの意味が分からないと思われる割合は女性が男性の約 1.5 倍である。また年とともにその割合は減少している。メディアの影響は全体の回答結果に反映しているはずで、次第に知らない人が減少しているところにあると考えられる。男女差が同じような比であられるのは、やはりカルト的な事柄への関心の差を反映している可能性が強い。



グラフ21 宗教系高校卒業者でカルトの語を知らない割合



グラフ22 カルトの語を知らない割合（卒業した高校の宗教・非宗教系別）

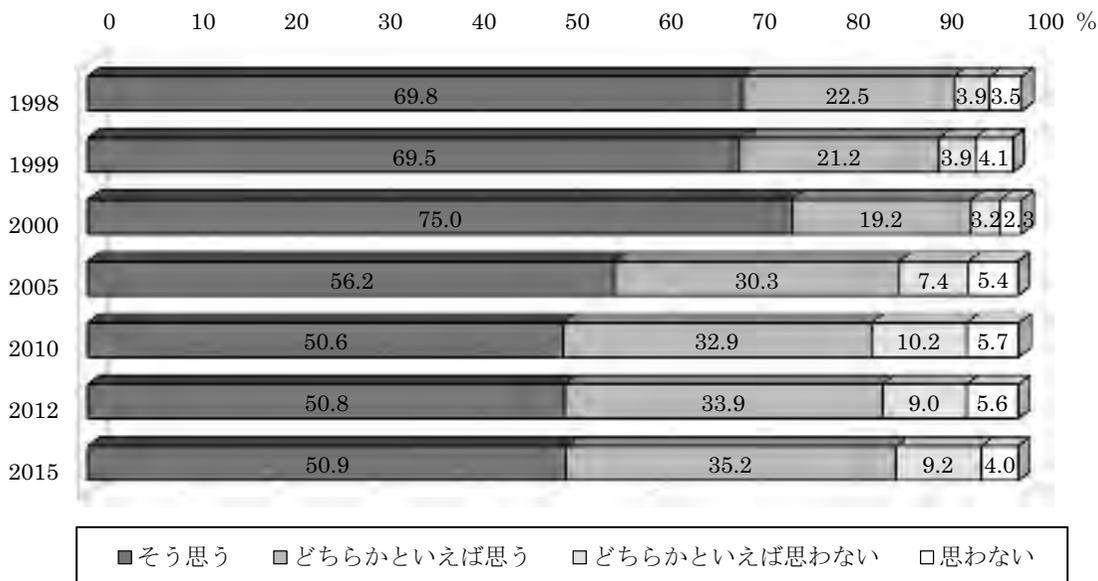


グラフ23 カルト教育を「ぜひやるべき」の割合（卒業した高校の宗教・非宗教系別）

カルトという言葉を知らない割合は、宗教系高校でしだいに減少する傾向にあるのに、非宗教系高校では減少せず、2015年は2010年より多い。カルト教育をぜひやるべきと考える割合も、宗教系は増加傾向にあるのに対し、非宗教系ではほとんど変わらない。この結果は宗教系高校の方がカルト問題についての教育を意識している可能性を示唆する。

カルト対策についての意見を聞くのとは別に、宗教トラブルについての相談に関する質問を1997年から2010年までの間に7回にわたって設けている。それは「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ」と思うかどうかである。これはカルト対策よりもう少し広く宗教問題一般についての相談窓口の必要性を感じているかどうかを尋ねたのである。この質問に対する回答の結果は、いずれの年においても宗教系か非宗教系では1～2%程度の違いしかなく、性別による違いもさほど大きくないので、全体の数値のみを記す。なお1997年だけはこの意見に同意できるかどうかという形で質問しているが、1998年以降は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4つの選択肢から選ぶ形式にした。

1997年では77.7%がこの意見に同意であると答えている。1998年から2015年に至る結果はグラフ24のとおりである。1998～2000年は「70%前後が「そう思う」と回答しているが、2005年は56.2%にまで減って、2010年代は約50%である。ただし、「どちらかといえばそう思う」までを入れると、いずれも2005年以後も8割以上であり、ある程度の要性は感じていると理解できる。しかし2005年以降「そう思う」が2割ほど減ったことの意味は少し考えおく必要がある。



グラフ24 公的な相談窓口の必要性

公的な窓口に関する質問の結果とカルト対策についての質問の結果を比較してみる。両者は関連性が深いと考えられるからである。2010年以降の3つの調査では公的な相談窓口が必要と思う人が約5割で、大学でカルト対策を「ぜひやるべき」または「やったほうがいい」と答えた割合もほぼ5割である。両者の相関はどうなっているであろうか。2010年、2012年、2015年におけるこの2つの回答結果をクロス集計したのが次の表である。分かりやすいように、それぞれの回答者数を記した。

これを見ると3回の調査とも、公的な相談の窓口が必要だと思い、かつ大学でのカルト対策はやった方がいいと答えた人の割合がもっとも高く、全体の約2割を占める。また公的な相談窓口の必要性について「そう思う」または「どちらかといえば思う」と答え、かつ大学におけるカルト対策を「ぜひやるべき」または「やったほうがいい」と答えた人は、3回ともほぼ5割であった。

2010年		大学でのカルト対策				
		ぜひやるべき	やったほうがいい	あまりやらなくていい	やるべきでない	知らない
公的窓口の必要性	そう思う (人)	532	910	284	103	345
	どちらかといえば思う (人)	163	570	310	44	326
	どちらかといえば思わない (人)	33	127	112	28	135
	思わない (人)	27	60	60	20	77

2012年		大学でのカルト対策				
		ぜひやるべき	やったほうがいい	あまりやらなくていい	やるべきでない	知らない
公的窓口の必要性	そう思う (人)	543	843	289	95	294
	どちらかといえば思う (人)	146	576	299	63	283
	どちらかといえば思わない (人)	27	115	118	14	89
	思わない (人)	22	37	65	36	67

2015年		大学でのカルト対策				
		ぜひやるべき	やったほうがいい	あまりやらなくていい	やるべきでない	知らない
公的窓口の必要性	そう思う (人)	777	1,110	361	158	515
	どちらかといえば思う (人)	241	778	381	85	530
	どちらかといえば思わない (人)	43	169	128	31	157
	思わない (人)	28	47	54	29	70

3回の調査を見るなら、公的窓口を設けた方がいいと答えた人と、カルト対策に肯定的な人との相関性は一定程度あることが分かる。1998～2005年はカルト対策について質問して

いないが、公的相談の窓口の必要性への回答結果から推測すると、もしカルト対策に関する質問項目を設けていたなら、2010年以降よりも割合は高かった可能性がある。つまりカルト対策が必要だと感じる割合は、オウム真理教事件から15年以上経った時点でやや少なくなったのではないかという推測が生じるのである。

むすび

オウム真理教事件が学生の宗教意識に与えた影響、オウム真理教への関心や意識が事件後どう変化したか、そしてオウム真理教事件がカルト問題に与えた影響について、20年間の調査結果から検討した。とりわけこの間のマスメディアの発する情報内容への関心の度合いに注目した。その際には事件直後から最近に至る情報ツールの変化にも着眼した。

分析の結果、第一に注目すべきは、メディアではあまり報じられることがなくなったものの、オウム真理教に対する学生たちの関心は、事件直後とさほど変わらない程度に保たれているという点である¹¹。事件後20年が経過しても、関連する報道には目を向けている学生が多いということである。宗教に対する警戒心は事件から数年程度経つと、少し弱まる傾向があり、21世紀に入ってからからは信仰を持つ割合や宗教に関心を抱く割合は増加傾向にある。

したがってこのオウム真理教事件はカルト問題への関心をいくらか高めたと推測されるが、カルト問題をどの程度重要と考えるかは、高校や大学における学校側の姿勢にいくらか影響を受けていることが推測された。一般的には事件から10年が経過したくらいから、宗教がもたらす社会的問題に対する関心は、少し低下したことをうかがわせる結果となった。

言うまでもなく、学生たちがオウム真理教に関する情報として接するのはマスメディアの報道だけではない。21世紀に入ってからインターネットの急速な普及、情報ツールのモバイル化、各種のSNSの広がりといった情報環境の変化によって、オウム真理教についての情報へのアクセス手段や、その拡散の仕方も事件当時とは大きく変わってきている。現在はオウム真理教のビデオの一部は、YouTube、ニコニコ動画その他で見ることができるので、マスメディアの発する情報内容に依存しない形での情報収集が可能な環境の中に若い世代は置かれている。むろん裁判の報道などマスメディアがオウム真理教問題を扱うかどうかの影響は一定程度あると考えられるが、ウェブ上に存在する情報によって、ある程度のリアリティを持ってオウム真理教の事件に個人的にアクセスできるという点は、今後を考える上で留意しておくべき点である。

分析により明らかとなった男性の方が女性よりもオウム真理教に関心を抱く割合が高い点については、情報化とは別の視点から考えた方がいいと思われる。一連の意識調査の結果から、男子学生の方が女子学生よりもオカルトや超常現象に関心を持つ割合が高いことが分かったが、このこととの相関性を重視したい。オウム真理教は修行によって空中浮揚ができると喧伝した他、オカルト的な主張をいくつもしていたからである。陰謀論的なことも主張していた¹²。

オウム真理教はカルト問題では筆頭にあげられる対象であるが、カルト問題への意識は宗教系・非宗教系ではあまり違いがないものの、卒業した高校が宗教系か非宗教系かではある程度の違いがみられた。これは中等教育における宗教教育の影響を考える上での参考になるが、これを直ちに大学における宗教教育は影響を持たないという結論には導けない。というのも、この意識調査では、回答者は毎回1年生がもっとも多くおおむね4～5割程度を占める。調査は毎回4月～6月に実施されているので、1年生は入学してまもない時期に調査対

象者になっている。入学した大学の講義や教育方針の影響が比較的あらわれにくいと考えられる。学年別に比較すると、項目によっては1年生と4年生でいくぶん違いが出る質問項目もあるので、宗教系大学における宗教教育の影響については別の機会に分析したい。

ただし、回答者の在籍する大学の宗教系・非宗教系の別で、回答結果にはあまり差がなかった点については、宗教系といってもとくに現代宗教について講義をしたり、カルト対策をしているところは実は少ないということを指摘できる。また1年生の回答者が多いので、大学の講義の影響が出にくいということもある。これに対し高校の宗教系・非宗教系は項目によっては顕著な差がある。たいていの宗教系の学校では、週に1時間は「宗教」あるいはそれに類する授業を設けている。その授業を牧師・神父・修道女、僧侶が担当している場合もある。年中行事に宗教儀礼を組み込んで、宗教家が話をする機会を設けている例も少なくない。こうした宗教系の学校の姿勢の影響は一定程度及ぶという推測が可能である。

すでに地下鉄サリン事件から20年以上経ているので、オウム真理教（アレフ・ひかりの輪）という団体についての記憶、関心の変化というフレームだけで、オウム真理教事件がもたらした問題、あるいはさらに広くカルト問題一般を考えていくのは不十分である¹³。量的な面を重視した調査ではあるが、20年にわたるアンケート調査のうち、とりわけオウム真理教問題に関する部分を分析した結果からは、今後教育の場において宗教情報リテラシーの問題を扱うことの重要性を示している。

カルト問題だけでなく、グローバル化が進み、多様な宗教（ハイパー宗教など）が増加しているという現状を直視するなら、身の周りの宗教現象についてどのようなフレームでみていくべきかの教育はその重要性が増している。また若い世代はサブカルチャーに大きな関心を抱き、そこにあらわれる宗教的テーマにも自然と親しんでいく。超常現象やオカルトへの関心がそこで増幅されることもあり、それがカルト問題とつながる可能性を持つことは、オウム真理教が端的に示したと言える。

学生たちが依然としてオウム真理教関連の情報へ高い関心を持っているということが明らかなので、宗教情報リテラシーも宗教教育における一つの重要な課題となる。しかしながら、この点における現時点での大きな問題の一つは、教える側の方が急速に進む情報化に対応できていないことが多いということである。この点の改善も同時に考慮することが、宗教情報リテラシーを実質的に論じることにつながると考えられる。

註

- 1 2つのプロジェクトとも筆者が責任者であった。各調査の結果についてはすべて國學院大學日本文化研究所から報告書が刊行されている。また調査結果をもとにした論文も数多く刊行されている。これらについては以下のサイトを参照のこと。<http://www.kt.rim.or.jp/~n-inoue/index.files/jasrs.htm>
- 2 宗教教育プロジェクトにより1992年に「宗教教育に関するアンケート」が実施され、32の大学から4,005人の有効回答を得た。その結果は1993年に報告書として日本文化研究所より刊行された。詳細は『「宗教教育に関するアンケート」報告書』（國學院大學日本文化研究所 井上順孝、1993年）を参照のこと。この結果を分析したものとして、拙論「大学生の宗教意識—宗教教育に関するアンケート調査の分析から—」（『國學院大學日本文化研究所紀要』72、1993年）がある。
- 3 1993年に設立された「宗教と社会」学会にはプロジェクト制度が設けられたので、筆者が責任者になって宗教意識調査プロジェクトを承認してもらった。以後メンバーの入れ替わりはあったが、毎回ほぼ20～30名程度が中心になってアンケート調査の実施、報告書の作成などを行ってきた。2016年度の

報告書作成をもってプロジェクトは終了の予定である。

- 4 ライフスペースや類似の事件が起こった背景を論じたものに、藤田庄市『宗教事件の内側—精神を呪縛される人びと—』（岩波書店、2008年）がある。
 - 5 これに関しては調査項目やワーディングが数値の変化にかなり大きな影響をもたらすことを確認している。前述の1992年の日本文化研究所による宗教教育に関する調査では、「宗教についてのあなたの関心は、次のどれにあてはまりますか」という聞き方をした。このとき「特定の宗教を信じている」と答えたのは17.7%に上った。非宗教系でも11.2%と一割以上になった。地下鉄サリン事件前であり、テレビ等で霊能者番組が花盛りであった時期であるので、そのことがいくらか関係していると考えられる。霊能者を信じる割合も、本稿では言及しなかったが、1995年以降の調査結果と比べてかなり高かった。

また2008年には38の大学の学生を対象に宗教文化教育に関する意識調査を行い、5,005人の有効回答を得たが、その最後に回答者の宗教への関心について本稿で扱っている調査と同じ内容の質問項目を設けた。このときは「信仰を持っている」と回答した割合が全体で18.8%、非宗教系で13.7%であった。かなり高い数値となった。これは前半の質問内容が宗教や宗教文化が非常に身近な問題であることを導くようなものであったことが関係していると考えられる。また調査時期が新学期でなく、秋であったことも多少は関係していると考えられる。この調査結果は平成20年度 科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者 大正大学教授・星野英紀)による報告書『宗教文化教育に関する学生の意識調査報告書』(大正大学、國學院大學、大阪国際大学、神戸大学、2009年)として刊行されている。またその結果を分析したものとして拙論「学生における宗教文化教育への関心について—2008年度アンケート調査の分析から—」『國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報』第2号(2009年)を参照。
 - 6 サティアンの取り壊しに際しては、関係者の許可を得た上で、放棄寸前になっていた資料の一部を筆者らが収集した。またサティアン内部の様子を見ることもできた。このときに収集した資料、またその他の資料や研究成果に基づいて刊行されたのが、宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『情報時代のオウム真理教』(春秋社、2011年)である。
 - 7 以下のサイトを参照。<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/new/index.html>
 - 8 2005年と2007年には韓国でもほぼ同じ内容の調査を行った。対象とした大学数と有効回答数はそれぞれ10校1,243人、12校1,422人である。日本よりは少ないが、韓国でも男女差は明確であった。これをどこまで一般化できるかは難しいが、日本独特ではないということはこれだけでも明らかである。
 - 9 カルト問題を扱う宗教研究者のプロジェクト例として、「宗教と社会」学会の「カルト問題と社会秩序」プロジェクトが挙げられる。これは2004年から2007年まで実施され、代表者はそれ以前からカルト問題に関わってきた櫻井義秀である。櫻井義秀『カルト問題と公共性—裁判・メディア・宗教研究はどう報じたか—』(北海道大学出版会、2014年)参照。
 - 10 これについては少し前のデータになるが、次の2冊が参考になる。國學院大學日本文化研究所編『宗教教育資料集』(すずき出版、1993年)には、宗教系の学校でどのような宗教関連の講義があるかが一覧表の形式で掲載されている。また國學院大學日本文化研究所編『宗教と教育』(弘文堂、1997年)の巻末には、宗教系の学校の授業のテキスト、サブテキスト(視聴覚教材を含む)の一覧がある。いずれも宗教系と判断されるすべての学校に問い合わせをし、回答を得られたものが掲載されている。
 - 11 新宗教に対する関心の度合いを調べた他の調査結果と比べて、明らかに高い数値を示す。
 - 12 辻隆太郎『世界の陰謀論を読み解く』(講談社、2012年)、同「オウム真理教と陰謀論」(宗教情報リサーチセンター編前掲書所収)に具体例が紹介されている。
 - 13 宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『〈オウム真理教〉を検証する—そのウチとソトの境界線—』(春秋社、2015年)もこのような意識に基づいてなされた研究の1つである。
- 付記：本稿で扱った調査データの整理にあたっては、國學院大學大学院生の仲鉢史也君と西尾拓海君にお手伝いいただいた。データのチェックも細かく行ってもらった。篤く御礼を申し上げる。

上代における「事」という漢字と「コト」という倭語との間の 意味的な隔たりをめぐる

イグナシオ・キロス Ignacio Quirós

日本語には「コト」という語がある。また、中国の漢字としては「事」という字がある。現代語は、熟語など以外では、「コト」をひらがなで書く場合がほとんどだが、戦前には「事」と書くことが多かった。一方、文字として漢字しか存在しなかった上代まで遡れば、その語は、多くの場合「事」と記していた。より具体的には、たとえば『記紀』はすべて漢字で執筆されたため、記述には「事」という字がよく出現し、それは多くの場合は倭訓で「コト」と読まれる。しかし、その対応は果たして適切なものだろうか。確かに、現代語では、漢字の「事」自体が日本語化しているため、語と字の対応は完璧だが、上代語においては、「事」という字が現れるたびに、それが上代日本語の「コト」の意味を指す意図で書かれたのか、あるいは「漢文」（以下では便宜上、大ざっぱに、八世紀初頭ころ、またはそれ以前の古典中国語の正書法を指して「漢文」と表記することにする。引用符の代わりに〈漢文〉と表記する場合は、必ずしも正書法に従っていない古典中国語を指す）の「事」の意味や用法の必要上で書かれたのか、という疑問があるからである。その上、「漢文」の語法としては上代の文献における「事」は誤用になる場合もあるので、問題はさらに複雑になる。もちろん、上代でも現在でも、日本語と中国語とは全く違う言語であるため、漢字で日本語を表わすと、意味のズレが生じるのは当然なことで、「事」と「コト」の関連性はその現象の一例である。しかし、われわれ現代人は日本語を表現するために漢字はもともとはやむを得ない手段だったという事実を忘れがちで、「コト」と「事」の間の隔たりが見えにくくなっている。本稿では、上代の文献に現われる「事」という字が、「漢文」としては本来なかった意味で用いられた例と、また「漢文」としての語法に倣った例をいくつか挙げて、『記紀』などの理解には「事」という字のそれぞれのケースを注意深く検討する必要があることを示したい。

1. 「事」の文字としての意味や用法

『記紀』は、漢字で表記されており、「漢文」の構文を手本にして（特に『日本書紀』）、〈漢文〉で執筆されたものである。とはいえ、その〈漢文〉には和風の要素が混ざっており、そうした要素が『古事記』には「変態漢文」と呼ばれるまで多く、『日本書紀』は一応、正式な「漢文」で書かれたように見えるが、「和臭漢文」または「和化漢文」と考えられる箇所も多くある。それゆえ、『記紀』などにおいては、「事」という漢字が和風の意味や用法に引きずられた可能性もあるので、本来の意味、つまり「漢文」における意味を再確認する必要がある。無論、中国語においても、「事」という漢字は時代に応じた意味の変化もあっただろうから、ここではできるだけ『記紀』の編纂以前の意味も参照しながら、その当時の意味を中心として考えたい。漢字の語源学はわれわれの専門外だが、まず、できる範囲で「事」という字の基礎的な語源を理解することを試みたいと思う。

漢字の語源を理解するためには、専門的な辞書が必要である。今回は白川静氏の『字通』を典拠とした。この辞典によれば、漢字「史」・「使」・「事」が一系統の字だと述べられている。氏はその漢字の語系について以下のように説明する。

事 *dzhiə* は史・使 *shia* と声義に近く、もと一系の字。また士・仕 *dzhiə* は事と同声。祭事がのち政治的な意味をもつものとなり、そのことに従うものが士とされ、士の使えることを仕といった。国語の「まつり～まつりごと」という語義の展開は、漢字では史・使・事・士・仕という声義の関係の上に残されている¹。

このように、「事」は本来まつりの際に行う仕事を意味し、それはのちに政治的に従属する者として、人を働かせるという使役の意味に転じた。よって、氏は「事」の読みと意味(訓義)を以下のようにまとめる²。

- [1] まつり、そとのまつり、まつりごと。
- [2] まつりする、まつりにつかえる、つかえる、上につかえる。
- [3] まつること、つかえること、こと、ことがら。
- [4] できごと、異常なこと、重大なこと。
- [5] 俚と通じ、たてる、さす、さしはさむ。
- [6] 使と通じ、つかう。

この読みは古辞書でも記録されており、氏は平安時代の『類聚名義抄』の項目によって、「事」の古訓は「コト・ワザ・ツカフ・コトトス・ツカウマツル・サシハサム・アヅカル」と記されていることを示している。

このように、この漢字の主要な意味をまとめると、「まつりごと」、「つかえること」、「異常なできごと」などであることが分かる。しかし、上記の引用には、世の中にあったこと(事実)、すなわち日本語の「何々という事」の意味が見つからない。確かに、上記の [3] の「ことがら」も、[4] の「できごと」もあるが、上の説明に基づくなら、「事」はまつりごとやできごととして、時間にかかわるものであるということが明らかになる。一例として、そうした「事」と時間の関連性は中国の『禮記』には以下の文にうかがえる。

物有本末 事有終始 知所先後 則近道矣³。

読み：物(もの)に本末(ほんまつ)有(あ)り。事(こと)に終始(しゅうし)有(あ)り。先後(せんご)する所(ところ)を知(し)らば、即(すなは)ち道(みち)に近(ちか)し。

意味：物には本と末があり、事には始めと終わりがある。事物を經營するにあつて、何を先にし何をあとにするかを知れば、道に近づくことになる。

この例文における「事」は抽象的で、広い意味で使われており、その漢字は必ず時間の経過を含む概念を指すことを示唆する。また、具体的で、明らかに「つかえること」という意味で用いられた「事」にも、同様の制約が見られる。たとえば、同じ『禮記』には、孔子が

臣の道について語るところがあり、そこには「終事而退」という表現が用いられている。読み下しでは「事を終へて退く」となり、「終事」の意味は、以下のように「仕事が済む」である。

故君使其臣得志、則慎慮而從之、否則孰慮而從之、終事而退、臣之厚也⁴。

読み：故（ゆゑ）に君（きみ）其（そ）の臣（しん）を使（つか）ふに、志（こころざし）を得（う）れば即（すなは）ち慎慮（しんりょ）して之（これ）に従（したが）ひ、否（しから）ざれば即（すなは）ち孰慮（じゅくりょ）して之（これ）に従（したが）ひ、事（こと）を終（お）へて退（しりぞ）く。臣（しん）の厚（あつ）きなり。

意味：それゆえ、君が臣に出使を命じたときは、臣は自分の志に合っている、慎重に考慮してこれに従事する。自分の志に合わない命令であれば、つまびらかに考慮してこれに従事し、仕事がすめば引退する。これが臣たる者の厚い道である。

これらの文に見られるように、中国語の「事」には始めと終わりがあり、それゆえ時間性によるものであることがわかる。この時間性とのかわり、上代日本語の「コト」においても同じであるかどうか、また「コト」における「事実」という意味は「事」という字の誤用にならないかどうか、そうした問題は重要であり、考察すべきである。しかし、それらの問題に移る前に、まず「コト」と「事」の間のもっとも明らかで、大きな意味的な隔たりを検討しよう。

2. 上代の「コト」という語の意味と用法

構文上の機能という面で見れば、日本語の「コト」は上代以来、大きな変化はしていないといえる。それは主に、文章の中で、ある内容を代表する形式名詞になれる、ということである⁵。しかし、意味的には、現代語と極めて大きな意味的相違がある。それは、上代においては「コト」は「事（コト）」・「言（コト）」という二つの意味が重なった二義語である、ということである。確かに、「事」と「言」を本来別の二語と捉える見解もあるが、以前の拙論では、音韻学などに基づいて「二義語」という見方を支持した⁶。というより、その論文で論じたように、「コト」はたんに二義語というより、文脈によって「言」、「事」、「本質」（たとえば「～のミーコト」という神名などの場合）、「命令」（「ミーコトのまにまに」というような表現で）、「信」（「マーコトの至り」などの表現で）など、非常に多様な意味を含みうる多義語である⁷。しかし、ここではとりあえず便宜上、「コト」を「事」・「言」という意味が重なった二義語として考えていこう。そうした二義語として捉える研究者の中で、大野晋氏は以下のように述べている。

こと【言・事】 古代社会では口に出したコト（言）は、そのままコト（事実・事柄）を意味したし、また、コト（出来事・行為）は、そのままコト（言）として表現されると信じられていた。それで、言と事とは未分化で、両方ともコトという一つの単語で把握されていた⁸。

われわれは、コトにおける「事」と「言」の意味の重なりにかんして、上記の説明は一応納得できるものとする。ただし、大野氏が述べた「言と事の未分化」をいかに解釈したらよいかという点については、より精密な分析が必要と考える。未分化という説明に従えば、上代人は「言葉」と「事実」を同一のものと捉えていたという意味になりかねないが、われわれは、上代人の考え方や世界観がそこまで奇妙なものだったとは考えない。彼らは、「言葉」と「事実」を同一性という関係ではなく、その二つの間に、ある種の対応性、または「相通じる」という関係があると考えていた、といった方がより適切だろう。もちろん、対応性という見方をしても、それをどう捉えるか、ということに関してはさまざまな見解があり得る。その一つは「言霊論」という語で表現できるだろう。その論によると、何かの「言」を発言すれば、「言霊」の呪力によってその内容が「事」として実現するという。しかし、それは江戸時代以後の思想に引きずられたものであると思われ、われわれの研究は、「言」と「事」の関連の方向性は、実はむしろ逆であることを明らかにできたと考える。すなわち、「コト」は、ほとんどの場合は、以前に何らかの「事」があり、それを語る「言」が、その「事実」に内容的に完璧に一致するべきである、という意味を含んでいる。しかし、その関連性は本稿の主要な論点ではないので、ここでは、コトが二義語であり、その中には「言」と「事」という意味が共存しており、その間には一種の関連性がある、というおおざっぱな定義をしておきたい。そうした定義は以下の展開を理解するには十分なものになるとと思われる。

ここまでは上代語の「コト」という表現を何度も繰り返したが、実際は、上代の文献でその語が出現するほとんどの場合には、意味上の漢字で記されている。それらの書物を書いた人々は、歌謡のように万葉仮名で（たとえば「許登」などと）書いたとき以外は、「コト」という二義語を記さなければならない場合には、「事」・「言」などの中に、一つだけの漢字を選ばざるを得なかったのだろう。しかし、「事」や「言」などの選択肢の中から一つを選ぶ必要性は、「コト」の本来の意味の一部を切り捨てるような結果を招く。たとえば、『万葉集』2466番の原文には「事」の奇妙な用法が見られる。

原文：浅茅原 小野印 空事 何在云 公待⁹。

読み：浅茅原（あさぢはら）、小野（をの）に標（しめ）結（ゆ）ふ、空言（むなこと）を、いかなりと言ひて、君をし待たむ。

意味：浅茅原の 小野に標をするように 出まかせの嘘を どう言いつくろって あの方を待てばよいだろうか。

文脈上の解釈を記すなら、この詩を書いたとされる女性は、彼女と好きな男についての噂に上がったが、その噂が根も葉もないもので、ここでは「空事」と表現されている。なお、上代では標を結ぶことがその土地を占有するための行為だったというが、「浅茅原」は価値のない土地なので、その行為が愚かな、あるいは無意味なことを示す。ここではそれが枕詞として用いられており、作者が話題にしている噂は「浅茅原を占有しようとするほど愚かな噂」という意味になる。

さて、「空事（むなこと）」という語を手短かに考えてみよう。上記では「奇妙な用法」と述べたが、それは、「噂」とは本来、言葉の一種であるから、「空言」という用字が自然である

はずなのに、ここでは「事」という字が用いられている、ということである。「空言」という用字はM 3063 番の本文で見られるが、今の2466 番でも、またM 2755 番でも「空事」と書かれている。「言」と「事」の漢字の交換は何らの詩的表現の方法だったのかもしれない。あるいは、上に論じたように、「事」と「言」は、同じ「コト」という語の二つの側面として用いられているので、意味上でも漢字の交換が許される可能性があったのかもしれない。具体的にいうと、「むなごと」は噂という意味になるため、嘘の「言」ということを指しているが、同時に事実ではない「事」という意味も含まれている、という見方もあり得る。多義語の分析においては、「事」と「言」の両方を視野に入れた総合的な解釈を考慮することが必要だろう。

『記紀』の場合、特に『古事記』では、「コト」における上記のような二義語的な特徴が、より明白にうかがえる。たとえば、景行紀で、景行天皇の皇子である小碓命（ヲウスノミコト）が熊曾（クマソ）の兄弟との戦いに勝利して、弟の熊曾建（クマソタケル）を殺そうとしたところ、彼に次のように言われた。

原文：莫動其刀。僕有白言¹⁰。

読み：其の刀（たち）を動（うごか）すこと莫（なか）れ。僕（やつかれ）、白（まをす）言（こと）有り。

意味：その大刀を動かさないでください。私は、申し上げることがあります。

原文における「僕有白言」という語句は、上記の「新編日本古典文学全集」でも、そして「日本思想大系」¹¹でも「日本古典文学大系」¹²でも「僕、まをすことあり」と読み下されており、「コト」という語が構文の必要上で現れる。「思想大系」と「日本古典文学大系」の読み下しでは「白言」の二字に対して「まをす」と読んでいるが、「白」という漢字があるから、読み下しの「コト」は「言」に当たるといふ、上引の「新編日本古典文学全集」のような解釈も成り立つ。その上、同じ『古事記』には、もう一つ別の箇所でも非常に似た表現が現われている。それは雄略紀における三重の采女の歌謡を記述する場面である。その采女は、天皇に渡した酒の杯の中に、木の葉が一枚落ちたことに気づかずに、そのまま渡してしまった。天皇はその葉を見て激怒し、采女を殺そうとしたが、その時、彼女はこのように発言した。

原文：莫殺吾身。有應白事¹³。

読み：吾（あ）が身を殺すこと莫（なか）れ。白（まを）すべき事有り。

意味：私を殺さないでください。申し上げることがあります。

そして、その采女が歌謡のかたちで、倭の神代を歌い、雄略天皇に許された、という物語である。しかし、本稿の論点からみれば、その歌謡の内容よりも、彼女が歌う直前の発言が興味深い。その発言の読み下しに見られる「コト」は間違いなく原文の「有應白事」の中の「事」に当たる。前述の「僕有白言」と対比し、「べき」（應）という、この論点と関係のない要素を除けば、両方の原文は「話すことがある」という意味になる。こうして見ると、その意味は、『古事記』の漢文においては、「有白言」でも「有白事」でも表現できると思われ

る。しかし、両方とも正式な「漢文」としては誤用であり、また「事」と「言」という漢字の関連性は日本だけの特徴なので、「事」という文字の本来の意味としては無理な交換と考えざるを得ない。

また、一見正しく見えるのに、実は「漢文」としては有り得ないケースもある。前述の小碓命と熊曾建の戦いの続きの場面である。その場で負けた熊曾建は、刀を刺されたまま、小碓命に「ヤマトタケル」という新しい名を付ける。そして次の瞬間に小碓命に殺される。

原文：是事白訖、即如熟瓜振析而、殺也。故、自其時称御名、謂倭建命¹⁴。

読み：是の事を白し訖（をは）るに、即（すなは）ち熟瓜（ほぞち）の如く振（ふ）り析（さ）きて、殺しき。故、其の時より、御名を称（たた）へて、倭建命（ヤマトタケルノミコト）と謂（い）ふ。

意味：〔熊曾建が〕このことを申し終えると、〔小碓命が〕直ちに熟した瓜を切り裂くように斬り裂いて、熊曾建を殺した。それでその時から、お名前をたたえて、〔小碓命は〕倭建命というのである。

この話の原文では、「是事」という組み合わせが現れる。それは「漢文」として正しい用法であり、『墨子』、『史記』などの古代中国の文献でも見られる。しかし、古代中国語では「この祭事」、「このつかえること」、「この仕事」などの意味であるのに対して、上記の挿話では「この言葉」という意味になっており、日本以外にあり得ない用法になる。なお、原文の「白」（まをす）という次の漢字を付け加えると「是事白」という語句になるが、われわれはこの漢字の組み合わせを古代中国の文献の中で見つけられなかったし、「漢文」としてはあり得ないだろう。

まとめると、「何々のコトを言う」という意味の読み下しが見えるとき、その読み下しが由来した原文に「事」という字が用いられているならば、それは「漢文」の誤用であると言える。「言葉」という意味を含んでいる倭語の「コト」と、本来その意味をまったく含んでいない「事」という漢字とは、大きな意味合いの隔りがある。そのズレはあまりにも明白で、研究者にとっては言わずもがなのことだろうが、われわれとしてはここに簡単に指摘しておくべきだと考えた。

しかし、倭語の「コト」における「言」の側面を別にして、「事」の側面のみを考察しても、その漢字の「漢文」としての用法とは思いがけない相違点もある。現代語の「何々をすること」「何々ということ」の文の場合に、「こと」をひらがなで書いても、「事」という漢字を用いても、用字法以外には何も変わらないだろう。上記で述べたとおり、上代日本語でも「コト」という語は同様の機能、すなわち、ある内容を代表するというはたらき（形式名詞としてののはたらき）を有している。しかし、そうした「コト」すなわち「事実」という意味的側面だけの「コト」と、本来の漢字の「事」との間にも隔りがあることを示したい。

3. 「コト」における「事」の側面、時間性との関係、事実としての意味合い

上記の説明では、倭語の「コト」には、「事」という意味的側面があることを述べた。その側面と、「事」における、漢字としての本来の意味とは、同一であるか否かということを確認するために、まず「コト＝事」の正確な定義を挙げる必要がある。さまざまな定義があ

るが、その一つは『時代別国語大辞典』の上代編にある詳しくかつ明確なもので、ここにそれを取り上げたいと思う。この辞典では、「事」と「言」を二つの別々の語として位置づけており、二義を併せ持つ一語というより、本来別の二語と捉えていると想定できる。しかし、多義語としての「コト」における「事」と「言」の併存については、すでに論じ、以下では上代日本語の文献における「事」（事実）という問題に絞って考えたいので、この辞典の定義が「二義語」の立場に立っているか、あるいは「異義の二語」の立場に立っているか、という問題は、ここでは直接の論点とはかかわりない。その点には関係なく、この辞典の定義を引くことが許されるだろう。

こと【事】 ①こと。事柄。抽象的な観念を表したり、ある内容を代表する形式名詞で、ある実体を表すモノに対して用いられる形式名詞であるから連体修飾を受けて修飾句の内容を体言として固定するか、修飾をうけずに事柄全体を漠然と示す。②実質名詞として用いられて、行為・仕事・任務などの意味を表す。③一大事。事件。アリ・ナシとともに用いられる。④夫婦の契り。結婚の約束¹⁵。

本稿・第一節で述べたように、古代中国においては、「事」は「まつりごと」、「つかえること」という意味を有しているが、それはこの定義の②に当たる。上代日本の『記紀』（特に『日本書紀』）においては、「天之事」、「天下之事」、「神事」、「政事」という熟語が頻繁に出現しており、実際、それらの表現における「事」は本来の中国語の意味で用いられていると考えられる。③の定義も、漢字としての「異常なこと、重大なこと」という本来の意味と完全に一致し、その意味の用例は『古事記』でほとんど見られないが、『万葉集』でも『日本書紀』でも、「事しあらば」や「有事」などの語句が現れる（ただし、この③の定義には、実は微妙な問題点も残っており、それをのちに、本稿・第四節においてより詳しく論じるつもりである）。最後に、「結婚の約束」の④は、大野晋氏が『万葉集』M 3113 番を挙げて、倭語の「コト」の意味の一つとして位置づけている¹⁶。漢語の「事」にはその意味が見られないため、それは漢字と倭語の間のもう一つの相違点になるが、その意味は限られており、それほど重大ではないものなので、ここでは例外とする。

まとめると、④を例外にし、②と③は漢語の「事」の意の範囲に完璧に入ると考えられるので、その事例には何も意味的な隔たりがない。焦点となるのは①である。本節では「コト」における「ことがら」や「事実」という意味と、またそれにかかわる用法を吟味し、その側面で漢字の「事」と対比しよう。

本稿・第一節の用例で示したように、中国の「事」には「はじめ」と「終わり」があり、それゆえ、「事」は時間性と関わっている概念であると考えられる。「まつりごと」、「つかえること」、「できごと」という本来の意味は、行為の次元に属するものなので、始めと終わりがあることは明らかだろう。そうした時間とのかかわりは無論、倭語の「コト」にもある。たとえば、大野晋氏は「コトが時間的に推移し、進行して行く出来事や行為を指すのに対して、モノの指す対象は、時間的経過に伴う変化がない」と述べている¹⁷。確かに、「出来事」や「行為」という意味は、「コト」の主要な位置を占めるものであるため、その点については氏の説に同意する。しかし、倭語の「コト」の中の「事柄」や「事実」（上記の「コト」

の定義の①) という面に限定しても、その意味は必ず時間的に推移するものを指している、という一般化は果たして可能であろうか。そうした論点に関して、廣松渉氏は大野氏の説を取り上げて批判している。

問題にしたいのは「コト」に関してである。氏〔大野晋氏〕は時間的推移や時間的進行という契機に留目して、出来事や行為を挙示される。しかし、時間的推移の概念を含まない事態、例えば「海は広大である」「猫は鼠より強い」「牛には角がある」etc. etc. は「コト」ではないだろうか？ 氏がモノとの対比上、時間性に留目して出来事や行為を挙げられる際の含意は一応諒解することができる。だが、眼目をなすのは時間性ではないのではないか。出来事や行為は、それを明識しようとするとき、「何々が何々する」という文章態のかたちで意識せざるをえない。そこでは「何々する」という動作的契機において時間性が含まれる。とはいえ、眼目は、この時間性そのものではなく、「何々が何々する」という文章態に存するのではないか。そして、この文章態のゆえに、「海は広大である」「雪が白い」「牛には角がある」etc. は、時間性の概念を含まないにもかかわらず、「コト」なのではないか¹⁸。

廣松渉氏が述べたとおり、「雪が白い」のような内容を表わした「AはBである」という文は「コト」の一種である。そうした現象が現代語にあるということは論を俟たない。しかし、廣松氏が上代語か現代語か、いずれの「コト」を指しているかということは、上引の文章からは明らかではない。だが、実際、上代の文献でも、「AはBである」という命題が「コト」の先行詞となった用例も存在する。たとえば、M 4216 番はそうした種類の「コト」を含んでいる。

原文：世間之 无常事者 知良牟乎 情尽莫 大夫尔之氏¹⁹。

読み：世の中の 常なきことは、知るらむを 心尽くすな ますらをにして。

意味：世の中の はかないことは ご存じでしょうに 心をお痛めなさるな ますら
おの身で。

この歌では「世の中のはかないこと」という抽象的な内容が、「事」という漢字で表現されている。ここでは、上記・第2節のM 2466 番などとは異なり、この「事」は「言葉」の意味をまったく含んでいない。しかも、その抽象的な内容には、時間性という概念も含まれていないことが明白である。もちろん、「世の中の 常なき事は」という読みのゆえに、その背後にある意味としては「世の中が常なものでない」あるいは「世の中は変わるものだ」ということであり、そこには時間との関連性を持つ概念が入っているが、主語は「世の中」であって、それは本来コトではなく、モノに対応する概念である。したがって、「世の中は変わるものである」という「事」は不変的な「コト」になり、時間とは関係のない抽象的な事実を指していると考えられる。言い換えると、上代日本語の「コト」も、必ずしも時間的に推移する内容を指しているわけでないのである。

そうした観点から考えると、時間とのかかわりが「事」と「コト」の間の、もう一つの隔たりであるが、それはおそらくより大きな次元の問題に由来すると思われる。第一に、漢字

の「事」は「ことがら」「行為」「出来事」という意味も含まれているが、「事実」という意味は見つからないと述べた²⁰。確かに、上引の廣松氏の「海は広大である」「雪が白い」「牛には角がある」というような内容の「AはBである」という文は、多く相対的な内容が含まれたものであるため²¹、それを「事実」として認められるかどうかという問題は議論を呼ぶかもしれないが、いずれにしても、時間とのかかわりが無い内容なので、それらの文を「事」で受けることは「漢文」の表現としては明らかに誤用になると思われる。しかし、そうした文ではなく、ある行為の結果となった、つまり世の中に実際に起きたこととしての「事実」の場合には、「漢文」でその「事実」を「事」によって表現することは可能だろうか。それを確認するために、『古事記』の例を挙げよう。海の神の娘である豊玉毘売命（トヨタマヒメノミコト）は、天神の子孫の火遠命（ホヲリノミコト）に嫁ぎ、妊娠して、分娩の痛みが始まったとき、海岸に移動して、出産の準備を始めた。しかし、彼女は海が存在であるがゆえに、出産するときに必ず本性を現すという。彼女はその姿を見られないために、夫の火遠命に「出産中にわたしを見るな」と誓わせた。だが、火遠命は、その言動を怪しく思い、妻が慌てて建てた産室（うぶや）の隙間から、出産中の妻の本性的を見てしまう。

原文：爾豊玉毘売命、知其伺見之事、以為心恥、乃生置其御子而 […] ²²。

読み：爾（しか）くして豊玉毘売命（とよたまひめのみこと）、其の伺見（うかか）ひ見る事を知りて 心（こころ）恥（はづか）しと以為（おも）ひて、乃（すなは）ち其の御子（みこ）を生み置きて […]。

意味：そうして、豊玉毘売命は、火遠命が、覗き見たことを知って、心に恥ずかしく思い、すぐにその御子を産んでその場に置き……。

このように、豊玉毘売命は、見られたことを恥ずかしく思い、火遠命との間にできた子供を捨て置いて、父の海神の宮に帰った。その時、大地と海の境が永遠に閉ざされた。このように、火遠命の行為（見ること）は重大な結果を招いたことが明らかである。その行為は、完了した瞬間に後に戻らない「事」（事実）になり、その「事」は漢字として『古事記』の原文の「知其伺見之事」（垣間見られたことに気づいた）に現れる。

ここに、「後に戻らないこと」と言ったが、それは、「見られたこと」がもはや行為ではなく、永遠に世の中に「事」として記録され、化学の不可逆反応のように、必然的な結果をもたらす「コト」となったという意味である。内田賢徳氏はこの挿話について「つまり、〔豊玉毘売命が見られたということは〕コトではなく、事こそが修正不能の絶対性を帯びている」²³と論じている。内田氏の説では、「コト」は「言・事」の二つの意味で用いられており、「言」の状態ならばまだ修正が可能である、という考え方が前提にされている。この点に関しては、議論の余地があるだろうが、この挿話における「事」の「修正不能の絶対性」という点については、そのまま従うことができるとと思われる。一つの行為の結果として、ここに「事」が上代日本語に忠実にその内容を表現していると言える。

しかし、上代日本語の「事」は必ずしも世の中にすでにあった「事実」という意味をしているとは限らない。計画や予言の内容を説明する場合にも、「事」という字が用いられた例が見つかる。たとえば、同じ火遠命の挿話を少し遡ると、兄の火照命（ホデリノミコト）の鉤（つりばり）をなくした火遠命は、兄に迫られ、その鉤を必ず返すと約束して、海に潜っ

た、という場面がある。そのあと彼は、海の神と出会い、その娘の豊玉毘売命と結婚して、海で三年過ごしたが、ある日、以前の約束を思い出して、海の神に助けを求める。海の神にその鉤を見つけてもらい、彼はそれを兄に返すために国に帰ろうとするが、その前に海の神に、鉤を返す時にある呪術を行えば、兄が貧しくなる結果になるだろう、と言われ、その呪術を教わる。さらに、海の神は、貧しくなった兄は彼を攻めるだろう、と予言し、それに備えてこのようにするとよい、と教えた。その一部（漢字「事」が出現する箇所）は以下の原文にある。

原文：若悵怨其為然之事而、攻戰者、出塩盈珠而溺²⁴。

読み：若し其の然為（しかす）る事を悵怨（うら）みて、攻め戦はば、塩盈珠（しほみちのたま）を出（い）だして溺（おぼほ）せよ。

意味：もしもそうしたことを恨んで戦を仕掛けてきたら、塩盈珠（しほみちの球）を取り出して溺れさせなさい。

原文の「其為然之事」における「事」は「呪術を行ったこと」という意味だが、この場合、その字は、世の中にすでにあった「事実」ではなく、いまだ予測に過ぎないことであって、修正不能なことを指してはいない。恐らく上代日本語の「コト」における「事」の側面でも、長い日常的使用の中で、実際の「事実」という意味が徐々に抽象化され、このような用法も可能になった、と想定できる。いずれにしても、上代語では「見られたこと」と「もしこれを行ったことで……」のような「コト」は、現代語の「何々すること」「何々ということ」という構文における、ある内容を名詞化するために必要な体言としての「コト」、いわゆる形式名詞としての「コト」とほとんど同じものだと思われる。それはおそらく上代以来の「コト」という語の、根本的な機能の一つだったと考えられるだろう。

とはいえ、「漢文」では、ある内容を受ける（「何々する事」という上代以来の日本語のように）ために、形式名詞として「事」という字を用いることはあり得ないので、上記の用例はどれも「漢文」としては誤用である。たとえば豊玉毘売命の「見られたこと」という語句を「見之事」という漢文で表現しようとしても、「見られたこと」という意味にはならない。また、海の神が火遠命のために立てた計画の中の「呪術を行ったこと」という語句を「為然之事」と書くことも、正しい「漢文」ではない。確かに「漢文」の「事」には、「行為」という意味が含まれるが、行為が行われた結果、つまり「事実」（実際にすでにあったかどうかを別にして）という意味が含まれているとは考えられない。また万一その意味があったとしても、「事」という字に、ある内容を受けて名詞化する、という機能を与える「漢文」の用法はあり得ない。『古事記』で頻繁に見られるこうした用法は、「何々すること」という日本語に引きずられた誤用と考えるべきである。

『古事記』は、日本語の音などをなるべく保とうとする意図があり、「変態漢文」で書かれているため、上記のような誤用が多く現われる。それに対して、『日本書紀』の〈漢文〉においては「何々すること」という日本語に引きずられた、明らかな誤用は見られない。もちろん、『日本書紀』全体の〈漢文〉における誤用と奇用は、森博達氏が示したように少なくないが²⁵、『日本書紀』の中の「事」の用例に関していえば、われわれが見つめることができたのは、誤用というより、一種の奇用である。つまり漢文の「誤用」とは言えないが、「漢

文」としてはやや違和感を感じさせるような、珍しい用法である。その奇用には漢文の上では違和感があるとはいえ、意味上では中国の「事」とは隔たりがないと言える。

『日本書記』における「事」の奇用にさえ、その字の本来の意味が保たれているなら、テキスト全体にわたった「事」を含めた、すべての例文も同様である、という大胆な一般化は可能であろうか。『日本書記』における「事」を含んだ例文はおびただしいが、われわれが知っている限りでは、そうした一般化は（もちろん神名や人名などのような、はじめから倭語である場合は別とすれば）ほぼ筋が通ると思われる²⁶。おそらく例外があるかもしれないが、もし『日本書記』における「事」（一語の場合でも、熟語の場合も）の例文を和訳せずに、漢字のまま、〈漢文〉として読めば、意味が問題なく通じるだけでなく、「事」という字が本来の意味から大きくは離れないと考えられる。それは、『日本書記』が、「漢文」で書こうとしたテキストであることを考慮すれば、別段不思議なことではないだろう。

だとすると、本稿には『日本書記』を検討する必要がないのではないかと考えられるが、実は、以下はわれわれの仮説であるが、そこにも「事」と「コト」のズレが見られる。もちろん、『古事記』のように、「事」という字が日本語的な意味に引きずられた、という現象は、『日本書記』の原文にはほとんど見られないが、原文に後から付けられた倭訓に、逆の方向の現象がうかがえると考えるのである。一言で言うなら、以下に見る例文では、本来の意味から離れてしまった「犠牲者」があるとすれば、それは漢字「事」ではなく、その漢字の訓読に当てられた「コト」という倭語である。それを具体的に吟味しよう。

4. 『日本書記』の読み下しにおける「コト」の「意味的拡張」

前節の冒頭には『時代別国語大辞典』の上代編の「コト〈事〉」の事項を取り上げたが、その中の③の定義に関しては、微妙な問題点が残っているため、後に論じると述べた。その③の定義によれば、日本語の「コト」は「一大事。事件。アリ・ナシとともに用いられる」という意味であるという。前節では、そうした意味は、本稿の第一節における「事」という漢字の本来の意味の一つ、すなわち、白川静氏の『字通』にある「できごと、異常なこと、重大なこと」という意味と完全に一致する、と述べておいた。詳しく論じる前に、『日本書記』の中の、そうした意味の用法の一例を挙げよう。崇神紀には、倭迹迹日百襲姫命（ヤマトトビモモソビメノミコト）という、崇神天皇の姑（おば）が登場する。佐々木隆氏が適切に描写するように、神にきわめて近い巫女的な存在として天皇を守り助けた女性である²⁷。彼女の事蹟を語るある場面で、彼女は謀反のたくらみがあることを察知し、それを天皇に知らせたが、話を終わる間にその危険を孕んだ事態に関して天皇に次のように警告した。

原文：是以、知有事焉。非早図必後之²⁸。

読み：是（ここ）を以ちて、事（こと）有（あ）らむと知りぬ。早（すむやけ）く図（はか）るに非（あら）ずは、必ず後（おく）れなむ。

意味：これによって、事が起こるのを察知しました。速やかに対処しなくては、きっと手遅れになるでしょう。

このように、上の文における「事」が指しているのは、何か重大で、厄介なコトで、ここではすなわち反乱ということである。その反乱は実際に起きたが、姑の忠告のおかげで天皇

はこの「有事」に対して臨機応変に行動し、最終的に救われた。

この意味の「有事」は『日本書記』にはよく見られる。もう一つの例は、雄略紀の冒頭に見られる。その物語によれば、若い眉輪（マユワ）の王は安康天皇を殺し、逃げて圓（ツブラ）の大臣の家に隠れた。即位前の雄略は彼を追って、圓大臣の家に着き、大臣に眉輪王が彼の家に隠れたかどうかを尋ねる。それに対し、圓大臣は次のように答える。

原文：蓋聞、人臣有事、逃入王室。未見君王隱匿臣舍²⁹。

読み：蓋（けだし）聞（き）く、人臣（きみのやつこ）事（こと）有（あ）るときは、逃（のが）れて王室（きみのみや）に入（い）るといふことを。未（いま）だ見（み）ず、君王（きみ）、臣（やつこ）が舍（や）に隱匿（かく）するという

意味：けだし、大臣は、有事の際に王室に逃げ込むと聞いていますが、君王が臣の家に隠れるのをまだ見たことはありません。

これらの挿話の原文を見れば、「事」は「有事」という熟語の構成部分であることがわかる。現代日本語にも「有事法制」などにその熟語があるので、二番目の例に付された小島憲之校注本の現代語訳の「有事の際に」という表現は問題なく通じる。無論、その熟語は中国語から来たもので、中国の古典には頻繁に見られる。それは「重大な、（よくない）事がある」という意味である。たとえば、中国の戦国時代の『商子』には次の文を読むことができる。

原文：國有事、則學民惡法、商民善化、技藝之民不用、故其國易破也³⁰。

読み：国に事あらば、学民（がくみん）は法を悪（にく）み、商民は善く化し、技芸の民は用ひられず。故にその国破れ易きなり。

意味：国家有事の際に、学問を身につけた人民は、法律に反対し、商業に従事する人民は、もうけるためにうまく立ちまわり、工芸にたずさわる人民は農事と戦争との役に立たない。故にその国は破れやすいのである。

この文における「有事」は、些細なことではなく、国が破れる恐れがあるほど重大な事態を指している。上の例文がよく示すように、中国語の「事」は本来「重大な、異常なできごと」という意味を含んでおり、それゆえ「有事」が「重大なコトがある」という意味を持つのは当然である。このように考えれば、中国語の構文で書かれた『日本書記』の、上記の二例における「有事」はそのまま中国語の意味で理解すべきである。それに付された倭訓では、「ことあらむ」または「ことある」という読みになるが、それを純粹に日本語の「コト」として理解すると、そこに「重大」という意味的要素を読み取ることには、やや違和感があるように感じられる。言いかえると、漢字の「事」にそうした意味があるからといって、倭語の「コト」にも本来それがあったのか、という疑問の余地がある。

この点については、方法論上、断わっておかなければならないことがある。というのは、ある語の根源を遡って追究していくと、たとえば「コト」の場合には、「本来のコト」あるいは「コトという語の本質的意味」というような表現を用い、その語を本質化しがちになる、ということである。そのような理想化した概念を追うよりも、「ある時代のコト」を分析し、

理解することの方が、方法論的な一貫性を保つことができる。したがって、ここでは、『記紀』、『万葉集』の執筆以前のコトを述べようとする場合には、「本来のコト」ではなく、「八世紀以前のコト」という、漠然とした表現を用いたい。もちろん、八世紀以前には日本語の文献が存在しないので、そうしたコトの意味を探究することには根本的な困難がある。しかし、この問題を可能な限り解明すべく、八世紀の、それぞれのテキストの書き方の間にある相違などに基づいて、一つの仮説を立ててみたいと思う。

実は上記の『時代別国語大辞典』の上代編の「コト〈事〉」の事項の中の③の定義をあらためて見直すと、「コト〈事〉」は「アリ」または「ナシ」とともに用いられた場合には、「重大なこと」という意味になる、と述べられていたことが確認できる。実際、「アリ」との組み合わせは『万葉集』にも見られる。一例として、M 506 を挙げよう。

原文：吾背子波 物莫念 事之有者 火尔毛水尔母 吾莫七国³¹。

読み：我（わ）が背子（せこ）は 物な思ひそ 事しあらば 火にも水にも 我（あ）がなげなくに。

意味：あなたそんなに 思い悩まないでください いざとなれば 火の中水の中に だって わたしはいとわずお傍におりましょう。

ここには、「事しあらば」という特殊な表現が用いられており、それは「コト」と「ある」とを組み合わせたものである（意味的には、現代語における「もしものことがあったら」という表現と近いだろう）。ただ、その「コト」は、一体どういうわけで、一見、中立的意味しか持たないと思われる「アリ」や「ナシ」という語と組み合わせられると、「重大」という特殊なニュアンスを持つようになるのだろうか。われわれの仮説は、「コト」という倭語は、八世紀以前に行われ続けていた、中国と日本の文化的（特に文学的）交流によって、一種の「意味的拡張」（semantic inflation）を起こしていたのではなかろうか、ということである。その拡張は、おそらく「重大」、「異常」という意味を含んだ「有事」や「無事」などの中国語に由来しているものであろう。なぜなら、「事しあらば」という日本語は、漢字にすると「有事」になるからである。もちろん、『万葉集』は、日本語で、その音韻に従って書かれたものであるが、八世紀のM 506の「事しあらば」という表現における「コト」は、明らかにそうした中国語的な意味に引きずられていたと考えられる。

実際、大野晋氏が指摘しているように、同じ漢字文化圏に属している韓国などと異なり、日本人は漢文を読むとき、漢字一字一字にヤマトコトバ的な「よみ方」を与える、という工夫をしていた³²。したがって、おそらくは日本語は、漢字文化圏の他の国々よりも、上記のような、漢字からの「意味的拡張」現象を起こしやすい言語なのではないか、と思える。たとえば、中国古典に「有事」という熟語が出現するたびに、文脈によってそれを「ことあらむ」、「ことある」、「ことしあらば」などと読み、また「無事」や「大事」などの場合も同様の傾向があったらうから、そうした慣習の結果、「コト」は、本来なかつたであろう「重大」「異常」という、中国の「事」の意味を徐々に吸収してきたと考えられる。決定的な証拠ではないが、より古い文章で書かれたといえる『古事記』では、「有事」、「無事」、「大事³³」という熟語は一例も見当たらないし、修飾をする語（「急」や「異」など）を伴わなければ、その特殊な意味の「コト」の用例は見つからない³⁴。このように考えれば、八世紀以前のあ

る時代の「コト」は、おそらく「重大」「異常」といった意味を含んでいなかっただろう、という仮説も成り立つと考えるのである。

まとめ

以上、本稿では漢字の「事」と上代の倭語の「コト」の間にある意味の隔たりについて論じた。上代の文献に見られるように、長い日常的使用で、漢字の「事」は「コト」の意味に影響を受けてきたが、同時にその逆の現象もあった。前者の例が見られる文献としては『古事記』と『万葉集』が挙げられる。そこに出現する「空事（でまかせな噂）」や「有白事（申し上げることがあります）」という表現が示すように、「事」という漢字は「言」の意味で用いられている場合があるが、そうした交換は中国語の意味上ではあり得ない。また、『古事記』の「見之事（見られたこと）」のような用例では、「事」は形式名詞としての、「事実（何々するコト）」という、「漢文」としてあり得ないはたらきをしている。八世紀までさかのぼっても、「事」という漢字はすでに色濃く日本語化されていたと言える。

後者の場合は逆に、「コト」という倭語が、中国の古典の倭訓による影響で、中国語における「事」の意味の影響を受けていたと思われる。『万葉集』の「事しあらば」、あるいは『日本書記』における「有事」などの「ことあらむ」「ことある」という倭訓のために、「コト」は、「事」という漢字が含んでいた「重大」、「異常」の意味を吸収して「意味的拡張」現象を起こしていたと考えられる。

こうした「事」と「コト」の緊張関係は、言うまでもなく日本側のみにあったものである。当時の中国語にも、または中国側における「事」という漢字の使用にも、「コト」という倭語から何らかの影響を受けたことは考えられない。本稿が示した意味的影響や意味的拡張の現象は日本という文脈に限られている（ただし、朝鮮半島やヴェトナムのような、他の漢字文化圏の問題は、別に考えなければならないだろう。筆者の能力を超えるので、ここでは疑問を提起するだけに止めたい）。そうした意味で言うと、たとえば、もし当時の中国人が『古事記』を読んだとしたら、「事」という字を目にするときは意味が通じなかっただろう。なぜなら、「言葉」または「何々するコト」という、中国の漢字の「事」にはあり得ない意味で用いられている場合がほとんどだからである。逆に、『日本書記』の場合は、その中国人は、構文に関してところどころおそらく首を傾げたかもしれないが³⁵、テキストにおける、個々の「事」の用例は一般的に中国的意味と一致しているので、意味が通じただろう。

したがって、要約するなら、『古事記』を読むときは、「事」という漢字は、倭語の「コト」の意味で捉えたほうが、筋が通る可能性が高くなると言える。なぜなら、「まつりごと」や「つかえること」という意味の少数の例を除き、ほぼすべての用例では、「コト」の代表的な意味、すなわち「言葉」あるいは「事実（何々するコト）」という意味で用いられていると考えられるからである。それに対して、『日本書記』を読む場合は、中国的な意味の「まつりごと」や「つかえること」あるいは「重大なできごと」などと理解した方が正しい場合が多いと思われる。『万葉集』については、「重大なできごと」という意味をしている例も見られるので、「事」の解釈を一般化することはできないテキストであると考えべきだろう。

最後に、ここでは触れられなかったが、八世紀以前の日本語の「コト」には、漢字「事」における「まつりごと」や「つかえること」という意味が含まれていたかどうか、という問題がある。古い多義語「コト」（事・言など）では、おそらくそうした意味は存在しなかつ

ただろうと思われる。であるとすれば、それもまた、中国語の「事」の影響による「意味的拡張」の一つと考えられるだろう。『日本書紀』では、すでに述べたように、そうした意味での用例が多く見られるが、『古事記』では非常に少ないようである（せいぜい一、二例しか見つけられない）。もしそうであるなら、『古事記』では、（これも前述のように）「急」や「異」などを伴った場合に、「コト」が「重大なできごと」という意味を持つこともあるから、「コト＝重大な出来事」と「コト＝まつりごと、つかえること」という二つの「意味的拡張」は、ほぼ同時代的に起きたのかもしれない。しかし、今のところ、それに関する文献的な根拠を示すことができないため、将来の研究の目的の一つにしたい。こうした問題が示唆するように、上代における中国語の単語「事」と日本語の「コト」の意味的な緊張関係に関しては、まだ吟味すべき問題が相当残っていると思われる。

注

- 1 白川静『字通』平凡社、1998年、682頁。
- 2 白川氏が示す「事」の字形と意味は、この字の「会意」に基づいたものである。同上参照。
- 3 市原亨吉等著『禮記』（全釈漢文大系、第14巻）、集英社、1979年、431～435頁。なお、以下に用いる中国古典の読み下し及び現代語訳は、それらに対応した原文における注が指示するシリーズと同一している（本稿では、そのシリーズは主に「全釈漢文大系」と「中国古典新書」である）。
- 4 同上、312～313頁。
- 5 この機能は重要な点であり、後に詳しく考えることにする。
- 6 周知のように、上代語の母音には甲・乙の二種類がある。「コト」は、「事」の意味でも「言」の意味でも、二つの母音が乙音（*ö*）である。この音韻の共通性も、これら二つの意味の「コト」が本来同じ語であったこと（二義語、または多義語説）を示唆している。「コト」（事）と「コト」（言）が本来は別の語だったと主張する研究者の中には、「コト」（言）は、動詞「カタル」（語る）の語幹から派生したと考える説もあるが（Roy A. Miller, "The spirit of the Japanese language," *Journal of Japanese Studies*, vol. 3, issue 2, 1977, p. 262～265）、「カタル」の語幹の音韻は甲音なので、この説の根拠は薄いと考えられる。詳しくは拙論「Sens et fonctions de la notion de « koto » dans le Japon archaïque」（上代日本における「コト」概念の意味と機能、博士論文）パリ、高等研究院（EPHE）、パリ、2016年、76～79頁。
- 7 多義語とは、現代語の文脈では複数の語によって表わされる意味を含むが、ある時点ではそれら複数の意味が一語によって表現されたと仮定できる、ということを含意している。八世紀の時点では、漢字の使用のために、意味はすでに別れる傾向にあり、それらが、たとえば「事」「言」などの漢字によって表わされていた、と言えるだろう。詳しくは、同上論文、461～466頁。
- 8 大野晋『岩波古語辞典』岩波書店、1982年、499頁。
- 9 小島憲之・木下正俊等校注『万葉集』（新編日本古典文学全集、第8巻）、小学館、1994年、194頁。なお、以下に用いる現代語訳は、原則として小学館刊のシリーズ「新日本古典文学全集」に載せられたものによる。
- 10 山口佳紀、神野志隆光校注『古事記』（新編日本古典文学全集、第1巻）、小学館、1997年、218～220頁。
- 11 青木和夫・石母田正等校注『古事記』（日本思想大系、第1巻）、岩波書店、1982年、176～178頁。
- 12 倉野憲司校注『古事記・祝詞』（日本古典文学大系、第1巻）、岩波書店、1958年、208～209頁。
- 13 山口佳紀、神野志隆光校注『古事記』（前掲、注10）、350～351頁。
- 14 同上、220～221頁。
- 15 上代語辞典編修委員会編著『時代別国語大辞典（上代編）』三省堂、2002年、297頁。
- 16 大野晋著『日本語をさかのぼる』（岩波新書）、岩波書店、1976年、59頁。

- 17 同上、29頁。
- 18 廣松渉著『もの・こと・ことば』筑摩書房、2007年、37～38頁。
- 19 小島憲之・木下正俊等校注『万葉集』（第9巻）〔前掲、注9〕、329頁。
- 20 漢字の「事」自体においては、本来「事実」という意味が見当たらないが、中国語には「事実」という語自体が存在しないわけではない。実際、古典中国の中では「事實」という熟語の例を多く見つけられる（中国語古典文献の検索サイト <<http://ctext.org/>> の漢代までの文献だけでも38個の用例がヒットする。2016年9月13日閲覧）。
- 21 たとえば、「海は広大である」という文には「広大」という語が含まれており、「広大」は「狭少」の反対語だから、相対的なものである。たとえば、人間にとっては海は広大なものになるだろうが、神から見れば狭少なものかもしれない。その意味で、「海は広大である」という言明を「事実」と認められるかどうか、問題が含まれる。
- 22 山口佳紀、神野志隆光校注『古事記』（前掲、注10）、134～136頁。
- 23 内田賢徳「萬葉の言（コト）」、『萬葉学会』123、1986年、29頁。
- 24 山口佳紀、神野志隆光校注『古事記』（前掲、注10）、130～131頁。
- 25 森博達著『日本書紀の謎を解く』中央公論新社、1999年、121～169頁。
- 26 ただし、石井公成氏が、論文「『日本書紀』における仏教漢文の表現と変格語法」（『駒沢大學佛教學部研究紀要』73〔2015年〕216～204頁）の210頁で指摘した、「用明紀」の冒頭付近に見られる原文「語見豊御食炊屋姫天皇紀」（読み「語〔こと〕は豊御食炊屋姫天皇の紀〔みまき〕に見ゆ」）の「語」を「コト」と読ませる箇所については、石井氏の指摘の通り、「漢文としては誤り」と考えるべきである。小島憲之等校注『日本書紀』（新編日本古典文学全集、第2巻）、小学館、1994年、500～501頁参照。
- 27 佐々木隆著『言霊とは何か』中央公論新社、2013年、127頁。
- 28 小島憲之等校注『日本書紀』（新編日本古典文学全集、第2巻）、小学館、1994年、278～280頁。
- 29 同上（第3巻）、144～145頁。
- 30 清水潔著『商子』（中国古典新書、第40巻）、明德出版社、1970年、60～62頁。
- 31 小島憲之・木下正俊等校注『万葉集』（第6巻）〔前掲、注9〕、284頁。
- 32 大野晋著『日本語をさかのぼる』（前掲、注16）、18頁。
- 33 神名の「大事忍男神」（オホコトオシラノカミ）は例外である。倉野憲司氏の注釈によれば、その神名の意味は未詳である（倉野憲司校注『古事記・祝詞』〔前掲、注12〕、57頁、注36）。
- 34 たとえば、「急」という漢字を伴い、「重大な、（よくない）出来事」という意味の「事」の一例は、『古事記』の景行紀に見つけられる。そこで、倭建命は、東征に出発する前に、叔母の倭比売命（ヤマトヒメノミコト）に一つの囊をもらい、彼女に「若有急事、解茲囊口」と言われた。読み下しおよび意味は「若し急（にわ）かなる事有らば、茲（こ）の囊（ふくろ）の口を解（と）け。〔もし火急のことがあれば、この囊の口を解きなさい〕」となっており、その中の「急かなる事有らば」の「事」には「重大な、（よくない）出来事」という意味がうかがえる（山口佳紀、神野志隆光校注『古事記』〔前掲、注10〕、224～225頁参照）。
- 35 『日本書紀』には「漢文」の誤用と奇用が相当あるからである。森博達氏によれば「『日本書紀』30巻は、表記の性格によって、 α 群・ β 群・巻30に三分される。 α 群は持統朝に〔中国人だった〕続守言と薩弘格が正音・正格漢文で述作した。 β 群は文武朝になって山田史御方が倭音・和化漢文で撰述した」（巻30にかんしては省略）という（森博達「日本書紀成立小論一併せて万葉仮名アクセント優先例を論ず」、『国語学』54-3、2003年、1頁）。

近世前中期における『神皇正統記』の受容史 —羅山・素行・白石の事例を中心に—

齋藤公太

はじめに

『神皇正統記』（以下『正統記』と略す）は南北朝時代の公卿・北畠親房が、南朝の正統性を主張するため、延元4（1339）年に執筆した史論である（興国4〈1343〉年改稿）。「おほやまとは大日本者は神国也。かみのくに天祖はじめて基をひらき、あまつみおや日神ながく統を伝給ふ。もとみ我国のみ此事あり。異朝には其たぐひなし。此故に神国といふなり¹」（序論）という冒頭の言葉が示しているように、『正統記』は天皇による統治の無窮性を中心とする日本国家の「本来性」を、明確に言説化した書物であった。それゆえに『正統記』は明治期以降、「日本学の第一教科書²」「国体明徴の経典³」などと評価されることになった。しかし、近代においても「倫理教育上有害の書なり⁴」といわれ、あるいは「此ノ書籍ニハ実ニ不敬極マル句数ヶ所アリ⁵」と批判されることが時折あったように、『正統記』は多様な相貌を持つテキストでもあった。いいかえれば、『正統記』が近代になって「国体」の書としての地位を確固たるものにするまでには、それ以前の受容史、とりわけ近世における解釈の集積を経なければならなかったのである。かかる受容史をたどることにより、日本の「本来性」に関する言説の形成過程の一端も明らかになるだろう。

本稿はこのような視点から、近世前期から中期に入るまでの時期を対象として、『正統記』の受容史を概観するものである⁶。近世の『正統記』受容史に関する研究は、闇齋学派や水戸学を対象としたものが多い。近世前中期におけるそれ以外の例も扱った考察としては、まず岩佐正による概説を挙げることができる⁷。岩佐は『大日本史』や頼山陽の『日本外史』、山鹿素行の『中朝事実』、新井白石の『読史余論』、室鳩巢の『駿台雑話』などに、『正統記』の引用やその思想の継承が見られることを述べている。特に山陽と白石は源頼朝と北条泰時に関する議論を引用しており、「江戸幕府政治を擁護するために頼朝・泰時の善政論が多用される傾向があるのは興味のあることである」としている⁸。

また下川玲子によれば、近世前期の儒者は儒教的な正統論の枠組みで『正統記』を受容し、『読史余論』に見られるように、「政治道徳的善性」によって南朝の正統性を根拠づけたという⁹。他方、勢田道生は南朝史受容という視点から近世の『正統記』の影響史を概観し、室町期から近世前期までの神器説の流れに『正統記』が大きな影響を及ぼしたこと、林鶯峰の『王代一覧』と『正統記』に叙述形式の共通性があること、また『読史余論』において「時勢や制度の変遷」に関わる『正統記』の記述が多く引用されていることなどを指摘している。そして勢田は「『正統記』という書物を軸として、その影響を広い視野から捉え直すことにより、『正統記』という書物の多面性や影響の大きさを、総体として把握することができるのではないだろうか」と結論づけている¹⁰。

本稿はこうした先行研究をふまえ¹¹、とりわけ儒家神道と朝幕論という観点から、近世前

中期における闇齋学派や水戸学以外の『正統記』受容の例について再考を試みるものである。最初に『正統記』受容の基本的な状況を確認した上で、林羅山、山鹿素行、新井白石の例を取り上げる¹²。

1. 『正統記』受容の二類型

近世に入ると、多くは武士や僧侶の求めにより、現存する『正統記』の写本の半数近くが書写されたという¹³。慶安2(1649)年には風月宗智により初の版本が刊行され、また天明6(1786)年に刊行を開始した『群書類従』所収の版本もある¹⁴。宗智は寛永期(1624～45年)の京都で活躍した代表的な書商の一人であった。寛永期に隆盛した出版文化の特徴の一つは、製版印刷によって日本の古典が広く普及したということにあったが¹⁵、宗智による『正統記』の版行もそのような潮流の一例といえる。幕末の慶応2(1866)年に刊行された『評註校訂神皇正統記』を除けば、近世に出された版本は上記の二種のみであったものの、公家や僧侶といった限られた層の人々にのみ享受されていた中世の状況に比べれば、近世において『正統記』は格段に多くの読者を得たといえる。

このような近世における『正統記』の受容は、大きく分けて二つの方面からなされた。一つは史書としての受容であり、もう一つは「神書」(神道書)としての受容であった。もちろんこれらは截然と区別しうるものではなく、実際の受容においては二つの方向性が交錯していた。しかし、あえて二つの座標軸を設定することにより、個別の『正統記』受容の位置も理解しやすくなるだろう。以下その二類型の内容について確認する。

(1) 史書としての受容

山崎闇齋は、没後の正徳5(1715)年に刊行された『続垂加文集』所収の「答黒岩慈菴問目」という文章のなかで、「嘉常に謂ふ、正統記は是れ吾国の資治通鑑なり。国史を見る者必ず是より始む¹⁶」(傍点引用者)と述べている。こうした例を根拠として、勢田道生は「このような、わかりやすい簡便な通史という性質も、『正統記』が後代に大きな影響を与えた一因であったと考えられる¹⁷」と述べている¹⁸。

『正統記』が簡便な通史として受容されていたことの証拠としては、他にも只見本『神皇正統記』の存在を挙げることができる。同書は現・福島県只見町黒谷の在村医師であった原田家の蔵書から発見されたもので、2014～15年の調査により、真言宗の僧侶・玄純房祐俊が天正15(1587)年に書写した写本であることが立証された。只見本には歴史的事件などの計13箇所、祐俊による付箋が貼られており、「天正十五年当時、手許において参照する通史の日本歴史書、歴史物語書」として『正統記』が受容されていたことを示唆しているという¹⁹。また、時代は大幅に下るが、天保15(1844)年に刊行された山本蕉逸の『童子通』にも、歴史を学ぶときはまず「神皇正統記ヲ始トシテ前後太平記ヨリ太閤記三河記等ヲ読ベシ²⁰」とある。以上の例から、近世以前から近世全体を通じて、『正統記』が「簡便な通史」として受容されていたことが推測される。

『正統記』が史書として受容されたのは、単にそれが読みやすい通史であったからというばかりではない。上に引いた言葉のなかで、何より闇齋は『正統記』が日本の『資治通鑑』であると述べていた。闇齋学派の儒者であった栗山潜鋒も、『大日本史』卷之一百六十五・列伝第九十二の「源親房」の項において、「其の微を明にし正を扶くること、誠に春秋の遺

旨に合へること有り」と記していた²¹。このことの意味は、同じく水戸藩に仕えた閩齋学派の儒者、三宅観瀾の言葉に詳らかである。観瀾によれば、中国の史書に見られる道徳的論評が日本の六国史において欠けているのは、古代日本の風俗が純朴で「皇道」が自然と行われていたからである。しかるに朝廷への反逆が行われるようになったあとも、当時の歴史書は真偽の入り乱れた散漫な記述をすることしかできなかった。そのようななかでの例外的存在が『正統記』であったという。

特に衣ひと纓いせい家に神皇正統記の編有り。成憲を掲げて頽風を振ひ、系緒を辨じて姦軌いましを警め、讜議・卓識、諸を君を思これひ時を憂ふるの誠に本づく。其の書、略なりと雖も、其の言、龐ほうなりと雖も、実に始めて与ともに春秋の遺意を言ふ可し²²（『保建大記序』、正徳2〈1712〉年）。

このように『正統記』が「春秋の遺意」に合致するとされるのは、それが日本の古典的な歴史書のなかでほぼ唯一厳格な倫理にもとづく歴史の論評を備えていると見なされていたからなのである。

また、朱子学者の室鳩巢は、保元の乱の折に源義朝が父・為義を処刑したことに對する『正統記』の批判を取り上げ、「此事は北畠親房の神皇正統記の論正きたばたけちかふさ しんくほうしやうとうきしうして、最理もつどもりに当たり、此事だんあむの断案ともいふべし²³」「此の時代是程正しき議論あるをきかず。さすが親房、南朝の耆老とて、此見識ある程に、此議論もあるぞかし²⁴」と述べている（『駿台雑話』巻之三、享保16〈1731〉年成立）。

これらの言葉からわかるように、儒者、とりわけ朱子学者にとって、『正統記』は中国の史書に匹敵する道徳的論評を備えた儒学的史論として珍重されていた。特に近世において『太平記』が広く愛読され、南朝への関心が高まるにつれ、『神皇正統記』の南朝正統論が改めて着目され、朱子学の正統論と結び付けられていったという側面もあったのである²⁵。

(2) 神書としての受容

他方で、前述のように『正統記』は神書としても受容された。勢田道生は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』（井上書房、1962年）所収の7つの書籍目録のなかで、『正統記』が「神書并有職」の項目に分類されていることから、当時『正統記』が「神書」として扱われていたことを指摘している²⁶。明和7（1770）年に刊行された当時の神書の目録である鈴木行義の『神道書目集覧』に『正統記』が記載されていることから²⁷、近世前中期において『正統記』が神書として位置づけられていたことは明らかであろう。

近世では神祇祭祀としての「神道」とは区別される、「日本の神の教へ又は定めた、従つて日本に特殊な、政治もしくは道徳の規範²⁸」としての「神道」概念が普及する。それは、吉田家や白川家といった執奏家によって管理される「法的組織」としての「神道」と、教説やそれにもとづく「門人組織」を指す「神道」が、近世において並存していたことと対応しているだろう²⁹。後述の例が示しているように、近世ではそのような政治的・道徳的規範としての「神道」を表した書として『正統記』は受容されていった。

しかし、度会延佳や吉川惟足といった近世前期を代表する神道家の著作のなかでは、時折

『正統記』への言及がなされることはあるものの、大々的に引用する例は見られない。そのことは、山崎闇斎とその門流、あるいは後述する林羅山や山鹿素行などによる、儒者としての立場から形成された「儒家神道」の教説において、『正統記』が重要視されていたことと対照的である。その理由の一つは、前述のように『正統記』が儒教的な史論としての側面も有していたことが関係しているだろう。しかしもう一つの理由として、『正統記』が中世の神道教説を伝える媒体としての性格を持っていたことも挙げられよう。近藤啓吾によれば、「伊勢大神宮儀式序」(明暦元〈1655〉年)の段階における山崎闇斎は、当時神書の閲覧が困難であったために、『正統記』を通じていわゆる伊勢神道の教説に触れていたという³⁰。同じ事情は羅山や素行といった他の儒者にも当てはまるだろう。神書の披見が比較的容易であった近世前期の神道家に比べ、そのような手段が限定されていた儒者にとって、『正統記』は神書としての重要な役割を果たしていたのである。

他方、前引の「答黒岩慈菴問目」のなかで闇斎は、「但し竺土の仏、柱下の老、信じてこれを取れるは、嘆くべきのみ³¹」とも述べていた。中世神道に立脚するがゆえに、『正統記』の教説には神仏習合の言辞や「付会」的解釈が含まれていた。それは儒者にとって受け入れがたい点であり、古典解釈の方法としての考証主義が発達するにつれ、その点は一層批判されるようになっていく。

2. 林羅山における『正統記』受容

前節で概観した『正統記』受容の方向性をふまえつつ、以下闇斎学派や水戸学以外の近世前中期における『正統記』受容の代表例として、林羅山、山鹿素行、新井白石の三者を取り上げ、それぞれの思想のなかで『正統記』が果たした役割について考察を進めていきたい。

徳川幕府に仕えた朱子学者であり、儒家神道の先駆けたる林羅山は、慶長9(1604)年に記した「既に見る所の書目」のなかで「神皇正統記」を挙げており³²、つとに『正統記』を読んでいたことがわかる³³。また神道方面の主著である『本朝神社考』においても、「今我神社考に於ける、遺篇を尋ね耆老に訪ひ縁起を伺ひて、之を旧事紀・古事記・日本書紀・続日本紀・延喜式・風土記鈔・古語拾遺・文粹・神皇正統記・公事根源等の諸書に証して、以て之を表出す³⁴」と序文で述べている。同書のなかで、『正統記』は他の神書と並ぶ参考文献の一つだったのである。

『本朝神社考』と並ぶ主著である『神道伝授』(正保元〈1644〉年頃成立)においても、「天照大神の孫天瓊々杵尊ヲ皇孫ト名ケ奉テ天降り日本国ノ主トナリタマウ。此皇孫ステニ外宮ノ相殿ニマシマストキハ、豊受ノ神ヲ御膳ノ神ト申スヘカラス。此事、北畠親房ノ記ニノセタリ³⁵」と『正統記』の説を引用しており、『正統記』を参照していたことがうかがえる。

他にも『神道要語』(成立年不詳)では『正統記』と関連の深い『元元集』神国要道篇から三種神器に関わる部分を引用している³⁶。また「神道要文」と題して「心不貯一物而不可止於虚無³⁷」という一文を挙げているが、これは「其源と云は、心に一物をたくはへざるを云。しかも虚無の中に留るべからず」という『正統記』応神天皇条の一節を漢訳したものである。また『神道秘伝折中俗解』(成立年不詳)においても、「又高天原ニ神アリ。天御中主神ト号ス。コレ国常立ノ別名ナリト、神皇正統記ニ書セリ³⁸」(巻第三)、「神皇正統記ニ云ク、国常立尊ニ五行ノ徳アリ³⁹」(巻第四)と、根源神・国常立尊に関する記述を『正統記』から引用している。

以上のように羅山は自らの神道教説を構築するにあたって『正統記』とそれに関連するテキストを参照していた。羅山において『正統記』は専ら神書として受容されたといえよう。羅山の唱導した「理当心地神道」は天照大神から代々の天皇に継承されたものとされ、祭祀を中心とする「卜祝随役神道」とは異なる「王道」としての神道と位置付けられる⁴⁰（『神道伝授』）。羅山はまさに前述のような政治的・倫理的規範としての「神道」概念によって「神道」を理解していたのである。そこで『正統記』の神道教説はどのように受容されたのだろうか。「理当心地神道」の中核をなす三種神器論について、羅山は次のように述べている。

右の玉と劍と鏡とを三種の神器と申候。天照大神よりさづけ給て代々帝王の御宝物也。此三の内証は、鏡は智なり、玉は仁なり、劍は勇なり。智と仁と勇と三の徳を一心にたもつ義なり。心にありては智仁勇なり。そのあらわれてうつわものとなる時は、玉と劍とか、みなり。これを以て国家をおさめまもる也。又鏡は日にかたとり、玉は月にかたとり、劍は星にかたとる。此三光ありて天地あきらかなることくに、三種の神器そなわりて王道おさまる。王道と神道と其理一也⁴¹（『神道伝授』）。

三種神器は天皇の身に付けるべき君徳の象徴であるとする解釈は、羅山にとって神道が「王道」であることの不可欠な根拠であった。このような神器論は中世神道を背景とした『正統記』の中心的な神道教説であった。羅山は『正統記』に直接言及していないが、神器を太陽・月・星に配当している点も、「三種の神器世に伝こと、日月星の天にあるにおなじ。鏡は日の体なり。玉は月の精なり。劍は星の気なり」（瓊々杵尊条）という『正統記』特有の議論と一致しており、羅山の神器論の典拠が『正統記』であることは明らかであろう。

ただし、ここでは神器の象徴する君徳が、『正統記』における「正直」「慈悲」「智慧」という仏教的な響きのある徳目ではなく、『中庸』に基づく智・仁・勇という儒教の三達徳に変更されている。三種神器に三達徳を配する解釈は親房の『東家秘伝』（成立年不詳）に見られるものだが、近世ではむしろそちらが親房の説として流布し、後にはそれが『正統記』の説であると誤って理解されるほどになった⁴²。羅山の神器論もその一例といえるが、羅山がとりわけこうした解釈を採らざるをえなかった所以は、『本朝神社考』の序文における次のような記述を参照することで明確になる。

夫れ本朝は神国なり。神武帝、天に継ぎ極を建てしより已来、相続き相承けて皇緒絶へず。王道惟に弘まる。是れ我が天神の授くる所の道なり。中世漸く微にして、仏氏隙に乗じて彼の西天の法を移して吾が東域の俗を変ず。王道既に衰へ神道漸く廢る。……庶幾くば、世人の我が神を崇めて彼の仏を排せんことを。然らば則ち、国家上古の淳直に復し、民俗内外の清浄を致さん。亦た可ならざらんや⁴³。

羅山によれば、「神国」たる日本では「王道」としての「神道」が伝えられていたが、その本来的な道は仏教の伝来により失われてしまった。「嗚呼、王道一変して神道に至る。神道一変して道に至る。道は吾が所謂儒道なり。所謂外道に非ず。外道なる者は仏道なり⁴⁴」（『隨筆二』『羅山林先生文集』卷六十六）とも述べているように、羅山にとって日本の本来的な「道」としての「神道」は儒教と同一のものであった。それを汚染した原因である仏教を排除すれ

ば、日本の「本来性」は回復すると羅山はいう。こうした立場からすれば、羅山が仏教的な響きのある『正統記』の神器論をそのままでは受容できず、三達徳説による再解釈を行ったのは当然であろう。

このような主張には、仏教が圧倒的勢力を誇る宗教構造のなかで、儒者としての政治的能力ではなく、ただ「博識と文筆能力⁴⁵」のゆえに幕府に登用されていた羅山の立場が関係しているだろう。つまり、羅山は儒教を神道と同一の本来的な道として語ることで、劣勢に置かれている儒教の真理性を保証しようとしているのである。かかる言説が以後、いわゆる儒家神道の基本的枠組みとなっていく。『正統記』もまたこうした文脈に合わせて受容されていたのである。

3. 山鹿素行における『正統記』受容

(1) 『中朝事実』

近世前期における『正統記』受容の一事例として、朱子学を批判して独自の儒学を唱えた山鹿素行の思想も挙げておきたい。素行の『正統記』受容に関しては前述の岩佐正が触れているほか、すでに久保田収や佐佐木杜太郎、野口武彦、中山広司による先行研究がある⁴⁶。中山によれば、素行はつとに『正統記』や『職原鈔』といった親房の著作を受容しており、『山鹿語類』（寛文5〈1665〉年成立）の段階からその顕著な形跡が認められるという⁴⁷。たとえば『山鹿語類』巻第一には次のような記述がある。

夫れ天子御即位には三種の神器を以て受禪讓位の印とす。三種の神器と申すは、智・仁・勇の徳を器に表はして、正直・慈悲・知恵と神道に沙汰せり⁴⁸。

中山広史が指摘しているように⁴⁹、神器の象徴する徳目に関して羅山の説のような三達徳だけではなく、『正統記』に特徴的な「正直・慈悲・知恵」をも挙げていることは、素行がその神器論において『正統記』を受容していたことの確かな根拠であろう。

『正統記』などのより大きな影響が見られるのは、神道を主題とする『中朝事実』（寛文9〈1669〉年成立、天和元〈1681〉年刊）においてである。同書は基本的に『日本書紀』に依拠しているものの、随所に『本朝神社考』所載の漢訳された『正統記』の一節や、同じ親房の著作である『職原鈔』、『元元集』の引用が見られる。また、明白に出典を示していない箇所においてもそれらの著作の影響があることが指摘されている。

それはたとえば、「玉は以て温仁の徳を表はすべく、鏡は以て致格の知を表はすべく、劍は以て決断の勇を表はすべし。その象るところ、その形するところ、皆、天神の至誠なり⁵⁰」（神器章）といった神器に関する議論である。このような神器論は神器に智・仁・勇を配当している点では羅山の説に近いといえようが、久保田収が指摘しているように、素行は親房と同じく鏡とその徳を三種のなかで最も根本的なものとしており、その点で明らかに『正統記』の影響を受けている⁵¹。次の一節はその例である。

謹みて按ずるに、神代の靈器は一ならずして、而も□天祖は唯だ三種の神宝を以て□天孫の表物と為したまひ、□大神は唯り宝鏡を以て□神勅を詳にしたまふこと此の如し。蓋し鏡は本明かにすべきの象あり。……夫れ人君の道は、要はその知を明かにするに在

り。その知明かならざれば、寛仁と云ひ果斷と云ひ、共にその節に中らず。知至りて而して后徳と云ひ勇と云ひ、以てこれを行ふべし⁵²（神器章）。

また、中山によれば、素行の中国批判や皇統の無窮に関する主張といった点にも『正統記』などの影響が見出されるという⁵³。以下はその一例であろう。

懿^{おほい}なる哉、本朝開闢の義、悉く□神聖の靈^{くしび}に因る。是れ乃ち実に天これを授け人これに与するなり。故に□皇統は億兆の系あり、終に天壤と窮りなし⁵⁴（中国章）。

このように見てくると、『正統記』において語られた神器論や日本の本来性に関する言説が『中朝事実』においても継受されていることが了解されるだろう。素行の儒学思想は朱子学とは異なるものであるが、羅山と同様に素行も『正統記』の神書の側面を受容し、自らの儒学思想を政治的・道徳的規範としての「神道」と同一の「本来的」な道として語ることでそれを正当化しようとしたと推測される。ただし素行が『正統記』から受け継いだものは、先行研究が挙げている部分に留まらない。たとえば次のような箇所も『正統記』をふまえていると見ることができよう。

竊に按ずるに、三器は□天神の功器、三徳の全備なり。□聖主これを用ひて内はその□睿心^{かんが}を鑒みたまひ、外はその治教を制したまふ。是れ乃ち□神代の遺勅か。若し専ら三器を擁して内を正したまはざれば、虚器にして靈用なし。若し唯だ性心のみを弄して外を知らざれば、空を雕つて神器^{なみ}を無するなり⁵⁵（神器章）。

神器に象徴される規範にしたがって天皇が自らの内面を正さなければ、神器は「虚器」となる。またそれを現実のなかで実践していくのでなければ、神器を軽んずることになる。このように素行は語り、天皇に対する規範という神器の側面を強調する。また素行は次のようにも述べている。

謹みて按ずるに、天下は神器にして、人君は人物の命^かを繫く。その与授の間、豈一人の私を存せんや。□皇統の初、□天神以て授け□天孫以て受く。然らば乃ちその徳天地に愧ぢずして而して後に神器の与授を謂ひつべし⁵⁶（皇統章）。

天皇が神器の規範にしたがうだけではなく、そもそも天皇が十全な徳を備えていなければ、神器を受けるに値しないと素行はいう。こうした考えは次のような皇統論につながっている。

竊に按ずるに、□天神天下の主を生ぜんと欲して□日神以て生ず。故に□日神を以て□地神の太祖□朝廷宗廟の第一と為す。然らば乃ち歴代の□聖主、二神の精一を守り縣象著明の実^{きは}を致めざれば、豈神明の統を承けんや⁵⁷（同前）。

伊弉諾・伊弉冉から天照大神を経て歴代の天皇へと受け継がれた規範。それを守らなければ「神明の統」を受け継ぐことはできない、と素行は述べる。このような皇統論は『正統記』

特有の「正統」論、すなわち単に皇室の血統を継いでいるだけではなく、君徳を備えることによって「正統」たりうるとする『正統記』の「正統」論を想起させる⁵⁸。素行は『正統記』における神器論などの神道教説だけではなく、その「正統」論をも受容していたと推測されるのである。そしてそれは次節で述べる歴史解釈に接続していく。

(2) 『武家事紀』

素行は武家の歴史について記した『武家事紀』（延宝元〈1673〉年成立）のなかで、朝廷の権力が衰退した原因について次のように説明している。

……天祖天照大神の遺勅に因つて、代々の天子三種^ノ神宝を以て帝王の聖徳を表し、宝鏡を以て神常^{いま}に在すが如き戒となし、聰明睿智^{かた}の天徳をただし玉ふ。是れ乃ち天子の道也。世久しく泰平に属し、往古の神勅も形ばかり残り、朝廷の礼義も威儀の節を事とし、楽の和は管弦の事になり、つひに好色の道幽玄の義のみ朝廷の有職とするになれり。故に天下の治道政法は上下ともに失却す⁵⁹（巻第一「皇統要略」）。

すなわち「泰平」が続くなかで三種神器によって君徳を表した「往古の神勅」が形骸化し、空疎化した礼楽のみを朝廷の職分とするようになった結果、朝廷は統治者としての能力を失った。それが素行の考える朝廷衰退の原因であった。こうした議論を支えているのは、神器に象徴される君徳を体現するか否かによって「正統」性が左右されるという前述の「正統」論であろう。

武臣上をなみして世を政するに非ず。上に君道不^レ明^{ナラ}がゆゑに武臣これを承けて天下を安んずる也。保元よりこのかた建武の乱に至るまで、朝廷の礼楽正道正しきに武臣己れが私をほしいままに致す事あらず、全く天下困窮するがゆゑに、武臣日々に盛にして是れを静謐せしむる也。されば平清盛ごときなる我まをなせし武臣たりといへども、猶ほ朝廷を立て命を重んずる事、是れ併しながら天神地祇の神靈万世の後まで相のこりて、君君たらざれども臣以て臣の道を守るのゆゑなれば、難^キ有本朝の風俗也⁶⁰（同前）。

朝廷が「君道」を失ったがために、保元の乱から建武新政を経て、武家が朝廷に代わって国家を治めることになったと素行はいう。つまり事実上統治者としての天命が朝廷から武家へと移ったのである。それにもかかわらず武家政権は形式的に天皇を君主として推戴し続け、革命を起こすことがなかった。その点に日本の本来性が表れていると素行は見る。

「保元・平治より以来、天下みだれて、武用^{このかた}さかりに王位^{ぶよう}かろくなりぬ。いまだ太平の世にかへらざるは、名行のやぶれそめしによれることとぞ見えたる」（二条院条）とあるように、朝廷の失徳のゆゑに武家政権が台頭したという歴史解釈は、『正統記』に元々見出されるものである。その背景には道徳的応報史観がある。こうした『正統記』の歴史解釈と『武家事紀』の記述は類似しており、素行が『正統記』の神道教説のみならず、朝廷の衰退に関する歴史解釈をも参照していたと推測される。

無論、親房は最終的に南朝が勝利を治め、朝廷の統治が回復されることを信じていたのであるが、現実の歴史は南朝の敗北に終わった。素行は天皇の君徳によって「正統」性が左右

されるという『正統記』の言説や、道徳的応報史観を敷衍することで、南朝敗北後の歴史過程を説明しようとする。それによって素行は幕藩体制の成立を正統化し、武士の存在意義を弁証しようとしたのである。

ところで大川真は、「近世の国家イデオロギーは、どちらの王権の存在も不可欠とする二重王権制構造（儒教的概念からすれば二つの『不完全』な王権を組み込んで、はじめて日本国家が成り立つという構造）を前提に成立している⁶¹」と述べ、熊沢蕃山、山県大弼、新井白石などに見られる王権論を「二元的王権論」と呼んでいる。それはすなわち、天皇家が治者としての天命を失った結果、幕府が「武」を、朝廷が「文」（礼楽）を分掌するようになったとする言説である⁶²。

「上古神聖の実義日に疎くなりて、御学問は鴻材利口のためにわたり、詠歌管弦は風流におち入りて、礼楽の実を失ふになれること也⁶³」（同前）と述べているように、素行は朝廷の学問や礼楽が次第に本質を失い、またそのように空疎化した礼楽に朝廷が耽溺した結果、朝廷と幕府の分掌体制が確立したと見ていた。したがって蕃山や白石のようにその体制を全面的に肯定しているわけではない。とはいえ素行はかかる分掌体制を所与の前提として認めているのであり、その点で素行もまた「二元的王権論」の圏内にいるといえる。「二元的王権論」は朝廷を組み込んだ幕藩制国家権力のあり方に対応したものであるが、素行の例が示しているように、『正統記』も近世前期においてはかかる体制に合わせて受容されたのである。

4. 新井白石における『正統記』受容

(1) 『古史通』に見る白石の古典解釈

素行からはやや時代が下った近世中期における『正統記』受容の例として、五代將軍綱吉に仕え、「正徳の治」を主導した儒学者、新井白石の例にも触れておきたい⁶⁴。正徳2（1712）年に白石が著した『読史余論』は『神皇正統記』の議論に全面的に依拠しており、『読史余論』全体の参照文献の中でも『正統記』の引用回数が最も多い⁶⁵。白石がいかに『正統記』に依拠していたかは明らかであろう。

しかし白石は『正統記』の神書側面を受容したわけではない。後述のように『読史余論』では専ら『正統記』の歴史解釈が引用されており、神道的言辭は見られないからである。この点に関しては、「神は人なり⁶⁶」（『古史通』巻之一、正徳6〈1716〉年成立）という有名な言葉が示しているように、「啓蒙的理性の持ち主」であった白石は神代の物語も人間の歴史としてとらえ、それゆえに『正統記』の神道的要素を受容しなかった、と時に説明される⁶⁷。

こうした説明は誤りではないが、『正統記』の神書側面を受容しなかった理由については白石自身が説明を残しており、まずそれを参照すべきであると思われる。『古史通或問』下巻（正徳6〈1716〉年成立）に収められている問答の中で、何を以て「我国の道」「我国の教」とすべきかという問いに対し、白石は次のように述べている。

曰経といひ史といふ、其体製自ら同じからず。……旧事紀古事記日本紀のごときも、また事を記せし所のものにして、道を論ずる所のものにはあらず。我積せし説のごときはたゞこれ訓詁の事にして、古今の異言を解くことは其文献の足れる徴となし、知らざる所を闕き疑ふべきは疑を伝ふるのみ。……神皇正統記の説のごときは、世に伝ふる所の

元々集といふものに見へし事ども多けれど、彼元々集に引用ひし所の如きは、並にこれ古にいひし閭門仮借之書、本朝の正史実記に見へし所にもあらず。又歴朝の宿儒進講の説にもあらず⁶⁸。

白石は古典を「経」と「史」に厳密に分けた上で、『旧事紀』『古事記』『日本書紀』などは教説を記した「経」ではなく、歴史的事実の記録たる「史」にすぎないとする。こうした立場から白石は、記紀などの古典から教説を導き出そうとする後世の神道教説を付会的解釈として排する。それゆえ、中世神道に基づく親房の『元元集』と『正統記』の神道教説も、歴史的事実からの逸脱として排除するのである。

ここで語られているのは単に儒教的「合理主義」による神道の否定ということではない。むしろ、同時代の国学とも相通ずる、近世中期以降に隆盛した考証主義による古典解釈の立場であるといえる⁶⁹。もっとも白石の思想と『正統記』の神書側面にはある共通性もある。しかしその点に触れる前に、まず『読史余論』における『正統記』受容のあり方を確認しておこう。

(2) 『読史余論』における『正統記』受容

『読史余論』が『正統記』に依拠していることはこれまでもしばしば指摘されてきた。たとえば前述のように下川玲子は、『正統記』を「政治道徳的」に解釈することで朝廷から武家政権への天命の移行を説明した例として『読史余論』を位置付けている⁷⁰。また勢田道生は、『読史余論』では「政治実権の変遷に関わる重要なポイントが、『正統記』を引いて論じられているのである」とし、「『読史余論』は『名』・『実』の関係とその『変』とに強い問題意識を持っているのであり、その『変』についての記述には、『正統記』が極めて大きな影響を与えていた」と結論づけている⁷¹。以下、このような見解をふまえて、『読史余論』において『正統記』がどのように受容されているか、具体的に見ていきたい。

同書は日本の歴史を九段階の変化に分けて最後の「九変」に南朝の敗北と武家政権の確立を置き、また「武家の代」の変遷も「五変」に分けその最後に徳川幕府の成立を置いている。『正統記』に関しては、たとえば「七変」の「北条九代陪臣にて国命を執し事」において、承久の乱における後鳥羽院の行動に対する親房の批判を引用し、「謹按ずるに、後鳥羽院、天下の君たらせ給ふべき器にあらず。ともに徳政を語べからず⁷²」と述べて賛同の意を示している。

また「およそ保元・平治より此かたのみだりがはしきに、頼朝と云人もなく泰時と云ものなからましかば、日本国の人民いかゞなりまし。此いはれをよくしらぬ人は、故もなく皇威の衰へ武備のかちにけると思へるは、^{あやまち}過也⁷³」という親房の言葉を引用しているほか、保元の乱に関する「王室の衰へし事、たゞ名行のやぶれによれり」という議論を引用し、「北畠准後のいひけん事、まことにしかり」と述べている⁷⁴。これらの例からわかる通り、白石は道徳的応報史観を背景とする『正統記』の朝廷批判の部分を参照し、それを武家政権確立の正統化のために用いているのである。

南朝に関しては、冒頭の「本朝天下の大勢、九変して武家の代となり、武家の代また五変して当代におよぶ総論の事」で次のように述べている。

尊氏天下の権を恣にせられし事も、後醍醐中興の政、正しからず、天下の武士、武家の代をしたひしによれる也。尊氏より下は、朝家はたゞ虚器を擁せられしまゝにて、天下はまつたく武家の代とはなりたる也⁷⁵。

「しかれども終に運祚のひらけさせ給ふ事なかりし事は、皆これ創業の御不徳によりて、天のくみし給はぬによれるなるべし⁷⁶」（「〈九変〉南北分立の事」）とも述べているように、北条氏滅亡の時節に巡り合ったために建武の中興は成功したものの、後醍醐天皇には君徳が欠け、その政治が正しくなかったために、結局南朝は敗北し、武家政権の支配が確立され、朝廷は「虚器」を持つだけの存在になった、と白石はとらえる。北朝の成立に関しても、白石は冷徹な分析を提示している。

北朝は、たゞ足利殿の、君にそむきまいらせられて、臣として天下をあらそひ給ふ事をさすが心のうちにおそれ給ひ、かつはその戦に毎度利なかりしによりて、すゝめ申すものどもありしかば、やがて光明院殿を君として、南北両帝の御あらそひのごとくにはとりはからはれしなり。……さらば北朝は、またく足利殿のみづからのためにたてをきまいらせられし所にて、まさしき皇統とも申しがたければ、或は偽主・偽朝などもその代にはいひしとぞみへたる⁷⁷（同上）。

白石によれば、現在の皇室に連なる北朝は足利尊氏が自らの正統化のために擁立した傀儡にすぎないという。それゆえ北朝は正統の皇統とはいいがたいのであり、「偽主」という親房の呼び方にも一定の正しさがあることを白石は認める。しかしこのことから直ちに、白石は易姓革命論を日本の歴史に適用し、朝廷から武家政権への「革命」を述べたのだと結論づけることはできない⁷⁸。

ことには、北畠源大納言入道親房父子の忠功、いにしへの大臣にもおとり給ふべからず。此世には、朝廷の人々も多くは義をおもひ節を守り給ひしにや。……さればある人のいひしは、その代に義をも節をも守りし人々は、皆南朝にさりて、偽朝の臣たらむ事をふかく恥き。その余、北朝にのこりとゞまりし人々は、皆恥なき人々なりとありけり。さもこそありけめとおもはるゝ也⁷⁹（「足利殿、北朝の主を建られし事、并室町家代々將軍の事」）。

後醍醐天皇の不徳のゆえに建武新政は失敗し、やがて南朝が滅びたとしつつも、白石は北畠親房をはじめとする南朝の臣下たちの忠義を称賛する。そもそも朱子学では易姓革命が原則として是認される一方で、たとえ不徳であっても従前の王朝の血統が続く限りはそれを正統とし、その君主に対する忠誠を要請するという面も並存していた⁸⁰。それゆえ白石が後醍醐天皇を批判しながらも、その臣下の忠義を評価していることは矛盾ではなく、元々朱子学が持っている二面性の表れであるといえる。

このような白石の『正統記』受容にかんがみれば、白石が易姓革命そのものを望んでいなかったことは明らかだろう。大川真によれば、白石が目指していたのは將軍に王権を一元化することではなく、むしろ將軍に「国王」という「名」を付与することで、天皇より下位に

ありつつも国家の統治者であるという「実」に一致させることであったとされる⁸¹。したがって白石は天皇と「国王」の関係について以下のように説明する。

皇といひ王といひ大小の字義同じからず。況や又皇に係に天を以てして天皇と称し、王に係に国を以てして国王と称し、上下の名分相分れし事天地の位を易ふべからざる事の如し⁸²（『殊号事略』下）。

このように白石は天皇と将軍のあいだの「上下の名分」は厳然として変わらないものにとらえていた。そのため、白石が以下のように天皇の統治の無窮性という日本の「本来性」を称揚していることもまた、不思議ではない。

我国のごとき、其万国の中にすぐれて神皇の大統天地と共に悠久におはしまし、宗社群神の祀典のごとき、初皇祖神のことよさし給ひし所のまゝに、其職を奉ぜし所の神胤今に絶せず……本朝正史のごときも、なほ日星の如く明らけき世の鑑とぞ成ぬる⁸³（『古史通或問』上）。

「神皇の大統」といった表現は『正統記』の口吻を思わせる。白石がここで『正統記』を参照していたかどうかはともかくとして、『正統記』の「本来性」の言説と白石の思想とのあいだに共通性があったことは確かである。白石が将軍に望んでいたことは、たとえ天皇が統治者としての天命を事実上失っていたとしても君主として推戴し続け、「上下の名分」を世に示し続けることだった。とすれば同じように天命を失ったとされる南朝を推戴し続けた親房のような人々の軌跡は、白石にとって将軍がならうべき「鑑」であったといえるだろう。

おわりに

日本の「本来性」を言説化した書物である『神皇正統記』は、近世には出版文化の隆盛も相まって多くの読者を得ることになった。そこで『正統記』の受容は主に神書と史書という二側面からなされたのである。本稿では近世前期から中期にかけての『正統記』受容、とりわけ闇齋学派や水戸学以外の受容の例として、林羅山、山鹿素行、新井白石の三者を取り上げ、再考を試みた。

羅山は主に『正統記』の神書的側面を受容し、自らの唱える「理当心地神道」を構築していった。しかしそれは『正統記』の神道教説をそのまま受容するものではなく、仏教に対抗するという目的のもとで、たとえば三種神器に表される君徳を智・仁・勇の三達徳に読み替えるといった変更がなされた。素行もまた『正統記』の神書的側面を受容していたが、同時に素行は『正統記』独特の「正統」論や、史書的側面も受容していたと思われる。それらを接合することで、素行は近世の二元的な王権のあり方を説明しようとした。白石は近世中期以降に興隆する考証主義に基づき、『正統記』の神書的側面を排除し、専ら史書的側面を受容した。それにより白石も武家政権の成立過程を説明しようとしたのだが、白石もまた天皇の統治を中核とする「本来性」の言説を共有しており、近世の二元的な王権を肯定していた。

以上の考察からわかることは、第一に、『正統記』が当初は中世神道の教説を伝える書物として重視されつつも、その神仏習合的側面は必ずしも受容されず、とりわけ考証主義が隆

盛するにつれ、その神書としての価値が否定されるようになっていったということである。第二に、近世前期から中期において『正統記』は、将軍（幕府）と天皇（朝廷）という二元的な王権の構造に合わせ、それを正統化するものとして受容されていたということである。天皇の統治を称揚する「本来性」の言説も、当時はこうした二元的王権とは矛盾しないものと認識されていたのだった。

考証主義の隆盛にともなう『正統記』の神書としての価値の低下は、白石に限らず、時代の趨勢であった。次の吉見幸和の言葉はその一例である。

又外宮神主家行、類聚神祇本源十五卷ヲ撰ス。准后親房卿、借_レ其本_ニ以尊_レ信之_一、元々集十卷ヲ撰シ、神皇正統記ヲ編集セラル。皆是兩部習合ノ甚キ者ニシテ、五部書ト同日ノ談也⁸⁴（『弁偽書造言総論』巻之一、元文元（1736）年成立）。

しかし近世後期に至ると、幕藩制国家の動揺とともに大政委任論が登場し、「国体」概念が普及していく。藤田幽谷が「其の国体を存し廢典を修むる所以の者は、千古寥寥、絶無にして僅かに有り⁸⁵」（『皇朝史略序』、文政9（1826）年）と述べているように、そこで『正統記』の「本来性」の言説が改めて注目され、『正統記』は「国体」の書として再定義される。その解釈が明治以降も継承されていくのである。そして「本来性」が主題となったがゆえに、『正統記』が武家政権の成立や、二元的王権のあり方を説明するものとして受容されえたと解釈の複数性自体が忘却されることにもなったのだった。

注

- 1 以下、『神皇正統記』の引用は岩佐正校注『神皇正統記』（岩波文庫、1975年）による。引用にあたっては括弧内に条目のみ示す。
- 2 徳富蘇峰『昭和国民読本』東京日日新聞社、1936年、26頁。
- 3 村岡典嗣「日本精神を論ず」『日本思想史研究Ⅴ 国民性の研究』所収、創文社、1962年、371頁。
- 4 木村鷹太郎「神皇正統記は倫理教育上有害の書なり」『太陽』4巻13号、1898年6月。
- 5 園田新吾「天皇観」、岡本太郎編『園田新吾十五年祭記念 維新の信條』所収、中井勝彦、1972年、212頁。この資料の存在は植村和秀『丸山眞男と平泉澄—昭和期日本の政治主義—』（柏書房、2004年）、174頁によって知った。
- 6 ここで近世前期とは慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いから延宝7（1679）年まで、近世中期とは延宝8（1680）年の五代将軍・綱吉の将軍襲職から十代将軍・家治の没年である天明6（1786）年までを指す。山口啓二『鎖国と開国』（岩波書店、1993年）、147-151頁を参照。
- 7 岩佐正「神皇正統記及び新葉集の研究史」『国語と国文学』12巻4号、1935年4月。同「解説」『神皇正統記』、岩波文庫、1975年。
- 8 岩佐前掲「解説」、281頁。また同前掲「神皇正統記及び新葉集の研究史」、416-417頁も参照。
- 9 下川玲子『北畠親房の儒学』ぺりかん社、2001年、13-15頁。
- 10 勢田道生「南朝史受容と神皇正統記」『藝林』65巻1号、2016年4月、73頁。
- 11 『正統記』の受容史を扱ったもの以外にも、たとえばケイト・W・ナカイ（平石直昭・小島康敬・黒住真訳）『新井白石の政治戦略—儒学と史論—』（東京大学出版会、2001年）第6章は、『正統記』から羅山を経て白石に至る天皇の解釈の系譜について論じている。
- 12 素行と白石に関しては拙稿「神器と正統—閻斎学派の南朝正統論—」（『日本思想史研究会会報』31号、2015年1月）でも取り上げた。本稿はそこで示しておいた論点を『正統記』の受容に即して具体的に

展開したものである。

- 13 岩佐前掲「解説」、280 頁。
- 14 熊田淳美『三大編纂物群書類従・古事類苑・国書総目録の出版文化史』勉誠出版、2009 年、20-21 頁。
- 15 今田洋三『江戸の本屋さん—近世文化史の側面—』平凡社ライブラリー、2009 年、40 頁。
- 16 日本古典学会編『新編山崎闇齋全集』第 2 巻、ぺりかん社、1978 年、358 頁、原漢文。以下、一次資料の引用にあたっては、旧字体を新字体に改め、適宜句読点や振り仮名を付した。闕字は「□」で表記した。
- 17 勢田前掲「南朝史受容と神皇正統記」、65 頁。
- 18 勢田は「『神皇正統記』が作られた後、近世前半くらいまで、『神皇正統記』ほど解り易い通史が他にあったらどうか」とも指摘している（糸賀茂男・所功・白山芳太郎・勢田道生・梶山孝夫・廣瀬重見・山口道弘「『神皇正統記』をめぐる諸問題 相互討論」『藝林』65 巻 1 号、2016 年 4 月、163 頁）。
- 19 「医家原田家書籍解説」『只見町文化財調査報告書 第 21 集 医家原田家書籍目録』福島県只見町教育委員会、2016 年、34-35 頁（久野俊彦担当箇所）。只見本の存在については石原和氏からご教示いただき、また報告書をご恵贈いただいた。記して感謝の意を表したい。
- 20 長澤規矩也編『江戸時代支那学入門書改題集成』第 4 集、汲古書院、1975 年、493 頁。
- 21 建国記念事業協会・彰考舎編刊『訳註大日本史』第 4 巻、1939 年、608-609 頁。吉田一徳『大日本史紀伝志表撰者考』（風間書房、1965 年）、408 頁を参照。
- 22 『日本思想大系 48 近世史論集』岩波書店、1974 年、322 頁。
- 23 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成〈第 3 期〉6』吉川弘文館、1977 年、268 頁。
- 24 同書、269 頁。
- 25 平田俊春『神皇正統記の基礎的研究』雄山閣出版、1979 年、837 頁。
- 26 勢田前掲「南朝史受容と神皇正統記」、75 頁。
- 27 山本信哉編『神道叢説』国書刊行会、1911 年、489 頁。
- 28 『津田左右吉全集 第 9 巻 日本の神道』岩波書店、1964 年、4 頁。
- 29 遠藤潤「『神道』からみた近世と近代」、池上良正・小田淑子・島蘭進・末木文美士・関一敏・鶴岡賢雄編『岩波講座宗教 第 3 巻 宗教史の可能性』所収、岩波書店、2004 年、163-168 頁。
- 30 近藤啓吾「北畠親房と山崎闇齋」『紹宇存稿—垂加者の思ひ—』所収、国書刊行会、2000 年、32-33 頁。
- 31 日本古典学会編前掲『新編山崎闇齋全集』第 2 巻、358 頁、原漢文。
- 32 『羅山林先生集附録巻第一 年譜上』、京都史蹟会編『羅山先生詩集』巻 4 所収、平安考古学会、1921 年、12 頁。
- 33 林羅山の『正統記』受容を主題とした論考は管見の限りないが、たとえば韋佳「神道即ち王道—林羅山の日本神国論—」（『東洋古典学研究』38 号、2014 年 10 月）は『正統記』に始まる神国思想の系譜に羅山の思想を位置づけている。
- 34 神道大系編纂会編刊『神道大系 論説編 20 藤原惺窩・林羅山』、1988 年、32 頁、原漢文。
- 35 『神道伝授鈔』、同書所収、398 頁。
- 36 同書、417-418 頁。
- 37 同書、420 頁。
- 38 同書、435 頁。
- 39 同書、438 頁。
- 40 同書、343-344 頁。
- 41 同書、330 頁。
- 42 加藤仁平『三種神器観より見たる日本精神史』第一書房、1939 年、93-95 頁。なお、加藤も上述の『神道伝授』の一節を、「『神皇正統記』の日月星三光説と『東家秘伝』の智仁勇三徳説とを継述した」とものと見なしている（同書、128 頁）。

- 43 神道大系編纂会編前掲『神道大系 論説編 20 藤原惺窩・林羅山』、31-32 頁、原漢文。
- 44 京都史蹟会編『羅山先生文集』巻 2、平安考古学会、1918 年、360-361 頁、原漢文。
- 45 渡辺浩『近世日本社会と宋学（増補新装版）』東京大学出版会、2010 年、24 頁。
- 46 岩佐前掲「神皇正統記及び新葉集の研究史」、417 頁、久保田収『近世史学史論考』（皇学館大学出版部、1968 年）第 1 章第 1 節、佐佐木杜太郎「山鹿素行の日本学と神道の基盤—中朝事実構成の参考文献を探る—」（『神道学』62 号、1969 年 8 月）、野口武彦『江戸の歴史家—歴史という名の毒—』（筑摩書房、1979 年）第 4 章、中山広司「北畠親房と山鹿素行」（『皇学館史学』3 号、1989 年 12 月）など。
- 47 中山前掲「北畠親房と山鹿素行」、64-66 頁。
- 48 廣瀬豊編『山鹿素行全集 思想篇』第 4 巻、岩波書店、1942 年、31 頁。
- 49 中山前掲「北畠親房と山鹿素行」、66 頁。
- 50 同書、45 頁。
- 51 久保田前掲『近世史学史論考』、9-10 頁。
- 52 廣瀬豊編『山鹿素行全集 思想篇』第 13 巻、岩波書店、1940 年、47 頁。
- 53 中山前掲「北畠親房と山鹿素行」、72-79 頁。ただし、影響の例として挙げた文章は、中山の引用しているものから改めた。
- 54 廣瀬編前掲『山鹿素行全集 思想篇』第 13 巻、16 頁。
- 55 同書、45 頁。
- 56 同書、43 頁。
- 57 同書、35 頁。
- 58 親房の「正統」論については石井紫郎「中世の天皇制に関する覚書」（『権力と土地所有』所収、東京大学出版会、1966 年）などを参照。なお、野口武彦は素行が『正統記』を受容しつつも、『正統記』における「危機的な歴史意識」や「正理」の観念が欠けていたと論じている（79 頁）。鋭い指摘であるが、本文で考察したように、素行は『正統記』の「正統」論もある程度受容していたと思われる。それを二元的王権の説明へと向けて敷衍していたことには、改めて着目する意味があるだろう。
- 59 同書、398-399 頁。
- 60 同書、399-400 頁。
- 61 大川真『近世王権論と「正名」の転回史』御茶の水書房、2012 年、20 頁。
- 62 同書、104-126 頁。
- 63 廣瀬編前掲『山鹿素行全集 思想篇』第 13 巻、399 頁。
- 64 白石の『正統記』受容についての先行研究は『読史余論』の問題に集中しており、同書について考察するときにまとめて紹介することにしたい。なお、本文では言及しなかったが、野口武彦が「歴史の目標の理念」の欠如など、『読史余論』と『正統記』の差異を指摘していることも重要であろう（前掲『江戸の歴史家』、61 頁）。
- 65 岩波文庫版巻末の書名索引による（村岡典嗣校訂『読史余論』、岩波文庫、1936 年、303-304 頁）。
- 66 国書刊行会編刊『新井白石全集』第 3 巻、1977 年、2-9 頁。
- 67 田尻祐一郎『江戸の思想史—人物・方法・連環—』中公新書、2011 年、116-118 頁。
- 68 同書、396-397 頁。
- 69 新井白石の神典解釈に元禄享保期以降の国学と共通するものが見られることは、安川実がすでに指摘している。安川実「近世合理主義とその神代巻批判」（『神道学』96 号、1978 年 2 月）を参照。
- 70 下川前掲『北畠親房の儒学』、14-15 頁。
- 71 勢田前掲「南朝史受容と神皇正統記」、68-69 頁。
- 72 『日本思想大系 35 新井白石』岩波書店、1975 年、261 頁。
- 73 同書、263 頁。
- 74 同書、265 頁。

- 75 同書、185-186 頁。
- 76 同書、275-276 頁。
- 77 同書、276 頁。
- 78 そのような解釈の代表としては尾藤正英による研究を挙げることができる（『新井白石の歴史思想』『日本思想大系 35 新井白石』所収、岩波書店、1975 年）。これに対しては大川真も「天命の授与がそのまま徳川政権の絶対王権化と直結するわけではないことに注意を払うべきである」と述べている（前掲『近世王権論と「正名」の転回史』、130 頁）。なお、白石の思想に関しては数多くの先行研究があり、本来はその検討も必要であるが、本稿では紙幅の都合によりその点は省略し、二元的王権論の面を強調する大川の見方に基本的に依拠した。
- 79 同書、378 頁。
- 80 島田虔次「宋学の展開」『岩波講座 世界歴史 9』所収、岩波書店、1970 年、440-447 頁。
- 81 大川前掲『近世王権論と「正名」の転回史』第 1 部第 2 章を参照。
- 82 前掲『新井白石全集』第 3 卷、636-637 頁。
- 83 前掲『新井白石全集』第 3 卷、325 頁。
- 84 『増補大神宮叢書 18 度会神道大成』後篇、吉川弘文館、2003 年、536 頁。
- 85 菊池謙二郎編『幽谷全集』吉田彌平、1935 年、283 頁、原漢文。

ポーランドのボードゲームに描かれる カトリック修道会の世界

加藤久子

はじめに

現代において、「教育」という語により一般に想起されるのは「学校」「子ども」「教師」「教科書」など、学校教育制度とその内側にある学齢期の児童・生徒、有資格者としての教員などであろうが、教育史全体を俯瞰すれば、教育がこのような形態を取るようになった歴史は比較的浅い。それ以前の「教育」は、家庭や「ゲマインシャフト」と規定されるようなローカルなコミュニティに根差したもので、一方が手本を示し他方がそれを反復するというような「教える＝教えられる」関係である以上に、年長者の行いを真似たり、必要に応じて自ら工夫したり、あるいは五感によって感得されるものの中で自らを成長させていくプロセスであったと考えられる。

現在の子どもの発達をめぐる環境において、学校が占める割合は拡大した。しかし、大陸ヨーロッパにおいては、現在もなお、子ども（あるいは人間）の発達は、「教育」と「人間形成」（陶冶とも。ドイツ語 *bildung*）の2側面から理解されている。前者を学校教育とするならば、後者の範疇に含まれるものは、学校外教育やノンフォーマル教育などの語によって説明される¹。ノンフォーマル教育の一例である博物館教育を、ドイツの教育学者（美術館教育）のパーモンティエは、（あらかじめ用意された解釈や知識を習得するようなものではなく）モノそれ自体から何かを感じ取る力を養うものであると説明し、「ミュージアムは市民に彼らの自身の伝統の具体的な遺産に直触れさせ、外国の文化から略奪してきたものと比較させ、自分が誰であり、誰になろうとしているのかを見いだすこと」を可能にすると説明している²。もちろん、ミュージアムに展示されているものが特定の価値基準によって抽出された「文化」のエッセンスである以上、そこに展示されているモノそれ自体から感じ取られるものにも、一定の方向性が与えられている。しかし、そのようなコンテクストに気付き、それを受け入れる人もいるだろうが、それに気付いたがゆえに反発し、批判や風刺を展開させる人もいようし、また、そのようなコンテクストには気づかず、あくまで等身大の世界観の中でそれを解釈し、その発想こそが（当人の意思とは無関係に）権力に対するアンチテーゼとして機能することもあるだろう。

本稿では、この枠組みを宗派教育に援用し、ノンフォーマルな宗派教育が何を伝達しようとしているかについて考えてみたい。フォーマルな宗派教育が、教団や聖職者を中心に伝達される教義や儀礼であるとすれば、ノンフォーマルな宗派教育とは、宗教儀礼の後などに行われる副次的な活動や信徒のグループによる活動、日々の家庭での生活、メディア、日常生活に入り込んだ音（鐘の音や歌声など）や風景の記憶（宗教施設を含む「ふるさと」のイメージなど）を通じて伝達される。そして、これらのノンフォーマルな宗教活動の中には、フォーマルな宗教活動を補強する機能を持つものと、結果的に前者との間で矛盾を来したり、前者と乖離した方向性を示したりするものとの2つがあるということになる。

本稿は、このようなノンフォーマルな宗派教育の一例として、ヨーロッパのカトリック修道会が制作や販売を行っているファミリー向けのボードゲームを取り上げ、そこには何が描かれ、どのような価値が伝えられようとしているのかという点を中心に見て行きたい。人々がそれを使って遊ぶ中で、どのような言動が見られ、実際にどのような価値が伝わっているかについての調査は行っていないため、教育を相互行為として描き出すには至らないが、フォーマルな教育が何を伝えようとしているのかを見るために教科書が用いられるように、ノンフォーマルな教育の分析に遊具を用いることで、そこで伝達されようとしている価値について一定の知見は得られると考える。

1. ボードゲームをめぐる近年の展開

日本の伝統的なボードゲームと言えば、囲碁や将棋などの抽象度の高いもののほか、双六が挙げられよう。戦後、アメリカから輸入された「人生ゲーム」や「モノポリー」などは、この双六のルールを複雑にし、ストーリー性を強めたものであるが、ファミリー向けのゲームとして日本においても一世を風靡した。しかし、これらのボードゲームは、今やコンピュータ・ゲームに取って代わられたと言ってよい。

他方、ヨーロッパにおいては、「ドイツのボードゲーム」または「ドイツゲーム」と称される、ファミリー向けのボードゲームが根強い人気を維持しており、独自の進化を遂げている。名前の由来となっている通り、ドイツを中心に人気デザイナー（ゲーム作家）を輩出しており、人気作品は各国語に翻訳され、販売されている。

「ドイツゲーム」の典型的特徴については、以下のように説明されている³。

- 1) 比較的単純なルール（たとえば5、6ページほど）
- 2) 比較的短い所要時間（30分ぐらいから長くても2時間ほど）
- 3) 運まかせではなく、戦術、戦略が要求される（ただし、囲碁、将棋ほどには熟達に
応じて初心者との差が開いていかない）
- 4) 直接的に他プレイヤーを攻撃する場面は少なめ
- 5) 勝利に近づくほどより有利になったり、他プレイヤーが脱落していくことは
少なく、全員が最後まで楽しめる工夫
- 6) ゲームのパーツ（コマなど）を木製にするなど、素材やデザインに配慮

そこで描かれるストーリーは、人気の火付け役となったと言われる『カタンの開拓者たち』（1990年代）や『カルカソニス』（2000年代）など、開拓や都市構築をモチーフとしたものなど、建設的な方向性のものが少なくない。また、外国を旅するストーリーや、歴史上の出来事をアレンジしたものなど、遊びながら地理・歴史の知識を身に付けられる教育的な内容のものも目立つ。攻撃性や駆け引きの要素が少なく、建設的かつ教育的であるという「ドイツゲーム」の性質は、宗教と相性が良いようで、ポーランドにおいては多くの修道会がオリジナルのボードゲームを販売している。

以下、自社製品を販売するだけでなく、各種団体や企業などからボードゲームの企画、製作、販売を請け負っているポーランドのボードゲーム・メーカー“polskie gry planszowe”で販売されているカトリックに関連するゲームを順次、紹介する。



図1 教会の売店のショーウィンドーに並ぶボードゲーム

2. ゲームの概要

(1) 「ベネディクト会ゲーム 写字室／祈り働け (ora et labora)」

ゲームは、中世のベネディクト会士の修道生活をモチーフにしたものである。1枚の盤面がリバーシブルになっており、「写字室」と「祈り働け」2つのゲームが楽しめるようになっている。さらに、コマやルーレット、コインなどが木製で重厚な作りになっていることもあってか、一般的な紙製のゲームよりもやや高額である。

「写字室」はサイコロの目にしたがって盤面に描かれたルートを回りながら、写本の言葉が書いてあるコインを集め、その言葉を使って修道者が写本を完成させるのを手伝うという設定になっている。「祈りと労働」は、ベネディクト会士の日課を疑似体験しながら、聖書の言葉が書かれたカードや日課に用いる道具のカードを集め、そこに書かれた指示に従い、ラテン語の単語が書かれた2枚のカードをつなげて1つの警句を作る（「メメント」と「モリ」の言葉つなげて「メメント・モリ」という言葉を完成させるなど）というような指令をこなしていく。

全体的に、観想修道会である会の特色が強く打ち出されており、図柄や文字なども中世の写本風に描かれている。ゲームの外箱には、通常は書かれている「ゲーム作家」の名前などは一切書かれておらず、ポーランド南部クラクフ市郊外のティニエツ村にあるベネディクト会大修道院の名前のみがクレジットされている。これはゲームのコンセプトやデザインなどに関する提案が修道会側から行われた可能性が高いことを意味している。また、聖句などの「言葉」に触れることに重きが置かれており、一部にラテン語なども用いられていることから、(対象年齢6歳以上となっているが)もう少し年長の児童・生徒向けであるようにも見える。



図2 ベネディクト会「祈り働け」の盤面

(2) 「平和と善 (pax et bonum) : 聖フランシスコをめぐる冒険」

ゲームの外箱にフランシスコ会創立 800 周年を記念して作られたゲームであることが記載されているが、ゲーム作家としてはメーカー側のデザイナーの個人名が記されている。ゲームのルールブックなどにも修道会が制作に関与したという記述はない。

ゲームの設定は、聖フランシスコの具体的な行いをエピソード的に知るものになっており、一生をなぞるような伝記的なストーリーではない。サイコロの目にしたがってルートを回りながら、特定のマスに置いてある「愛」「喜び」「寛大」「平和」「忍耐」「信仰」「親切」「秩序」「善意」と名付けられたコインを集めるルールだが、ルートの選び方はかなり自由度が高い。また、聖フランシスコにならった行いをする（「貧しい人にパンを分け与える」「物乞いに僧衣を与える」「嵐で倒壊した家を再建している家族を助ける」など）マス目に止まればポイントが得られ、聖フランシスコに反する行いをする（「仲間と喧嘩をする」「十字軍に参加するよう唆される」「貧しい人に施しをしない」など）マス目に止まれば何らかのペナルティがある（「ふりだしに戻る」「1 回休み」など）。ただし、ペナルティを受けた上で、それを克服するために必要なコイン（前述した「愛」「忍耐」「親切」などのうち 1 つ）を受け取れるなど、カトリック的人間観が見てとれるルールもある。

(3) 「ミッション：リーダーシップをめぐるゲーム」

ゲームの外箱には、スポンサーとして、クラクフ市にあるアカデミア・イグナチアヌム（イエズス会の経営する人文・教育系の高等教育機関）、イエズス会中学校「スタニスワフ・コストカ校」、イエズス会系出版社 WAM など、十数のイエズス会関連団体が列記されている。

プロジェクト責任者としてはイエズス会士である Mariusz Han 司祭の名前が挙げられている。同司祭の個人ウェブサイトには、略歴として、ニューヨークのフォーダム大学メディア学科を卒業し、15 年ほどラジオやウェブサイトなどメディア関連の業務に携わり、ゲーム制作のプロジェクト責任者の任務が完了した 2015 年以降、バチカン放送局のポーランド語部門に



図3 「ミッション」の外箱（左から、ロヨラ、ザビエル、コストカ、現教皇フランシスコ）

異動したことが記されている。プロジェクト・メンバーとして十数人の名前が挙げられているが、ゲームの全体的な構想や作画などは主にゲーム作家が作成し、ルールブックやカードなどの人物紹介や歴史解説の執筆陣として3名のイエズス会士の名前が挙げられている。

ゲームのタイトルにもなっている「リーダーシップ」については、イエズス会の創設者であるイグナチオ・デ・ロヨラが当初の7人のイエズス会士のリーダーであったことから、同会においてロヨラに学ぶべき特質として一般に強調されている。ゲームの主人公の1人としてもロヨラが登場するが、残る3人は、日本でも良く知られる初期イエズス会士のフランシスコ・ザビエル、ローマで客死したポーランド人イエズス会士のスタニスワフ・コストカ、そして現教皇フランシスコとなっている。その他、ゲームに置いて特別な効果を持つ12枚のカードには、それぞれイエズス会士が描かれており、その生涯に関する短い解説が付されている。



図4 「ミッション」ゲームに用いるボード、駒、コインなど

ゲームは、宣教に訪れた架空の都市で教会堂や学校、孤児院などを建設して行き、プレイヤーは都市の繁栄ぶりを競い合うという内容になっている。ボードは9枚に分割されているが、移動のルートや方向なども指定されておらず自由なルートで移動できるため、コインのあるマス目に最短距離で移動するための多少の数理的思考も要求される。イエズス会のマークが記されたマス目に止まった際にはカードを引くことができ、「愛」「ヒロイズム」「リーダーシップ」「探究心（知的的好奇心）」と名付けられた4種類のコインのいずれかを手に入れることができるが、「愛」はザビエルの、「ヒロイズム」はコストカの、「リーダーシップ」はロヨラの、「探究心」は教皇フランシスコのシンボルとされている。これらのコインを集めると、その数に応じて、さまざまな施設を建設することができるが、教育活動に活動の基盤を置くイエズス会らしく、建設できる建物は教育関連施設に偏っている。それぞれの建物を建設するのに必要なコインの種類と数は次の表のとおりである。

	リーダーシップ	探究心	ヒロイズム	愛
教会	1	1	3	1
聖堂		1	2	
黙想センター	2		2	1
伝道所	2			2
伝道所		2		
伝道所			2	
伝道所				2
大学	4	1		1
高校	2	2		1
小学校	1	3	1	1
学生寮	1			1
図書館	2	1	1	1
体育館		1	1	1
学生クラブ	1	2		1
病院		1	1	3
孤児院		1	3	2

カードでは、駒の例外的な動きなどについても指示されているが（「ふりだしにもどる」「全員が2マス自由に移動できる」「ライバルの駒を勝手に動かすことができる」など）、それぞれの指示の根拠として示されたイエズス会の歴史は、一定以上の歴史や地理の知識がなければ理解が難しいものとなっている。例えば、「全員がふりだしにもどる」とされたカードには、第二次世界大戦中に多くの聖職者が各地の強制収容所で殺害されたことが説明されており、「すべてのプレイヤーが1枚のカードと1つのコインを放棄する」とされたカードには、1582年に始まった中国宣教とその困難さについて説明されている。その他の修道会作成のボードゲームの対象年齢が6歳以上となっているのに対し、本ゲームの対象年齢は10歳以上である。

(4) 「ミッション・ゲーム：アフリカを知り、好きになろう」

制作者としてはメーカー側のゲーム作家の名前が記されているが、外箱には19世紀のイタリア人宣教師ダニエレ・コンボーニ司教が創立した修道会「コンボーニ会」のマークなどとともに、同会の活動についての解説などが書かれている。コンボーニは晩年、中央アフリ

カ（現スーダン）の司教となった人物で、コンボニー会はアフリカ宣教に力を入れている。

ゲームの登場人物は聖職者ではなく、首から十字架をかけた少年・少女と、現地の子どもたちと思われる絵柄になっている。ストーリーも、これらの子供たちがサイコロの目にしたがって、一緒にアフリカ大陸を一周するという設定になっており、止まったマスによって、コインを得たり、失ったりするという単純なルールだが、別添の小冊子にコインを得たり失ったりする根拠となるエピソードが簡潔に示されており、年長者が傍でゲームを見守りながら、これを読み上げることが想定されているようである。エピソードは宗教的なものだけではなく、地理や動植物（ナイアガラの滝、キリマンジャロ山、ヤシの木、らくだ）、スポーツ文化（サッカー、マラソン）なども紹介され、「動物の大移動を見るために」サファリに参加したが、動物を驚かせてしまい失敗に終わる（2マス戻る）というような、修道会の価値観を感じさせるストーリー設定も見られる。

宗教的な記述としては、奴隷貿易の負の遺産として有名なセネガルのゴレ島で「正義に反する扱いを受けた全ての人々に追悼の意を表する」（ゲームとしては「1回やすみ」）、ケニアでストリートチルドレンを保護する活動をしている宣教師のグループに多額の寄付をする（多額のコインを失う）、ルワンダ内戦で傷ついた人々を助ける活動に参加し表彰される（多額のコインを得る）など、社会貢献活動に関するものが主に挙げられる。

また、エジプトのピラミッド、エチオピア正教会のラリベラの岩窟教会群、マリ共和国のジェンネの大モスクなど、世界遺産を中心に他宗教の宗教文化に関する記述も少数ながらある。一方、修道会の創立者である聖ダニエレ・コンボニーはもちろんのこと、ややトリビアルと思えるカトリック聖人・福者に関する知識が多数含まれている。例えば、アフリカゆかりのカトリックの聖人として、テーベの聖パウロ（最初の隠修士）、19世紀の厳律シトー会士で、モロッコやアルジェリアなどで学究活動（地理学、文化人類学）を行った福者シャルル・ド・フーコー神父、19世紀ウガンダの「聖カロロ・ルワンガと同志殉教者」、スーダン出身の修道女聖ジュゼッピーナ・バキタなどである。さらに、19～20世紀にかけてポーランド人司祭ヤン・ベイジムがマダガスカルに建設した病院など、ポーランド人ゆかりのエピソードも記されている。他方で、シュバイツァーやリビングストンなど、キリスト教他教派の宣教に関する記述は一切見られない。

なお、付録の3択クイズには、地理、動植物、民族文化に関する基礎的な問題が掲載されており、これらのカトリック聖人に関する問題はほとんど出題されていない。ごく1部に「20世紀にアフリカを訪問した初めての教皇は誰か」（パウロ6世）、「ヨハネ・パウロ2世は何度アフリカを訪問したか」（14回）、「聖アウグスティヌスの出身地はどこか」（チュニジア〈ママ〉）などの設問がある。ややトリビアルに感じられるものとしては、「3～4世紀のエジプトに生きたテーベの聖パウロは現在、どの修道会の守護聖者になっているか」という設問があり、ハンガリー発祥の修道会「最初の隠者聖パウロ修道会」が回答となっている。

(5) 「神のゲーム／ミッション・ゲーム」

現物は目にしていないが、個別の修道会をテーマとしたゲームとしては、そのほかにもサレジオ会の「神のゲーム／ミッション・ゲーム」（盤面がリバーシブルになっている）がある。カタログの説明には、前者のゲームではドン・ボスコの人生に触れること、後者では宣教とは具体的にどのような活動をするかを紹介することをテーマにしていると記載されている。

外箱の写真を見れば、サレジオ会の名前がクレジットされていることが確認できる。

3. その他のゲーム

上記の修道会作成のゲームにもミッション（旅）をモチーフにしたものが幾つか見られたが、販売されているカトリック関連のゲームには、時代設定を問わず旅を舞台にしたものが多々見られた（「聖パウロの旅」や「ヨハネ・パウロ2世と世界一周」など）。多くのゲームが定められたルートを移動する中でさまざまなアクションを行うことを基本としていることから、宣教はこの移動に根拠を与える舞台設定になっているようである。

また、具体的に子どもに善悪や規範を教える手段としても利用されている。上記のフランシスコ会のゲームにおいても、フランシスコの行いを真似るか背くかにより、コインを得たり失ったりするという設定があったが、その他にもカタログに掲載されている「あなたを信じます」というゲームには、サイコロの目に従ってルートを巡りながら、各所に置いてある「善」のコインを集めるという設定がある。

その他、宗教史をテーマにしたものとして、「十字軍:特別なミッション」や「グルンヴァルトの戦い」などがある。戦闘的なテーマに思えるが、実際には、前者はドイツ騎士団の居城であるマルボルク城から捕虜になったポーランド兵を救い出すという設定で、いわゆるイェルサレム奪還を錦の御旗に掲げたイスラム教徒との戦いではない。また後者は、ドイツ騎士団の東方植民をポーランド＝リトアニア連合軍が打ち破った史実（1410年）を題材にしているが、この出来事については、近年、ポーランドとリトアニアを中心に多民族が協力して戦ったことが「ヨーロッパ精神」の端緒として語られたり、ポーランド＝リトアニア側の兵隊に正教徒（現ルーマニア、ベラルーシ、ウクライナなどの住民）が含まれ、さらにはイスラム教徒（クリミア半島のタタール人）を傭兵として戦いに参加させたことがコンスタンツ公会議で問題にされた際、ポーランドの法学者パヴェウ・ヴオトコヴィツが信教の自由と基本的人権の尊重を盾に反論し、教皇がこれを認めた点などが宗教的寛容史の文脈で再評価されている。このような歴史観を反映し、ゲームのキャラクターのデザインも、ドイツ側は全員が揃いの銀色の鎧を身に着け、白馬にまたがっているのに対し、ポーランド＝リトアニア側は、全員の衣装が色とりどりで全く統一されておらず、主要登場人物の1人としてチェコ兵のコマがある。

まとめ

多くのゲームの基本的構造は、サイコロを振って決められた数だけコマを進めるといった「すごろく」にも似た形式であるが、「すごろく」との大きな違いは、単純に「あがり」のスピードを競うのではなく、自由度の高いルートを戦略的に移動しながらコインやカードを集め、さらにそのカードの指示に従って次のアクションを起こすといった、2層、3層構造のルールになっている点である。ボードに描かれた視覚情報や舞台設定のほか、この2層目、3層目にあたるコインの獲得・没収の根拠や、カードによるアクションの指示に聖人伝や歴史、聖句が取り入れられているということになる。

また、各修道会が制作・販売しているゲームについては、自らの会の特徴をゲームの舞台設定に取り入れたり（ベネディクト会、コンポーニ会）、創始者に焦点をあてたり（フランシスコ会、イエズス会、サレジオ会）するなど、会の活動内容や設立の精神などを強く反映

した内容になっている。これについては、多くの修道会が出版・印刷活動を通じて宣教を行ってきた経緯があり、ボードゲームはそのヴァリエーションの1つとして扱われていると考えることができる。

その中で、ミッションが「冒険」や「開拓」を疑似体験する装置として示されているだけでなく、観想修道会であるベネディクト会のように、ある程度閉鎖的な環境で、独自の儀礼（グレゴリオ聖歌によって執り行われるミサなど）や世界観を維持してきた修道会が、自らの修道生活そのものを「冒険」の舞台として提示している点は、現代の修道者の自己理解という点で興味深く感じた。

注

- 1 関啓子『コーカサスと中央アジアの人間形成』明石書店、2012年。丸山英樹・太田美幸『ノンフォーマル教育の可能性』新評論、2013年。
- 2 ミヒャエル・パーモンティエ『ミュージアム・エデュケーション』慶應義塾出版会、2012年。
- 3 有田隆也「ドイツボードゲームの教育利用の試み—考える喜びを知り生きる力に結びつける—」『コンピュータ&エデュケーション』31号、2011年、35頁。

スタッフ紹介

※ 氏名、現職、専門分野、担当プロジェクト、および2015年度の研究業績について紹介します。今年度新任のスタッフには、研究紹介および2014年度以前の研究業績についても掲載します。

井上順孝 所長・教授 宗教学、宗教社会学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

[単行本]

- ・『〈オウム真理教〉を検証する—そのウチとソトの境界線—』（編著）春秋社、2015年8月。
- ・『第12回学生宗教意識調査報告』（編集責任）國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、2015年12月。
- ・ *Encyclopedia of Shinto: Chronological Supplement*, (ed), IJCC, 2016年1月。
- ・ *Workbook for Learning Religious Culture in Japan and World*, (ed), Kokugakuin University, 2016年2月。
- ・『世界の宗教は人間に何を禁じてきたか』河出書房新社（KAWADE 夢文庫）、2016年4月。
- ・『宗教社会学を学ぶ人のために』（編著）世界思想社、2016年4月。

[論文]

- ・「国際的視点からみた宗教文化教育」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』8、33-45頁、2015年9月。
- ・「現代宗教の侵襲的研究と宗教調査リテラシー」『國學院雑誌』116-11(1303)、1-16頁、2015年11月。
- ・「現代宗教は古代宗教と何が違うか？—宗教進化論再考—」『國學院大學研究開発推進機構紀要』8、174-206頁、2016年3月。

[口頭発表]

- ・「コメント」(テーマセッション「ポストオウム研究の課題と展望—地下鉄サリン事件20年の地点から—」)、「宗教と社会」学会2015年度第23回学術大会、於東京大学、2015年6月。
- ・「Religious Culture Education Seen From Global Perspectives」(パネル Religion and Education in the Age of Globalization: The Attempt of Education in Religious Culture in Japan)、IAHR第21回国際学術大会、於ドイツ・エアフルト大学、2015年8月。
- ・「宗教のグローバル化現象に対するニッチ概念の適用」、日本宗教学会第74回学術大会、於創価大学、2015年9月。
- ・「コメント」(國學院大學日本文化研究所設立60周年記念国際研究フォーラム「[日本文化]研究の展望」)、於國學院大學、2015年10月。
- ・(講演)「現代社会と教派神道」、教派神道連合会主催、於國學院大學、2015年6月。
- ・(ミュージアムトーク)「教派神道の創始者は教祖か?」、於國學院大學博物館、2015年6月。
- ・(講演)「現代宗教は古代宗教と何が違うか?」(國學院大學研究開発推進機構公開学術講演会)、於國學院大學、2015年10月。
- ・(招待講演)「宗教文化教育とカルト問題」、宗教学会第71回大会、於創価大学、2015年11月。
- ・(講座)「世界の宗教文化から多様な考え方を学ぶ」、於清泉女子大学ラファエラ・アカデミア、2015年5~6月。
- ・(講座)「『見える神道』と『見えない神道』」、於朝日カルチャーセンター横浜、2015年11~12月。
- ・(講義)「宗教社会学」、於警察大学校、2015年6月・10月、2016年1月。
- ・(講演)「宗教観—日本人にとっての宗教、現代における宗教—」、於日本生産性本部、2015年11月。

[その他]

- ・(テレビ出演)「過激派“イスラム国” 米を敵視の根本と宗教」、BSフジLIVE PRIME NEWS、2015

年4月。

- ・「日蓮」(「シネマ特別席」)、『中外日報』、2015年4月。
- ・「フラム・イーブル」(「シネマ特別席」)、『中外日報』、2015年5月。
- ・「石井のおとうさんありがとう」(「シネマ特別席」)、『中外日報』、2015年8月。
- ・「おかげは和賀心にあり」(「シネマ特別席」)、『中外日報』、2015年9月。
- ・「世界の果ての通学路」(「シネマ特別席」)、『中外日報』、2015年10月。
- ・「扉は開かれた」(「シネマ特別席」)、『中外日報』、2015年11月。
- ・「ダ・ヴィンチ・コード」(「シネマ特別席」)、『中外日報』、2016年1月。
- ・「レフトビハインド」(「シネマ特別席」)、『中外日報』、2016年2月。
- ・「パッション」(「シネマ特別席」)、『中外日報』、2016年3月。

藤澤紫 教授 日本美術史、日本近世史、比較芸術学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

【研究紹介】

専門は日本美術史、日本近世文化史、比較芸術学。特に、浮世絵や琳派など日本近世における絵画史、風俗史研究を軸に、景観表現、四季の祭礼、衣食住、芸能をはじめ、描かれた日本の諸文化に関わる考察を行っている。版本や錦絵など、日本近世の出版文化研究を通じて、個々の作品が有するメディアとしての機能にも着目している。ボストン美術館所蔵のスポルディング・コレクション(浮世絵約6,000点)のデジタル化およびウェブ上での一般公開に関わる業務などを介し、美術と国際交流の観点からも研究を進めてきた。近年は、「美人図」や「異界表現」をキーワードに、造形文化における虚と実の問題にも関わっている。

【論文】

- ・「名所絵の機能と広がり―「名所江戸百景」に見る名所絵の「記録」と「記憶」―」『國學院大學大学院紀要 文学研究科』46、1-40頁、2015年4月。
- ・「近代文学のなかの浮世絵―泉鏡花と歌川派の絵師を中心に―」『東洋通信』2016年度2月号、15-25頁、東洋大学、2016年2月。

【口頭発表】

- ・(講演)「ジャパニーズ・ビューティー―「美人図」にみる日本の美意識―」、桜友会文学部同窓会、於学習院創立百周年記念会館、2015年6月。
- ・(講演)「こんなに面白い江戸の幽霊図」、東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業「夕涼み浮世絵講座」、於國學院大學常磐松ホール、2015年8月。
- ・(講演)「琳派とやまと絵―雅と粋のデザイン文化―」、東京・渋谷から日本の文化を国際発信するミュージアム連携事業 美術文化フォーラム1「琳派400年記念 琳派―受け継がれる美の系譜―」、於國學院大學常磐松ホール、2015年9月。
- ・(講演)「鯰絵と江戸の大地震―鯰絵とよみがえる光景―」、江戸歴史講座第34回(錦絵誕生250年記念)、於千代田区立日比田図書館文化館、2015年9月。
- ・(講演)「錦絵誕生250年記念 鏡花と錦絵―描かれた美と奇―」、泉鏡花記念館特別展フォーラム「怪異の泉―鏡花 幻影の本棚―」、於金沢21世紀美術館、2015年10月。
- ・(基調講演)「錦絵の誕生と鈴木春信―美人図の百花繚乱―」、国際浮世絵学会第20回秋季大会、於國學院大學、2015年11月。

【その他】

- ・(テレビ出演)「アート・ステージ～画家たちの美の饗宴～浮世絵 SPECIAL 葛飾北斎 驚異の世界～浮世絵師最大の巨匠 北斎の名画誕生の秘密～」、TOKYO MX、2015年5月。
- ・(テレビ出演)「円楽の大江戸なんでも番付 2時間スペシャル よっ、世界遺産だ! 謎だらけの富士山」、BS朝日、2015年10月。

- ・(テレビ出演)「円楽の大江戸なんでも番付 おっ、見返り美人だ!べっぴん列伝」、BS朝日、2015年11月。
- ・(テレビ出演)「美の壺 file331 手のひらの美術館 ぼち袋」、NHK BSプレミアム、2016年1月。
- ・(ラジオ出演)「風天 浮世の歩き方」、奈良どっとFM、2016年2月。

[2014年度までの主な研究業績]

- ・『浮世絵の至宝 ポストン美術館秘蔵 スポルディング・コレクション名作選』(共著)小学館、2009年11月。
- ・『遊べる浮世絵—体験版江戸文化入門—』東京書籍、2008年9月。
- ・『鈴木春信絵本全集(改訂新版)』(編著)勉誠出版、2001年7月。

ノルマン・ヘイヴンズ (HAVENS, Norman) 教授 日本宗教史、日本の民間信仰
担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

黒崎浩行 教授 情報化と宗教、現代社会と神社神道

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

[論文]

- ・「地域再生のため宗教に何ができるか—ソーシャル・キャピタルの視点から—」小熊英二・赤坂憲雄編著『ゴーストタウンから死者は出ない—東北復興の経路依存—』人文書院、237-256頁、2015年7月。
- ・「東日本大震災におけるコミュニティ復興と神社—宮城県気仙沼市の事例から—」『國學院雑誌』116-11(1303)、17-29頁、2015年11月。

[口頭発表]

- ・「コミュニティ復興の課題と神社—宮城県気仙沼市の事例から—」、日本宗教学会第74回学術大会、於創価大学、2015年9月。

平藤喜久子 准教授 神話学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

[論文]

- ・「近代植民地主義と『古事記』研究の闇」『古代史研究の最前線 古事記』洋泉社、220-235頁、2015年5月。
- ・「神と出会う・神を描く—ポップカルチャーにみる伝統と現代—」『國學院大學雑誌』116-11(1303)、142-154頁、2015年11月。
- ・「海外における日本神話研究—ファシズム期の視点から—」國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『昭和前期の神道と社会』弘文堂、511-529頁、2016年2月。
- ・「宗像三女神と住吉三神—比較神話学的視点から—」『悠久』144、37-48頁、2016年3月。

[口頭発表]

- ・"Translation Issues in Kojiki: God, Deity or Spirit?", at NINTH ANNUAL INTERNATIONAL CONFERENCE ON COMPARATIVE MYTHOLOGY, The International Association for Comparative Mythology, June 10-12, 2015, Nicolaus Copernicus University, in Poland.
- ・"Myth education from a global perspective", in the panel "Religion and education in the Age of Globalization: The attempt of Education in Religious Culture in Japan", The XXI World Congress of the International Association for the History of Religions (IAHR), August 23 to 29, 2015 in Erfurt, Germany.
- ・(講演)「世界の神話と日向」、神話のふるさと県民大学、於宮崎県立図書館、2015年9月。

[その他]

- ・(解説)「『神々の系譜 日本神話の謎』を読む」松前健『神々の系譜 日本神話の謎』吉川弘文館、251-257 頁、2015 年 2 月。

松本久史 准教授 近世・近代の国学・神道史

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」
[単行本]

- ・神社本庁監修『神社検定公式テキスト 9 神話のおへそ『古語拾遺』編』扶桑社、2015 年 12 月。

遠藤潤 准教授 宗教学・日本宗教史

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」
[論文]

- ・「幕末における国学・仏教と国家—平田国学の仏教批判と仏教からの反批判—」『國學院大學大学院紀要 文学研究科』47、1-21 頁、2016 年 3 月。
- ・「ヨミをめぐる『古事記伝』と『古史伝』—『古事記』解釈における思想編成の力学—」『古事記学』2、79-106 頁、2016 年 3 月。

[口頭発表]

- ・(講演)「神道の死生観—いくつかの論点—」、神社本庁総合研究所主催「中堅神職研修」、於神社本庁、2015 年 4 月。
- ・(講演)「神道思想史 I」、神社本庁総合研究所「第 91 回 明階基礎研修(甲)」、於神社本庁、2015 年 10 月。

[その他]

- ・(記事)「近現代神道史の一齣—宮地直一と特殊神事—(前・後)」『神社新報』2015 年 9 月 7 日付・14 日付。

星野靖二 准教授 宗教学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

[口頭発表]

- ・"Considering the 'Religious' and the 'Secular' in Meiji Japan" in the panel "Revisiting 'Secularization' in Japan: A Historical Perspective (1850s-1890s)" organized by Orion Klautau, at the XXI IAHR World Congress, held at Erfurt University, 2015.8.27
- ・"How Religion Relates to "Public Space" in Modern Japan?" in the panel "Public Religion and Public Roles of Religions in Modern Japan" organized by HOSHINO Seiji, at the 74th Annual Conference of the Japanese Association for Religious Studies (JARS), held at Soka University, 2015.9.5 (「宗教の「公」への関わり—近代日本における回路の歴史的検討—」(開催校企画英語パネル「近代日本における公共宗教と宗教の公的役割」パネル(代表者:星野靖二)における発表)、日本宗教学会第 74 回学術大会、於創価大学、2015 年 9 月)

[その他]

- ・(研究ノート)「小崎成章のキリスト教・日本宗教論」『キリスト教史学』69、197-211 頁、2015 年 7 月。
- ・(書評)「末木文美士・林淳・吉永進一・大谷栄一共編著『ブツダの変貌—交錯する近代仏教—』」『宗教と社会』21、97-102 頁、2015 年 6 月。
- ・(書評)「前川理子『近代日本の宗教論と国家—宗教学の思想と国民教育の交錯—』」『近代仏教』23、201-205 頁、2016 年 5 月。

塚田穂高 助教 宗教社会学、近現代日本の宗教運動

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」／「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」

【論文】

- ・「メディア報道への宗教情報リテラシー—「専門家」が語ったことを手がかりに—」（平野直子と共著）宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『〈オウム真理教〉を検証する—そのウチとソトの境界線—』春秋社、213-255頁、2015年8月。
- ・「日本の〈新宗教運動＝文化〉研究の課題と展望」『國學院大學研究開発推進機構紀要』8、1-35頁、2016年3月。

【口頭発表】

- ・「趣旨説明とオウム事件後20年の成果」（テーマセッション「ポストオウム研究の課題と展望—地下鉄サリン事件20年の地点から—」）、「宗教と社会」学会第23回学術大会、於東京大学、2015年6月。
- ・「運動の発生と展開の現在—〈新新宗教〉論の再検討を通じて—」（パネル「新宗教論の再検討—後期近代社会における展開を踏まえて—」）、「日本宗教学会第74回学術大会、於創価大学、2015年9月。
- ・「霊術・身体から宗教・国家への跳躍—三井甲之の手のひら療治—」（ワークショップ「身体と政治—近代日本の霊的な心身技法と国家論—」）、「京都大学人文科学研究所共同研究「日本宗教史像の再構築」第11回研究会、於京都大学、2015年9月。
- ・「現代日本の「草の根保守」合同運動・日本会議—そのナショナリズム、宗教性の構造と運動手法—」、第88回日本社会学会大会、於早稲田大学、2015年9月。

【その他】

- ・（書評）「三木英著『宗教集団の社会学—その類型と変動の理論—』」『宗教と社会』21、109-113頁、2015年6月。
- ・（報告）「『宗教と社会』全19号の概略」（テーマセッション報告「『宗教と社会』誌からみた「宗教と社会」学会の20年」）『宗教と社会』21、122-125頁、2015年6月。
- ・（資料）「宗教事件年表」（杉内寛幸と共著）宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『〈オウム真理教〉を検証する—そのウチとソトの境界線—』春秋社、330-344頁、2015年8月。
- ・（項目執筆）「大本」「創価教育学会」「谷口雅春」「出口王仁三郎」「戸田城聖」「ひとのみち教団」「牧口常三郎」吉田裕・森武磨・伊香俊哉・高岡裕之編『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、77・357・402-403・436・470・566・620頁、2015年11月。
- ・（紹介）「新書紹介『宗教と政治の転軸点—保守合同と政教一致の宗教社会学—』」『臺灣佛教研究』4-2、3-4頁、2015年12月。
- ・「日本会議と宗教」渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2016』平凡社、144-149頁、2016年3月。

鈴木聡子 助教（特任） 神道史学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

市川収 客員研究員 惑星物質科学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

加藤久子 客員研究員 政治と宗教

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

【論文】

- ・「ポーランド人にとっての〈アウシュヴィッツ〉—アウシュヴィッツ＝ビルケナウ ナチス・ドイツの強制絶滅収容所」『季刊民族学』153、18-29頁、2015年7月。

[口頭発表]

- ・「社会主義期ポーランドにおけるカトリック教育」、「宗教と社会」学会第23回学術大会、於東京大学、2015年6月。
- ・「他者の歴史を展示すること—ポーランドにおけるホロコースト・サイトの保存、展示—」、仙人の会11月例会、於明星大学、2015年11月。

[その他]

- ・「欧州で標的となるユダヤ人」『ラク便り』66、66-69頁、2015年5月。
- ・「シャルリ・エブド事件—宗教を対象とした風刺の限界—」『ラク便り』66、69-71頁、2015年5月。
- ・「欧州における終戦70周年—ドイツ、ロシア、そしてその狭間で—」『ラク便り』67、61-64頁、2015年8月。
- ・「負の記憶をめぐる旅〈アウシュヴィッツ〉：ポーランド」『山本敏夫記念文学部基金講座「現代社会と宗教」2014-2015年度：戦争と宗教／聖地とツーリズム』慶應義塾大学出版会、38-40頁、2016年1月。
- ・「気になる人物の発言集・2015年の物故者」（村上晶と共著）渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本2016』平凡社、206-217頁、2016年3月。
- ・「フランス同時多発テロ後の欧州社会」『ラク便り』69、61-65頁、2016年3月。
- ・「家族のあり方についてのシノドス—空転した報道とバチカンの示した一歩—」『ラク便り』69、66-68頁、2016年3月。

イグナシオ・キロス (QUIROS, Enrique Ignacio Luis) 客員研究員 上代語・上代の認識論

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

[論文]

- ・Sens et fonctions de la notion de « koto » dans le Japon archaïque. 「上代における〈コト〉という語の概念的意味や役目をめぐって」博士論文、2016年1月（EPHE 高等研究院のサイトに公開する見込みは2016年7月）。

[その他]

- ・(西和訳) マリア・イサベル・アルコネロ・グティエレス「スペインにおけるリーガル翻訳・通訳：司法翻訳・通訳と公認翻訳・通訳」『裁判員裁判時代の法廷通訳人』大阪大学出版会、2016年2月、195-206頁
- ・(和仏訳) — Nanzō-in et la société locale de Sasaguri — 鈴木正崇「仏教寺院の近代化と地域社会—篠栗町南蔵院の場合—」Cahiers d'Extrême-Asie 22 [2013, publié en 2015], Le vivre ensemble à Sasaguri, une commune de Kyūshū, édité par Anne Bouchy, pp.351-421.

カール・フレイレ (FREIRE, Carl) 客員研究員 近代の日本史（特に社会史・思想史）

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

[その他]

- ・(翻訳) *Encyclopedia of Shinto: Chronological Supplement*, IJCC, 2016年1月。

村上晶 PD研究員 宗教社会学・シャーマニズム研究

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

[論文]

- ・「現代巫者研究—知識の日常的交渉の観点から—」筑波大学博士論文、2016年3月。

[口頭発表]

- ・「巫者と教団—津軽のカミサマを事例として—」、「宗教と社会」学会第23回学術大会、於東京大学、

2015年6月。

[その他]

- ・「気になる人物の発言集・2015年の物故者」(加藤久子と共著) 渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2016』平凡社、206-217頁、2016年3月。

齋藤公太 研究補助員 宗教学、日本思想史

担当プロジェクト『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—

[論文]

- ・「大山為起と荷田春満の『古事記』注釈」『國學院大學研究開発推進機構紀要』8、75-98頁、2016年3月。
- ・「前期水戸学における神器論争」『年報日本思想史』15、1-15頁、2016年3月。

[口頭発表]

- ・「前期水戸学における神器論争」、日本宗教学会第74回学術大会、於創価大学、2015年9月。
- ・「大山為起と荷田春満の『古事記』注釈」、神道宗教学会平成27年度第3回研究例会、於國學院大學、2015年10月。
- ・「今泉定助の『神皇正統記』解釈」、神道宗教学会第69回学術大会、於國學院大學、2015年12月。

[その他]

- ・(研究ノート)「安全保障関連法案と宗教—政治と宗教のことはめぐって—」(天田顕徳と共著)『ラク便り』68、61-72頁、2015年11月。
- ・(翻訳)ジェリー・プロットン『地図の世界史大図鑑』(石垣憲一・石井克弥・荻野哲也・黒田真知・中川泉と共訳)河出書房新社、2015年11月。
- ・(書評)「宗教がわかる Book ガイド (2015年刊)」(相澤秀生・今井信治・藤井修平・光成歩と共著) 渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2016』平凡社、232-239頁、2016年3月。

芹口真結子 研究補助員 日本近世史・近世宗教史

担当プロジェクト『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—

[論文]

- ・「明治五年東本願寺の九州巡回説教—教導職制度揺籃期の教化活動—」『國學院大學研究開発推進機構紀要』8、99-133頁、2016年3月。

[口頭発表]

- ・「明治初期における東本願寺の教化活動—明治5年大谷勝尊一行の九州巡回説教を事例に—」、国学会、於國學院大學、2015年9月。
- ・「近世後期における教学論争の展開と民衆教化—文政期加賀安心争論を中心に—」、近世史研究会、於東京大学、2016年1月。

天田顕徳 共同研究員 宗教社会学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

[口頭発表]

- ・「文化遺産としての修験道考—世界遺産登録と吉野の10年—」、日本宗教学会第74回学術大会、於創価大学、2015年9月。

[その他]

- ・(研究ノート)「安全保障関連法案と宗教—政治と宗教のことはめぐって—」『ラク便り』68、61-72頁、2015年12月。
- ・(用語解説)「話題の用語解説・新語解説」(小林宏至との共著) 渡邊直樹責任編集『宗教と現代がわかる本 2016』平凡社、246-251頁、2016年3月。

李和珍 共同研究員 宗教社会学、日韓の新宗教教団の比較研究

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

ヤニス・ガイタニデイス (GAITANIDIS, Ioannis) 共同研究員 医療人類学・宗教社会学・日本学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

[論文]

- ・ガイタニデイス ヤニス・小林聡子・西住奏子・和田健・吉野文「[日本]を題材とした協働学習の仕掛け—教養教育における実践から考える—」『国際教育(International Education)』9、千葉大学国際教育センター、1-73頁、2016年3月。

[口頭発表]

- ・“De-Racializing Japanese-ness: A Collaborative Approach to Shifting Interpretation and Representation of “Culture” at a University in Japan”(on skype) with Satoko Shao-Kobayashi (on site), in Higher Education SIG Highlighted Session: Race, Equity and Higher education: The Global Relevance of Critical and Inclusive Pedagogies, Comparative and International Education Society 2016 Conference, Vancouver, 10 March 2016.
- ・“Translation and Interpretation of Western Occultism in Contemporary Japan,” in Panel: Japanese Religions under Globalization (panel chair: Ugo Dessi), 27 August 2015, XXI IAHR World Congress, University of Erfurt.
- ・“The Vicious and Virtuous Aspects of Japanese Studies in Japan: Towards a Critical Japanese Studies Perspective,” in Panel: Japanese Studies in the Era of Cool-Japanization of Japanese Higher Education, Anthropology of Japan in Japan Spring Workshop, 26 April 2015, Seijo University.
- ・(講義)「グローバル社会におけるリベラルアーツ教育への提案—言語的・文化的多様性を持った学生間における協働学習のためのアプローチ—」(小林聡子と協働実施)、異文化間教育学会第36回大会プレセミナ、於千葉大学、2015年6月。

イヴ・カドー (CADOT, Yves) 共同研究員 日本文化と武道

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

野口生也 共同研究員 宗教人類学、ペンテコスタリズム研究

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

ジャン＝ミシェル・ビュテル (BUTEL, Jean-Michel) 共同研究員 日本民俗学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

牧野元紀 共同研究員 東洋学・ベトナム キリスト教社会史

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

[研究紹介]

今日のベトナムで全人口の一割程度を占めるキリスト教(カトリック)が、現地社会においていかなる位置を占めているのか。歴史的な文脈から考察する。ベトナムは19世紀後半にフランスの相次ぐ軍事侵攻の結果、植民地化されるが、そのきっかけとなったのが現地政権、グエン王朝によるキリスト教の弾圧であった。フランス政府はグエン朝に弾圧をやめさせ、信教・布教の自由を認めさせることを第一に掲げた。ではなぜ、ベトナムにおいてキリスト教は受容されていたのか、また今日もなぜ一定数の信者を得て社会に根を張っているのか。日本や中国との比較を念頭に、文献資料の解析、フィールドワークなどを通じて

解明に努めている。

[単行本]

- ・『東インド会社とアジアの海賊』（共著）、勉誠出版、2015年5月。

[2014年度までの主な研究業績]

- ・ Local Administrators and the Nguyen Dynasty's Suppression of Christianity during the Reign of Minh Mang 1820-1841, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, 71, 2013.
- ・ The Vietnamese Written Languages and European Missionaries: From the Society of Jesus to the Société des Missions Etrangères de Paris, *Beyond Borders; A Global Perspective of Jesuit Mission History*, Eds. Shinzo Kawamura and Cyril Veliath, Sophia University Press. 2009.
- ・ 「パリ外国宣教会のベトナム宣教とカテキスター—18世紀末から19世紀前半におけるトンキンのキリスト教社会—」『東南アジア 歴史と文化』35、山川出版社、3-21頁、2006年5月。

一戸 渉 共同研究員 日本近世文学

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」

小田 真裕 共同研究員 日本近世史

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」

ナカイ・ケイト (NAKAI, Kate W) 客員教授 日本思想史

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

土屋 博 客員教授 宗教学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

山中 弘 客員教授 宗教社会学

担当プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」

林 淳 客員教授 日本宗教史

担当プロジェクト「『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—」

出版物紹介

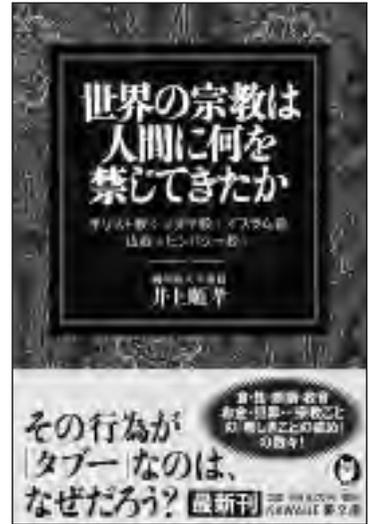
井上順孝『世界の宗教は人間に何を禁じてきたか』

(河出書房新社、2016年4月)

内容紹介

世界の宗教の戒律の問題を分かりやすく解説。イスラム教、ユダヤ教、上座仏教などに見られるよく知られた戒律だけでなく、身近に見られる宗教習俗をもとりあげ、人間がどのような宗教の戒律によって意識や行動に影響を受けているかを具体的に述べている。日本の宗教は本当に戒律が少ないのかという問いかけもなされている。内容は次の章立てから読み取れる。

- 1章 「食」をめぐる、さまざまなタブー
- 2章 戒律が分断する「性と愛」
- 3章 「死後の世界」はどう説かれてきたか
- 4章 何を尊び、どのように祈るのか
- 5章 「教育」と宗教はどこまで不可分か
- 6章 「お金」と宗教の悩ましい関係
- 7章 戦争を禁じる宗教、認める宗教
- 8章 生活に溶け込む信仰と戒律



井上順孝編『宗教社会学を学ぶ人のために』

(世界思想社、2016年4月)

内容紹介

1994年に刊行された同じ編者の『現代日本の宗教社会学』を大幅に改訂し、新しい構成のもとで編集されたもの。執筆者は編者の他、磯岡哲也、岩井洋、岡田正彦、弓山達也の各氏。第Ⅰ部は「宗教社会学の基礎理論」で、古典的な宗教社会学の理論、20世紀後半の欧米の理論、日本の展開が示される。宗教社会学に関わりの深い宗教心理学の学説、最近の認知科学の紹介もなされている。第Ⅱ部は「現代社会と宗教社会学」で、主に近現代の日本社会の宗教と社会の関わりについての分析、国際化・グローバル化が進む現代世界の宗教状況、そうした中での宗教情報リテラシーの問題などが扱われている。付録として文献解題、基本統計、参考となるウェブ情報一覧がある。情報化の進行を踏まえて、最近の新しいデータ・情報類を収録するとともに、それらを用いるときの注意点も述べられている。



井上順孝責任編集・宗教情報リサーチセンター編『〈オウム真理教〉を検証する—そのウチとソトの境界線—』

(春秋社、2015年8月)

内容紹介

井上順孝がセンター長を務める公益財団法人国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンターの共同プロジェクトによるオウム真理教問題に焦点を当てた論文集。『情報時代のオウム真理教』(春秋社、2011年7月)を基礎編とすれば、本書は応用編と位置づけられる。オウム真理教事件から20年を経て、風化と忘却が叫ばれるなかで、とりわけ大学生や若者がこの事件について知り、この事件を通じて何かの教訓を得ようとする際の手がかりとなることを意識して、具体的かつ確実なデータに基づいて、各章が執筆されている。テーマとしては、麻原言説の特徴、幹部らの信仰深化過程、脱会者の気づきのポイント、疑似科学的言説や暴力的言説の特性、メディア報道の問題点、学生のオウム観、ロシアでのオウムの活動などをそれぞれ論じている。研究所スタッフでは、井上順孝と塚田穂高が執筆にあたっている。



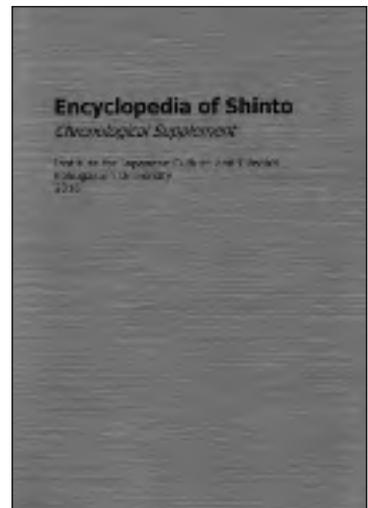
國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所編『*Encyclopedia of Shinto: Chronological Supplement*』 [『神道事典』 卷末年表・英語版]

(國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、2016年1月)

内容紹介

日本文化研究所ではかねてより『神道事典(縮刷版)』(國學院大學日本文化研究所編、1999年、弘文堂)の英語版である *Encyclopedia of Shinto* をウェブ上で公開しているが、同事典の付録として作成された「年表」(764-830頁、作成: 井上順孝・並木和子)について、日本文化研究所のプロジェクトの一環として英訳を行った。

翻訳は主に研究所スタッフであるチャールズ・フレール(FREIRE, Charles)の手になるものであり、作成に際しては研究所スタッフであった小堀馨子の助力を得た。2014年9月に先行してEOSサイトで電子ファイルを公開していたが、利用者の便を鑑みて、今回それに修正を加えた上で紙媒体として刊行した。なお、紙媒体のもととなった改訂版の電子ファイルも同様にウェブ上で公開されている (<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/pdfPreview/EOS-Chrono-sup2016.pdf>)。



井上順孝責任編集『第12回学生宗教意識調査報告』

(國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所、2015年12月)

内容紹介

2015年4月から6月にかけて全国36の大学で実施された第12回の学生宗教意識調査の結果をまとめた報告書である。國學院大學日本文化研究所プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」と「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトのメンバーが中心になって行われた。

この意識調査は1995年に第1回が実施され、2015年の調査が12回目となり、かつこの12回目が最終調査でもある。有効回答数は5,773であった。第1回より継続的になされている学生およびその両親の信仰の有無、宗教への関心度合いといった基本的調査項目の他、オウム真理教に対する関心やイスラム教の認知度など現時点で重要と思われる調査項目が合計20ある。

2016年度にはこれまでの12回の調査報告書を再編集するとともに、12回の調査結果を比較した報告書が作成され、オンラインでも公開される予定である。



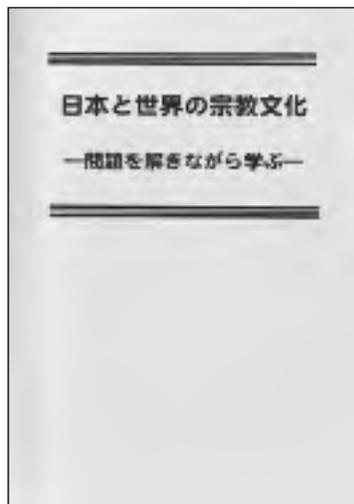
井上順孝編集『日本と世界の宗教文化—問題を解きながら学ぶ—』

(國學院大學、2016年2月)

内容紹介

平成27年度國學院大學特別推進研究「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」(研究代表者:井上順孝)の助成を得て行われた研究の成果である。宗教文化士認定試験を実施している宗教文化教育推進センター(センター長・土屋博北海道大学名誉教授)の承諾を得た上で、同センターが実施した過去8回の試験のうちの記号選択式問題について、400問の中から200問を選び、解説を付したものである。問題と解説に用いられている重要な用語(人物名、団体名、事項名)をキーワードとする索引を作成し、どのような用語が宗教文化教育では重要であるかを示した。

解説はそれぞれの宗教史の専門家に依頼した。すなわち、市川裕(東京大学)、岩井洋(帝塚山大学)、岡田正彦(天理大学)、小田淑子(関西大学)、加瀬直弥(國學院大學)、櫻井義秀(北海道大学)、佐々木裕子(白百合女子大学)、土井健司(関西学院大学)、平藤喜久子(國學院大學)、星野靖二(國學院大學)、三木英(大阪国際大学)、八木久美子(東京外国語大学)、矢野秀武(駒澤大学)の各氏である。



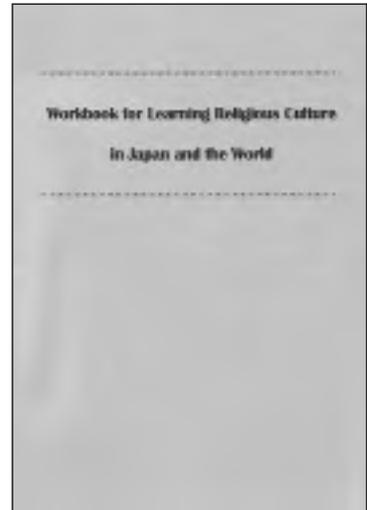
井上順孝編集『Workbook for Learning Religious Culture in Japan and the World』

(國學院大學、2016年2月)

内容紹介

平成27年度國學院大學特別推進研究「国際的視点からの宗教文化教育教材の総合的研究」(研究代表者:井上順孝)の助成を得て行われた研究の成果である。前掲『日本と世界の宗教文化—問題を解きながら学ぶ—』で選んだ200問を英訳し、英語圏の研究者や学生に日本における宗教文化教育の現状を説明するための一助とすることを目指して作成されたものである。

翻訳はAvery Morrow氏に依頼し、さらにこれを本学神道文化学部教授のNorman Havens氏に細かく校閲してもらった。



神社本庁監修(松本久史執筆)『神社検定公式テキスト9 神話のおへそ『古語拾遺』編』

(扶桑社、2015年12月)

内容紹介

日本文化興隆財団主催の「神社検定」の公式テキストであり、2016(平成28)年度と同検定には本書からの出題があり、2017(平成29)年度にも同様の予定である。斎部広成『古語拾遺』の全文を現代語訳し、さらに神道・神社とのかかわりを中心に、詳細な解説を加えている。三章から構成され、第一章は『古語拾遺』の現代語訳と概説、第二章は同書の成立背景としての忌部氏の歴史、古代律令制下における氏族の記録、律令祭祀と忌部伝承の関連性などを論じ、第三章においては『古語拾遺』本文の詳細な解説を加えた。「神社検定」のテキストではあるが、神道に関心のある大学生・社会人および現役神職の教養に資することも目的としており、『古語拾遺』への理解を入り口に、多様な神道古典への関心を喚起させる内容になっている。



テレビ放映・番組紹介

「BS フジプライムニュース」ゲスト出演

2015年4月21日（火）放送の「過激派“イスラム国” 米を敵視の根本と宗教」に、井上順孝がゲスト出演した。IS（イスラム国）によるとされるテロが世界各地で頻発する状況を背景に、イスラム教さらに宗教がもつ基本的な問題点について生放送で議論した。キャスターはフジテレビ報道局政治部編集委員の反町理氏。日本女子大学教授の臼杵陽氏と意見を交換する形で進められた。



「国際研究フォーラム スカイパーフェク TV！」

2015年10月25日（日）に國學院大學常磐松ホールで開催された日本文化研究所主催の国際研究フォーラム「「日本文化」研究の展望」を1時間番組として編集したものが、CSのスカイパーフェクTV！529チャンネルにて、2016年3月26日の21：00～22：00に放映された。番組では発題者の発表の骨子部分とコメント、そしてフロアからの質問の一部が放映された。



國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所年報 第9号

平成28年9月30日 発行

発行者 井上順孝

編集担当 塚田穂高

鈴木聡子

印刷所 株式会社 丸井工文社

発行所 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所

東京都渋谷区東4丁目10番28号

郵便番号 150-8440

電話 03-5466-0162

FAX 03-5466-9237